Kurokawa, Mamichi
Kokushi sōsho

評議員
文學博士 萩野由之　文學士 笹川臨風
文學博士 黑板勝美　文學士 菊池謙二郎
文學博士 松本愛重　文學博士 三宅米吉
（イロハ順）

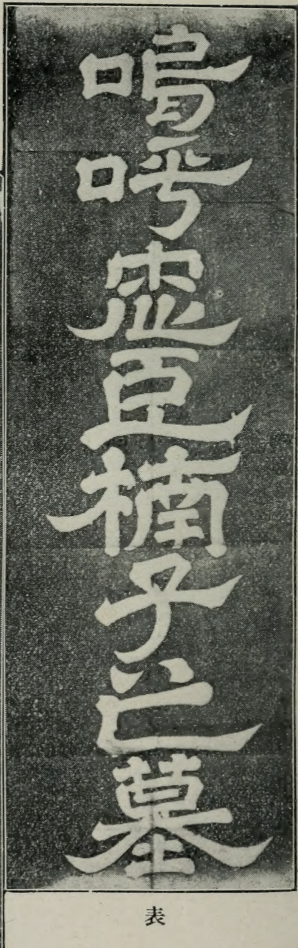
黑川真道編

國史叢書

南朝太平記　全

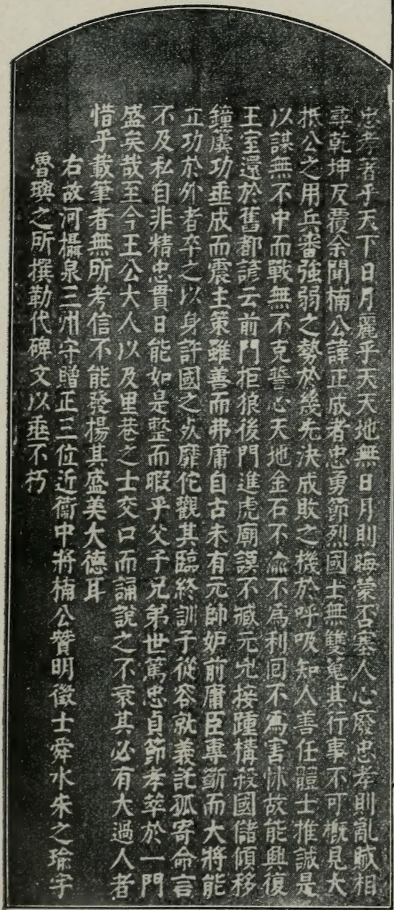
國史研究會藏版

湊川楠公碑


嗚呼忠臣楠子之墓

表

裏


忠孝著乎天下日月麗乎天天地無日月則晦蒙否塞人心廢忠孝則亂賊相
尋乾坤反覆余聞楠公諱正成者忠勇節烈國士無雙蒐其行事不可概見大
抵公之用兵審強弱之勢於幾先決成敗之機於呼吸知人善任體士推誠是
以謀無不中而戰無不克誓心天地金石不渝不爲利回不爲害怵故能興復
王室還於舊都諺云前門拒狼後門進虎廟謨不臧元兇接踵構殺國儲傾移
鐘簴功垂成而震主策雖善而弗庸自古未有元帥妒前庸臣專斷而大將能
立功於外者卒之以身許國之死靡佗觀其臨終訓子從容就義託孤寄命言
不及私自非精忠貫日能如是整而暇乎父子兄弟世篤忠貞節孝萃於一門
盛矣哉至今王公大人以及里巷之士交口而誦說之不衰其必有大過人者
惜乎載筆者無所考信不能發揚其盛美大德耳
右故河攝泉三州守贈正三位近衛中將楠公贊明徵士舜水朱之瑜字
魯璵之所撰勒代碑文以垂不朽

時に間斷なく、往・今・來は一線の上に繋れり。夫れ現在は過去の生む所にして、未來を誘き得るもの、現在に其の基脚を置けばなり。顧ふに世の人、多く現在を重んじて過去を輕んず。過去を輕んずるものにして、現在の眞想を窺知し得るものなく、現在の眞想を窺知し得ざるものにして、安ぞ未來に想到するの餘裕を存せんや。言ふ迄もなく我國の現在は、數千年に亘れる過去の產物なり。皇室の尊嚴・國民の性情、將又文物發達の徑路・治亂盛衰の顚末等、仔細に之を觀察すれば、現在の由つて來る所以を明かにし、隨つて未來の赴趨する所を察するに難からざるなり。

抑過去を觀察するには、根本史料に據らざるべからずして、一篇の成書に據るを非なりとす。蓋人各見る所あり、自家の見地は、是れ他人の見地にあらず。一篇の成書に賴りて過去を知らんとするは、卽ち自家の見地を沒却して、他人の見地に傾倒するものなり。讀史餘論・日本外史は、各其の著者の心に映り眼に現れたる日本歷史にして、之を以て眞箇の日本歷史と稱し得べからず。自ら眞箇の日本歷史を知らんと欲せば、根本史料たる當時の記錄に由りて研鑽討究せられざるべからざるなり。是惟に日本の過去を正當に知り得るのみにあらず、研究の興味、亦實に津々たるものあらん。本叢書は眞に我國を了解せんと力むる特志者に、根本史料を提供せんと欲して刊行す。

蓋世には現在にのみ齷齪して、過去を觀察する興味と餘裕とを有せざるもの多しと雖、又孜々として往を彰にし今を知り來を考ふるの士尠しとなさず。此の書、或は少數篤學の士に容れらるゝも、多數俗庸の人に迎へられざるは固より期する所なり。されば需要の多少を論ぜず、必ず全部の刊行を大成すべし。敢て爰に之を聲明す。

國史研究會主幹

解題

南朝太平記　廿四卷

本書は後醍醐天皇、北條高時を討ち給ひて、公家一統の御代となし給ひしに、足利尊氏反し官軍利を失ひ、楠木正成は湊川に戰死し、新田義貞は北國に落ち行き、天皇は大和國へ御潛幸あらせ給ひ、吉野に皇居をすゑさせ給ひ、後村上、長慶、後龜山の四帝相續いで、明德三年に至るまで彼の宮にあらせ給ふ。これを南朝といふ。足利尊氏は光嚴天皇を擁立し、光明、崇光、後光嚴、後圓融の五帝、相續いで京都にあらせ給ふ。これを北朝といふ。

足利義滿、大內義弘を以て兩朝の和睦を請ひ奉り、遂に、後龜山天皇より神器を後小松天皇に傳へ給ひ、玆に一統に歸し給へり。

本書は其の南北分立五十七年間に於ける南朝の事蹟を記し、又此の間に於ける

楠木氏子孫勤王の勳績をも記し、終には南北一統後と雖、猶南朝の皇族吉野にまして、時々兵を構へ給ひしに、長祿二年赤松の遺臣等、更に吉野を襲ひて神璽を奪ひ、遂に南朝の全滅に及び給ふに筆をさしおきたり。

本文中特に目立ちし記事は、元祿四年水戸光圀卿の建てられし湊川の楠氏の碑銘を掲載せしこと是なり。そは本書出版は享保十年にして、建碑より凡三十餘年後の著述なれば、楠氏の碑銘を掲載したりしとて珍しからねども、全體の事蹟は何れも太平記其他の軍記等より採用したるものなれば、獨りこれのみ新しき材料として目立ちたり。これにより推考すれば、或は本書の作者馬場氏は、湊川の碑に感激する所ありて、本書編輯の動機をも成したるやも知るべからず。故に此の新材料をも掲げたるなるべし。此の建碑の感化力は實に廣大なるものといはざるべからず。

作者馬場信意は京師の人なり。玄隆と號す。後に柳隱子、山川素石と改む。信意は儒家にして易學に達したる馬場信武の子なり。和學を好み多く軍書を編輯せ

り。後には神書をも講談せり。享保十三年三月八日歿す。洛東鳥部山に葬るといふ。

大正三年三月

黒川眞道識

例言

一、本書五頁に楠氏世系圖後に出すと掲げたり。然るに底本には省きたるものか又は散逸せしものか見當らず、よりて他本に見えたる楠氏系圖を以て補足せんとて、是彼披見するに、何れも大同小異區々にして、且又本書の世系とも合はざれば、止むを得ず補足を見合せたり。他日同書を尋ねて補足すべし。

一、卷頭寫眞版楠公碑は黒川藏拓本に據る。

一、原本片假名なるも、本編には悉く平假名に改めたり。

一、原本中地名人名等にして、往々文字の一定を缺くものありしを以て、今全體を通じて最も多く用ひられたる文字に基きて他を訂正し、此が一定に努めたり。

一、假名遣、當字、借字等にして、原本の特長と認むべきものは、之を改竄する事なかりしと雖、讀誦に不便なるものは、假名を補うて語格を正したるもの尠なからず。且時として讀誤り易き場合に限り、振假名を附したるものあり。

一、本編の注記は、原本にありしものにして、當編輯部にては、一の注記をも加へざりき。但文字の左側に縱線を加へて、識者の高考に資したるもの二三これありしのみ。

編者識

目次

南朝太平記

卷第六

卷第七

巻第十九

巻第二十

目次終

南朝太平記

序

雖本朝治亂繁多、南北兩朝之會戰、新田・足利二家之諍亂、古今不聞自是大矣。後世之兒童走卒無不談話。延元年中後醍醐帝自建皇基於和州芳野以降、南朝旣四世、年曆五十餘歲、終泯滅而膾炙人口。然楠公正成者一奉詔命而擧忠烈功之美名於天下、顯智仁勇之三德於海內可謂神武不測之智臣也。子孫正行・正儀・正秀、相續而義心忠功粲然于世矣。余輯錄之爲廿四卷、名號南朝太平記。數任書林田井氏之請、從楠氏正澄至正秀記五世之勇戰、而以壽梓云爾。

柳隱子信意　序

南朝太平記 巻第一

洛下　馬場氏柳隱子信意　編集

國家治亂 附 南朝來由の事

茲に本朝八十三代の帝、土御門院の御宇、正治・建武の頃より、元弘年中に至つて、百三十年、北條氏天下の權を執つて、四海を掌に握る。其故を尋ぬれば、右大將源賴朝卿、平家の一族を攻滅し、相州鎌倉に安座し給ひしより、北條遠江守時政、外戚の威に乘じて、謀略を以て賴家・實朝（賴朝卿御子）を弑せさせ、是より武威を日本に振ふ。其子武藏守義時・其嫡泰時・其孫武藏守經時・其次相模守時賴・最明寺道崇是なり。其子實光寺時宗・其子相模守貞時・最勝園寺崇演と號す。其子相模守高時入道崇鑑、相續いで天下の權を執れり。此時高時、前代に變つて朝廷を蔑如（ないがしろ）にし、科なき諸士に罰を加

へ、民に臨時の課役をかけ、美女を集め酒に沈醉して、猿樂・田樂・鬪犬等の逸遊に日を送れり。　此時の聖主後醍醐天皇、高時が暴惡を惡ませ給ひ、足利尊氏・新田義貞・楠正成・赤松入道圓心（俗名號二次郎則村一）・名和長年以下に敕命あつて、北條門族を誅伐なされ、絕えて久しき公家一統の御代となし給ふ。　然るに兩雄は、必ず諍ふ習なれば、足利尊氏・新田義貞、互に其勳功を諍ひ、確執に及びけるが、尊氏兄弟の惡逆露顯せしかば、新田義貞、足利征伐の敕諚を蒙り、合戰數十度に及びけるに、尊氏戰利なうして、西國に落下られしかども、又大軍を催し、西海より攻上らる。　此時官軍利を失ひ、比叡山に取上る。　然れども勝利を得させ給はん事の、難き事を知召し、京都に出させ給ひしかば、尊氏頓て主上を押籠め奉れり。　義貞は又、天皇に見放され參らせて、力なく北國に落行かる。　其後主上は、都を忍び出させられ、南方に潛幸あつて、大和國吉野山に皇居を据ゑさせ給ひ、南朝と號し奉る。　是より後村上天皇・長慶院・御龜山院、相續いで四代、明德年中に至つて、五十餘年に及びけり。　されば後醍醐天皇に仕へ奉りし武臣多しと雖、楠氏四代、義を金石よりも重くす。　誰人か之に比せん。

徳川光圀楠公碑を建つ

古今に希なる忠臣なり。中にも河内判官正成は、智仁勇の三徳を兼備へて、守城野戰の功、奇策妙術勝げて計へ難し。最も不測の良將なり。

楠氏世系圖 後に出す。

南木氏石碑之銘

楠河内判官正成は、智勇古今に秀で、機に臨み變に應じて城を守り、謀を帷幕の内に運らして、勝つ事を千里が外に決す。一世の奇策謀略、勝げていふべからず。後醍醐帝に、一度賴まれ奉つて、忠臣の美名を揚ぐ。惜哉足利尊氏卿、西海の波に數萬の兵船を浮べ、攝州兵庫に着岸の日、聖運の開かるまじきを知りて、遂に彼地に自殺せらる。今に至つて天下の人、樵夫牧童迄も、其忠貞を感じ、其神策を美談せり。されば近世、元祿四辛未年、貴君、楠氏の德を感じ思召れ、其舊跡の、末代に至りなば、廢れんことを嘆せられ、兵庫民家の外れ、正成の墳墓を再興遊ばされ、碑石を立てさせ給ふ。土臺は當國御影石を以て、高さ五尺方一丈四面になされ、中段共に

楠公碑銘

御影石にて、高さ二尺方五尺四寸なり。其上に洛東白川石を以て、長さ三尺高さ六寸の龜形あり。其上に居うる所の石塔は、和泉石を以て、高さ三尺八寸横一尺六寸腹一尺五寸なり。土臺の下には石棺を埋ませられ、棺中には亘一尺二寸の圓鏡を納めさせ給ふ。其鏡の裏の銘に、楠正成靈、源光圀造立とあり。碑石の表には嗚呼忠臣楠子之墓と刻せられ、裏に碑の銘あり。其文に曰く、

忠孝著乎天下、日月麗乎天、天地無日月、則晦蒙否塞。人心廢忠孝、則亂賊相尋、乾坤反覆。余聞楠公諱正成者、忠勇節烈、國士無雙、蒐其行事、不可概見。大抵公之用兵、審强弱之勢於機先、決成敗之機於呼吸、知人善任、體士推誠。是以謀無不中、而戰無不克。誓心天地、金石不渝、不爲利回、不爲害怵。故能興復王室、還於舊都。諺云、前門拒狼、後門進虎。廟謨不臧、元兇接踵、構殺國儲、傾移鍾虡、功垂成而震主、策雖善而弗庸、自古未有元帥妬前、庸臣專斷、而大將能立功於外者。卒之以身許國之死靡他。觀其臨終訓子、從容就義、託孤寄命、言不及私。自非精忠貫日、能如是整而暇乎。父子兄弟世篤忠貞、節孝萃於一門。盛矣哉至今王公大

人、以及里巷之士、交口而誦說之不衰。其必有大過人者、惜乎哉、筆者無所考信、不能發揚其盛美大德耳。

右故河攝泉三州守贈正三位近衞中將楠公贊、明徵士舜水朱之瑜字魯璵之所撰、勒代碑文以垂不朽。

今既に三百餘年の星霜を歷ると雖、貴君、南木氏の智仁勇の三德を褒し、其忠戰義死を感じさせ給ひ、末代の將士として、忠勇の道を勸めさせ給ふ。豈其德大ならずや。

楠氏由緒附菊水紋の事

河陽侯橘朝臣正成は、神武不測の良將にて、敕命を奉り、一度天下一統の大功を立てしより、相續いで四代、其佳名を汚さず、民を懷くるに仁を以てし、君に仕ふるに忠を以てす。其祖先を尋ぬれば、人皇三十一代敏達天皇の玄孫を、葛城王と號す。然るに元明天皇の御宇、和銅元年十一月廿五日、天皇、群臣を集め遊宴なされける時、葛城王に浮盃の橘を賜はり、是を以て汝が姓とすべしと、敕命をなし下さる。其

楠氏略系

後聖武天皇の御宇、天平七年十月朔日、從三位葛城王・同舍弟佐爲王に、橘宿禰を賜はりぬ。葛城王、其月、諸兄と名を改め給ひ、同じき十年、右大臣に任じ、同じき十五年五月、左大臣に轉任あつて、同じき廿一年四月、正一位に敍し給ふ。然るに聖武天皇の御子孝謙天皇の御宇、天平勝寶二年正月廿七日、橘宿禰を改めて、朝臣と號すべしと敕命ある。其後同じき八年二月、諸兄公逆心の企ある由、讒言する者ありと雖、天皇許容坐さず、讒者の申す所を、敢て實と思召されざりしかども、是より官職を辭して、致仕し給ひける。然るに此公は、山城國井手の里に別殿を營ませ、常に此處に坐せしかば、井手左大臣と號しけり。其假山水石の跡、今に至つてありとかや。天性酴醿（本ノマヽ荼蘼カ）を愛し給ふ事甚しければ、此里井手の玉川は、酴醿の名所にて、花の盛の頃は、岸の酴醿を映し、色なる浪の打寄せて、類なき眺望なるを、限なく愛で給ひて、酴醿を眺め、蛙の啼く聲に心を澄し、風詠の仲立となし給ふ。此處は又井手の蛙とて、其啼く聲、餘所に勝れて清朗なり。酴醿も、高堤の邊には、今は纔に殘れるなり。されば諸兄公、其愛し給ふの餘りに、玉川に酴醿の咲ける所を、直衣に

菊水紋の由來

繡にして、常に之を着し給ふ。其後胤之に倣ひて、水に酴醿を畫きて家の紋とせり。然るを後人、誤つて菊水なりと思ひけるを、末葉の人も、共に誤つて菊水となしけるなり。其後人皇六十一代朱雀天皇の御宇、天慶年中、藤原純友、平將門と心を合せ、反逆を企て、東西に起りし時、純友征伐の爲、小野好古・藤原慶幸・大藏春實以下、數萬の官軍、敕命に依つて西國に發向し、大に純友と攻戰ふ。此時諸兄公十代の後胤、橘少將經氏も、敕命を奉り、大に戰功ありしかば、其賞として、河内・備中兩國を恩賜あり。是より子孫相續いで、河内の國に住しけり。

河内守成綱被レ愛レ楠事

斯くて少將經氏より、十一代の後裔を、河内守橘成綱と號し、河州金剛山の麓七鄉を領し、居住せり。然るに成綱其性好んで楠を愛し、己が居館追手の馬場に、楠を數株植ゑ置きたり。又常に近習の輩に語つて曰く、天地の間に生ずる所の諸木、多しと雖、中にも世に愛する所は、櫻・藤・梅の類を以て最上とす。是れ陽氣を受けて

楠氏の由來

花開け、紅白の色を諍ひ、其匂を四方に散ず。さるに依つて折に觸れ氣色に附けて、題詠するもの之を愛す。然れども詩歌は、公家の翫ぶ所にして、我家のものに非ず。さありとて强ち之を捨つるには非ず。君子も、有行餘力則學文とこそ宣ひし。其外には古より、松を愛し或は柳を好むと雖、某は之を好まず。其故如何となれば、柳は花も咲かざれども、春は陽氣を待ち得て、綠の色を顯せり。されども素より氣力無うして、怯弱の士に似たり。松は最も木の情盛なり。花咲かねば色香もなしと雖、十八公色深雪中、春秋を知らずして、露霜にも衰へず。諸木の花は黄ばみ落つれども、松は其色常磐なれば、殘る松さへ、嶺に淋しきなどと詠みしなり。楠は其情剛强にして、松に似たりと雖、叉松に似るべくもなし。盛長することは、餘木に劣つて少しと雖、雪折もなく、究めて大木は楠にあり。其勇强なることといふべからず。後には磐石となりて不朽に傳はり、永世に至つて、天地と共に長久を保つもの、楠にあらずして何ぞや。最も武士の愛すべきは楠なり。我之を思ふが故に、此木を朝暮に愛することと甚しとぞ語られける。此の如く楠を多く植ゑ置きて、朝夕之を愛せ

られしかば、是より世人、楠殿々々と呼びし故、成綱それよりして、自ら楠河内守とぞ名乘られける。

左兵衞督盛康室男子誕生の事

河内守成綱の家嫡楠左兵衞督盛康、父の遺跡を繼ぎ、相續いで楠を愛せられけるが、父祖の業を繼ぎて、文武の道に賢く、士を撫で民を憐まれしかば、諸人其德を稱しけり。然るに當國水分明神は、呉子・孫子を祭れる所の神社なれば、是れ軍術武略の祖神にして、兵家の崇め信仰すべき神なりとて、常に社參せられける。或時盛康從者二三輩召連れ、忍びやかに參詣し、心閑に祈念せられ、下向に赴かれけるが、館の前楠の馬場を、閑に歩み通られけるに、日既に夕陽に及びしが、楠二本摺違うて、生ひ繁れる其陰に、年の頃二十計と見えて、美目形美しく、いふ計なく﨟長けて、いと艶なる女房の、唐綾の小袖に繡しけるを着て、打萎れ涙ぐみて佇めり。盛康も此女房を、一目見るよりも心浮かれ、知らず我魂も、此人の袖にや入りぬらんと、心もた

どたどしく、覺えず立寄りて、君は何國如何なる人にて候ぞや。斯る片田舍に住み給はん人とも覺えずと、問ひければ、彼女房少し顏打上げて、さん候自は、知らずも此處に吟ひ來りし者にて候。扨爰は、何國にて待ふやらんといふ。爰こそ河內國赤坂と申す所にて候と答へらる。彼女房打聞きて、扨は河內の國とやらんにて待ふかや。其は都近き國と聞きつれば、懷しくこそ侍らへ。自ら元は都の內にて、父は雲の上にも交はられし殿上人にて候が、去る年の春、讃岐國寒川郡牟禮松の領主坂原藤馬助と申せし人に迎へられ、一葉の船に乘り、八重の潮路を漕がれ行きて、彼人に契を籠めしこと、宿世如何なる緣やらんと思ひしに、此藤馬助は、人に深き恨を受けたる人にて、國の敵とやらんなりとて、或夜丑三つの頃、見るも怖しき武士共二三百人、弓·胡籙·鑓·長刀を持ちて、牟禮松の館を取卷き、火をかけて打入りし程に、在合ふ者共も、命を限りに働き、夫の藤馬助殿も、自ら刀を持出で、切合ひ給ひしが、大勢に取籠められ、敢なくも遂に討たれ給ひぬ。日頃夫の側近く召使はれし若者、甲斐々々しくも自らを搔負ひ、煙の內を遁れ出で、濱邊に至り、彼方此方と尋ね

しに、商人船の磯に繋りてありけるを、兎角賺して、此人を、都の方に送り届けて呉れよと深く賴みて、我身は又、主君の御供を仕候と計いひ棄て、元の方へ走り行きて候ひし。其より商人船に乘せられて、此頃尼崎とやらん迄着き候ひしに、船の中の輩も、自を都迄も送りたく侍らへども、人々共に急ぎの事の侍れば力なし。是より都へは程も近し、辿りて渡り給へなんといひて、己が樣々行分れ侍りき。其より知らぬ道芝の露に濡ち、其所とも知らず吟ひて、今爰に來て侍りぬと、細々に語りて、せきあへず泣きければ、扨はやんごとなき人にこそ。某が方より、都へ送らせ參らせん。何か苦しく候はん。此方へ入り給ひとて、吾館に具し歸り、其より比翼の衾を重ね、別なくいひ睦ばれける程に、此女房只ならぬ身となりて、相勞る體に見えけるが、十月經て、一人の男子を誕生す。盛康大に悅び、早く成長せさせて、我家督となさばやと、早晩當所の領主とは呼ばれんずらんとて、其寵愛斜ならず。此若成仁の後、左兵衛督成氏とぞ號しける。

河州水分明神靈驗附法華經普門品の事

斯くて其年も暮れしかば、此若二歳になられけるに、正月の中旬、霖雨降續きて、物寂しき夕暮に、母の女房、何地ともなく失せられけり。盛康大に驚き、日頃、故鄕なれば、都へ歸りたきなんどいひつるが、都へや上りつる。又野狐の所業にやと、方々人を走らして、尋ね求めさせけれども、其行方を知るものなし。時に二歳の男子、寢て居られける傍に、小卷の卷物一軸あり。乳母の女房驚き、頓て彼卷物を取りて、急ぎ盛康に差上ぐる。左兵衞督取りて開き見給ふに、極めて細字の一卷なり。何なるらんと能々見給ふに、孫子が神武統宗といへる、軍略至極の祕書なりけり。盛康驚き、是は希代の珍書かな。吾幼少より軍學に心を委ぬと雖、今迄此書の名をだにも聞かず。是を以て思ふに、我れ武略の道に心を寄せ、明暮孫子の宮に步みを運び、尊崇すること年あり。されば孫子水分明神、我心中を憐れみ給ひ、假に女に化して、此若を授け、今此祕奥の一卷を與へさせ給ひしにや。然れば此若は、凡人にあるべか

らずと、信心肝に銘し、感涙を押へ乍ら、頓て身を清め、水分明神に參詣し、樣々奉施をぞ奉られける。斯くて其年も暮れて、翌年の春二月中旬のことなりしに、所用の事ありて、館の前なる楠の下を、下部共に掘らせけるに、土の下三尺計に至りて、金襴の守袋あり。下人等大に驚き、急ぎ取りて主君に奉る。盛康取りて見給へば、去年行方も知れず失せたりし妻の女房の、常に身を離さず持ちたりし、肌の守にぞありける。こは心得ぬ事共かなと、袋を開き見給へば、彼の妻の自ら書ける法華經の普門品にてぞありける。左兵衛督暫く思案し、感涙に咽び、我れ熟勘ふるに、亡父成綱より以來、世人に變りて、楠を愛する事甚し。又常に水分明神を信仰す。是れ武の道に達し、子孫繁榮を祈る故なり。さるに依つて水分明神御納受あり。神力にて楠の精靈をして、我に夫婦の語らひをなさしめ給ひ、一人の男子を與へ、祕奥の一卷を賜はりしこと、皆是れ靈驗あらたなるに依つてなり。又楠は非情なれども、我が愛する所を感じて、其恩を報せんが爲ならんか。然らば子孫に至つて、至剛の美名を天下に顯はさんこと、疑あるべからずとて、彼一卷の祕書と普門品とを深く納

めて、永く之を家寶とす。されば其後數十年を經て、元弘年中、楠河内守正成、赤坂の城より落行きし時、敵の射る矢、正成の肱のかゝりに當りしに、身に何の恙もなかりしを見れば、守袋に入れ置きたる普門品の、一心稱名の二句の偈に中りしと聞えしは、此普門品の事なりし。是れ不思議第一の奇瑞なり。此盛康よりして、楠氏代々、水分明神を敬信せらる。さるに依りて此社の華表の額も、帶刀左衛門尉正行の筆蹟なり。

多門丸誕生幷宇佐美彌次郎相撲の事

さる程に此男子生長して、武勇智略の名を顯はし、畿内に其德を稱す。左兵衛督成氏是なり。然れども其頃は、鎌倉の北條家、四海の權を執りて、仁政を行はれしかば、天下泰平にして、萬民快樂に誇りし故、させる高名もなかりけり。其家嫡刑部大輔正俊・其子從五位上左衛門尉正遠、後に改めて正澄と號す。正澄は人皇八十九代龜山院の御宇、弘長三年癸亥に生る。是れ宗尊親王の治世にして、北條相模守平時

楠正成誕生

宗、執權の時に相當れり。然るに正澄、先祖より取傳へたる所領、金剛山の麓二千餘貫の地を領し、隣郷に威を逞しくす。男子一人あり、俊親と號す。然れども早世しければ、正澄既に卅一歲に及ぶまで、續子なき事を深く歎く。爰に和州平郡郡信貴山歡喜院朝護國孫子寺（大和河内の境）の毘沙門天は、靈驗灼（あらた）なりしかば、正澄の室深く此事を歎き思ひ、信貴に百日參詣して、才智賢き男子を一人、儲けさせてたび給へと、丹誠を盡し、多門天にぞ祈られける。其信心や通じけん、彼室或夜の夢に、金色の甲冑を着たる異人、我口の中へ飛入ると見て夢覺めぬ。夙に起きて熟と案じられけるが、如何樣此は靈夢ならん。如何なる事の心にやと思はれしに、果して其より只なる勞（いたはり）とて、懷胎の身となられしかば、願望成就しぬと悅ばれけり。斯くて十四月に當つて、人皇九十一代伏見院の御宇、永仁二年甲午に誕生す。此時既に久明親王の治世にして、執權は高時の父相模守貞時にてぞありける。是れ正しく毘沙門天の、我子と化現し給ひしものなりとて、其名を多門丸とぞ號せられける。其故にや、幼少より聰明睿智にして、辯舌明かに、賢々（さくさく）しき事、譬へていはん方なし。六歲の時、

家人等の子供と、戲れて相撲を取られけるに、十二三歲なる童共の、而も逞しき者共を、易々と打倒されける。其後四五日を經て、又相撲を取り戲れられけるに、十一二歲より十五六歲の子供を、悉く打倒されければ、後には怖れて、相手になり候はんといふものなし。斯る所へ多門丸の乳母の夫、宇佐美次郎澄安が嫡子彌次郎出來れり。傍なる童共之を見て、彌次郎殿こそ來り給へ。若君の相撲に勝ち給はん人、宇佐美殿ならではあるまじといふ。彌次郎は十八歲にて、而も健者（したゝかもの）なりけるが、某、若君と相撲を取り申さば、中より落し申さんといふ。多門丸聞きて、如何に彌次郎ともいひ、中よりは落されまじと、立向つて組まれける。彌次郎頓て多門丸の腰の帶を攫んで、中に差上げ、落し申さんやと打笑ふ。多門、差上げられ乍ら、落して見よといひさま、右の手にて、宇佐美が眉間を丁と打つて、忽ち渠が心を奪ひ、中より跳ね落ち、彌次郎を打倒されければ、宇佐美も負け乍ら、此君御成長の後、如何なる譽をか顯し給ふらんと、悅の淚をぞ流しける。此彌次郎は、後に宇佐美河內守と呼ばれ、正成（多門丸後號二正成一）の正の字を賜はつて、正安と號し、數度の忠戰を勵みて後、建武二年、

正成と共に、湊川にて、自害をぞしたりける。斯くて多門丸、七歳にては尋常の男の力量よりは、少し勝つて見えたりけるが、其年の冬、或雪の夕暮に、雁の友に後れて渡るを見て、多門丸、弓取つて矢打番ひ、過たず彼飛雁を射落されしかば、父左衞門尉正澄も、是れ凡人の所爲にあらずと、舌を振はしてぞ居給ひける。其翌年八歳の春より、同國錦部郡檜尾山觀心寺といへる眞言寺へ上せて、學文をなさしめられけるが、一を聞きては十を知る、才智世に雙なかりしかば、稽古滯る所なく、水の流るるが如くなり。

多門丸智勇の事

斯くて多門丸、明暮文を學び劍術を琢磨して、遊戯を好まるゝ事なく、才智世に勝れて、さながら神の如くなり。爰に同國矢尾別當顯幸といふものあり。楠左衞門尉正澄と、地を爭ふこと累年なり。然るに別當、法師の身なりと雖、武の道に賢く、勇謀勝れたる法師にて、或時は勝ち或時は負け、勝敗曾て定まらず。斯る所に嘉元三年

多門丸の武勇

四月十二日、矢尾別當顯幸出張すと聞えしかば、楠多門丸、父正澄の前に進み出で、敵に足をためさせなば、合戰しにくかるべく候。味方唯今馳せ合ふべしとは、敵思ひ寄るまじければ、油斷してぞ候らん。其不意を討つて、勝利の術を盡させ給へと申さるれば、正澄大に喜び、汝は老將の智ありとて、有合ふ勢を引率し、敵陣に馳向ひ、鬨をも作らず、無二無三にどつと切つて懸らるゝ。矢尾が軍勢共、思ひ設けざる事なれば、上を下へと猿狽へ廻り、周章て騷ぎて見えけれども、顯幸武功の法師にて、士卒を下知し、陣を取鎭めて戰うたり。左衞門尉正澄、敵は多勢なりと雖、事ともせず。駈入りては駈出で、駈拔けては切通る。此時多門丸、眞前に進み戰はれけるが、黑糸緘の鎧に、染羽の矢を負ひ、黑き馬に乘つたる武者と渡し合ひ、馬より下に切つて落し、敵の上に乘懸り、和主は誰ぞと問はるれば、別當に加勢として、泉州より馳來りたる、岡田六郎左衞門と、名乘も果てぬを首掻落し、太刀の鋒に刺貫き、楠多門丸十二歲、軍は斯くこそすれと、高聲に名乘られける。斯くて兩軍雌雄を爭ひ、爰を先途と戰ひしかども、互に敗られず圍まれず、合戰は互角にして、敵味方共

に戰ひ屈せしかば、相引に引取りけり。此多門丸、後に楠河内守判官正成と號せし良將なり。

南朝太平記卷第一終

軍法の傳來

南朝太平記卷第二

軍法傳ニ來本朝ニ來由并楠正成軍術傳習の事

抑兵家の軍法祕傳妙要と申すは、昔時老子、天上より傳ふる所の一法を種として、太公望、天人地理に則り、三門四種を立て、始めて兵道を開く。其始は軒轅黃帝より起れるなり。されば李老君・太公望・管仲・黃石・張子房に、相傳はると雖、子房深く之を祕して、世に傳へざりけるに、其後唐太宗皇帝、天下の內を普く尋ね求め給ひ、李靖と之を論決し給ふ。是よりして軍術の祕要、永く末世に傳はれり。然るに本朝には、人皇十四代仲哀天皇の御宇、僅に三略の書、日本に渡ると雖、永く世に斷絕す。其後吉備大臣入唐して、三略一部を傳へ、歸朝すと雖、深く胸中に祕して、子にだも授けず。洛北鞍馬寺の多門天の寶藏にぞ納めける。是に依つて人皇六十代の帝醍

醐天皇、如何にもして兵書の至要を、日本に求め得て、永く吾朝の寶とせんと、樣々叡慮を運らさせ給ふ。此時安保親王の曾孫左大辨宰相大江維時、江相公孫千古子也、文章博士にてありければ、維時に命ぜさせ給ふ。維時敕を蒙つて、延長三年五月唐朝に赴きけるが、同年の仲秋唐土に漂着し、沙金五萬兩を以て唐帝に獻じ、五萬兩を將軍龍取に與へて、軍術の奥祕を授からんと歎きしかば、帝之を許し、龍取に敕して、六韜三略天文取捨の傳、諸葛亮が四首八尾、常山の蛇勢、奇正進退千變萬化の傳規、凡そ兵家の祕書三十餘卷、悉く眞授を蒙り、日本に歸朝せり。是よりして大江氏の後胤、世々軍術の祕奥を傳へ受くるとかや。爰に河内加賀田鄕に、修理亮大江時親といへる人あり。中納言維時始は左大辨宰相の末裔にて、太公望が立つる所の、覇者の眞傳の奥義を極めし人なりけり。然るに楠左衞門尉正澄の長男多門丸、十五歲になられけるが、箕裘の業を繼ぎて、聰慧萬人に勝れける故、如何にもして軍法兵傳の祕法を知らんと、思慮せられけるが、幸ひ大江修理亮時親當國にあり。此人に便りて、軍術を學ばゝやと思案して、時親と子弟の契をなし、同國加賀田の鄕に行通ひて、太公

が八十一變、轉化順逆百二十八變、孫子が十三變を始め、唐朝傳來の軍術、臨機應變の祕奥を、悉く習ひ得られけり。

正澄父子與二矢尾一合戰の事

斯くて楠多門丸、既に十六歳に及びしかば、延慶二年二月十三日に首服を加へ、楠兵衞尉正成とぞ號せられける。斯る所に、矢尾別當顯幸、多年の本意を達せんと、同年の六月下旬、軍勢を催し出張す。楠左衞門尉正澄・嫡男多門兵衞尉正成、敵に足をためさすなとて、勢を二手に分けて、左衞門尉正澄、其一手を帥ゐ、敵陣に馳向はる。多門兵衞尉正成は、殘る一手を從へ、敵陣の左の方なる森の中に、忍び寄り、勢を伏せてぞ居られける。矢尾の別當は、斯る謀ありとは夢にも知らず、敵は小勢なるぞと見謾り、太皷を打たせて懸り合ふ。楠勢、豫て謀りし事なる故、馬の足四度路になり、辟易してぞ見えたりける。顯幸大に勇み、懸れ〳〵と下知すれば、逸雄の若者共、無二無三に切つて入り、一戰に切勝ちて、遁さじと追懸くる。兵衞尉正成、時分

多門丸元服、正成と稱す

楠勢、矢尾勢を破る

は好きぞ。起立てよと下知せらるれば、伏勢共一同に起立ちて、喚き叫んで打つて懸る。時に正澄の勢、一同に取つて返し、先づ後より引包み、微塵になれと攻立つる。さしもの顯幸一戰に打負けて、三方に分れ敗北するを、楠先陣の勢を以て、備を亂して、少々敵を追討にぞ討たしめけり。此時矢尾が領地一千五百餘貫の地を討取つて、楠家前代より領し來る所の采地、河州石川郡二千餘貫、凡そ三千七百餘貫の領主となりて、是より永く矢尾に切取らるゝ事なし。是れ偏に正成一身の謀略に據れり。此人今年未だ十六歳、末如何ならんと、聞く人舌を振はしけり。是より楠家次第に繁榮し、殊に子數多出來れり。嫡子は多門兵衞尉正成、其次は女子なり。

楠正澄死去

是は一族和田孫三郎正遠（後和泉守と號す）が妻にして、新田新兵衞高家・同五郎正隆・同新發意源秀等が母是なり。其次は楠五郎正氏、其次七郎正季、其次は法師にして、後越前國平泉寺に住せしめ、律師惠秀とぞ號しける。其後左衞門尉正澄いつしか病にそみ、遂に卒去せられければ、正成、父の名跡を繼ぎて、威名彌盛なり。

筒井氏家系并矢尾・筒井柚頭出張の事

筒井氏家系

爰に和州の住、筒井氏の來由を尋ぬれば、天津兒屋禰命の苗裔、藤原の方族にして、近衞家より分れ出でたり。其故は、人皇四十八代稱德天皇の御宇、神護景雲二年戊申の冬十一月、和州添上郡三笠山に遷ります神あり。第一神は、常陸の鹿島より遷らせ給ふ武甕槌命是なり。第二神は、下總國香取より影向ある。其御神を經津主命と申し奉る。第三神は、河內國平岡より、此處に跡を垂れ給ふ。天津兒屋禰命是なり。第四神は、伊勢國度會郡より遷らせ給ふ。其御神を姬大神と申奉る。春日大明神と崇め奉るは、此四座の御神なり。此時天津兒屋禰命に從ひ奉る藤原氏四家あり。其內に一人、添下郡筒井庄に住して、春日の神社に給仕す。さるに依つて、筒井を以て世々氏とす。其名を筒井太夫藤原順武と號す。是れ筒井氏の元祖なり。當時其後胤に筒井淨慶といへる法師ありけるが、世々春日明神の社僧にして、釆地二千五百町、家富み榮えける故、己が職にもあらずして、武を嗜み馳引を習ひければ、

楠正成、矢尾筒井兩軍と戰ふ

相從ふ一族郎等共、早業力達をのみ好みけり。然るに楠多門兵衛と不快の事出來つて、互の遺恨日々に增長せり。此事を傳へ聞き、矢尾別當顯幸、時を得たりと悅び、正成に切取られし千五百餘貫の地を取返さんと、筒井が方へ使者を馳せて、淨慶に加勢をぞ賴みける。淨慶も、楠を惡しと思ふ折なれば、堅く領掌して、一千餘騎を引率し、白地に墨にて、春日大明神の五字を、大文字に書きたる旗を飜し、河州矢尾に馳來れり。顯幸大に悅び、己が手勢一千餘騎、兩勢合せて二千餘騎を相從へ、赤坂へ押寄せんとぞ議したりける。楠正成之を聞き、何程の事かあるべきとて、一家相集つて八百餘騎、赤坂の館を打つて出で、堺の津より東の方、譽田の北に當つて一城を構へ、要害堅固に陣しけり。さる程に、國中の諸士、矢尾が催促に從ひ、與力して馳着きしかば、顯幸既に三千餘騎の多勢になり、柚頭神道に備へて、其間二里餘りに、軍勢陣を固めたり。然れども淨慶は、正成が武勇尋常ならずと怖れて、寄らん義勢もなし。正成は又、味方の勢八百餘騎、敵は既に三千餘騎、對揚すべくもなき多勢なれば、如何なる謀をかなしけん、敵の軍立を見て、轉化して戰ひ、勝つ

は良將の謀なり。然らば待つに如かじとて、敢て出でて戰はず、互に睨み合ひて、十餘日をぞ過しける。

柚頭合戰 附 正成奇策の事

さる程に、兵衞尉正成は、斯くてもあるべき事ならずと、八百餘騎を引率し、花田鄉に陣を移し、敵陣近く進まるゝ。筒井淨慶之を見て、さらば一戰を始むべしと、軍勢を押出す。此勢、道一筋を中にして、池を前に當て、池の岸の少し高きを要害に取りて、岸より此方に勢を備へ、先づ足輕の兵を、十八二十八一組にして、足輕軍をぞ始めける。大將正成、恩地左近太郎滿一を近付け、大和勢の軍立、思ふに合せて恐るゝに足らず。軍には打勝ちたり。若者共も、皆々今に高名せさせんと申さるれば、滿一聞きて、其故は如何なる事にて候ぞ。承らんといひければ、正成莞爾と笑ひ、さればとよ。池の岸少し高きに、岸の上には、兵を一騎も出さず、岸より下の彼方に、軍勢を立てたるは、正成が武勇を怖れたると覺えたり。其上一二町退いてこそ勢

を立つべきに、池の際に備へしこと、是れ良將のせざる所なり。其故は、敵、中なる道を越して寄せ懸けんに、池の際近々と備へたる軍勢は、懸らんとするに、行先遠からず、餘りに近き故、却て後るゝ者なるぞ。斯樣なる細道を、押來つて懸る者共は、皆討死と期したる者共にて、其と戰ふに於ては、味方多くは討負くべし。又敵の先陣に進まん者共、臆病にして、逃歸らん輩ありとも、後より續く軍勢共、聲々に喚き叫んで、勇み來る時は、其勇氣に引立てられ、必ならず味方の陣中へ、必ず切つて入る者なり。然らば必定、味方の勢討負くべし。其時は味方、假令ば先陣千騎計ならば、二陣は一町五反退き、又先陣二千ともあらんには、二町を退き備ふべし。敵兵池の中なる細道を押來り、廣みへ打つて出で、二十間も過ぎて來らん所へ、味方の先陣、備を亂さず押懸つて戰ふ時は、味方の勝利疑なし。是れ旨將の嘗て知らざる所にして、良將の專と謀る所なり。其上敵陣二三の備も、思の外遠ければ、さのみ心にくからずとぞ語られける。之を聞きて士卒上下共に、悦び勇むこと甚し。然る所へ矢尾別當顯幸、勇謀兼備の法師なれば、逞兵六百餘騎を引勝(ひきすぐ)つて、旗只一流

押立て、香象の波を踏んで、大海を渡る勢の如く、正成の本陣の右の脇より、靜々と懸り合ふ。　正成之はと見やりたれば、敵勢雲霞の如く、後陣よりも段々に、備を立てゝ向うたり。　其時正成、和田孫三郎正遠に向ひ、某が早晩(いつ)とても、四隊の陣を好むは是なり。　向に敵ありとのみ備へなば、斯る時大に騒ぎなんぞと、快げに打笑ひ、池より此方一町計退きて、備へ居たる味方の勢へ、急ぎ軍使を馳せて、少しも駭く事なかれ。　敵兵、池の中なる道を越えて切出なば、懸合せて相戰へ。　少しも時刻を移すべからずと、いひ遣して後、味方の勢を見給へば、横合より懸り合ふ敵に驚き、諸卒辟易して色めき立つ。　此體にては、戰ふといふとも、利あるべからずと思はれければ、鐙踏張つて立揚り、諸勢に向ひ大音上げて、正成今日軍を發せし事、尋常にはあらず。　敵の中に、味方へ返忠の者多くあつて、合圖の契約ある故なり。　恩地はなきか、滿一はあらざるか。　池より此方にて、合圖の火を擧げられよと下知せられしかば、之を聞きて士卒色をなしけり。　恩地左近太郎、扨は合圖のありけるにやと、池より此方の少し高き塚に登つて、合圖の狼煙を三つ迄上げたりける。　之を見て

横合に懸り來る矢尾別當が軍勢共、敵陣に狼煙の上りたるは、如何樣味方の中に、返忠の者共ありと覺ゆるぞ。若し此勢の中に、敵と心を合せぬる者やあるらん。又後陣より續く味方に、敵と一味の者やあらん。其上大和勢の心も知り難しと、ひそひそと私語き立ちて進み得ず。又筒井が軍勢共も、是は何樣、味方の中に、敵へ返忠の者共ありと見えたりと、互に人を疑ひ、私語き合ひて進み得ず。暫く時刻をぞ移しける。正成、士卒に向つて、合圖の狼煙を揚げつるが、今少し早かりけるぞや。和田正遠の一備は、虛逃して、敵に見せられよと下知せらる。和田孫三郎、さ承り候とて、士卒に其心を知らせ、俄に崩れ立ち、周章ふためき逃退く。敵の方には之を見て、又例の古狸が、虛崩れすると覺えたり。化さるゝな人々、馬早からん者共、見て來れと下知すれば、忍田次郎・絹川入道以下、五騎三騎づつ、打連れ〳〵馳行きしかども、敵を怖れて、矢掛り迄も近付かず。馳歸つて、彼の向に見えたる林の廻と其陰に、伏勢のあるかと見えて候なんどと、定めぬ事を、實しやかにいひければ、元來取集め勢の事なる故、正成一時の謀に陷つて、さぞあるらんといふ程こそあれ、

矢尾に與力したる若江藤次、己が勢を引纏め、後陣より引行けば、矢尾・筒井が軍勢共色を失ひ、色めき渡つて見えたりけり。正成下知して、今日の合戰は是迄ぞ。引取れよ者共と、靜々と引取られしか共、一人も追懸くる敵はなかりけり。實は敵方に、返忠の者ありしにはあらず。矢尾が軍勢、思の外に味方の後に廻りたれば、前後の敵に取包まれ、戰ふとも利あるまじければ、引取らんと思はれしが、只引取らば、定めて敵兵附慕はん。然らば味方に、手負死人多く出來んと思案して、斯く烟をぞ上げられける。是ぞ豫て企みし謀にもあらず、事の急なるに臨んで、時に取つての方便(てだて)なり。如何樣凡人にはあらず、謀略勝れたる名將ぞやと、諸人後にぞ感じける。

矢尾・筒井引二退柚頭・神道一事

斯くて正成は、一時の謀略を以て、安々と勢を引入れられけるが、此軍過ぎての後、數年に及ぶ迄、謀成りし事は、曾て口外に出されず。某敵に方便(たばか)られ、返忠せんといひしを、實ぞと心得、大に負軍せんとしたりしなりとぞ宣ひける。是は以後又斯樣

の謀、すまじきにてもあらざれば、其時軍勢共、以前にも斯樣の方便にて、大將のたらされしぞやと、いはれまじきが爲なりけり。さる程に正成は、其翌日より時を替へて、日每に兵を出し、敵の中に、味方へ返忠の者共ある氣色にのみ見せかけ、敵陣へ、合圖の矢文など射入れければ、矢尾・筒井が陣中に、大に狐疑出來つて、誰こそ楠と心を合せて、後矢射んと相巧めり。何某こそ敵に一味して、味方を討たんと謀るぞなんどと、陣中の曲として、ありとあらぬ虛說共をいひ私語きければ、互に人に心を置合ひて、其より軍の評議もなし。然る處に、玉手四郎・白坂兵部丞・岩田・布忍・當宗・雜賀・龍田・十市・加木波等楠と慣れ、合敵を陣中に引入れんと相謀れりと沙汰しければ、此者共之を傳へ聞き、大に怒り訇り、我々身に過もあらずして、斯る惡名を蒙るこそ安からね。必竟今度の合戰は、將軍家鎌倉殿への忠功にもあらず、又正成に私の遺恨もなし。親しきまゝに、顯幸や淨慶に賴まれて、其信を達へじが爲、士の一道を守り、一旦與力したる計なり。然るに左樣に疑ひ思はるゝこそ口惜しけれとて、雜賀小太夫、一番に勢を引連れ落行きしかば、玉手四郎・白坂・岩田・當宗・龍田・

布忍・十市等我先にと、己れ〳〵が陣を引拂ひ、領所々々へ落ちて行く。筒井・矢尾に與したる集り勢共之を見て、一人二人拔々に逃行きしかば、殘り少なになりにけり。結句後には、筒井は顯幸を疑ひ、顯幸は淨慶を疑ひて、楠と一味をやなしつらんと、互に狐疑の心を生じけるが、終には筒井淨慶法師、別當に斯くとも告知らさず、夜深けて陣を引拂ひ、大和の筒井に逃歸れば、顯幸も怺へ得ず、己が矢尾の城にぞ引取りける。正成、さあらんと思ひつる事よとて、其翌日軍勢を出し、敵の陣所を悉く燒拂はせ、赤坂にぞ凱陣せられける。

矢尾顯幸敗走

矢尾顯幸智謀の事

斯の如く矢尾と楠、爭ふこと數年、動もすれば顯幸働き出でしかば、之を防がんが爲に、家子の志貴右衞門尉を、兩家の領所界へ差遣さる。是に依つて志貴究竟の者共を從へ、一城を構へて、百餘騎にて楯籠りければ、顯幸も出張すべき便なし。然れども以前花田にて、無下に引退きし事を本意なく思ひ、右衞門尉を追落して、多年

の恥辱を雪がばやと思ひ、種々思慮を運らしけるが、一術案じ出して、郎等の上村十郎に謀を委しく言含め、百餘騎にて、搦手の方へ忍び廻らせ、我身は追手へ向ひけるが、五町餘を退けて、竹の林のありけるに、澤五郎を始めとして、健なる若者共八十餘騎、伏勢として隱し置き、別當顯幸は五十騎を引率し、追手の門近く押寄せたり。此城追手一方は、平地に續きたれども、搦手は數十丈の谷にして巖銳く、殘る二方は、深田重々に續いて、人馬の足及び難し。元來僅百餘騎の勢なれば、三方は切所を賴みに勢をも配らず、百餘騎の者共、悉く追手へ集つて、敵は小勢なりといふまゝに、門を開き切つて出で、互に鬨を作り懸け、追つ返しつ相戰ふ。顯幸豫て企みし事なれば、爽に物具し、矢尾別當是にあり。城主志貴右衞門尉に見參せんと、高らかに呼はり、邊を拂つて馳立て〳〵戰ひしが、顯幸矢に中りける眞似をして、馬より下に𠀋と落つる。郎等の香西兵衞次郎走り來り、己が背に搔負ひ、後陣の方へ引退く。是を見て城中の兵共、敵の大將顯幸は、痛手負ひしと覺えたり。進めや討取れと、喚き叫んで攻立つる。寄手は豫て合圖の事なれば、周章騷ぎて崩れ行く。

志貴右衞門尉、謀とは知らず、顯幸を討取れと、百餘騎を前後に立て、城を拂つて切つて出で、遁さじと追懸けたり。此時上村十郎、兎角して搦手の切所を忍び越え、城中へ乘入れ、矢尾が家の旗十餘旒、塀の上へ差上げたり。斯くとも知らで右衞門尉が士卒共、短兵急に追懸けたり。時に伏勢の八十餘騎、一同に咄と鬨を作る。澤五郎、懸れや進めといふ儘に、眞先に打つて懸れば、士卒等我劣らじと、面も振らず切つて入る。すは寄手には伏勢こそあれ。過すな、備を立直せといふ程こそあれ。城の方を顧みれば、早敵入變りたりと覺えて、敵の旗十餘旒、飜つて見えければ、進まんとするも叶はず、引かんとすれば、早城を取られぬ。進退爰に谷つて、網裏の魚の如くなり。右衞門尉血眼になつて、敵に安々と方便れぬる口惜さよ。斯樣の時、遁れんと思へば死し、死せんと思へば生くる者ぞ。命を捨て、一方打破つて通れよ者共とて、鋒を揃へ敵中に切つて入り、近付く者を馳倒し切散らして、直に切拔けしかば、志賀が賴み切つたる郎等十八騎討たれ、殘る者共も、深手淺手、悉く負ひて、赤坂へと落行きしは、嚴しかりし分野なり。

志貴右衛門尉の事

顯幸が謀に乘せられて、志貴右衛門尉一戰に打負け、赤坂へ逃歸りしかば、諸人之を見て、楠家と別當と、所領の論に依りて、相爭ふこと數年、勝敗互に定まらずと雖、楠方一城をも取らるゝ程の事はなし。然るに志貴は、法師の軍立より拙なうして、斯く赤恥を搔きぬるは、侍にてはあらずして、比丘尼にも猶劣れり。今赤坂に落來り、楠殿に對面し、何事をか申すべき。生きて恥を曝さんより、只死ねよかしとて、指さしゝてぞ笑ひける。斯くて志貴右衛門尉、赤坂の館に來り、大將に對面す。正成、軍の次第を委く尋ね問ひて後、正成が常にいふ所は、爰にこそあれ。斯迄に愚なる合戰をすべき和主にてはなきに、何とて斯る不覺はせられしぞやとて、以往に數度ありし志貴が忠義武勇の働、又軍旅に謀才ありし事共を語り出し、さるにても其身、恙なく遁れ歸りしことこそ嬉しけれ。死したる者は、歎くといふとも歸るべからず。然れども某故に、多くの士卒討死せしこそ、實に以て不便なれとて、暫く淚を

流されけるが、誠に此度和殿が過は、只是正成が、天命に違ひたる故にして、和殿の過にはあるべからずと、再三之を賞し、馬物具も、定めて戰場にぞ捨てられぬらん。之にて後日の合戰をせられよと、馬物具を與へ、又討たれし兵共の、親妻子を呼出し、金銀米錢を、悉く程々に從ひ與へられければ、諸人其情をぞ感じける。さる程に矢尾別當顯幸は、志貴が城を安々と攻落し、上村十郎を入置きし所に、志貴右衞門尉之を口惜く思ひ、如何にもして城を取返し、會稽の恥を雪がんと、晝夜心を碎きけるが、百餘日過ぎて後、右衞門尉、正成の前に出で、上村を攻落し、鬱憤を散じたく候と望みしかば、正成、此儀尤なりとて、敷地太郎・佐川平九郎・同又次郎以下、究竟の兵百三十騎、相添へてぞ差遣されける。右衞門尉大に悅び、赤坂を打立ち、上村が城に忍び寄りけるが、術を企み澄まし、素より案内は知りすかしつ、名譽の忍の上手共を二十餘人、城中へ入れ置きて、其夜の丑の上刻、敷地・佐川を搦手へ差向け、我身は追手より忍び寄せ、鬨を作りて攻懸る。城中には、思設けざる事なる故、夜討こそ寄せ來れと、周章騷ぐこと大方ならず、太刀よ松明よ馬よ鎧よと騷動す。城

の領人上村十郎、士卒を下知して防ぎ戰ふ所に、豫て入置きたる忍の者共二十餘人、城中の所々に火をかけ、此に顯れ彼に隱れ、喚き叫んで切廻れば、城兵等之に驚き、味方の中に謀叛人こそ出來たれと、狼狽へ廻る所に、寄手の勢、追手搦手より、只一息に攻入りて、切立て追立て戰ひしかば、城兵散々に切なされ、十方に落ちて行く。城將上村十郎、今は是迄なり。引入りて自害せんと、一間なる所へ走り入り、鎧を脫捨て、既に腹を切らんとする所に、右衛門尉が甥の志貴小八郎、障子を蹴破り飛入りて、只一太刀に討取り、首を鋒に刺貫き、悅ぶこと限なし。殘黨等悉く討取りて、再び城を取返しければ、大將正成大に感じ、賞祿をぞ與へられける。

河州人見山城軍附永瀨七郎被二生捕一事

楠正成と矢尾別當と、互に威を爭ふこと數年なり。素より正成、神武不測の名將なりと雖、矢尾も亦勇謀兼備の法師故、打負くれども事ともせず。如何にもして、本意を達せんと思案して、正成の領所人見山に城を築き、若し正成押寄せなば、我れ後

詰して、前後より取挾み、楠を討取るべしとて、正和五年四月上旬、舍弟永瀨七郎元滿に、從兄弟の若江四郎を相添へ、如法院幸覺・宍太藤三以下、究竟の精兵三百餘騎をぞ籠めたりける。正成此告を聞き、敵に足をためさせては惡かりなんとて、赤坂に有合ふ所の手勢二百餘騎を引率し、人見山へ押寄せらる。和田孫三郎正遠・恩地左近太郎滿一等馳加はつて、五百餘騎にぞなりにける。正成悅び、士卒を集め、此人見山は、東南の二方は、磐石連り要害自然の嶮岨なれば、城兵等働くこと叶ふまじ。元より切所を賴みに、防ぎ勢もあるまじけれども、味方の勢、攻寄すること叶ひ難し。さるに依つて正成思慮を廻らすに、先づ忍の上手共を、城中に忍ばせ入れ、不意に城に火をかけなば、城兵等前後を忘れ、周章せんは治定なり。其時味方の勢進むべからず。靜まり返つて勢を備へ、敵の落つるを待ちて討止むべし。日を經ば顯幸後詰して、正成を、先後より引包まんとぞ議るらん。今夜城を燒落すべしとて、板持・飛田以下、名を得し忍の者共を招き、汝等城に忍入り、方々に火をかけよ。城主永瀨は、矢尾の作道へぞ落行くらん。元滿を擒にせよ。必ず討つべからずとて、恩

人見山の合戰。

地左近太郎に、究竟の若者五十人に、棒を持たせて差添へ、矢尾の作道へ向はしめ、和田孫三郎は、宇津の在家に陣を取らせ、我身は城に向ひ、陣を取りてぞ居られける。板持・飛田以下、安々と城中に忍入り、其夜の丑の刻計に、三所より火をかくる。豫て合圖の事なれば、鬨をも作らず、靜まり返りて詠め居る。城中には、忍の入りたるとは夢にも知らず、返忠(かへりちう)の者こそ出來たれと、驚き騷ぐこと斜ならず、子は親を捨て、從者は主を後に置きて、十方に落行きけり。恩地左近太郎は、矢尾の作道に陣を取り、棒の者五十人を、路の傍なる草中に伏置きたり。案の如く大將永瀨七郎元滿、主從只三騎にて、作道を落來る。恩地は百二十騎にて陣しけるが、敵を僞(おび)引き寄せんが爲め、味方の勢廿五騎を、落人に似せさせ、同士軍せさせて、逃る體にぞ見せかけゝる。先立つて早敵二人生捕りしかば、棒の者共に相添へ差置きて、敵の樣子を問はせければ、只今逃れ來るこそ、大將七郞殿にて候といふ。五十人の者共、此事を聞課せ、永瀨を間近く僞引き寄せ、一同に咄と起立ち、馬の足を薙伏せ〳〵、落つる所を叩倒し打伏せて、何の手もなく、三騎共に生捕りけり。如法院幸覺は、深手淺

手十三ヶ所迄負ひ乍ら、辛うじて落延びぬ。若江四郎は、多勢の中を切拔けて、難なく矢尾に落行きけり。斯くて正成は赤坂に歸陣し、七郎元滿に對面し、懇懃に饗應すること、宛ら賓客を請ぜしが如く、世に情深くあへしらひ、三十餘日を經て、矢尾が方へ送り返されければ、諸人皆正成の情の程をぞ感じける。

北條高時奢侈并越智八郎滅亡の事

北條高時驕奢

北條相模守平高時と申すは、最勝園寺貞時の家嫡なりし故、正和五年父の遺跡を續ぎて、將軍家の執權職に補せらるゝ。此時の征夷將軍は、後深草院の御孫久明親王の長子守邦親王にてぞ坐しける。高時此時十四歲未だ幼若なりと雖、北條既に九代、天下の執政として、殊に武藏守泰時より以來、專ら仁政を執行はれければ、其餘澤にやよりけん、內管領長崎入道圓喜・高時の舅秋田城介時顯等、高時を輔佐し、貞時の政務を學び、先例を以て政道を執行ひしかば、天下も穩なりし所に、高時成長あるに從ひ、非道非義の行跡のみにして、晝夜俛遊を好み、夜は終夜美女を集め、酒

に沈醉して狂人の如く、晝は終日田樂を集め、金銀を費すこと瓦石の如し。後には入道して、崇鑑とぞ號しける。奢侈日々に盛に、月々に增長して、鎌倉府中に集め置く所の美女三十七人、大庄三ヶ所四ヶ所、或は二千貫三千貫の所領を與へらる。加之新座・本座の田樂、凡そ二千餘人、之を十人廿人、或は二人三人づつ、在鎌倉の諸大名の、其分限に隨つて、預け置かるゝ所の弊幾許ぞや。是等が爲に、故右大將賴朝卿より給はり傳へたる諸士の領地を、故なく沒收して與へられしかば、大名國人等貧うして、民を貪り惱せり。是に依りて日本六十餘州、總て貧國とぞなりにける。然るに長崎圓喜入道、既に老耄しければ、其子新左衞門高資、內管領として、天下の事、大小となく執行ふ。高資素より慾心强盛にして、色を好んで美女を愛し、己を慢じて士を侮り、賄賂に耽つて、忠なき者に賞を與へ、咎なきに罰を加へしかば、大名國人等、相模守高時を恨み憤ること甚し。視二君臣一如二土芥一則視二臣君一如二寇讎一といへること、理なりと覺えけり。其頃大和國の住人に、越智八郎といふ者あり。相模守平高時幷に長崎新左衞門尉高資が、非道の政を恨み、反逆を企てんと相巧みけるが、

内々紀州の安田庄司・攝州の渡邊右衛門尉等と心を合せ、天下を覆さんとぞ企みける。斯る所に越智八郎逆心を企つる由、京都六波羅に聞えしかば、未だ敵に勢の馳着かざる先に、攻落せよとて、元亨二年の夏、六千餘騎を差遣さる。楠多門兵衛尉正成も、六波羅の催促に從ひ、三百餘騎にて出陣す。越智八郎もさる者なれば、三千餘騎を引率し、半途に出でて勢を伏せ、敵の思寄らざる所を、不意に起つて攻立つる。京勢は、すは敵方に伏勢を設けたるぞ。備を立直して戰へと、いふ程こそあれ。先陣後陣一同に、嗜と崩れて逃げて行く。大和勢氣に乘りて、短兵直に進み備を亂し、一人も遁さじと追懸くる。是に依つて敵將八郎が本陣も、僅百騎計になりにけり。楠正成は是迄も、猶靜まり返つて備へられけるが、百騎計にて控へたるは、大將越智が本陣と覺えたり。斯く軍道をも知らざる敵を討たん事は、いと易く覺ゆるぞ。必ず亂れて味方を追ふ敵を討つべからず。我三百餘騎の勢を以て、五人六人方々へ散亂れたる敵を討ちたればとて、何の高名とかなるべきぞ。敵將越智が首を取つて、子孫の眉目に當てよと、下知せらるれば、三百餘騎の兵共、越智が勢の眞中へ、

驀直に切つて入り、敵を巴の字に追廻し、萬字に切立つるとぞ見えし。百餘騎の者共、或は討たれ又は逃散りしかば、今は大將越智八郎を始め、主從僅十三騎にぞなりにける。八郎此勢を一所に集め、又敵中に馳入つて、前後に當り左右を擊ち、七顚八倒して戰ひけるが、十一騎討たれて、大將八郎と生羲五郎と、主從只二騎に討なされ、敵中を切拔け、南を指して落ちて行く。逸雄(はやりを)の若者共、何國迄と追懸けしかば、越智・生羲二人、共に馬をも射られ、步立になり、四五町も落延びしを、多勢追懸け、遂に二人共に討取りしかば、京勢悅び、凱歌を唱へて引返す。是に依つて諸士、愈正成の武勇を感ぜずといふ事なし。

楠正成、越智八郎を討つ

南朝太平記卷第一終

南朝太平記 卷第三

渡邊右衛門尉逆心 附 楠正成攝州發向の事

楠正成、渡邊勢と戰ふ

さる程に和州の越智、既に滅亡しける所に、攝津國の住人渡邊右衛門尉、高時を恨み逆心を起し、近郷を侵せしかば、六波羅多勢を差向けらるゝの所に、京勢一戰に打負け、言甲斐なく帝都まで引返す。是に依つて楠兵衛尉正成、六波羅の命を奉つて三千餘騎を引率し、渡邊の城に押寄せらる。此城廻(まはり)十町廿町が程は深田にして、路より外は、人馬の通ひなり難し。敵將渡邊右衛門尉も一千餘騎を従へ、城中を打つて出で、七つに分けて備へたり。正成士卒に向ひ、敵の陣所を見渡すに、是より十餘町は隔てぬらん、其の勢千騎にはよも過ぎじ。然れば百騎と見えたる備へは、百五十騎差遣さん。何れとも斯の如くにして、味方をも七つに分けて差遣し、敵の

強弱を試みんとて、先づ持楯の人長なるを、面に撓皮を張り、楯に狹間を切らせたるを手々に持たせ、打物の衆を後に立て、射手を先に進ませて、敵間十間十五間、又は廿間計を隔てゝ相戰ふ。敵、馬武者を以て駈破らんとすれば、持楯前に突連ねて堅城の如く、又引取らんとすれば、敵追繼つて、駈散らすべき氣色なり。右衞門尉が郎等深志入道伯心、渡邊が前に來り、此分にては味方の負軍と見えて候。早く此方にも柴を築上げ、防戰の便と仕らばやといへば、渡邊聞きて、此儀尤なりとて、芝を築上げさする所に、正成、精兵の射手を二百人勝り出し、散々に射させければ、楯も物具も耐らず、手負死人數百人出來れり。敵の防ぎ兼ぬるを見て、楠又七手の備へ、加勢の者共を差加へ、我身は二三町退きて陣を立て、又百五十騎を遣して、戰ひ疲れたる味方の勢と、入變へて戰はしむ。正成又豫て用意し置きたる酒飯を、先陣の勢に勸むること、一日に三度なり。正成の本陣より、軍使の行歸ること、只櫛の齒を引くが如く、斯くして戰ひ暮しけり。渡邊右衞門尉、正成の智謀に碎かれ、叶はじとや思ひけん、夜に入りしかば、士卒を引具し、城中に逃籠る。扨こそ敵は引入り

たるぞと、寄手の勢直に進んで、渡邊が城を七重八疊に取卷きたり。恩地左近太郎滿一、此度の御謀こそ驚入りて候へ。誠に深き御智謀にこそと感じければ、正成聞き給ひ、物に心得ざる將の、敵を攻めんとばかり思ふに依りて、斯の如く狹き所にては、不覺の事出來るものなり。切所は、味方ばかりの切所にあらず、敵の爲にも切所なれば、斯樣の沼深田を隔てたる戰にこそ、深き謀略の侍るなれと宣へば、滿一愈感心をぞしたりける。

渡邊防戰附殁落の事

斯くて楠多門兵衞尉は、一族の和田孫三郎正遠を招き、敵は味方の勇威に怖れ、周章の體見えて、騷動すること斜ならず、今一時は動轉せんずるぞ。一當あてゝ見給へとて、正遠に八百餘騎にて攻立てさせ、神宮寺太郎・宇佐美彌次郎に一千餘騎を相添へ、二手に分けて中陣とし、大將正成は、一千三百餘騎を三つに分け、深田を後に當てゝ陣せらる。城の大將渡邊右衞門尉・同執事深志入道、眼をいらゝげ馳廻つて、

斯樣の一大事に與したる者共の、周章騷ぐは何事ぞや。豫て討死とは約せざるや。士卒心を一致にして、皆悉く討死して、譽を後代に殘せよと下知しければ、諸勢暫時に靜まりて、爰を先途と防いだり。斯る所に正成の陣所より、引太鼓を打出せしかば、先陣の軍勢共、本意なき事に思ひ乍ら、豫ての軍令嚴密なれば、敵を攻捨にして、一同に颯と引取りけり。和田孫三郎正遠、正成の陣所に來り、今少し攻めたりせば、城は落つべかりつるものを。何故早く引太鼓は打たれ給ひしぞ。殘念の至りにこそと申さるれば、いやとよ、さにはあらず。攻めざる前に周章騷ぎたる城の、攻懸るや否靜まり返りたるは、如何にも落し難きに候。攻めざる前は靜まりたる城の、攻懸りてより騷ぎ出でたる城は、必ず落城するものにて候ぞ。城の堀深く芝の手極めて高ければ、中々落つべうも候はず。強く攻めば落つべけれども、味方多く討たれぬべし。良將は戰はずして勝つといふ事の候ぞ。明日は謀を以て、敵を滅すべく候ぞと答へられけり。其翌未明に、東藏主といへる僧の、辯舌勝れたるを城中に差遣し、當城を攻落し候はんことも、日あらじとこそ存じ候へ。假令合戰の習、如何

なる術を以て、正成には打勝たせ給ひ候とも、日本國を敵に受け、早晩迄か遁れさせ給ふべき。世々武名香しき渡邊の御家を失はせ給はんこと、勿體なく覺え候。夜に紛れて當城を御落あり、如何なる山林にも身を寄せて、天下の變を待ち給ふか。鎌倉へ緣を求めて、降參をも御乞ひ候へかし。能々御思慮候べしと、理を盡していはせければ、渡邊是に同じ、仰に從ひ候はんと答へければ、正成悅び、一方を闕きて陣せらる。其夜深更に及んで、渡邊を初め城兵等、何國ともなく落行きしかば、翌日城を燒拂ひ、其より歸陣せられけり。右衞門尉、此情を感じけるにや、元弘の合戰に正成に屬し、粉骨を盡しけるとぞ聞えし。

宮田庄司謀叛附正成紀州勝尾着陣の事

斯る所に紀伊國の住人安田庄司も、逆心の色を顯し、軍勢を相催す所に、玉置庄司・湯川庄司等も、安田が緣者たるに依つて、一番に馳來る。其外紀伊の深田に育ちたる剛强の溢れ者共馳集つて、七千餘騎に及びけり。紀州の早馬頻に打つて、事の急を

告げしかば、六波羅の周章斜ならず。漸々越智・渡邊を退治せし所に、こは如何なる事ぞや。誰々といふとも、楠に越すべからずとて、又正成にぞ命せられける。是に依つて楠兵衞正成は、大和・河内・和泉・紀伊の勢を相催して、三千餘騎、紀州を指して發向す。然るに安田が陣より、四里此方に深山あり。其より五六町計此方に、河一筋流れたり。此河、さまでの大河にはあらざれども、大石多く巖峙ち、水逆巻き白浪岸を洗ひたり。正成先づ若黨二人走らして、鄕民一人尋ね出し、爰をば何といふぞと問ひ給へば、勝尾と申候といふ。扨は名といひ地勢といひ、旁以て究竟の陣所なりとて、河を前に當てゝ陣し給ふ。手の勢六百餘騎をば二つに分けて、二百餘騎を嶺々に備へさせ、四百餘騎をば麓に陣取らせ、正成は供の郎從少々相從へ、何處は沼、何處は深田、何處は谷、此處には坂、彼には細道ありと、前後三里の谷嶺を、悉く見課せて、備分をぞせられける。先づ小賀太郎宗澄・宇多入道法印勝順は、二百餘騎にて、艮の方峠に續いて陣を取る。其よりなれ下りたる尾崎には、河瀨兵部丞清定・嫡子太夫定種・伊丹十郎、百五十騎にて備へたり。西南の方の山壇には、村越與市・

正成、安田庄司の勢と戰ふ

木澤入道、內郡の者共三百餘、麓には、一千餘騎にて備へけり。斯くて正成は、其より忍の者を以て、敵陣の樣を、三日が間見せられしかども、元來河內の野伏共なれば、紀州の案內を知らずして、敵陣近く迄も行くこと能はず。少々敵陣へ入る者ありと雖、見課するは希なりけり。正成思慮を廻らし、如何にもして、紀州の野伏共を招かばやと思はれけるが、我扶持し置きたる野伏共の中に、當國の野伏共と相知れる者やあると尋ねられけるに、某こそ知れる野伏共の多く候といふ。然らば急ぎ尋ね具して參るべしとて、金銀多く取出してぞ與へられける。此者彼方此方と走り廻りて、野伏八人具し來れり。正成見給ひ、御邊達は、當國の案內をば、能く知りぬらんと問はるれば、形の如く存じて候といふ。然らば敵の陣所を見て歸るべしとて、宗徒の野伏六人を、相添へてぞ遣されける。野伏共、其夜敵陣に忍入り、翌日は敵の陣中に紛れ居て、思ふまゝに見澄し、次の夜正成の陣所に歸り來る。正成一人づつ呼出して問はれけるに、敵の陣屋八百餘も候らん。安田庄司が本陣は、一段高く候。其餘は谷にも峯にも、陣を取續け候といふ。正成一々尋ね聞きて後、忍び入りたる

樣をも、細々と問はれけり。是は國に依りて用心する風をも聞き、又忍び入る樣をも、國々に依りて品多くあるべければ、其を聞きて、其國の忍を防ぐ便ともなすべき爲なりけり。十餘人が申す言葉、一々相違なかりければ、正成熟思案し、扨は紀州武者の軍立も、事淺く覺ゆるなり。今一度功者の忍を差遣し、能々窺ひ畢せて後、夜討にせんものをと、思設けてぞ居たりける。

勝尾合戰附安田滅亡の事

斯る所に安田庄司、寄手の勢、思ひしより小勢なりと見謾り、湯川・玉置などと軍議して、七千餘騎にて押寄せたり。寄手の陣に備へたる、諸國の取集め勢共之を見て、すは敵は寄懸けたるぞ。一戰に打散らせといふ程こそあれ。河を渡して、敵を一戰に打散らさんとぞ犇きける。正成の手勢六百餘騎は、豫ての制法正しければ、己れ己れが陣前に並居て、大將の下知を待つ。時に正成、山より下りて陣前に立ち、峯の勢を山の半腹に控へさせて後、足輕の兵三十餘人相具し、河を渡して敵陣を見られ

けるに、七十餘騎もやあらんと覺えて、先後二つに分けて備へたり。正成、集め勢共を麾き、河岸より一町計り向なる妻手の方に伏せ置き、峯より向の左の方に、集り勢に足輕を加へて備へさせ、正成は少々集り勢を差加へ、先陣四百餘騎にて備へられけるが、七八町も先登に進みたる勢に軍使を馳せ、虛逃(そらにげ)して敵を僞引寄(おびきよ)せよと下知せられしかば、先登の兵共、敵の多勢に怖れたる氣色をして、ひた引に引退く。敵將安田の庄司は、四千餘騎にて先陣に打ち、湯川庄司・玉置庄司等が勢三千餘騎を、後陣に打たせて押寄せけるが、敵兵亂れ引くを見て、大將安田庄司、敵は退くぞ、追懸けて討取れよ。一陣破れて、殘黨何ぞ全からん。追討して高名せよ者共と下知すれば、剛强の若者共、我後れじと追懸くる。寄手一返しも返さず、八方に分れて敗走す。安田が勢氣に乘つて、突兵急に追懸くる。楠方の三百餘騎、敵を半やり過して、魚鱗懸りに駈入り、北より南に追廻し、西より東へ切通つて、旌旗入れ交はるとぞ見えし。安田が勢咄と崩れ、立足もなく逃行くを、突立て切立て追懸けしかば、後陣に控へたる玉置・湯川が三千餘騎の中へ、頽れ懸つて逃入りしかば、後陣の勢三千餘騎、

安田庄司自害

騷動すること夥し。時に河岸に控へたる四百餘騎、正成の下知を受けて、一同に河を押渡り、安田が勢に打つて懸る。始めより山の半腹に備へたる二百餘騎、松柏の生繁りたる陰より、菊水の紋畫きたる簱を、數十流れ差上げて、坂を下りに押向ふ。其勢數萬騎に見えて、雲霞の如くに棚曳いたり。先に敗走せる軍勢共も、時こそよけれと取て返し〳〵、喚き叫んで追懸くる。其勢震々雷々として、霹靂頭を碎くかとぞ見えし。玉置・湯川が勢も、耐らず㗅と崩れけり。安田が叔父の安田又次郎も、痛手三ヶ所迄蒙り、馬にも離れ落行きしを、宇多右衞門次郎追詰めて組んで討つ。雜賀入道も、主從二騎にて落行きけるを、玉井小次郎父子追懸けて討取つたり。斯の如く其行程二里計、追討に討取りし程に、死骸は累々として、新に一堆の山をなせり。玉置・湯川を始め、與力したる軍勢共、十分に逃行きしかば、安田主從八十餘騎になり、己れが居城に逃籠る。寄手の勢勇み進んで、十重廿重に取圍み、塀を乘破つて攻込み、殘兵等を追詰め〳〵討取りしかば、安田庄司も、今は遁れぬ所なりと、腹掻切つて伏しければ、寄手の勢、城に火をかけ、勝鬨作つて引取りけり。相模守平高

時、此注進を聞きて大に其戰功を感じ、安田が一跡三千餘貫の地を、正成に與へらる。是よりして正成の武名、遠近に轟きけり。

高時倪遊 附 萬代入道の事

さる程に相模守平高時は、奢日々に超過して、明暮田樂を弄びけるが、此頃は又闘犬を愛する事甚し。之を見て媚を求むる佞人等、奇犬を尋ね出し、鎌倉へ引下りて差上げしかば、金銀・珊瑚・琥珀などの首輪を入れ、綾羅を着たる公犬、鎌倉中に充滿(みちく)たり。之を飼ふに魚鳥を以てし、之を維ぐに金銀を鏤め、錦繡を以て着物とす。されば旅人も、此公犬に逢ひぬれば、馬より下りて跪き、商工の輩も笠を脱ぎ、頭巾を取つて畏る。此時豐前國より黄犬を進上し、周防國より靑犬を引參らす。黄犬の眼は靑くして光あり。靑犬の眼は黄にして、遠く光り耀けり。之を兩陣の犬將と號し、月に十二度の犬合あつて、在鎌倉の諸士、其席に連らん事を求めけり。其弊(つひえ)幾千ぞや。加之新殿とて、扇谷に妾あり。之を愛すること甚しく、其賂として、大庄四ヶ所

寄せらる〻。其餘の美女卅七人、酒に長じて終日戲れ、終夜に舞ひ遊ぶ。さるに依つて智化老臣は、高時の前に出づる事を得ず。只昵近する者とては、田樂・猿樂・大酒の輩なり。爰に萬代左衞門尉入道は、故貞時高時父也の寵臣にて、文學の聞ありけるが、貞時卒去の後、哀悼の餘り入道して、萬代入道とぞ呼びにける。然るに高時、渠は父貞時の近臣にて、仁義を行ふ者なれば、我不義の行跡を、爭か能しと思ふべき。必定諫言をぞせんずらんと思はれければ、事を左右に寄せて、所領を半歿收し、常に對面する事なく、萬に付けて難面くぞ當りける。入道是より家貧しくなりて、譜代の郎等も、多くは散々になりにける。此入道常に文學を好むと雖、元來佞奸の者なりければ、此事を大に歎き、熟と心に思慮しけるは、世人皆濁、何不掘其泥而揚其波。衆人皆醉、何不餔其糟而歠其醨とは、古人の金言なるものをと思設けて、高時が美女を集め遊び戲れ居る所へ、萬代入道、態とさあらぬ體にて推參す。さしもの高時、いと恥かしく思はれければ、面を赤めて、暫は物をもいはず。良ありて萬代を傍近く招き、我れ終日酒を好み、終夜色に迷ひ、逸遊を心に任す。是れ諸人の指さす

所なり。此故に我れ之を恥づ。入道もさぞ傍痛く思ふらんと打笑はる。入道申しけるは、公今日本を掌握に治め給ひ、萬民其快樂に誇り、四海其德を稱す。今此時に當つて、其程の御樂、何ぞ物の數にて候べき。堯舜文武の君の、聖人の行ありし事も、誠は書の詐にて候ものを、さのみ御心に懸けらるべからずといひければ、高時大に色を直し、扨々御邊は、廣學大智の人なるぞやとて、以前沒收せる所領を、悉く返し付け、其上に新恩地二ヶ所を與へられければ、智ある輩は、爪彈をしてぞ笑ひける。

後醍醐天皇北條高時を討たんと謀り給ふ

後醍醐天皇御隱謀露顯附奥州蜂起の事

此時聖主は、後宇多院第二の皇子、後醍醐天皇にて渡らせ給ひけるが、王法の衰へたる事を歎き思召し、如何にもして北條一家を滅さんと、宸襟を惱ませ給ひけるが、近年諸國に武命を背く者多ければ、時既に至りぬとて、日野中納言資朝・四條中納言隆資・花山院大納言師賢・右少辨俊基・平宰相成輔に御密談あつて、少々在京の武士を召しける所に、此事六波羅に泄れ聞えしかば、正中元年九月十九日、君の御隱謀に

與し奉りたる土岐十郎頼貞・多治見四郎次郎國長等を誅せられけるに、東使二人を落して、資朝・俊基を生捕りて關東に下りければ、こは如何なる憂目に逢はんずらんと、君叡慮を惱まさせ給ひ、萬里小路大納言宣房卿を以て、告文を關東に下させ給ふ。高時も、流石恐多くや思はれけん、御治世の事は、朝議に任せ奉る上は、武家いろひ申すべきやう候はずと敕答して、告文を返し奉りしかば、頓て宣房卿歸洛して、此由を奏させ申されけるにこそ、君も宸襟を安んぜさせ給ひけり。其後嘉曆元年三月十三日、高時廿四歳にして薙髮し、入道崇鑑とぞ號しける。其翌年の三月、高時入道異例以の外なりければ、樣々醫術を盡されければ、程なく快氣せられける故、在鎌倉の諸士、悅の色を顯さんが爲、寄合ひ〳〵遊宴す。此時奥州の住人伊達光廣入道が亭へ、長崎新左衞門尉高資以下の幸臣を招き、宴會を催しけるに、安藤五郎と下山の一族と、傾城を爭ひ口論し、下山の一族を討ちしかば、鎌倉中の騷動夥し。相模入道大に怒り、是非を分たず、雙方共に誅すべき由を下知せらる。安藤も下山も大に恐れて、己れが本國に逃下り、高資が方へ使者を送つて、多く金銀をぞ與へける。長崎飽

迄慾に深き者なりければ、高時には兎角申し、討手の沙汰も止みける所に、安藤又太郎俄に下山に一味し、兄の五郎と合戰し、忽ち五郎を討取り、日々合戰に及び、奥州の騷動以の外に聞えければ、高時怒つて、其狼藉を鎭めんが爲、使節を差下されける所に、安藤等は之に從はず、忽ち使者を梟首しければ、相模入道大に怒り、足立五郎時光を、三千餘騎にて差下さる。足立奥州に發向し、數度合戰に及びけるが、遂に逆徒等を退治して、一先づ無爲にぞ屬しける。然るに主上は、猶も北條誅伐の御謀息らせ給はずして、元德二年三月、東大寺・興福寺に行幸あり。同月又比叡山に行幸あつて、大講堂の供養を遂げ行はせ給ふ。是れ皆衆徒の心を取らせ給はんが爲なりけり。其上關東調伏の祕法を行はるゝ由聞えし故、同じき五月、東使二階堂下野判官・長井遠江守兩人上洛して、法勝寺の圓觀上人・小野文觀僧正・淨土寺の忠圓僧正を召捕りて、鎌倉に連下りしかば、相模入道仔細を尋ね問ひ、御謀叛紛れなかりしかば、三人の僧徒を遠流に處し、右少辨俊基を再び關東に召下し、葛岡原にて死罪に行ひ、中納言資朝卿をも、配所佐渡國にて、終に誅し參らせけり。

後醍醐天皇御陰謀露顯

山徒心變并主上潛行笠置事

後醍醐天皇南都へ御潛幸

然るに元弘元年八月、東使兩人、三千餘騎にて上洛す。是は主上を遠島に遷し奉り、大塔宮尊雲親王（第四宮といへるは誤なり、第六の宮なり）を死罪に行ひ奉らんが爲なりと聞えしかば、主上大に驚かせ給ひ、急ぎ南都の方へ御潛幸あるべしとて、同じき廿四日の深更に及んで、鳳闕を忍び出させ給ひ、南都東南院へ入らせ給ふ。此時尹大納言師賢卿に天子の號を許され、山門へ差上させ給ふ。師賢卿敕に從ひ、袞龍の御衣を着し、瑤輿に乘りて、山門の西塔院へ入り給へば、四條中納言隆資・二條中將爲明・中院中將貞平など、衣冠にて相從はれけり。是は南都へ官軍未だ馳せ集らず、城廓もまだ調はざる方に、凶徒遮つて押寄せば、事難義に及ばんか。然れば且は六波羅勢を防がんが爲、又は山門の衆徒の心をも、御覽せられんが爲なりけり。案の如く兩六波羅大に驚き、一萬二千餘騎を比叡山に差向けらる。此勢一戰に打負けて、六波羅に引返しければ、山徒悅ぶ事限なし。然るに古、後白河院山門を賴ませ給ひ、御登山ありし時

後醍醐天皇笠置へ御遷幸

も、先づ横川へ入らせ給ひて後、東塔南谷圖融坊へ移らせ給ひぬれば、且は先蹤といひ吉例なり、早く行幸を本院へなし奉らんと、西塔院へ觸遣せしかば、衆徒等理に服し、行幸を催さんと、皇居に參上したるに、折節深山颪烈しくして、御簾を颯と吹上げたるに、龍顏を拜し奉りたれば、主上にはあらで師賢卿なり。大衆驚き呆れて、其より參上する衆徒一人もなかりしかば、今は事露顯しぬとて、師賢・隆資以下、君の御跡を慕ひ忍んで、山門を落ちられしかば、第三宮妙法院尊澄親王も、主上の御方へと志して落ちさせ給ひ、大塔宮も、吉野十津川の方へと志して、南都へぞ落ちさせ給ひける。さる程に主上は、南都東南院に入らせ給ひしかども、衆徒の心一致ならずして、事調ふべくもあらざりしかば、其より和泉の鷲峯山へ入らせ給ふ。此處も人里遠き深山なれば、計略の便ぞ惡かりなんとて、同じき廿七日、南都の衆徒等少々供奉し奉り、笠置の石室へ潛幸なし奉り、本堂を皇居となさる。斯る所に京勢、山徒に打負けぬと聞えしかば、近國の武士共馳參る。然れども勢の百騎とも從へたる輩は、一人も參らざれば、此體にては、當山の籠城も如何あらんとて、叡慮を惱ま

させ給ひけり。

藤房卿密計 附 正成參上笠置事

さる程に主上、萬里小路中納言藤房卿を、玉座近く召され、北條が權威を怖るゝが故か、名を知られたる武士は、未だ一人も馳參らず。此體にては、當寺に暫く安座せん事も覺束なく覺ゆるなり。然れば近年越智・安田等を誅伐して、世に武名を顯したる楠とかやいへる者は、河内國に居住すと聞きつれば、是より程も遠からじ。渠を招いて、賴まばやと思ふなり。此事如何あらんや、心中を殘さず敕答すべしとなり。藤房冠を傾け、暫時思案して申されけるは、敕定理に當つて覺え候。是に付きて猶も深く謀を巡らしたく候。古、殷高宗位に卽かせ給ふ時、賢臣を求めて、天下を泰平に治めんと思召されしかども、御心に叶ふ臣なかりけるが、或日群臣を召集めさせ給ひ、今夜不思議の夢を感得せり。其故は、天、朕が不德なるを憐れみ給ひ、良弼を授け給ふと見たり。朕正しく其顏色を覺えたりとて、其姿を繪に畫かしめ、普

く天下を、殘る所もなく尋ねしめ給ふ。時に傅岩の野に、土を荷へる民一人あり。其名を說と號す。惟肖たりとて、召連れて來りしかば、天、朕に與へ給ひし、夢中の賢人は是なりとて、頓て立てゝ宰相となし、其左右に置き給ひて、敕命ありけるは、朝夕誨を納れて以て台德を輔けよ。若金ならば、汝を以て礪とせん。若巨なる川を濟らば、汝を用ひて舟楫とせん。若歲大に旱せば、汝を以て霖雨とせん。乃が心を啓いて、朕が心を容れよ。若藥瞑眩せずんば、其疾瘳じ、若跣にして地を視ずんば、厥足用ひて傷れん。惟乃の僚と心を同うして以て、乃の辟を匡すといふ事勿れ。先王に率ひ、我高后に迪つて、以て兆民を康んぜよ。嗚呼予が時命を欽んで、其終あらん事を惟へと詔し給ひて、天下の政を任せられしかば、殷の世大に治りて候ひき。されば高宗幼稚に坐す時、民間に坐して傅說が賢なる事を御覽じ及ばせ給ひしかば、卽位の後、此人を擧げ用ひて、天下の政を任せたく思召しゝかども、賤き民を登用して、群臣の上に置きなば、諸臣皆恨み妬んで、其命を用ひまじと思召し、夢に事を寄せられて候なり。然れば今般靈夢なりと敕定あつて、楠を召し候ひなば、諸士

正成が德を感じ、聖運再び開かるべしと、思取り候べしとて、其謀を、忍びやかに奏聞し給ひしかば、君淺からず藤房の才智を叡感坐しけり。其翌朝主上は、萬里小路中納言藤房卿・舍弟中宮大進季房・源中納言具行・按察大納言公敏・六條少將忠顯・當寺の衆徒成就房以下を召し、朕昨夜不思議の靈夢を蒙れり。所は紫宸殿の庭上かと覺えたるに、大なる松樹あり、南へ指したる枝の、千年の陰深く榮え蔓れる其下に、三公九卿次第を守つて列座せり。座上に疊を高く敷き、未だ坐したる人もなかりしかば、誰を設けん爲の座席やらんと、怪しく思ひ見居たる所に、鬟結うたる童子二人、忽然として來り、朕が前に跪き、涙を流し乍ら、當時一天下の間に、暫くも御身を寄せらるべき所なし。南へ向へる玉扆こそ、御爲に設け置きて候。暫く是に御座候へといひて、二童は天に飛去りぬと見て、忽に夢覺めたり。朕思ふに、是れ天より示させ給ふ所の靈夢なりと覺えたり。吉凶如何あらん。勘へ申すべしと敕定ある。時に藤房卿、左右を顧みて宣ひけるは、臣退いて思案を巡らし候に、是れ天より告げさせ給ふ所の吉夢にて候。先づ二童子は、日月にて候べし。南に向ひて設けたる

後醍醐帝楠正成を召し給ふ

玉座は、若再び南面の德を治めさせ給ふべきとの御事にて候べし。其上木の枝の南へ指したるに、心を付けて見候へば、木に南と書きたるは、楠と申す文字にて候はずや。然れば此邊に楠と呼るゝ武士の候か。御尋あつて、若し左樣の者の候はゞ、召されて御賴み候へかしと宣へば、諸臣皆最上の御吉夢にて候と賀し奉る。主上御心よげに打笑ませ給ひ、藤房いしくも申したり。若此邊に楠といはるゝ武士やあると、敕定ある。成就律師承り、近き邊に左樣の武士ありとも、未だ承り及び候はず。河内國金剛山の西に、楠正成と申す者の候。渠が父母、志貴の毘沙門に祈つて、靈夢を感得し、設けたる子にて候とて、多門丸と呼び候ひしが、當時は兵衞尉正成と申候と申す。扨は夢の告、是れなんめり。楠を召せと仰出されければ、藤房敕を奉り、頓て正成をぞ召されける。楠は、武門の面目、何事か是に如かんとて、急ぎ笠置に參上す。主上、藤房を以て仰出されけるは、東夷の征伐を賴み思召さるゝの所なり。如何にしてか朝敵を一時に滅すべきと敕定ありければ、正成謹んで承り、東夷の暴惡、前代未聞に候へば、天誅を巡らさるべき時至り候なり。戰伐の功は、偏に智

勇の二つにて候。勢を以て論じ候はゞ、日本の兵を集め候とも、武藏・相模の勢に對し難く候べし。然れども謀を以て戰ひなば、欺くに易く候はん。合戰の習、一旦の勝敗を、必ず叡慮に懸けらるべからず候。正成一人戰死仕らず、未だ存へ罷在りと聞召し候はゞ、聖運再び開かるべしと思召候べしと、堅く領掌仕りて、御前を退出せられけり。

南朝太平記卷第二終

南朝太平記 卷第四

楠正成赤坂城に據る

楠正成赤坂籠城附北條差ニ上多勢一事

さる程に楠兵衞尉正成は、主上に賴まれ奉りしが、俄の事故、兵糧の用意なんどもなかりしかども、笠置に力を合せんが爲に、妻子幼若の輩を、金剛山の奥、觀心寺といへる山寺に隱して後、九月十一日、五百餘騎にて赤坂山の城に楯籠る。是は高時軍勢を差上すとも、諸士北條を恨むる時節なれば、不日には出勢すべからず。其間には和泉・攝津・河內三ヶ國を攻靡け、多勢になりなば、笠置の後詰をせんとぞ企みけり。さる程に六波羅の多勢、去る二日より笠置の城を取圍み、攻動かすと雖、城兵能く防ぎ戰ひしかば、寄手每度利を失ふ所に、楠正成赤坂の城に楯籠り、櫻山四郎入道も官軍に屬して、備後の一宮に起る由聞えしかば、六波羅の北方常陸駿河守大に

周章し、日々早馬を馳せて、關東に勢をぞ乞はれける。此早馬、同十六日に鎌倉に來着す。相模入道大に驚き、一家他家の大名、六十三人迄ぞ上されける。其人々には、大佛陸奥守貞直千二百餘騎・同遠江守貞次千五十騎・普恩寺相模守千百五十騎・鹽田越前守千百二十騎・櫻田三河守千三百餘騎・赤橋尾張守千三百餘騎・絲田左馬頭五百餘騎・江馬越前守三百餘騎・佐介上總介二百十騎・印貝兵庫助百十騎・名越右馬介六十騎・金澤右馬介八十騎・遠江左近大夫將監治時百騎・足利治部大輔高氏千五百餘騎、侍大將には、長崎四郎左衛門尉二百餘騎、其外岩城次郎入道四百餘騎・宇都宮安藝守五百餘騎・同肥後守七百餘騎・同美濃入道八百餘騎・石崎彈正左衛門尉二千五百餘騎・田村刑部大輔入道五百餘騎・下總入道七百餘騎・長井因幡民部大輔入道五百餘騎・同備前太郎三百五十騎・同治部少輔二百餘騎・伊達入道七百餘騎・筑後前司四百餘騎・那須加賀守三百餘騎・葛西三郎兵衛尉三百餘騎・大内山城前司三百餘騎・上野七郎三郎二百餘騎・椎名孫八入道百五十騎・小山出羽入道百八十騎・氏家美作守二百餘騎・那波左近大夫將監百八十騎・三浦介入道百餘騎・結城上野入道百騎・武田次郎左衛門尉百餘

騎・長沼四郎左衞門尉百五十騎・梶原上野太郎左衞門尉二百餘騎・土屋安藝守二百餘騎・相馬右衞門次郎百二十騎・南部三郎二郎百二十騎・木村次郎左衞門尉百餘騎・一宮善民部大輔二百餘騎・土肥佐渡前司三百二十騎・寒河彌四郎百騎・佐野安房彌太郎三十騎・佐竹上總入道二百八十騎・毛利丹後前司百二十騎・岩崎孫三郎二百餘騎・同彥三郎百五十騎・山城左衞門太夫五百餘騎・橫山・猪股の兩黨千餘騎・入江・蒲原一族千二百餘騎・武藏勢百騎・相模勢八十騎・伊豆・駿河勢百三十騎・上野勢五十騎、都合二萬五千七百五十餘騎、（太平記に、廿萬七千六百餘騎と記せるは僞なり、）同廿日に鎌倉を打立ちけり。北條家天下の權を執つて、承久の亂より以來、兵を動すことの輕き此の如し。今崇鑑愚將なりと雖、先代の掟を守り、且は父祖の家風殘れるが故に、早速諸勢打立ちけり。

赤坂城攻并神宮寺彥太郎の事

さる程に東國の多勢、近日着陣すと聞えし所に、陶山藤三・小見山次郎、同晦日笠置の城に夜討して、忽に攻落せしかば、主上を始め奉り、一宮中務卿親王・三宮妙法院

北條高時赤坂城を攻む

尊澄親王、其外月卿雲客貴僧高僧以下、悉く生捕り參らせけり。斯くて東國勢は、笠置既に落城の由を聞き、之を本意なきことに思ひ、伊賀・伊勢・宇治・醍醐を經て、赤坂の城に押寄せたり。此城方一二町には過ぎじと覺えたるが、塀一重を賴みに、櫓少少搔雙べたれば、楠が分限思ふに違はず、乘入つて高名せよといふ程こそあれ。諸勢一同に打寄するより早く、堀へ飛入り、塀の陰に立雙んで、既に乘込まんとする所に、城中に豫て選び置きたる精兵の射手共二百餘人、鏃を揃へて散々に射ければ、板屋を過ぐる霰の如く、寄手、的になつて射られける程に、諸卒一溜りも怺へず、我先にと逃げ退く。正成之を見給ひ、あれ追立てられよと下知せらるれば、舍弟七郎正氏・甥の和田五郎正隆、三百餘騎を從へ、三の城戸より打つて出で、遁さじと追懸くる。引立ちたる勢なれば、一返も返さず、八方に分れ逃行くを、一里計り追討にして、敵を討つこと數を知らず。士卒悅び勇んで城中に引入りけり。正成諸卒を集め、今日の合戰は、是れ只弓の德なるぞや。二百人の射手あらずんば、爭か敵を退くべき。又追討せし兵も、功なきにあらず。命を義に捨て、多勢の中に、小勢にて切入りし

は、忠なりと感ぜらる。神宮寺彦太郎進み出で、士たらん者は、射術を學ぶべき事に候。我々は城中より切つて出で、數ヶ所の手負ひ、太刀長刀を篩の子の如くにしなしつれども、させる高名ならず。射手の人々は、居ながら敵を退けて、第一の高名となりぬるぞやと、無興氣にいひければ、正成聞き給ひ、無骨なる神宮寺が申やうかな。時によつて弓・鎗・刀の功も勝劣あり。敵元より弱兵にして、味方の防ぐに怖れ、引退きて敢て近付かざりしかば、今般は弓の功にてありしなり。猶も近く進み懸らば、其時は太刀・長刀の功なるべし。又猶も近からん時は、組討にすべければ、其時は力なり。此故にこそ、古より兵具の品を分ちたり。其上御邊達の功なきにあらずと宣へば、神宮寺赤面し、某若年故、士の道に疎く、誤つて候なりと退きけり。斯くて打散らされたる寄手の勢、漸々吐田・檜原まで寄懸けしが、親を討たれ子を討たれたるを憤り、重ねて城に押寄せ、乘入らんとする所に、豫て設け置きたる釣塀の繩を切つて落せしかば、士卒等塀の下に敷かれて、起上らんとする所を、城中より大木大石を投懸けしかば、寄手又七百餘人討たれて、陣所に引取りけり。

正成拔ニ落赤坂ニ附和田・原田・勝多・生地の事

さる程に寄手の勢、此度は楯の面に撓皮(いためがは)を張らせ、漕き連れて攻寄せけるが、又釣塀にやあるらんと、士卒堀に飛浸り、熊手をかけて塀を引破らんとせし所に、城中より砂を煎り、柄の一二丈長き杓にてかけゝる程に、兜鍪の天邊、綿嚙の外れより、彼砂、身に徹つて焼け爛れければ、寄手怺へず、一同に哺とぞ崩れける。是より寄手合戰を止め、只守り詰めてぞ居たりける。元來此城に、兵糧の用意なかりしかば、既に二十餘日にして、城中の糧盡きにけり。正成諸勢を集め、我れ數度の合戰に討勝つと雖、城中糧既に乏し。正成素より節に當り義に臨んで、命を惜むには非ざれども、謀を以てせずんば、爭か敵を亡さん。我今自害の眞似をして、敵兵を欺かん。然らば東國勢退くべし。敵退かば打つて出で、敵進まば退かん。此の如く五度も六度も、敵勢を惱しなば、極めて氣短なる東兵等、爭か退屈せざるべき。其間には、諸國に、御味方を仕る者多く出來らん。其弊に乘つて攻討たば、大利を得んこと必定

正成赤坂城を忍出づ

なりとて、城中に大なる穴を掘らせ、此程堀の中に多く討たれ伏したる寄手の死骸を二三十人、穴の中に取入れ、薪を多く積ませ、風雨の夜を待受けて、和田新五郎宗景・勝田左衞門尉直幸・生地兵衞尉・佐田原次郎正忠四人を、城に殘し留め、四五町も落ちつらん時、城に火を放つべしとて、術を委しくいひ含め、皆鎧を脫ぎて徒膚になり、正成を初め、城中の士卒二人三人五人六人、敵に紛れて落行きけり。正成は、西の方の門より忍び出でられけるが、寄手の先陣、北の方は、赤橋尾張守の役所なり。其に續いて侍大將長崎四郞左衞門尉、其より南の方は、櫻田三河守が陣所なり。長崎が陣に續いて、三浦介入道、其より南は、名越右馬助の陣屋なり。正成は、長崎が陣所厩の前を忍び通り、三浦が陣所の前へ差掛らんとせられける所に、三浦介が郞等古郡彌三郞之を見咎め、何者なれば深更に及んで、御役所の前を忍び、竊に通るぞと咎めける。正成聞きも敢ず、是は大佛陸奧守殿の御内の者にて候が、雨強く候ひぬ。雲重なつて目刺すも知らず候へば、道を踏違へて候と、いひ捨てゝ通られけるを、木村新介、扨は痴者ぞ。馬盜人にてぞあるらん。射殺してくれん者をと、走

り寄つて兵と射る。其矢正成の臂のかゝりに當りたるが、少しも膚を犯さずして、筈を返して飛飜る。後に能々見れば、膚の守に入れて、年來日來身を離たず、信仰して讀誦せし普門品に、矢先留りけるこそ不思議なれ。正成の先祖左兵衛督盛康より、子孫代々持傳へし普門品は是なり。正成を始め、家子郎等一人も討たれず、皆悉く落延びけり。城中に殘り留りたる和田新五・田原次郎・勝多左衛門・生地兵衛尉、是等四人の者共、今は時分こそよけれと、城の役所に火をかくる。寄手の勢之を見て、すは城は落ちたるぞと、喚き叫んで押懸くる。豫て正成、巧み置きしことなれば、勝田と生地は、西の方の門より出で、和田と原田は、北の城の城戸より出でけるが、先駈の勢の眞似をして、手々に首を提げ、敵は未だ詰の城にあるぞ。切入れや者共と呼はつて出でければ、寄手の勢、味方ぞと心得、勇々しき者共かな。我々も高名せんと、揉合ひ押合ひ込入る程に、西より入る者は、北より入る味方を敵ぞと思ひ、北より入る勢は、西より入る者共を敵ぞと誤り、豫て合印合詞をも定めざれば、同士討すること數刻なり。互に味方ならんと、思ひも寄らざることなれば、爰を詮と戰ふ

程に、二百餘人同士討に討たれて、漸々と靜まりけり。夜明けて後に見れば、大なる穴の中に、燒死したる死骸多し。扨は正成を始め宗徒の者共、悉く生害したるにこそ。流石武功の勇將程ありけるぞとて、諸人之を感じけり。さる程に勝田・生地・和田・原田は、安々と赤坂を遁れ出で、金剛山の城に落歸り、正成に對面し、事の次第を語りければ、正成大に感じ、多くの人の中に四人殘り留つて、今又恙く歸りしは、忠あり義あり勇ありとて、太刀一振づつ與へらる。四人の者共畏つて申しけるは、命は義によつて輕しとこそ申候へ。累代御厚恩を蒙り、妻子を育み候へば、命は君に豫て奉り置き候ひぬ。引出物は、前より數度給はり候ものをとて辭退せり。正成平に給はるべしと、三度に及んで强ひられければ、其時各拜受して退きけり。

恩地滿一計略并赤坂城軍の事

さる程に關東の計らひとして、後伏見院第一の御子を御位に卽け奉らる。光嚴院殿是なり。斯くて先帝後醍醐天皇を、隱岐の國へ流し奉り、其外諸門跡月卿雲客以下、

或は流罪或は死罪に行はる。大塔宮尊雲親王計は、辛うじて十津川の方に落ちさせ給ひ、竹原入道が許に忍びて坐しける。楠兵衛尉正成は、赤坂の城を落ちて後、猶も計略の爲、恩地左近太郎滿一と二人、三河國に下り、正成は猿樂の從者となり、恩地は猿舞の從者となり、姿を變へて、彼方此方と經廻りける。其の年も暮れて、翌れば元弘二年正月、二人共に河内國觀心寺にぞ歸りける。是は關東よりの計らひとして、赤坂の城に、紀州の住人湯淺孫六入道定佛を据ゑ置きければ、先づ初度の合戰に、赤坂を攻落さんが爲なりけり。此城は、元來正成の築かれたる城なれば、家子郎從能く案内を知りぬ。其上鄕民等は、數代の領主なれば、正成を戀慕へり。去るに依つて攻落すに安かるべしとて、斯く思ひ立たれけるが、若城の體替りしこともあるらんとて、先づ忍の者二人差遣し、城中の體を窺はせけるに、二人の忍び立歸つて申しけるは、湯淺愚將と見え候ひて、城中の體、思ひしよりは淺間に候。役所々々に掻楯もなく、矢の用意をもせず、兵糧も少く、内外の城に、家六十八軍勢五百人には過ぎ候はじとぞ申しける。正成猶も能々窺ひ課せん爲に、恩地左近太郎を、忍びに交

へて遣さる。滿一深く思慮を巡らし、我領内に八郎太夫とて、猿を舞はす男のありけれぱ、渠に猿を引かせ、下人になりて、髭を剃りて、綴りたる着物の袖も附けざるを着し、破れたる笠を引蒙り、爪木に米鬻など取入れ、八郎太夫に從ひ、白晝に赤坂の城中に入り、城の構、勢の多少、兵糧の分限、思ふまゝに見澄してぞ歸りける。正成恩地に對面して、城中の樣を問ひけるに、始め忍びの者共が申せしに、少しも違はず候といふ。正成扨は心易し。攻取らんこと手裏にありと、近國の勢を相催し、和泉・河内兩國の堺にて勢を揃へければ、三千餘騎にぞ及びける。さらば赤坂に押寄せ、敵の虛實を窺ふべしとて、同四月二日に、觀心寺を打立ち、翌三日の卯の刻、赤坂の城に押寄せらる、正成謀才深き大將なれば、若敵追手より討つて出でば、搦手より城中に切入るべしとて、志貴右衞門尉に三百餘騎を附け、搦手の南に當りたる竹の林、又は木の茂りたる中に隱し置き、其外所々の切所に勢を伏せ置きて、態と小勢の體に見せ、追手の城戶に押寄せらる。士卒同音に鬨を作り、只洪水の漲り來れる如く、無二無三に攻懸る。湯淺入道大に驚き、敵は誰なるぞと問ふ。敵の籏の紋、皆菊

水にて候といふ。入道聞きて、扨は正成が自害したるは僞ぞや。大事の敵ぞ。卒爾に出でて、戰ふべからずとぞ制しける。湯淺が甥の有田孫四郎、敵は小勢にて候ぞ。切つて出で一戰し、追拂ひ候はゞやといひけれども、入道用ひず。敵も敵によるぞ。正成は謀深き者なれば、如何なる術をかせんずらん。能く防ぎ守つて、敵の軍立をも見定めてこそといへば、有田聞きて、入道殿は、早晩も合戰を大事にし過し給ふぞや。味方兵糧多からねば、久しき籠城は叶ふまじ。然れば敵を急に追拂ふべきの圖に當れり。此上は某が手勢計にて討つて出で、一戰して試み候はんと進みけれども、入道大に制しければ、力なく止みにけり。寄手は、午の刻まで攻立てしかども、城兵一騎も出でざれば、正成其より一里計引退き、廣野の中に小高き岡のありければ、此所に陣をぞ取られける。

赤坂落城 附 定佛入道降參の事

正成は豫てより、忍びの者八人、赤坂の城に入れ置かれけるが、翌四日の寅の下刻、

忍びの者二人走り歸り、城中兵糧乏しく候故、紀州阿瀨川より兵糧を入れ候といふ。正成大に悦び、扨こそは能き謀は出來れりと、和田孫三郎・恩地左近太郎・高安寺に能々術をいひ含め、是等を將として、究竟の兵三百人、紀伊と河內の境なる、紀見峠へぞ差遣はされける。斯る所に同七日の丑の刻計り、湯淺が兵三百餘人、兵糧を牛馬に負はせ、或は背に負ひて紀見峠を越えんとす。時に和田・恩地、二百餘人を跡に殘し、百餘人にて一同に喵と馳出づる。湯淺が郎等雜人等、牛馬を捨て、背負ひたる米を打捨て、這々紀州に逃歸る。和田・恩地馳廻り、必ず敵を追ふべからずと制しけり。是は味方三百餘、氣に乘つて追懸けんに、若敵に武勇の士あつて取つて返し、切拔けて赤坂の城へ入り、此事を知らせなば、後の謀、なり難からんずればなり。此時敵の首十二級を得たりけり。正成は、敵の捨てたりし兵糧を、味方の陣に取り運ぶべしと下知せらる。又豫てより、俵に鎧を多く入れ置かせたるを、馬に負はせ、雜人に荷せて、二三百人作り立て、明れば八月の卯の刻、阿瀨川より兵糧を入るゝを、寄手の勢、追散らさんとする眞似をして、城邊にて追つ返しつ、同士軍をして相

正成、赤坂城を陷る

戰ふ。湯淺入道成佛此體を見て、敵は兵糧を奪はんとするぞ。打つて出で追拂へと、城を拂つて切つて出で、爰を詮と戰うたり。寄手の勢、安々と城中に入りて、俵より鎧取出し、ひし〳〵と堅め、菊水の旗を颯と差上げ、同音に鬨を咄と作る。湯淺が勢大に驚き、敵兵早城中に入りたるぞ。引入れて戰へと、周章騷ぎて逃入るを、寄手の勢氣に乘つて、遁すな泄らすな討取れと喚き叫んで、切立て〳〵城中に攻入れば、城の大將湯淺孫六入道も、一騎當千とも賴みたる有田孫四郎は、橋本八郎と組んで討たれぬ。敵は前後より攻立つる。今は十計盡きて、降を乞ひ城を渡し、正成の手にぞ屬しける。此合戰、湯淺が不覺にあらず、只正成の神智妙策によるものなりと、諸人之をぞ感じける。

矢尾顯幸屬㆓正成㆒事

さる程に楠兵衞尉正成は、赤坂の城を攻落し、湯淺が勢を併せて、近國を攻從へんと思はれければ、先づ格侍者といへる禪僧を、矢尾別當顯幸が方へ遣はし語らはれ

ければ、別當之に應じ、頓て手勢百五十騎にて馳來り、正成の手に屬す。此別當は、楠と合戰を挑むこと數年、殊に顯幸は、正成に我領地を伐取られ、憤、骨髓に徹つてありけるに、今何故に、正成と和睦せしぞと尋ぬるに、是皆正成の計略より出でたるなり。其故は、正成未だ赤坂を落さゞる前、先づ三州より觀心寺に歸りて後、去ぬる正月、十津川に御坐しける大塔の宮の御方へ、使を參らせて、忍びやかに申しけるは、矢尾の別當顯幸は、法師ながらも、武勇勝れたる者に候へば、渠が味方に屬せざる程は、河内の國平治し難く覺え候。正成とは、父正澄より、所領のことによりて矛盾に及び候へば、正成未だ生きてありと知り候はゞ、如何に召され候とも、勅定に應ずまじく覺え候。此法師は、生得心淺々しく、正直なる者にして、官位に望をかくる者にて候へば、令旨を賜はつて、渠を招かれ候へかし。其術は先づ權僧正になし下され、恩賞は朝敵誅伐の以後、宜しく請ふによるべしと仰下され候はゞ、必定味方に參つて、忠戰を勵むべく候とぞ申送られける。宮大に悅ばせ給ひ、木寺相模を御使として、密に令旨を顯幸になし下さる。顯幸之を頂戴し、僧正になし下さる

ぬること、法師の面目、何事か之に過ぎ候はん。此上は御味方仕りて、逆徒誅伐の謀を巡らすべく候。然れども楠、赤坂にて自害したりとも申す、又未だ生きてありとも申候。若正成遁れて、未だ御味方仕り候はゞ、顯幸勅諚に從ふこと叶ふまじく候とて、相模をば歸しけり。宮此事を難儀に思召し、正成が方に斯くと宣ひ遣はさる。正成承り、別當左樣に御返事申さんとは、豫て存じ設け候故、能き方便を案じ置きて候とて、御返事の次第を、委しく申送りけり。宮大に御感あり、赤松律師則祐・村上彦四郎義光を召し、正成は勇といひ謀才といひ、當世無雙とは雖、上古にもあるべからずと宣ひて、重ねて木寺相模を以て、矢尾が方へ仰せ遣はされければ、正成が存亡、其實を知召さゞる所なり。生きてあらんには、今まで音信せぬことはあるまじ。若し生きてあらんにも、此の如く吾に與せざらんには、何ぞ賞することあらん。只朝敵に等しからん。以後正成申入るゝとも、御許容あるべからずと仰遣はされければ、顯幸之を實ぞと心得、御味方に屬し候はんと、御請をぞ申されける。斯くて廿三日を過ぎて、正成赤坂へ打つて出でたりと聞えしかば、別當大に驚き呆れ、

大塔宮の御方へ、正成未だ存へて、赤坂へ打つて出で候なり。御存候やと申送りければ、嘗て知らせ給はざる旨、御返事坐しけり。是に依つて別當も、赤坂の城軍の間、何方へも與せず、樣子を見合はせ居たりけり。斯る所に正成、赤坂を攻落して後、矢尾別當が方へ、格侍者とて、辯舌勝れたる僧を以ていひ送られけるは、勅諚默止し難きに依つて、身不肖ながら、此一大事を思立ちて候。此度貴坊の訴によつて、宮より御不審の端多く候。私の遺恨を以て、公事を忘れんは、忠義を知らざるにて候はずや。此上は、年來の遺恨を御許し候べし。父祖の恥を忘れて、貴坊へ降參仕候間、正成曾て不忠を存せざる由、宮の御方へ仰入れられ給はり候へ。偏に貴坊の御祕計を賴み存ずるなり。其とても叶ふまじきにて候はゞ、私の宿敵といひ、朝敵征伐の障にて候へば、朝敵に同じかるべく候上は、正成馳向つて、運を天に任せ候はんといひ送られければ、別當驚き、我れ官軍に屬し、一度六波羅の惡しみを蒙る上は、京方にもなり難し。又正成多勢になりぬれば、私に戰ふとも、利を得ん事叶ひ難し。さばかり良將の正成、愚僧に降を乞はるゝ事、法師の面目、且は後代迄の譽な

矢尾顯幸楠正成に屬す

りと思ひければ、格侍者に向ひ、一天の君の御味方仕る上は、爭か私の遺恨を存じ候べき。宮の御前は、愚僧宜しく申なし候はん。今よりは殿の御手に屬し、忠戰を盡し候べしと返事して、手勢百五十騎を引率し、赤坂に馳來つて、正成に屬しける。御代一統の後、此事を包まず顯幸に語りければ、別當聞きて、扨は安くも計略に落し入れられて候ぞや。さり乍ら佛神に非ずんば、爭か此謀に乘らで候べきと感じける。

正成出㆓張住吉・天王寺㆒附㆓京勢發向の事

さる程に矢尾・湯淺、正成に屬しければ、和泉・河內兩國の勢、戰はざるに靡き、攻めざるに降つて、悉く歸伏しければ、同五月十七日、住吉天王寺に打つて出で、渡邊橋より南に陣を取りて、京勢遲しとぞ待たれける。正成此時、家子郎從等を集めて語らはれけるは、夫れ良將は、敵國を攻むる時、先づ其利害を勘へて、敵の備へて待つと待たざるとに拘はらず、其利あらん所へ向ふなり。今京勢六萬餘騎と聞ゆれば、此勢を以て、渡邊・大和路・飯盛より向ひなば、戰難儀ならんか。然れ共六波羅愚將なれ

ば、我備へたる所にぞ向はんずらん。盲人の、人の呼聲に付きて來るが如くなれば、盲將とは名付けたり。敵押寄せなば、味方は鳥雲に陣を取り、數度駈惱ましたらんに、などか川へ追はめざらん。斯くしたらんには、敵の後陣、如何に多勢なりとも、川を濟すことを得ず。數日向ひ暮らすべし。然らば兵糧盡き衆和せずして、士卒大將を恨むべし。其時謀を以て招かば、味方に屬する者、多からんずるぞと宣ひけり。若又味方利を失ひなば、籠城して戰はんとて、金剛山の麓千破劔に堅城を構へらる。其上忍びの者五十人、京都に附置かれければ、六波羅の軍議、一として聞えずといふ事なし。斯る所に六波羅の討手として、隅田次郎左衞門尉・高橋又四郎、其外四十八箇所の篝、畿內近國の勢を合せて七千餘騎、同廿日帝都を立ちて、神崎・尼崎・柱松に陣を取る。正成此由を聞き、敵によつて轉化すとは是なりとて、僅三百餘騎を、渡邊の橋より南に控へさせ、殘る勢を、住吉天王寺に引入れてぞ待たれける。

楠正成北條高時對陣

天王寺合戰の事

天王寺合戰

翌れば廿一日、六波羅の五千餘騎、渡邊の橋に打寄む。正成士卒に下知せられけるは、敵兵川を濟しなば、味方三百餘騎の見せ勢は、一戰にも及ばず敗北せよ。敵は氣に乘つて追懸けんずるぞ。敵天王寺の西を半過ぎん時、和田孫三郎は、一千餘騎を二手に分け、天王寺より駈出でよ。敵は思ひ寄るまじければ、周章騷ぎて漂はん。其時、住吉に置きたる六百餘騎、古宇都の東より、魚鱗になつて、敵の眞中へ切入れよと下知をなし、又渡邊の橋より、十町此方へ軍使を馳せ、敵川を渡さば、早く住吉に引來れといひ遣はし、吾身は住吉と天王寺との半途に在つて、住吉に軍使を馳すること止む時なし。自ら渡邊に馬を飛ばして、敵の形勢を勘へ、又住吉に馳せ歸つて、味方に術をいひ含め、天王寺に馳向つて士卒を下知し、此の如く馳廻り〳〵、衆を勇めて下知せられける程に、其日馬を乘替へらるゝこと、七疋にぞ及びける。高橋又四郎、川より向ふを屹と見て、敵は小勢ぞ。駈散らせよと、橋を下つて濟しければ、畿內の集り勢之を見て、人に先を越さんとし、或は橋を渡し、又は河瀨を濟しけり。隅田は之に同ぜず、又楠が如何なる術をかなしぬらん。暫く敵の働を見てこそ

正成、六波羅勢を破る

とて制しけれども、士卒耳にも聞入れず、我先にと進みければ、隅田も心ならず、そぞろに河を濟しける。三百餘騎の見せ勢共、一戰にも及ばず北げ行くを、追懸けて討取れと、天王寺の北の在家まで、山川も崩るゝ計り、喚き叫んで攻込んだり。時に和田正遠、一千餘騎を二つに分け、一手は天王寺の東より、敵を左にして駈出づれば、一手は西門の石の華表より打つて出る。六波羅勢之に驚き、辟易して見ゆる所に、住吉の松原より、六百餘騎の逞兵等、馬の頭を雁行に連ね、旗の手を龍粧に進め、靜々と懸りければ、京勢なじかは怺ふべき。一同に咄と崩れ立ち、親を捨て、主討たるゝをも顧みず、ひた崩れに逃げ行くを、隅田次郎左衛門尉大に怒つて、斯くあらんと思ひ、制しつるものを。貳し返せと下知しけれども、一返しも返さず、人馬共に橋より押落されて、水に溺れ死する者數を知らず。七千餘騎の兵共、殘少に討ちなされ、這々京都に逃歸る。見苦しかりし分野なり。

南朝太平記卷第四終

南朝太平記　巻第五

楠正成宇都宮公綱對戰

宇都宮公綱攝津發向の事

さる程に隅田・高橋大に敗亡して逃げ歸りしかば、六波羅に重ねて合戰の評定あつて、宇都宮治部大輔公綱を差向けらる。其頃關西にては楠、坂東にては宇都宮とて、天下に武名を稱せらるゝ程の勇將なれば、此度合戰利なくんば、生きて再び歸らじと討死を思定め、七百餘騎を引率し、七月十九日の午の刻に、六波羅を立ちて、其夜は柱松に陣をぞ取つたりける。夜半に及んで、和田孫三郎正遠、正成の本陣に來つて申しけるは、宇都宮旣に柱松に着きて候が、士卒七百には過ぎ候はじ。今夜逆寄にして、追拂ひ候はゞやと申しければ、正成暫く頭を傾け、和田殿の宣ふ所も、利に當つて候へども、上策とはいひ難し。其故は、公綱六波羅に勇を進められ、必死と思

ひ定め、炎の如くに、勇氣頭に上りたる士卒なれば、小敵と雖、侮り難し。今夜押寄せ戰はゞ、勝利は得べく候へ共、味方多く討たるべし。然れば先づ味方は陣を引退き、敵に一利を付けて後、八方の山々に篝を燒き、夜毎に敵を劫しなば、氣短なる坂東勢、疲れて引返さんは治定なり。是れ戰はずして勝つといふ術にて候と宣へば、橋本八郎正員進み出で、誠に深き御謀にては候へ共、世の聞えも、餘りに穩便に覺え候といへば、正成聞き給ひ、以前の多勢にも打勝ちながら、今小敵なれども、宇都宮が勇に怖れ、正成が引入りしなんど、武の道をも知らざる者は、幾萬人もいへ。曾て恥辱とするに足らず。今愚人のいふを恥ぢて合戰に及びなば、家子郎從多く討たれ、大損を取るべきなり。宇都宮一人朝敵ならんには、如何樣にしても討取るべけれども、彼一人は、大海の一滴に同じ。多からぬ味方を討たせなば、後度の合戰しにくからん。夜明くれば敵押寄すべし。片時も早く引取れよとて、天王寺を立ちて、觀心寺にぞ引入れられける。翌拂曉に、宇都宮公綱七百餘騎にて押寄せしかども、敵一人もあらざれば、頓て天王寺に入り替り、京都へ早馬を以て、楠を容易く追散ら

し候とぞ告げたりける。公綱素より小勢なれば、續いても攻入り難く、又一戰にも及ばずして、引返さんも無念なれば、何のする業もなく、徒に日をぞ送りける。此時宇都宮、六波羅に援兵を乞ひ、其勢を併せて、河内に攻入るべきことぞかし。又六波羅も、軍勢を差下すべき思慮もなく、京勢六萬餘騎を遊軍となして、只うか〳〵として、暮されけるこそ轉情けれ。

正成計略附板持奇妙忍の事

斯くて四五日を經て、正成思慮を巡らし、矢尾別當顯幸を始め、和泉·河内の者共、其外宇多内郡の野伏共を語らひて、三千餘人、秋篠や外山の里·生駒が嶽·志貴·津浦を始め、浦々山々に篝を多く燒續けさせ、足輕三百餘人に、野伏千餘人を差加へ、攻むべき體に見せければ、すは敵は打出でたるぞと、芳賀兵衛尉·同次郎四郎を始め、紀淸兩黨の者共、一戰せんと打出でけれども、十方に分れて逃げて行く。敵は案内者ぞ。取巻れなとて引退く。敵引かば追懸くる。又取つて返し戰へば、思ひも寄らざる方

より一同に鬨を作り、或は俄に狼煙を揚げ、遠矢を射懸け打ち、樣々と惱ましければ、宇都宮が勢怺へずして、天王寺に引取りけり。斯の如く夜毎に敵を劫して後、夜半に及んで、志貴・早瀨・宇佐美、一千餘騎にて天王寺の東に押寄せ、鬨を咄と上げしかども、宇都宮、勢を一人も出さゞれば、其儘勢を引取りけり。其上正成、板持といふ名譽の忍びの者を、差遣はされければ、公綱が持ちたる扇の、遠山に月を出せる繪を畫きたるを、盜み取りて歸りけり。正成大に悅び、頓て宇都宮が陣に使を遣し、某が手の者共、御陣所に推參仕り、御所持の扇を盜み取りて候へば、返進仕り候とてぞ送りける。公綱大に驚き、我れ殘暑堪へ難く、手を離さず持ちし扇なり。如何樣奇妙の忍び共の、多くありと覺ゆるぞとて、愈用心堅固にぞ守らせける。其夜板持、又宇都宮が陣に忍び入り、六波羅の越後守仲時の方より來りたる狀を一通、盜み取りて來りしかば、正成又初めの如く、使を以て返されけり。さしも大剛の公綱身震して、いや〳〵此所に長居せば、命を捨つるのみならず、如何なる恥辱をか取らんずらん。敵の退きたるを一面目にして、上洛せんと思ふは如何にと問はれけれ

ば、紀清兩黨の者共も、我々は此間、正成といふ古狐に化されて、心神疲れ果て候ぞや。少しも人心のある中に、御引取候へとて、同廿七日の寅の刻、公綱天王寺を立ちて上洛すれば、正成頓て天王寺に入り替らる。是に依つて近國の勢、我も〳〵と馳加はつて、勢強大になりにける。

天王寺未來記の事

正成猶も思慮し給ひけるは、衆の心和せずんば、大功を立つる事なし難からん。當時既に末世なりと雖、猶も佛神を尊む事甚しく、其奇瑞を實とする事は、さながら嬰兒の如くなり。吾密に聖德太子の未來記を披見して、細やか文を作り、忍びやかに祕して人に見せしめば、頓て世上に風聞せん。是大なる謀にして、且は諸人に、信を勸むる術ならんと思はれければ、同八月四日天王寺に詣で、大般若經轉讀の布施として、白鞍置きたる馬一疋・白綾縅の鎧一領・白覆輪の太刀一振を引かれけり。其後當寺の一舍利大師に對面し、忍びやかに密談せられければ、舍利大師之に同じ、密

に寶藏に入りて、金軸の書一巻を持來れり。正成之を拜見し、豫て企みし如く、思ふまゝに書き調へ、寶藏を出でて後、吾上宮太子の一皇治天の安危を勘へ給ひ、持統天皇より以來、末世代々の治亂を記されたる未來記を拜見せしに、不思議の讖文一段ありとて、和田孫三郎正遠に、七日齋せさせて、密に之を拜せらる。其文に曰く、

當人王九十五代、天下一亂而主不ㇾ安。此時東魚來呑二四海一。日沒二西天一三百七十餘箇日、西鳥食二東魚一。其後海内歸ㇾ一。

正遠三拜して、悦ぶこと限なし。其時正成、和田に向ひ、熟讖文を考ふるに、君既に神武帝より九十五代に當り給へり。天下一亂而主不ㇾ安とあるは、將に當時のことなるべし。東魚來呑二四海一とは、是れ平氏の逆徒なり。日沒二西天一三百七十餘箇日とは、君、隱岐國に御遷幸ありしことならん。西鳥食二東魚一とは、如何樣關東を滅す人出來らん。然れば君明年の春は、隱岐の國より還幸あつて、再び位に卽かせ給ふべきこと、必定なりと宣へば、正遠大に悦び、恩地に齋すること五日にして、密に之を拜ましむ。恩地、又楠家の老臣七人に齋すること三日にして、拜ませしかば、皆悦の

涙を流して、末頼もしくぞ思ひける。諸人此讖文を書きて、密に齋すること二日三日にして、拜ませければ、扨は權者の記し置かせ給ひし上は、疑ふべきにあらずとて、少々運を兩端に窺ひし者共も、皆楠に思ひ付きにけり。其上六波羅の越前守仲時を始め、北條家宗徒の人々も、之を傳へ聞ける輩は、心の賴みも盡き果て、何の思慮にも及ばず、當家の運命も、今は此迄なりとのみ思ひて、只忙然として居られけるとぞ聞えし。されば後醍醐天皇も、此の事を謀とは知召されざりければ、四海一統の後、天王寺へ勅命あつて、彼未來記を叡覽ありけるに、此文なかりしかば、諸卿扨は正成の謀にやと申さるゝ。是に依つて主上、正成を召され、御尋あり、正成謀の次第を、ありのまゝに勅答し給ひしかば、君叡感あつて、正成は、智仁勇の三德を兼ねたりと、敕諚ありけるぞ忝き。

東兵圍㆓赤坂城㆒附石上十郎次郎入道の事

さる程に大塔宮は、十津川を御出あつて、槇野の城に入らせ給ひけるが、此處も要

正成、金剛山に籠る

阿曾治時赤坂城を攻む

害の地ならねばとて、三千餘騎を從へられ、吉野山に楯籠らせ給ふ。楠兵衛尉正成は、赤坂の城に平野左金吾入道を籠置き、我身は紀伊と河内の境、金剛山に堅城を構へ、八百餘騎にて楯籠り給ひけり。此平野入道は、矢尾別當が甥なりしかども、顯幸と正成、異心あるべからずとの誓約に依つて、平野を正成の養子とし、和田孫三郎正遠が子滿仁王丸は、正成の甥にて、十一歳になりけるを、顯幸が弟子とせり。後に和田新發意賢秀といひし法師は、此滿仁王が事なりけり。斯る所に、相模入道の下知を受けて、諸國の勢十八萬餘騎上洛して、元弘三年正月晦日、三方に手を分つて、吉野・赤坂・金剛山、三の城へぞ向ひける。阿曾彈正少弼治時は、赤坂の城へ向はれける所に、同二月二日、人見入道恩阿・本間九郎資貞父子、拔駈して討死す。之を合戰の始めとして、晝夜息をも續がせず攻立つる。同九日、寄手の勢一萬三千餘騎、南より攻寄せて、切岸の下迄ぞ近付きける。此一方は、左右田にして平地なれば、攻むる便ありける故、安々と攻寄せて、士卒等既に塀を打破らんとしける所に、小田次郎左衞門尉といふ、小賢しき男進み出で、以前も此城にて、寄手の勢方便られ、大に

不覺を取りしなり。又例の釣塀なるを知らざるや。少し引退きて城を攻めよと、馬を乘廻して下知しければ、諸卒尤と同じて退かんとする程に、備騷ぎて見ゆる所を、城中より、矢前を揃へて散々に射る。寄手射白まされて、互に人を楯にせんと、背を屈めて色めく所を、城兵得たり賢しと城戸を開き、一同に切つて出で、霹靂碎けて太山をも劈くが如く、敵中に切つて入れば、なじかは以て耐るべき、崩れ立ちてぞ逃げ行きける。平野が勢は、僅三百餘騎なれば、長追をすべからずとて、頓て城へ引入りけり。寄手は之にも痛まず、同十四日まで、荒手を入替へ〳〵攻めたりけり。茲に寄手の中に、吉河八郎といふ者ありけるが、此城の體、三方は谷深うして道もなく、一方は平地にして、山遠く隔りぬ。何所に水あるべしとも覺えざるに、水の卓散(たくさん)なるは心得ずと、樣々思慮を巡らし、其邊を左右と巡りけるに、とある森陰の藁屋の内に、讀經の聲聞えければ、扨は僧のありけるにこそ。いしくも尋ね出したりと悅びて、庵の内へ入らんとするに。盜賊の用心と見えて、内より扉を閉ぢてけり。八郎立寄り扉を叩き、案内を乞ひしかば、法師立出で、扉を開きて内に請ず。

八郎丙に入りて彼の法師に向ひ、某は播磨國の住人吉河八郎と申す者にて候が、阿曾霜臺が手に屬し、此城に向ひ候なり。合戰の習、十にして九つは討死を仕るべく候へば、能きに菩提を弔ひてたび候へ。若又一命恙なく候はゞ、現當二世の爲ともなり候はんとて、銀錢二百文と太刀一振と與へて後、樣々の物語をしけるが、さるにても敵城に水の多く候は、外よりも取り候にや。如何なる故にて候ぞ、御坊は知り給はずやと問ふ。法師聞きて、城の用水は盡くる事あるまじく候。其故は、南の山の奥、葦谷の瀧口より地の底に樋を伏せ、城中へ水を掛入れ候なり。其樋を堀切らせ給ひなば、平野は落城に及ぶべし。然らば功は萬人の上に立ちて、恩賞厚く蒙らせ給ふべし。愚僧は先年楠に攻滅されし越智八郎が郎等、石上十郎次郎と申す者にて候ひしが、越智滅亡の後、剃髮染衣の身となり、諸國をさまよひ歩き、近き頃より、此所に忍び住み候なり。主人越智事は、鎌倉殿を敵に受けて候へども、差當つての敵は、正成にて候へば、其恨なきにあらず。早く大功を立て給へと敎へければ、吉河大に悅び、暇を告げてぞ歸りける。

赤坂落城 附 平野入道以下被ㇾ誅事

斯くて吉河八郎は、大將治時の陣所に來り、當城には、南の山より用水を取り候なり。此事某謀を以て、尋ね聞きて候といふ。彈正少弼大に悅び、人夫を集め、城へ續きたる南の方の山の尾を、掘切らせて見られければ、葦谷の瀧口より十八町が間、二丈餘りの土の底に、石を疊みて樋を伏せ、眞木の瓦を覆ひたり。此樋を掘切りて後、日々火矢を射かけし程に、追手の櫓六つを燒落せり。城中には、口中を濕すべき一滴の水だになくて、既に十二日に及びければ、今は精力も盡き果てぬ。皆一同に切つて出で、討死せんとぞ議したりける。茲に寄手の勢の中に、澁谷十郎といふ者あり。平野が郎等一九彥九郎とは、智音なりける故、大將治時、是ぞ能き便なりと悅んで、澁谷を以て城中にいひ遣はされけるは、弓矢の道、今は是迄にて候。枉げて當方へ御出で候へ。御本領の上に新恩を申沙汰仕らん。此の事努々相違候はじと、詞を巧みにぞいひ送られける。十郎城中に入りて、一九に先づ此旨を語る。一九又右

赤坂城陷る

の次第を、大將平野入道に告げければ、入道忽ち義を忘れ、同十六日、士卒二百八十二人を從へ、城を開け、降人になつて出でけるを、長崎九郎左衞門尉請取りて、鎧太刀を奪ひ取り、高手小手に搦めて、六波羅へ引渡せしかば、案に相違してぞ見えたりける。爰に兵衞尉正成は、吾身金剛山に楯籠り、妻子幼稚の者共を、觀心寺に隱し置き、舍弟正氏・和田孫三郎正遠・恩地五郎・橋本六郎・志貴右衞門尉・渡邊五郎以下、一千餘騎を籠置きて、助勢とせられけるが、平野が降人に出でぬる由、觀心寺に聞えければ、楠正氏・和田正遠・恩地・志貴・渡邊等相集り、六波羅を助け置けば、吉野・千劒破兩城の軍勢共、籠城に苦しんで、降人に出でんことを思ふべし。如かじ謀を以て、彼等を誅せんにはとて、六波羅に間者を入れ、平野は、正成の養子矢尾が甥にて、無二の官軍なれば、時を待ちて、本意を達せんと企つる由をいはせければ、越後守仲時、此謀に陷れられ、諸人の見懲にせよとて、平野を始め相從ふ輩、悉く六條河原にて首を刎ねられしかば、吉野・千劒破の城兵等傳へ聞き、愈義心金石の如くになりにけり。

金剛山の要害

正成被レ構ニ金剛山城ニ事

楠兵衛尉正成は、千劔破の城に籠り給ふ。此山は、金剛山と號して、大峯葛城の頂なり。金剛山の本堂より、坤の方へ十八町去つて、千劔破と號し、日本第一の城地にして、五德相應の名城なり。五德といつぱ、水を以て第一とす。此峯に祕水あり。其滴ること一日に三石六斗なり。城外より取る水は、敵、鴆毒を入るゝ怖あり。第二には、此山嶮岨にして、一夫爰に怒れば、萬卒も進むことを得ず。四方の谷深く切れて、峯つゞかず。第三には、麓は平地にして、岸嶮なり。上の岸平なれば、敵、城を掘るに便あり。又四町の内に山あるときは、敵、矢を飛ばすの怖あり。第四には、岸皆岩石なるを以て能とせり。敵登ること叶はざるか故なるべし。第五には、近邊の山深く、地ざかひがんたるを以て能とせり。是は敵の寄るに難儀にして、城兵の忍んで出入するに、便あるべければなり。峯岩石にあらざるぞ、五德の一缺けたり。然れども當城は、此外に一德あり。高きこと二町に過ぎず。餘りに高きは、軍勢の

出入難儀なり。されば此山の東の高さ百五十六間、南の方は百三十間、西の方は百二十五間、北の方は、高さは五十四間なり。扨こそ正成、此一德を加へて、五德相應の名城とは名付け給ひけり。正成此城の廣狹を計られけるに、乾より巽の方へ、其長さ百六十五間、城の根廻り九百四十餘間なり。先づ芝を四尺に築き、芝より下本の土より三尺を掘りて、間四尺を置きて、長さ二間の柱を立てたり。芝と土と都て七尺立てたれば、如何なることにも、崩るべからざるに、本土の下にても、貫を二筋通し、芝の間にも、又一筋の貫を通し、其上に五尺の塀をかけたれば、飛鳥ならでは、越ゆることを得べからざるに、猶も矢切を構へたり。塀の柱は廻二尺餘、又は一尺七八寸なり。二本の柱の間には、悉く六寸五分、又は五寸六分の矢狹間を、內八文字外八文字に切らせたり。是は岸に三尺五寸の人形を立てゝ、內より射よきやうに、高く低く切らせらる。坂を上る敵なれば、腰の屈むべければとて、三尺五寸の人形を射させられけり。矢狹間の上下に、四寸の貫を通し、貫二筋に、間二廻り八寸の小柱を立て、四五寸の木を、內外より塀を骨にかき、其間に小石を入れて、粘土

を以て突込み、日に乾すこと十日にして、又内外より土を以て塗立て、内三尺の走り櫓高櫓等を、かき雙べたり。又城中の諸木も、松の外は、春若葉の頃、悉く取りて日に乾し、又は煎干鹽に漬けて、之を食物の便とす。木を伐る時は、太きを敵に抛る礫とし、枝の細きを薪とす。又水舟を二三百作り雙べ、役所の軒に續樋をかけ、一滴の雨をも殘さず入れ置きたり。米を磨ぎし水を捨てずして、士卒洗足の水となし、其をも捨てずして、馬にかひ湯洗ひの水となし、其をも猶すたらざる樣にして、火矢を消す水とせり。

千劍破城壁書の事

斯の如く拵へたる上に、塀の內一丈五尺を去り、樹木を植ゑて林とす。其內に室家土藏あり。塀より外の樹木を切り、其餘りも、悉く根を掘りたり。是は敵登るに、便あらせじが爲なりけり。米粟麥以下三萬餘石・大豆二千餘石・鹽五百石、又方三間に深さ二間の藏箱あり。之を地に掘入れて、稻の穗を積み滿てり。其外油・干魚・海藻

は、其數を知らず。長さ五間横四間の土藏に、矢の根を入れ、其上鐵三萬斤・鍛冶六人を籠めて、晝夜之を打たせたり。正成此の如く、思ふまゝに用意して、義心鐵石の如くなる逞兵八百六十四人を選み、引勝（ひきすぐ）つてぞ楯籠り給ひける。又正成壁書を出して、士卒を誡めらる。其文に曰く、

一、遊びも度々重なりぬれば、樂にあらず。
一、珍膳も、毎日向へは甘からず。
一、甲冑は、さねの固きを良しとす。好むべからず。
一、よせいの馬何かせん。長三寸計にて、遠行に疲れず、足の強きをよしとす。
一、太刀は骨のきるゝをよしとす。作を好むべからず。
一、高直の着物を求めず。
一、人の惡をいはず、善をも便なきにいはず。
一、世の善惡を、あからさまにいはず。
一、吾にある有を報ぜんといふ事なかれ。爲レ國報レ人惡二常人一は可レ禁なり。

一、唯今日無事ならんことを思へ。

已上

去年正成、湯淺を攻落されし後、和泉・河内兩國の敵の所領、悉く取集め、家子郎從に與へて、殘る所は皆千劍破に取入れらる。其時、胡麻の油はいふに足らず。一切の菓を取らせて、油とせらる。正成の居給ひし家の下には、深さ二間に穴を掘り、炭を埋むること三千餘駄に及びぬ。唐土・天竺より寄せ來りたらんは知らず、日本の勢は、數を盡して攻むるとも、落つべき城とは見えざりけり。

名越時有陣二水邊一事

斯る所に、同閏二月十八日、二階堂出羽入道道蘊、吉野の城を攻落せしかば、今は吉野・赤坂の東國勢、悉く馳せ加はつて、千劍破の寄手二十萬騎に餘りけり。東國勢は、城の小きを見侮り、切岸の下迄漕き連れて攻め近付く。城中には豫てより、大木の三四尺廻りなるを、四五尺に筒切りて、塀裏に多く積置かせ、又轉び易き石の、

一人して一つ二つ持つ程なるを、山の如くに積み置きたるを、士卒等取つて投かけ投かけ漂ふ所を、散々に射させければ、手負死人五六百人に及びける。是より左右なく攻めんともせざりけるが、爰に木坂九郎といふ者あり。主君金澤右馬助貞將に向ひ、先日赤坂を攻落し候ひしは、吉河の水を留めて候ひし故、忽に落城して、阿曾殿の高名となり候はずや。是を以て案じ候に、是程の小城に、水の澤山に候は、如何樣東の山の麓に流れたる溪水を、毎夜汲むかと覺え候といへば、貞將大に悅び、汝がいふ所理に當れりとて、大將大佛・陸奥守貞直・同武藏左近將監宣政・名越遠江入道元心に對面し、此由を宣へば、皆此儀尤なりとて、名越越前守時有を差向けらる。時有三千餘騎を引率し、水邊に陣を取り、城より出下るべき道々つまり〳〵に、逆茂木を引きて待懸けしかども、素より城中に此水を汲まざれば、曾て人音もせざりけり。正成此事を聞き給ひ、名越が陣に忍びを入れ、毎日敵の樣子を窺はせ、備の虛實、名越が術、殘る所もなくぞ尋ね聞かれける。其上觀心寺より、毎日十人十四五人づつ、忍びの者共を敵陣に差遣す。此者共、或は餠・酒・草鞋等を賣る商人になり、又は猿引

なんどになりて、陣中に紛れ居て、敵方の取沙汰を城中に知らせけり。敵は十重二十重に圍みたれども、毎夜城中に狀を通ず。其狀は皆白紙なりといへども、水に漬しぬれば、文字明に浮べるなり。又鍋の墨を付けて見るにも、文字顯はれぬ。是はたうごまの油を以て書くとかや。其頃迄は世人曾て知らざりければ、正成大に之を祕せられけり。去る二月廿三日の黎明に、忍びの者一人、正成の返狀を持ち、觀心寺に歸らんと、城中より出でけるを、大佛左近將監の番兵見咎めて、何者なるぞと捕へければ、吉野より參りたる商人にて候といふ。何條さる事あるべき。密狀やある、搜せよとて、赤裸にしたりけるに、懷中に白紙の折りたるが、十枚計ありしより外、何と見咎むべき物もなし。番兵等、扨は實の商人にやといふ所に、同じく觀心寺より出でたる忍び一人走り來り、こは如何に、汝は何の過をなしつるぞやと問へば、さればとよ、道に踏迷ひ、城の方へ行きし程に、爰は敵の方なりと思ひ、足早に逃げ歸りしに、此の如く見咎めせられ、難儀に及ぶなりといふ。彼の忍び聞いて、是は吉野より近き頃參りたる、油醬なんど賣る者にて、某が友にて候が、和泉より參

りたる商人に僞り方便られて、昨日錢四百文盜まれて候故、彼の男奴を尋ね出さんが爲め、此者と二人、方々と尋ね廻り候なり。汝は又何故に、其樣子をいはざるや。陣中に馴れざる故、隱したりなどいへば、さればとよ、餘り怖ろしさに、兎角をも得いはざるなりといふ。番兵等、扨は實の商人ぞや、疾々歸るべしとて歸しけり。大將左近此由を聞き、諸國より來り集れる商人共を、其の如くに惱したらんには、賣人等怖れて、悉く己が在所に逃げ歸るべし。然らば陣中詰りて、諸勢難儀に及ばんか、以來卒爾の擧動をすべからずと、陣中を觸れさせられければ、是より忍びの者共、彌思ふ儘に陣中を經巡りける故に、名越時有の備の疎なるをも、日々城中へぞ告げ知らせける。

南朝太平記卷第五終

南朝太平記 巻第六

千劒破城兵夜討附時有敗北の事

さる程に兵衛尉正成は、敵の虚實を、思ふまゝに窺ひ澄して、敵陣を見やり給へば、諸陣よりは、十町又は十四五町も隔てたり。城よりは五町有餘と見課せて後、一夜討して、敵に目を覺させんとて、逞兵を勝り出し、相印相詞を定めらる。一番は湯淺六郎百餘騎、水邊に陣せし敵に、一文字に切つて入れ。二番は北辻玄蕃允宗以、是も百餘騎にて、名越が陣の、周章騒がん所へ切入れよ。三番は楠三郎正富、是も百餘騎にて、後陣を堅く守るべしと下知せらる。豫て物馴れたる勇士十六人、敵陣に入れ置かる。是は名越周章出合へば、組せんが爲なりけり。時に北辻申しけるは、名越は遊興をのみ事として、夜毎に夜半過ぐる迄酒宴をして遊び候由、傳へ承りて候と

名越時有敗走

いふ。然らば卯の一天、宜しからんとぞ定められける。殘る城兵五百餘騎も、面々の持口を堅めさせ、若敵寄せ來らば、防ぐべしと下知せらる。斯くて卯の刻になりしかば、大將正成も、三十餘人を相從へ、正富が陣より、二町ばかり後陣に控へ、我れ能き時分を勘へ、引太鼓を撃つべきなり。一番の太鼓に、湯淺・北辻引取れよ。味方如何に勝誇りたりとも、打捨てゝ引取るべし。其故は、時有を討ち取りたりとも、敵はさまで痛むまじ。味方一人にても討たれなば、大なる損なるべし。二番の太鼓に、正富引け。縱ひ一番の太鼓に、先の二軍引かずとも、正富は引取れよ。先の二軍太鼓を用ひずして引かずんば、捨てゝ正富を引かせ、正成も引かんずるぞ。二軍を助けんとて、城を敵に取られなば、末代迄の恥辱といひ、君に對して大なる不忠なり。三番太鼓は、正成が引取ると知らせん爲の太鼓ぞと、軍令堅く下知せられけり。名越が勢、毎夜氣を詰めて守りけるが、後には次第に懈りて、敵此水は汲まざりけりとて、打解にぞ居たりける。斯る所に又、篠目の霞隱れより押寄せて、河邊の者共二十餘人切散らし、直に名越が陣に切り入つて、東西南北に駈立つる。越前守時有、辛き

命を助かり、這々本の陣所に引取らる。數萬の寄手助け合せんとて、騷動する體を見て、正成一番太皷を撃つて、早二軍を引取り給ふ。二の太皷に付きて、正富も引入れば、漸々數萬の敵兵。名越が陣に馳付きたれども、喧嘩果ての千切木なりとぞ見えたりける。斯くして後正成、三番太皷を打たせ、靜々と引入らるれば、名越が陣に集りし諸軍勢、此太皷に驚き、すは楠こそ寄すれとて、前後を忘れ途を失ひ、八方にぞ逃行きける。斯くて湯淺以下三人の者共は、敵の捨てたる旗幕など取り持たせ、大將の前に出合ひ、戰の次第を述ぶる。正成其戰功を感じ、恩賞夫々にぞ行はれける。時に北辻進み出で、敵の旗幕を追手に立て、笑ひ候はゞやといへは、正成打笑ひ、我もさ思へども、敵若し誤つて、名越殿こそ城へ切り入り給ひたりなんどといはゞ、數萬の敵、之を誠ぞと思ひ、競ひ懸つて攻め來らば、城危かるべければ、暫く敵の靜まるを待つべしとぞ宣ひける。其翌日櫓に三木傘の旗と幕とを引きて、昨日名越殿より賜つて候と、同音に咄と笑ふ。名越一家の人々大に怒つて、五千餘人切岸の下迄攻付けて、城中へ切入らんと揉む所を、切岸の上に横たへ置きたる大木共

を、一度に切つて落しければ、壓に打たれて死する者、千四五百人に及べり。是に駭き、士卒騷ぎ立つ所を、城中より差詰め引詰め射ける程に、五千餘人の勢過半討たれ、殘りし者共も、朱になつてぞ引取りける。

足利治部大輔高氏術の事

斯くて正成、又一つの謀を巡らし、芥を以て人形を二三十作らせ、甲冑を着せ兵具を持たせ、深夜に及んで麓に立置き、逞兵百餘人を交へて、黎明の比、鬨を咄と作らせける。數萬の寄手之を見て、我一にと攻合はす。城兵は、矢軍少々する體にもてなし、次第々々に城中へ引いて入る。寄手人形を敵ぞと思ひ相集る所を、大石四五十一同に轉ばせしかば、敵數百人討たれて逃退く。寄手も大に呆れて、是より合戰を止めにけり。爰に足利治部大輔高氏も、此城の寄手に向ひ居給ひけるが、大將大佛・陸奥守貞直へ向ひ、數萬の大軍取圍みながら、うか〳〵として爭が日を送り候べき。謀を以て一夜討仕らんと宣へば、貞直も此儀尤に候ぞと、同ぜられける。足利

殿の一族、細川彌八郎淸氏（後相模守と號す）の乳母は、正成の家子早瀨吉太が伯母なりければ、是ぞよき便なれとて、乳母の夫桂平六を以て、御邊の役所より手引せられれば、夜討にして當城を攻落すべし。然るに於ては、恩賞として、四千貫の所領を申行ふべし。此事僞あるべからずとて、黃金五百兩をぞ送られける。然れども正成良將たるにより、番兵をして城を堅固に相守らせ、十二時に鐘を撞かせ、廻り番六十八、十八人を一與として、每夜六七度づつ之を廻らせて、怠を禁めらる。櫓々よりは、松明又は車松明を、夜每に五度六度かけ出して、忍び入れじと檢むる。正成も、勇士十八人相從へ、自ら夜每二三度づつ巡らるゝ。松明二つ、雨の夜は三つ、其內一つは樹の內を通し、何れも二十間計り先に立ちて、面々の陣に、御用心候へと呼はつてぞ通りける。其上敵より隱謀を勸め、賞を與へんとの判を出し、又は引出物を送るべし。然らば正成、敵の一倍を與ふべしと、豫て下知し給ひければ、早瀨頓て正成の前に來り、敵よりの術を、ありのまゝに申し、陸奥守の證判・引出物等を出して、正成の前に置きければ、正成大に感じ、卽座に千兩の金を與へ、四千貫は唱への惡ければ、五千貫を宛

行はんとぞ約せられける。足利殿は、斯る事とは知り給はず、既に夜討の日限を定め、人質を出さるべしといひ送られければ、早瀨、正成の下知を受けて、密に返事しけるは、當城には、一族も候はず。妻子も南都に候へば、質に進ずべき者なく候。此上は一紙の告文を進じ申候はんといふ。高氏之に同じ、告文せさせて後、細川九郎義實を大將として、二百餘人をぞ差遣はされける。義實此勢を從へ、さしも嶮しき山を攀登つて、切岸の下に着き、早瀨が相圖を待ち居たり。城兵等、敵を思ふ儘に僞引寄せ、吉太を搦めて、生捕りたる體に見せ、遙々と難所を是迄御出こそ、御大儀に候へ。籠城の儀にて候へば、何とて持成すべき物もなく候。堅くとも之を聞召され候へといふ儘に、大石を抛掛け〳〵漂ふ所を、松明を投出し〳〵、其光に精兵の手垂共、差詰め引詰め射たりければ、細川九郎を始め殘少なに討たれ、其餘の者共は、我先にと逃行きけり。是より諸將會議して、只食攻にすべしとて、合戰を止められける。

遠州入道元心・同時家鬪諍附遊女新羅幷梯の事

斯くて寄手の諸將、軍を止めて守り居られければ、永陣に屈し、徒然に堪へ兼ねて江口・神崎の傾城共を集め、思ひ〱に遊興をぞせられける。爰に名越兵庫介時家は、神崎の新羅といふ遊君に相馴れ、わりなく思ひ通はれける所に、叔父遠江守篤時入道元心、彼女を戀慕ひ、己が方に取隱して、閨の友とぞなしにける。甥の時家、此事を泄れ聞きて大に憤り、小田常陸前司時知は、無二の朋友なりしかば、小田に此事を語る。時知聞きて、某に任せられよ。能きに計らふべしとて、入道の陣に行向ひ、此事甚だ以て宜しからず。世の聞く所も如何に候と諫めしかども、左樣の事思ひも寄らず候。如何樣讒人の申す所か、人違かとこそ存じ候と陳ぜられければ、時知も力なくして立歸りぬ。兵庫介大に怒り、如何にもして見顯はして、本意を達せんとぞ企まれける。斯くとも知らで遠江守入道、或時遊女・遁世者共を集め、酒宴を催し居られけるに、兵庫介不意に出來り、入道の傍に居寄つてありけるを見て、礑と睨み、何ぞ入道、斯くまで無禮を行ひ給ふべき。郎等共、あの新羅を引立てよと怒らるれば、さ承り候と、若者共三人、新羅を取つて引立てんとす。入道之を見て、兵

庫介を拔打に切らるれば、時家も透さず、入道の左の肩より右の助まで切離さる。入道の手の者共、頓て兵庫介を切倒す。兩人の郞等共之を見て、或は切合ひ或は刺違へて、片時が程に二百餘人、枕を雙べて死したりけり。城兵等之を見て、朝敵に與し、十善の君に敵し奉る惡人共が、自滅するを見よやとて、同音に咄と笑ふ。寄手の諸勢は頭を搔きて、名越殿の仕出されたる事よとぞ呟きける。斯る所に同じき四月四日、鎌倉の飛脚到來し、城をも攻めず、徒に日を送ること、甚だ以て然るべからずと下知せらる。是に依つて諸將會合し、軍の術を評定ありけるが、城の前なる堀に、橋を渡して打入るべしとて、京都より番匠を五百餘人呼下し、八九寸計の材木にて、長さ十丈、橫は二丈五尺に、梯を作らせたり。是は大繩を二三千筋附けて、車を以て卷立て、向ふの岸へ倒し懸けんが爲なりけり。忍びの者共之を見て、城中に告げければ、城兵等も大に怖れ、如何せんとぞ案じける。正成又思慮を巡らし、いや〳〵敵の術恐るゝに足らず。梯を挺木にして射んに、あだ矢は更にあるべからずとて、敵より橋を渡すらんと思しき所に、櫓を多く構へさせ、竹を以て水彈を七千餘作らせ

らる。又大壺を多く土に掘り据ゑさせ、油を湛へたること二百三十餘石、又長さ一尺廻り一尺五六寸の松明を、二萬餘用意せられけり。是は寄手橋を渡しなば、水彈を以て油を彈きかけ、其上松明を投げ出して、燒落さんが爲なりけり。斯くて梯出來しかば、數萬の寄手、車木を以て卷立てさせ、既に向へ倒し懸けんとせし所に、城兵一同に鬨を作り、散々に射立てければ、元來臆病なる人夫共、わつというて逃げける程に、是に氣を奪はれて、すは例の楠よと、何の分ちもなく、崩れ立ちてぞ逃行きける。梯は倒れぬ。又壓に打たれて死せし者も多かりける。寄手材木を敵に取られじと、小町民部丞を、一千餘騎にて、番兵として附置きける所に、小町大に怖れ、我れ楠が爲に討たれんは必定なりと、身を震はして悲みけるが、次の夜暗きに紛れて、行方も知らず落失せけり。

正成計略附佐介時氏・陸奥貞森以下被レ討事

正成又思慮を巡らされけるは、寄手の中にも、金澤右馬助貞將は、小賢き男にて、動も

すれば間者を入れ、味方を討たんと相企むなる。我れ上手を討つて、今より術を止めさすべしとて、觀心寺にありける舍弟正氏の方に、密計をいひ送らる。是に依つて正氏、大事の計略なればとて、日井小藤太・木澤平次兩人を、敵陣にぞ遣されける。日井・木澤は、吉野より來りたる商人の體にもてなし、此彼と徘徊しけるが、貞將の家子岩城右京進が許に行き、樣々物語りしけるが、越中の一方の將、恩地左近太郎が方へ參りて、味方になし參らせてんやといふ。岩城能き便なりとて、二人を具して、貞將の前に出で、斯くと申しければ、貞將大に悅び、汝等は如何にしてか、城中へは入るべきと問ひ給ふ。二人聞きて、能き方便(てだて)の候。大塔宮の令旨を、一通作りて給はり候へ。城中に入りて正成に令旨を渡し、扨恩地が役所に忍び行き、味方に語らひ候はんといふ。金澤殿之を感じ、汝等は、鄕民には才智勝れたる者共なりとて、令旨を似せて一通認め、術を委しくいひ含めてぞ遣されける。兩人は、城中に忍び入りけるが、翌日立歸つて、金澤殿に申しけるは、恩地御返事を申候は、仰の如く日本を敵に受け、此一城に楯籠り候へば、落城とこそ存じ候へ。然れ共主人正成を捨て

難く候。此一跡を御絶し候はんには、爭か仰に從ひ候べき。正成計を御誅伐あつて、幼子多門丸を御立てあらんに於ては、正成は一代、家は末代にて候へば、仰に從ひ候はんと申候といふ。其上正成よりの、令旨の御請をも取來れり。貞將諸將と胥議し給ひけるが、正成一人討て出しなば、多門丸は本領安堵相違あらじと、誓書をぞ出されける。二人は之を帶し、又似せ令旨を賜はつて城中に入り、先づ恩地が役所に來る。左近太郎二人を相具し、正成の前に出で、披きて之を見るに、六ヶ條の好みの內、極めて難儀なるは人質なり。是は足利尊氏、以前の不覺に懲りて、堅く支へ申さるゝ所なり。茲に長谷平九郎は、大剛の者にて、力世に超えたれば、並々の者四五十人は、屑ともせまじければとて、長谷を招きて、此事を宣へば、御承り候。君の爲に命を捨てんこと、士の面目にて候なり。然れども如何なる敵中にても候へ、大方は切拔け歸り候はんといひければ、長谷を、恩地が舍弟左近三郎と申者にて候とて、人質にぞ出しける。右馬助貞將、謀相調りぬと大に悅び、金劔三振・黃金三百兩・白銀千兩を、恩地が方へぞ送られける。恩地相圖を定め、多勢は御無用にて候。

正成に腹を切らせんことは、御勢を賴む迄もあるまじく候。宗徒の人々、少々大將の後の方の櫓の下へ御付け候へとて、案內者二人、相言葉を定めてぞ遣はしける。金澤右馬助、さらば勢を差向くべしとて、佐介次郎時氏・陸奥式部丞貞森・嫡子小式部貞武・南澤右衛門次郎・藤村與一以下、宗徒の一族八人、究竟の若者三十二人をぞ遣されける。此勢、其夜の寅の刻、案內者を先に立て、城邊に近付きたり。時に恩地が勢直先に進み、切り入る體に見せければ、四十人の者共、劣らじと込入りたり。時に賊兵共、洪水の漲り來るが如く、一同に喚き叫んで切つて懸る。恩地が勢之を見て、咄と逃ぐる眞似をして、寄手の勢四十人を、眞中に取包み、一人も殘さず悉く討取りけり。其後城兵等、太鼓を擊ち鐘を鳴らし、鬨の聲を揚けしかば、數萬の寄手之を見て、扨こそ城は落ちたるぞ。攻入つて高名せよと、谷とも崖ともいはさず、曳や曳やと攻登る。城兵等思ふ圖に敵を近付けて、大木大石を投懸くれば、さながら天狗礫の如く、見る內に二百餘人打倒され、蜘蛛の子を散らすが如く、一同に崩れ行くを、散々に射させければ、四方の谷に人雪崩を築かせけり。長谷平九郞・木澤平

次・日井小藤太三人は、此騷動に紛れ、敵陣を遁れ出で、觀心寺へぞ落行きける。

宇都宮千劍破發向同城攻の事

宇都宮公綱千劍破城を攻む

大塔宮尊雲親王（護良と改め給ふ）は、吉野の城を落ちさせ給ひ、觀心寺に忍びて坐しけるが、吉野十津川宇多内郡の野伏共、宮の命を奉じて、七千餘人蟻の如くに集り、蜂の如くに起つて、此彼の谷岸に群り居て、金剛山の寄手の往來を差塞ぐ。是より諸國の軍勢共、兵糧運送の道を留められ、人馬共に疲れ苦しみ、百騎二百騎打連れ〳〵落ちて行く。和田孫三郎正遠、五百餘騎にて觀心寺より打つて出で、糧道を差塞ぎ、落人を討留めしかば、日毎に討たるゝ者數を知らず。僅に死を遁れたる者共も、赤裸になつて落行きける。兩六波羅大に呆れ、兎角楠を退治すべき人は、宇都宮殿ならではあるべからず。馳向つて凶徒を誅伐し給ふべしと申されれば、公綱畏つて、仰承り候。某罷向ひ、身命を捨てゝ忠戰を勵み候べしとて、手勢千二百餘騎にて、千劍破の城に馳せ向ひ、大佛陸奥守貞直・同武藏左近將監宣政以下の諸將と評議して、其

より城を七重八疊に取圍ませ、夜毎に關を作らせ、前なる兵には鋤鍬を持たせ、堀を深く掘らせ、土を高く築上げさせ、宇都宮以下の諸將、其蔭に詰寄せたり。城兵等之を見て、車松明を投懸け〳〵防ぎけれども、悉く堀へ落入りて、寄手死傷する者一人もなかりけり。既に黎明も明行けば、朝霧の晴間より、敵陣を見やりたるに、件の堀を前に當て、土手を高く築上げて、宇都宮治郎大輔公綱・千葉大介貞胤・伊具右近大夫將監有政・土岐伯耆入道存孝・結城九郎左衞門尉親光以下の宗徒の大名、家々の紋付きたる旗を、嵐に飜らせ、軍勢沓の子を打ちたる如く、寸地も餘さず詰寄せたり。斯くして又夜に入れば、十間二十間繰寄せて堀を掘る程に、十餘日に及びしかば、切岸の下まで攻寄せて、鹿垣一重引破る。城兵も爰を詮と防ぎしかば、此時又寄手多く討たれけり。紀淸兩黨の者共、切岸を上らんと揉みけれども、元來正成能く構へ置かれたる城なれば、寄手終に登り得ず。公綱思慮を巡らし、只掘崩せよと下知して、岸の下よりぞ掘らせける。寄手左右なう詰寄せて、城近く陣取りしかば、忍びを出すべき便もなく、掘崩さんとする術を、城中曾て知らざりけり。氣を得た

る寄手なれば、難なく三日が間に、追手の櫓一つ掘崩す。諸勢すは攻込めよといふ程こそあれ、曳々聲を出して攻登る。されども豫て植ゑ置きたる樹木、嚴しく生茂りたれば、寄手も攻入り難く、猶ためらふ所を、大石を抛げ矢を飛し、破られじと防ぐ程に、寄手若干討たれにけり。其より正成思慮を巡らし、穴を掘りて湯を沸し、之を敵にかけ、大石を落せしかば、是が爲に或は死し、或は瘡を蒙る者、其數多く出來たりし故、寄手の勢も、今は十計盡きて、すべき術なかりけり。

楠正氏・和田正遠夜討、千劔破寄手の事

觀心寺に忍び居たりし女童等、此事を傳へ聞き、君の一大事、此時に限りたり。我我も命生きて何かせんと、泣悲みければ、楠正氏、和田・恩地以下を集め、舍兄正成の滅び給はんを、我々斯くてあり乍ら、何ぞ餘所に詠むべき。いざや一夜討して、敵を遠く追拂はんと、目刺すも知らぬ暗き夜の、而も風雨烈しく、大木をも吹折る計なるに、物馴れたる兵十八人廿八人一與として、寄手の諸陣へ忍び入れ、又五十八人六十八人

楠正氏和田正遠等夜討

づつ、此彼に伏せ置き、又二百餘騎は、敵陣に切り入るべしと下知せらる。和田孫三郎は八百人にて、大佛が陣に忍び居て、敵、鬨の聲に驚き、周章せん時に、火をかくべしと約をなし、我身は百五十騎にて、寄手の勢の、夜詰に行く眞似をして、公綱が陣の後に控へたり。斯る所に二百餘騎の兵共、寄手の陣へ、喚と叫んで切つて入る。諸陣驚き騷ぎ、こは何事ぞといふ所に、和田正遠、大將貞直の陣に火をかけ、鬨を作つて切つて廻る。豫て與々を分けて入れ置きたる軍勢共、味方の誰こそ敵になりし、何某こそ返忠すれと、聲々に喚はつて、此に顯はれ彼に隱れ、十分に駈亂す。此時楠正成の勢百五十騎、公綱の陣へ、無二無三に切入りて、縱橫無碍に駈立つれば、紀清兩黨の者共、一戰にも及ばず、八方に分れて落行きたり。其餘の諸陣も、親討たれ子討たるゝをも顧みず。多くは赤裸にて逃げて行く。正氏敵を追立て、直に城門に馳來らる。番の者共大に悅び、城戸を開かんとするを、正氏怒つて、何故此節大將の下知をも受けず、門を開かんとはするぞ。軍令を知らざるや。大將に申すべし。寄手強く攻め候故、斯く夜討を仕候とて、郎等一人城中に入れ、我身は頓て馳返さ

る。正成之を聞き給ひ、戰半なるに、正氏が爰に來れる愚さよ。思ふ圖の合戰は、えせまじきぞと宣ひけるが、案の如く與をなして、分れ居たる軍勢共、大將引き給ひたりと心得て、我も〳〵と引いて行く。正遠は使を一人城中に遣して、合戰のやうを告げ、正氏の見えざるは、城へぞ入り給ひつらん。正氏には似合はざる擧動かなとて、山陰にて待ち居たれば、正氏五十騎計にて馳來る。此勢と一手になり、豫て相圖せし所にて、後れし勢を待揃へ、打連れてぞ引取りける。其夜陣を退かざりしは、長崎四郎左衞門尉高貞・城太宰大貳入道・三浦若狹五郎氏明・千葉大介貞胤・二階堂出羽入道・小山判官秀朝が勢計なり。其餘の輩は、三里四里逃れしかば、翌日白晝に歸るもあり、又夜に入りて歸るもあり、見苦しかりし分野なり。

兩六波羅最後并千劔破寄手敗北の事

爰に播磨國の住人赤松入道圓心は、大塔宮の令旨を賜はつて、苔繩の城より打つて出で、所々の合戰に打勝ちて、摩耶山に楯籠り、遠江に威を震ふ。四國の土肥得能

後醍醐天皇隱岐を忍出させらる

北條時益仲時戰死

も、宮方になつて、長門の探題上野守時直を討散らし、六千餘騎にて讃州宇多津今張に舟を汰へ、京都に攻上らんと企てける。斯る所に閏二月廿四日、先帝隱岐國を忍び出でさせ給ひ、伯耆國に濳幸ある。村上又太郎長高、（名和と號す。後敕命に依り長高を長年と改む、）敕命に從つて次男孫三郎基長（後三郎左衞門尉と號す。卅歳にて出家す）・三男乙童丸（後四郎左衞門尉と號す。建武三年に逝去す）・長高の舍弟鬼五郎助高（後に左衞門尉と號す）・從弟小太郎信貞以下を引率し、先帝を船上山に遷幸なし奉り、此所に楯籠り、勢强大になりにけり。然る所に赤松入道、酒部瀨川の合戰に打勝ちて、直に帝都に攻上る。此時味方に力を合すべしと敕命を蒙つて、千種頭中將忠顯、船上より打つて上り、赤松に力を合さるゝ。六波羅每度戰に利を失ひ、關東に加勢を請はれしかば、名越尾張守高家・足利治部大輔高氏を差上さるゝ所に、名越尾張守は、久我畷にて討死し、足利治部大輔高氏は、忽官軍に屬し、六波羅を攻められしかば、兩六波羅遂に戰負け、東を指して落行かれけるが、左近將監時益は、四宮河原にて、流失に中つて死し給ひぬ。越後守仲時も、五月九日、一揆等に取籠められ、江州番場の宿にて、主從卅二人、自害してぞ失せにける。正成の京都に附置かれたる忍

宇都宮公綱退軍

の者共、翌十日の卯の刻、千劔破に走り歸り、兩六波羅沒落の由を告げければ、城中の士卒、悦び勇む事限なし。正成、追手の櫓に人を上せ、六波羅殿こそ、御慰のため東國へ御向ひ候へ。知召されて候にやとぞ呼ばらせられける。寄手は未だ曾て知らざりければ、又古狐が、如何なる巧をかなしつらんと、陣中ひそめき合ふ所に、其日の午の刻、六波羅攻落されし由聞えしかば、上下周章騷ぎて、東西に走り南北に馳り廻るとぞ見えし。未の刻に及んで、寄手悉く陣を拂ひ、南都の方へと落ちて行く。近國の野伏者、谷に充ち峯に群り、螺を吹き枯木を叩いて喚き叫ぶ。正成之を見給ひ、敵を追討に討取れよ。落人を討止めんと、野伏共峯々に充滿(みち／＼)たり。彼者共に高名あらば、恩賞を行ふべしと、大將の下知なるぞと觸聞かせ、百人づつに先をせさせ、三百人を三つに分け、後陣に備へて追懸けよ。敵の返し易からん所にては、遠矢に射よ。切所に懸らば追懸け追詰め、討取れよ。若敵大返しに返さば、城に馳入るべからず。向の深山へ引入れよとて出されけり。士卒等、大將の下知の如く野伏共を語らひ、短兵急に追懸けしかば、大軍の引立ちたる癖として、一返しも返さず、主

討たれ子死するをも顧みず、我先にと落行く程に、討たるゝ者數を知らず。或は深谷に落入り又は深田に轉び入りて、心ならず生捕らるゝもあり。さしもの多勢、殘り少なに討なされ、其夜の子刻計り、漸々南都にぞ落着きける。正成、恩地以下の諸臣を集め、敵に一人も、合戰の道を知りたる將はなかりしぞや。正成此の如く引取らんには、今日は手強く城を攻めて、明日曉天より峯々を取つて勢を備へ、士卒三十餘一組にして、谷の方より引取らせ、其餘は次第を守らず峠へ登せ、峯より峯を持ちて引取らんに、城兵も野伏も、爭が追ふことを得べけんや。敵の難所は味方も難所なり。去年より爰に在陣しぬれば、案內は知り透しつらん。然れば城より打出でなば、願ふ所の幸にてこそあるべきに、富めるに誇つて、次第に武の道の疎くなりぬる淺猿しさよと宣へば、湯淺彥六進み出で、峠より彼方をば、如何にして引き候はん。承りたく候といふ。正成聞き給ひ、峠より彼方に小き峯いくらもあり。然れば先備の、峠に登りたる勢を以て、小峯々々を堅めさせ、跡に引きたる軍勢を、峠に備を立てさせて、其內より三千餘を峠に殘し、先の如くに引取らん。然らば峠を下ら

ん所を討取らんと、城の軍勢打出でんか、其時は、先の峯に備へし勢と、三千餘騎を亂さず引きける勢と、一つになつて戰はんに、などか勝利を得ざらんと、謀巧みに宣ひければ、恩地以下の者共、皆智慮の程をぞ感じける。

南朝太平記卷第六終

南朝太平記卷第七

新田義貞被ㇾ攻ㇾ滅北條一附寶戒寺建立の事

爰に上野國の住人新田小三郎義貞は、鎌倉の催促に從つて、千劔破の寄手に相加はつて居給ひけるが、密に大塔宮の令旨を蒙り、虛病を構へて本國に引歸し、同心の一族を相語らひ、元弘三年五月八日、笠掛野へ打つて出でらるれば、越後の一族里見・鳥山・田中・大井田・羽川以下馳來る。其外甲斐・信濃の源氏五千餘騎、小幡の庄にて馳着きたり。翌日武藏國に打越え給へば、紀五郎左衞門、足利殿の息千壽王殿を大將として、一百餘騎にて馳せ加はる。其外近國の勢相集り、山野一片に陣を取る。相模入道大に驚き、金澤武藏守貞將・櫻田治部大輔貞國・長崎次郎高重以下を差向けらる。櫻田・長崎以下、小手差原・久米川兩所の合戰に、悉く打負けて、分倍を指して引

北條氏滅ぶ

退く。高時重ねて舎弟四郎左近大夫入道惠性に、各勢を相添へ差向けらる。敗軍の勢、荒手の加はりしに力を得て、聊勝利を得ると雖、終に合戰利なうして、鎌倉に引退く。新田方は、鎌倉勢馳せ加はつて、龍の雲を得、虎の山に凭る勢をなし、巨福呂坂・假粧坂・極樂等の切通より、三手に分れて攻寄せらる。鎌倉にも三方に分れて、拒ぎ戰ふと雖、天運既に盡きけるにや、所々の合戰に悉く利を失ふ。官軍は氣に乘つて、稻瀨川の邊に火をかけて、濱面より鎌倉に亂れ入る。折節魔風頻に吹きて、鎌倉中殘る所なく焦土となり、相模入道の屋形にも火かゝりければ、東南の方、東勝寺葛西が谷に引籠り給ひ、同廿二日、高時を始め一族二百八十三人、悉く自害して、平氏九代の繁榮一時に滅亡す。哀れなりし事共なり。其後足利尊氏、後醍醐天皇に奏し、高時の亡魂を弔はんが爲、彼舊宅に東勝寺を移して、北條一家の骸骨を改め葬り、寶戒寺を建立し、圓觀僧正（五代國師と號す）を開山とせらる。第二世慈源和尚（普川國師と號す）と申せしは、尊氏の次男にして坐しけり。即高時の靈を德宗權現と崇め、祉を建てゝ、當寺の鎮守とぞなし給ひける。

主上御還幸花洛ニ幷定平・正成南都發向の事

後醍醐天皇御還幸

兩六波羅既に敗亡の旨、京都の早馬、船上に下着しければ、頓て御還幸あるべしとて、同じき晦日、攝州兵庫に着かせ給ふ所に、翌日新田義貞の早馬參着して、北條一家滅亡の由を奏せられければ、主上叡感斜ならず、其翌六月二日、兵庫を御立あつて、重ねて寶祚瑤輿を廻らさるゝ程に、同じき六日、二條富小路の內裏に還幸あつて、重ねて寶祚を踐ませ給ひけるこそ目出たけれ。さる程に千劔破の城に向ひ居たりし關東勢は、漸々南都に落集り、鎌倉へ引返さんと擬しけるが、道々は、皆官軍に屬すべければ、長途如何あらんと思ひ煩ひ居る所に、鎌倉滅亡の由聞えしかば、今は何國へか落行くべき。殘り留まる勢五萬餘騎、心を一にして帝都へ攻入り、潔く討死して、名を後代に殘さんとぞ催しける。此事叡聞に達しければ、頓て楠正成を召され、此事如何あらんと勅諚ある。正成謹んで承り、北條が殘黨、恐るゝに足らずと申ながら、窮鼠却て猫を咬み、鬪雀人を辭せざるの類にてぞ候はん。今迄は何とぞ身を全うして、

關東へ落下らんと存候べきか。然れども北條既に滅亡の上は、迚も遁れぬ所と存じ、死を一途に思ひ定め候べし。中にも宇都宮、勇猛の者にて候へば、最後の合戰と、存じ詰めて戰ひ候はんには、容易に誅伐を加へ難く候はん。士卒を多く討たせ候ては、勝ちても良將とは申難く候。戰はずして勝つと申す事の候へば、謀を以て御退治候ひて、宜しかるべく候と申す。合戰の道は、勇士に勝ることあるまじければ、汝計らひ申すべしとなり。正成承り、然らば追手の大將を一人、差向けられ候べし。正成は搦手より罷向ひ、官軍の威を顯はし候べし。其後追手の大將より、先づ宇都宮が方へ綸旨をなし下され、汝が勇敢豫て叡聞に達す。早く官軍に降るべし。本領安堵相違あるべからずと敕諚あつて、彼を召され候はゞ、降參仕り候べし。然れども何事も、正成に負けじと存ずる者にて候へば、其取扱ひ候はゞ、必定我を立てて、敕諚に應ずまじきにて候。其餘も降參するに於ては、罪科を恩免あり。忠あらば、賞祿を宛行はるべしと、御下知を下され候べし。宇都宮降參を仕りなば、諸勢力を落し、十方に逃散り候はんに、況してや御免の敕諚候上は、我も〱と降人に出

で候べし。能く計り課せ候はゞ、大佛二階堂以下の諸將をも、悉く生捕り候はんと敕答申さるゝ。主上叡感淺からず、正成が術に勝ることあるべからずとて、中院中將定平を追手の大將として、五萬餘騎にて、大和路より差向けられ、正成は搦手の大將として、河内路より差向けさせ給ひけり。斯る所に同じき七日、菊地小貳大友が方より早馬到來して、九州の探題英時を退治仕候と奏聞す。今四海一同に符を合せたるが如く、逆徒悉く滅亡して、王化に復しぬるこそ目出たけれ。

正成謀略の事

さる程に追手搦手の勢七萬餘騎、南都に攻寄する所に、宇都宮・紀清兩黨、七百餘騎にて般若寺の一の木戸を固めたりけるを、定平樣々賺して、綸旨を遣はし招かれければ、公綱、一族郎等共を集め、此事如何あらんと評議せらる。時に芳賀淸太郎貞邦、諸人の意見をも待たず、進み出でて申しけるは、此度所々の合戰悉く利を失ひ、鎌倉殿滅亡に及び給ひしこと、是皆不義の行跡あつて、天命に逆ひしに依つてなり。

宇都宮公綱降る

然れども君臣たるの道を盡し、一命を戰場に抛ち、忠功の譽を天下に顯はし給ひぬれば、武恩は、形の如く報じ盡し給へり。然る上は敕命に從ひ、官軍に屬せさせ給ひ、御子孫の後榮を御議り候へと、理を正していひければ、公綱此議に同じ、頓て降人にぞ出でたりける。然れども猶も殘る處の東國勢三千餘騎、東大寺に楯籠り、一支へせんと待ちたる體、行末の事はいさ知らず、先づ勇々しくこそ見えたりける。斯る所に楠正成、追手の大將羽林定平の陣所に行き、東大寺に楯籠る所の三千餘騎は、必死の敵にて候へば、攻むるに容易(たやす)からずして、士卒多く損じ候はん。勝は良將の好む所にて候へば、今一術(ひとてだて)仕り候はんとてぞ歸られける。されば二階堂出羽入道道蘊は、古、正成と鎌倉にて學友の交り深かりければ、美酒三箇佳肴七種を送り、正成討手に罷向ひしこと、私の遺恨更になし。敕命は辭し難きに依つて、罷向ひ候へども、古の好(よしみ)忘れ難く候へば、寸志を述ぶるにて候。鎌倉も、新田義貞に攻破られ、相模入道殿を始め、御一門悉く御生害候なり。君にも入道は、朝憲を蔑如にし、萬民を惱亂せさせしに依つて、天誅を巡らせし所なり。彼が一族に於て、何の罪かあると、

忝くも敕諚ありし由、禪林寺の頭中將殿忠顯又千種と稱すの物語にて候ひし。又洞院殿を、敕諚にてあるぞ。討手に罷向ひたりとて、荒く沙汰すべからずと、御內意を承り候程に、合戰も斯く相延べ候なり。鎌倉殿既に滅亡の上は、誰が爲にか忠戰を勵まれ候べき。早く中院殿へ仰入れられ、官軍に屬せられ候へかし。大佛右馬助殿高眞と號す太平記に貞直に作るは非なり。大佛貞直は鎌倉にて戰死す。大なる誤なり近日降人として出でらるべき旨、事既に定まり候とて、一封の狀を添へてぞ送られける。出羽入道、此上は官軍に降り、妻子所從等が一命を助けばやと思ひ、降人に罷出づべき旨、自筆の返狀を遣はしける。正成大に悅び、又大佛右馬助高直の方へも、右の通をいひ遣し、二階堂殿も、斯の如く降人に出でらるべきに極り候とて、入道の返狀を遣されける。高直之を見給ひ、渡りに舟を得たる心地して、是も降人に出づべき由、返狀をぞ送られける。正成、扨は謀なりぬと悅んで、阿曾彈正小弼時治以下の諸將へも、又右の通りをいひ遣はし、高直・道蘊の返簡を送りければ、時治以下の人々大に驚き、急ぎ會合して見らるれば、紛れべくもなく道蘊・高直の自筆なり。實にも此程兩人、共に病氣と稱して、評定の場へも出合

北條の遺臣悉く降る

はれざるは、斯る企ある故なり。我々とても忠義致せり盡せり。今は誰人の爲にか身を亡すべき。倡や降人に出でて、一所懸命の地をも賜はらんは如何にといへば、臆病神の付きたる人々、皆此議に同じけり。其より城八郎、兩人の方に行向ひ、忍びやかに語りければ、兩人も大に悦び、諸將打寄り評議一決して、道蘊・時治の方より、羽林定平の方へ降參の由を乞ふ。正成微妙の謀を以て、斯くまで方便り課せたる術の程こそ恐しけれ。

南都逆徒降參幷本間・澁谷謀逆附降人等誅伐の事

斯くて東大寺にある所の東國勢、降人に出づべきに事極まりしかば、大佛右馬助高直・阿曾彈正小弼時治（按ずるに、太平記に、阿曾時治は、鎌倉に於て、高時と同じく自害すと記し、又此時降人に出づる諸將の內に載せたり。是大に前後齟齬せる者なり。此時三人の時治あり。鎌倉にて自殺せるは、武藏左近少監時治にして、今降人に出づるは、阿曾時治なり。諸抄を按ずるに、或は時治に作り又治時に作る）・佐介安藝守時俊・左京亮貞俊以下、北條家宗徒の一族十三人、並に長崎四郎左衞門尉高貞・二階堂出羽入道道蘊・長井壹岐四郎・長沼太郎を始めとして、北條恩顧の輩五十四人、皆般若寺にて出家を遂

げ、律僧の形になり、三衣一鉢の姿に窶れ、しほ〳〵として降人に出でたりけるが、定平之を請取り、悉く高手小手に禁め、傳馬に縛り付けて、白晝に京都に歸陣せらる。見苦しかりし事共なり。頓て法名を改めて、諸人の大名に分預けらる。出羽入道計りは、廣學の才ある由、其聞えありければ、一所懸命の地をぞ賜はりける。然るに翌年建武元年三月、本間・澁谷の者共、高時の一族を取立てゝ、大將とし、謀叛を起して、鎌倉へ押寄する。時に澁川刑部大輔義季、極樂寺の前に馳せ向つて、數刻挑み戰ふ所に、凶徒等悉く討負けて、十方に敗走せり。此の事京都に注進せしかば、去年降參せし千劒破の寄手共、如何なる隱謀をや企つらんとて、七月九日、大佛右馬助高直・阿曾彈正小弼時治・佐介安藝守時俊・長崎・長井以下宗徒の輩十五人、忍びやかに阿彌陀峯にて誅せられぬ。二階堂も亦、如何なる不思議をか企つらんとて、其後是も誅せられけり。此君重祚の後、諸事の政をも、未だ捗々しく行はれざるに、刑罰を專とせられんこと、仁政にあらずなんどと、京童は私語く(さゝや)も多かりけり。然れどども此君、重祚なされしにあらず。其故は、伯州船上より還幸の時、先づ東寺へ入ら

せ給ひ、二條關白道平公を召され、此度內裏へ入らせ給ふこと、重祚などにてあるべけれども、神靈を御身に添へられ、隱岐・伯耆へも還幸ありたれば、只遠き行幸の還御の式にてあるべけれと、定められたれば、更に重祚ありしにてなかりしなり。其頃左大臣道平公の關白を止められ、氏長者になされ、右大臣經平公と、萬機の政を補佐せらる。是は偏に延喜の佳例を追はせ給ひしとぞ聞えし。

諸國逆徒蜂起并顯寶僧正叛逆の事

爰に大塔宮護良親王は、和州志貴に御座ありけるが、六月十七日に志貴を御立あつて、同じき廿三日御入洛あり。頓て左近大夫入道惠性の一跡を進ぜらる。高時の德宗領分を、內裏の供御所料と定め、大佛陸奧守以下平氏一族の所領、關東權勢の輩の釆地をば、准后を始め、御寵愛の宮女・郢曲・妓女・伎藝の者共、又は官僧などに、一跡二跡を合せて賜はりしかば、軍勢の恩賞に行はるべき地はなかりけり。是に依つて諸士恨み歎き、國費え民苦む所に、翌年建武元年の春より、大內裏造營の御沙汰あつ

て、彌天下貧國となれり。斯る所に筑紫には、前亡の餘類規矩兵庫助時秋・同掃頭助高政・絲田左近大夫將監貞義、殘黨等を集めて、帆柱の城に楯籠る。伊豫國には、赤橋駿河守宗時が一子駿河太郎重時、立烏帽子峯に城郭を構へ、邊境を侵し掠む。時に大佛陸奥守貞直の家子に、大佛藤太光正といふ者、未だ身を全うして隱れ居しが、時既に至れりと悅んで、佐々目顯寶僧正とて、高時の一族の南都に居られけるを大將に仰ぎて、樣々計略を巡らしける。顯寶頓て還俗して、相模左衞門時光と改名し、便宜の味方を語らひければ、紀州槇野の庄司・和州の筒井淨春・寒江民部丞貞忠・芳野禪師坊清秀を始め、是に與する者十三人、關東の殘黨相集つて、和州邊栗に旗を擧ぐる所に、隣國の勢相加はつて、一萬八千餘騎にぞ及びける。正成は其頃は、在京して居られけるが、此事を聞き、二條左府道平公の方に參り、朝敵の殘黨等、所々に蜂起仕候へば、又由々しき御大事にて候べし。然れば和州の朝敵に於ては、某罷向つて退治仕り候はんと申さるれば、左府、如何樣奏聞を經てこそと宣ひながら、兎角して日數を送られける所に、相模左衞門時光、和州邊栗より打つて出で、河内の飯

盛山に取登り、近邊を亂暴し、大和・河内の兩國に威を震ひけり。

正成被レ遣二恩地滿一飯盛一事

さる程に天下靜謐の爲、竹内慈嚴僧正に敕命あつて、南殿に壇を構へ、國家安鎭の法を行はせ給ふ。此時武家の輩、四門の警固を奉る。楠も其役人に相定めらる。正成承り、此度の御所の役人は、餘人に仰付け候へかし。朝敵近國に城を築き、武威を振ひ候なる。幸に正成存知の國にて候へば、罷下つて退治仕度候。某とても祈の役人、正成に仰付けられ候上は、和州の逆徒誅伐のこと、然るべき仁に仰付けられ候へかしと申されしかども、近日大法を行はるゝの上は、御祈過ぎての後、早々發向仕るべしと仰下されしかば、正成も、是非なくして止みにけり。是に依つて正成思慮を巡らされ、長臣恩地左近太郎を以て、飯盛へいひ送られけるは、此度兵を集め萬民を惱さるゝ段、甚逆義の至りなりとは申し乍ら、鎌倉殿既に滅亡し給ひぬれば、忠貞を忘れ給はずして、厚恩を報ぜられんが爲に、御旗を上げらるゝの條、神妙

に存じ候なり。定めて討手には、正成罷向ひ候はんずれば、合戰は天運に任せて、一時に決し候はん。然るに兵糧に事を寄せ、民を苦めらるゝこと心得難く候。民には何の咎の候や。只穩便の御沙汰あつて然るべく候。何にても相應の御用に於ては、正成承り候べしとて、兵糧米百石・樽五十荷・肴十種をぞ送られける。其上我郎等共の相知りたる者共には、皆酒肴小袖なんどをぞ送られける。逆徒之を見て、又例の背の脫けたる古狸が、如何なる珍らしき謀をか仕出すらん。正成と旋風とには、遇はざるこそよけれ。使者の男奴が鼻を劓げよ。首を刎ねて獄門に梟けんものをなんぞと罵りけれども、大將時光を始め、槇野庄司・岩田源次郎以下の宗徒の輩、いやいや此正成は、謀略に於ては神の如くなれども、仁義の勇士にして、賢人の譽あり。其上彼は民を憐むこと、親の子を思ふが如し。僞をいふ男にあらず。察するに正成、一度公家に賴まれて金剛に楯籠り、莫大の軍忠を盡しぬれども、さまで恩賞の沙汰もなければ、定めて君を恨み奉るにてぞあるらんと、又返札を送れり。扨こそ正成の分國をば、敢て侵すことなかりけり。

正成和州發向附時光對二面恩地一井田氣多和の事

斯くて鳳闕の祕法遂に行はれしかば、畿内の逆徒の討手として、正成敕命を奉り、選兵五百餘騎を引率し、河内の國に發向せられけるが、謀は、子房をも欺く程の良將なれば、恩地左近太郎滿一を使にて、此度正成敕命を奉り、討手に罷向ひ候なり。然れども咎なき民を苦めんこと、歎かはしく候なり。願はくは降を乞うて、京都へ御出候へかし。御所領の地に於ては、正成命に替へても、申請けて進じ候はん。先非を悔えて、敕命に從はれんに、何の憚か候べき。過つて改めざるを、過とは申候へ。能々御思慮候べしとて、小袖二十領・良劍一振送られけり。時光、恩地に對面し、楠殿の御懇志の段、返々も祝着の至りに候。然れども某事は、既に僧正迄經登りて、專ら衆生の濟度をこそ、心にかけて存ずべき身の、古の俗になり返り、三衣を脫ぎて堅甲に變へ、念珠を大地に拋つて、劍戟を手に提ぐ。是れ少しも名聞利慾の爲に候はず。相模入道殿の厚恩をも報じ、先祖北條代々の靈魂を安んぜんが爲に、生

きながら大魔王となつて、國民を惱亂す。然る上は楠殿に對して、私の遺恨なしといへども、勝敗を天に任せて、一戰の中に決し候べしと、返事してぞ返しける。滿一は此使の往返の內、小高き前に走りて、城中の陣屋を算ふるに、三千餘もやあるらんと覺えたれば、勢の程は、一萬二三千もあるらんと積りけり。斯くて恩地は飯盛の城を出で、卅町計りも歸りける所に、向より田氣多和次郎兵衞尉、飯盛の城に歸らんとて來りけるが、恩地とは古より相知りたる中なりければ、珍らしや恩地殿と詞をかくる。其時互に馬より下りて、古今の物語しけるが、扨も城中の御勢の、思ひしよりは多く候。某は三萬餘と積りて候といふ。田氣多和悅べる氣色にて、さん候、軍勢四萬餘騎とこそ承り候へ。楠殿、明日にもあれ押寄せ給ひなば、天地も反覆する計の大合戰ありぬべしと存候。恩地殿には御存じ候はずや。九州には規矩兵庫助時秋・同掃頭助高政・絲田左近大夫將監貞義、近國の味方を相語らふに、弓削左兵衞尉清常・宗藤三盛芳・片岩金吾淨古・山鹿筑前守政貞・原源吾・惟任一郎以下、無二の武家方五萬餘騎、筑前の國山鹿葦屋より打つて出で、帆柱山に楯籠り、九州を攻從

へ、都へ上らんと相催し候なり。加之伊豫國には、赤橋太郎重時、立烏帽子峯に取登り、既に多勢になりし故、數百艘の兵船を揃へ、是も上洛せんと相企み候なる。然らば天下、武家の掌握に落つることもや候らん。若恩地殿も、武家へ降らんと思召さば、某如何樣とも取持ち候はんといひければ、恩地、品に依りて降人に出で候はん。其時は、兵衞殿の御祕計を賴み存ずるなりと、半時計りが程、物語りしてぞ別れける。

正成邊栗發向の事

斯くて恩地左近太郎滿一は千劒破に歸り、右の次第を委しく語り、さるにても田氣多和は、敵方にては一方の將にて候へ共、心の淺き男にて候。敵は一萬五千餘と積り乍ら、三萬餘もやあるらんと申せしに、田氣多和、某が一言に乘せられ候ひて、四萬五千餘騎ありと申候。さばかり勢を見損ずべきや。一萬餘の勢を、三萬餘もやと申しつるを誠ぞと思ひ、悅べる色の候は、愚なる故にて候なり。然れば田氣多和が大

正成、邊栗城に向ふ

將にて向ひ候はんずる所へ押懸けて、一術（てだて）仕り候はゞ、勝利立所に候はん。其上城の構、無下に淺間にして、陣の取りやう疎（まばら）なれば、忍びを入るゝにも、又易く覺え候とぞ申しける。　其後正成、古市九郎を招き、邊栗の城の有樣を問ひ給へば、さん候、邊栗は、高安四郎三郎・十市太郎兩人相守り候が、軍勢五千餘もや候らんとて、城中の樣子、委細にぞ語りける。　正成は、昨日千劒破に着かれけるが、此由を聞き、其夜戌の刻に及んで、諸勢に觸れ知らしめ、子の上刻に打立たる。　先陣は舍弟正氏にて、諸卒、正氏の旗の赴くに從ふべしと下知せらる。　正氏其勢八百餘騎、中軍は正成六百餘騎、後陣は和田正遠八百餘騎、都合其勢二千三百餘騎とぞ聞えし。　然る所に志貴・恩地以下馳來り、何故に斯く小勢にては向はせ給ふらんといふに、御邊達を始め、矢尾別當以下の宗徒に、正成が手勢を加へて、六千餘騎はあるべければ、跡に於ては心安しとて打立ち給ふ。　此は四月廿九日、善惡（あやめ）も知らぬ暗き夜なれば、案内者十人づつ三軍に分ち置き、二人は先に進み、三人の道の曲れる難所にて、立留つて勢を通す。　其餘の五人は、前後を馳巡つて士卒を下知す。　相印は赤布を八寸に切つて、

鎧の綿嚙につけ、誰といはゞ、勇むと答へよと相詞を定め、一備に笄一本づつ用意させさせ、道の分れて知れざる所にて、士卒の通りたる方に立置くべしと下知せらる。是は後れたる勢に、道を知らせんが爲なりけり。其上跡に下りたる勢の、若も行くべき道の知れずんば、人馬の足跡を指南にせよ。其も兩方の道に足跡ありて、何れをそれとも知れざるもあらん。古き足跡は土堅まれり、新しき足跡は土柔なり。今宵は雨降りぬれば、路邊の草葉を嘗めて見よ。士卒の通りたる路には、人馬の蹴上掛りたるあるべし。是も雙方の道の草葉に蹴上あらば、何れとも知れ難からん。古き蹴上は葉にひつくべし。今の蹴上は露に浮べり。是を以て知るべし。又深谷深野にては、太刀を鞘ながら擧げて、一町計兩方へ行き見るべし。蜘蛛の糸の懸りたる方は、あらぬ道ぞと心得べしと、細々と下知をなし、態と松明を燈させずして、其夜の寅の下刻、邊栗にぞ着しける。

邊栗合戰附落城の事

正成、邊栗城を陷る

斯くて楠正氏は、郎等の中忍びに馴れたる者共を、百餘人勝り出し、木子兵太氏鎮に相添へて、敵城にぞ遣はしける。敵の要害淺間なれば、百餘人の者共、安々と忍び入る。大將正氏は、先陣より六町を退きて備へ、其より二町を退きて、後陣の正遠備へたり。正成諸卒に下知して、松明を三把宛持たせ、輕卒八十餘人、和田が陣より後の山へ差遣さる。此者共、後の山々峯々に登つて、茂りたる木陰より、松明を一同にぱつと燈す。其光一尺に輝きて、宛も白晝の如くなり。時に大將の本陣より、太鼓を打出す。之を聞きて先陣の勢、一聲咄と鬨を作り、喚き叫んで攻懸る。城中には思寄なきことなれば、こは何事ぞや。楠は未だ都にありと聞きつるものをとて、太刀よ物具よと犇く程に、松明に火を燈す隙もなく、目刺すも知らぬ闇夜に、士卒等東西へと走り廻る程に、或は鑓長刀を倒につきて、己れが足を突通すもあり。又は傍輩と行當り踏倒されて、摑合ひ敲き合ふもあり。何と分けたる方もなく、只周章ふためく所に、正氏の八百餘騎、一同に乘入りたり。城中に入置かれたる百餘人の忍びの者共、此彼に火をかけて、五騎十騎づつ、走り巡つて切り通れば、すは城

中に返忠の者こそあれと、狼狽へ廻る所を、追懸け追詰め討取りけり。城兵今は過半討たれ、我先きに落行くを、正成、先後の備を亂して追はしめ、城をば田原・勝田等に守らせ、我身は、右の方なる峯に登つて備へらる。追擊の軍勢共も、豫て下知せし如く、一里計にして引返し、陣を堅うし備へたり。斯る所へ豫て正成の下知に依つて、家嫡多門丸、生年八歲なりけるを大將にて、其勢三千餘騎、寅の刻に千劒破を立ち、六里の道を押して、辰の上刻、邊栗に着き、先陣は志貴右衛門尉・橋本小辨六百餘騎、中軍は多聞丸一千餘騎、後軍は牲川・西川六百餘騎にて、段々にて馳せ來る。此多聞丸は、後帶刀正行とて、父に劣らざる良將なり。扨こそ未だ八歲なりと雖、鎧一縮して、馬上にて來られければ、正成出向ひ大に悅び、多聞丸の手を取つて、いしくも早く來れるものかな。鎧つきの能さよ。馬に乘振の能さよ。子ながらも、天晴君の御用に立つべき人ぞや。豫て此勢に、後より來れと言付けしことは、敵多勢なれば、若今日歸り來つて、城を攻返さんとすることもあらんか。始の勢は終夜遠路を越え、而も戰ひ疲れたる勢なれば、戰ひ危しと思ひて、斯くは計りしなりとて、悅の

涙を流し給ひける。其日は、人馬の足を休められける所に、國中の勢馳せ集つて、一萬餘騎に及びければ、翌日其勢を從へ、方々に押寄するに、何國にか落行きけん、敵一人もなかりしかば、所々の城々に勢を殘し置きて、河州も亦心元なしとて、千劒破へぞ歸陣し給ひける。

南朝太平記卷第七終

南朝太平記巻第八

飯盛合戰の事

正成、飯盛城を攻む

さる程に楠正成は、建武元年五月朔日、千劔破に歸陣し給ふ所に、又飯盛の逆徒等、三荷・新床に打出でて引入れたり。正成此告を聞き、翌二日千劔破を打立ち、六千餘騎を率し、飯盛に馳向はる。先陣既に久寶寺に着けば、正成は、伯々部の城に入り給ふ。其時一の術を巡らし、和田正遠・志貴右衞門・楢原三郎・石澤十郎以下三千餘騎を、飯盛の城邊に伏せ置き、我身は逞兵三千餘騎にて、敎興寺に備へ、野伏五六千人に士卒二百五十人相添へ、備を三つに分け、手々に松明を持たせ、城より二里此方にて、陣を取る體をぞ見せたりける。是は城將時光、敵は小勢なりと思ひ、陣を取敷かせじと打出んか、其時正成城中に攻入りて、一戰に城を取らんとの巧なり。案の如

く城守左衛門尉時光、寄手の松明を見て、早楠は寄せたるぞ。陣を取敷かぬ先に、打散らせよと下知しけるを、筒井淨春法師進み出で、敵夜中に進んで兵を動す時、其軍立をも勘へず、味方懸り向ふ時は、必ず敵の爲に計らるゝものにて候ぞと、大に制し諫めけれども、河上兵內・禪師房淸秀之を用ひず。軍勢八千餘騎を、用心の爲に城中に殘置き、我々五千餘騎にて打て出で、正成を打散らして捨て候はんといへば、時光之に同じ、河上兵內・芳野禪師房・長崎七郞をぞ差向けゝる。時光も、夜明けなば城を拂つて打出でんと、堅固に守つて控へたり。豫て正成の附置かれたる忍びの者共、打出る敵に連れて逃げ歸り、右の次第を告げければ、正成聞き給ひ、然らば和田は合戰をすべからず。味方の野伏を敵に追はせよ。松明の逃げ散るを見て、城兵悉く打出づべし。其時合戰を始むべしと、軍使を正遠の陣に遣さる。軍使未だ馳着かざるに、早正遠の勢起立ち、敵兵と相戰ふ。正成之を見給ひ、今は方便相違せり。城兵等殘らず討つて出でなば、忽ち正遠討たるべし。重ねて敵を落さんに、何條事のあるべきぞ。此陣より鬨を發すべしと下知せらるれば、三千餘騎の軍勢共、一同に咄と

鬨を作る。城中には之に驚き、上を下へと騒動す。正成態と城をば攻めず、筋違に押出し、野伏共が備へし傍に陣し、又正遠の陣に使を馳せ、相圖既に相違せり。必ず長追をすべからず。夜明けざる以前、我陣に來るべしと下知し給ひ、佐田の宮を、後に當てヽ備へらるれば、夜はほのぐヽと明けにけり。正遠は少々敵を追討にして、頓て追捨て、正成の陣前に馳せ來る。城中には、敵より寄れど、勢を配つて待居たりしが、東雲明行くに見れば、敵兵は一人もなし。合戰には負けぬ。又正成といふ古狐に化されけりと悔え怒れり。恩地、正成の前に來り、本陣より鬨を揚げ給はずんば、城兵悉く打出で候はん。然らば正遠は討たれ給ひなんと存候といふ。正成聞き給ひ、吾陣に鬨を發せしは、敵を出すまじきが爲なり。此城に向つて長陣せば、諸國の敵蜂起するとか、又飯盛は堅城なるとかいはゞ、正遠を見捨てヽも、城を攻落すべけれども、落すに容易すかるべければ、和田討たせてはと思ひ、城兵等に怖れさせんが爲、鬨の聲を揚げしなり。其時一同に城中に攻入らば、城は落すべかりつれども、城中にも武功の者共多ければ、味方多く討たれんと思ひ、扨止めしなりとぞ

語られける。

矢尾顯幸攻二飯盛城一幷高畠才五詐返忠の事

斯くて正成は、如何にもして敵を方便り出さんと、色々に術を巡らされしかども、以前に懲りて、敵は曾て出合はず。味方小勢なれば、城を攻むることも叶ひ難し。是に依つて飯盛山の麓の川より、向ふに六十間が程逆茂木を引き、輕卒百三十人を出し置き、敵兵急に寄せ來らば、逆茂木の陰に又河中に蒺藜をまきて、引退けよと約せられしかども、敵敢て出合はず。然る所に矢尾別當顯幸、正成の前に來り、奇妙の忍びを以て敵の樣を窺ひ知り、一術なされ候へかしとて、己が手の忍びの者五人、正成の手の忍びの者五人を、敵城に差遣さる。城兵等之を見付け、彼者共を八人迄生捕り、耳鼻を殺ぎ、髮を剃落してぞ追返しける。其上却つて城中より忍びを出し、矢尾が陣に火を放つて刧し、逆茂木の陰なる足輕共を、廿七人討取りけり。顯幸大に怒り、此小城一つを攻落さゞるこそ遺恨に候へ。諸勢を以て、一息攻に攻めて

御覧候へといふ。正成聞き給ひ、別當の詞、餘りに荒氣に覺ゆるなり。某一謀を以て、廿日が中には、城を攻取りなんものをと宣へば、顯幸いや〳〵餘りに敵をふかみさせ給ふな。別當あてゝ見候はんとて、頓て飯盛に押出づる。槇野庄司・岩田源次郎等、枝城より打て出で、散々に戰ひければ、矢尾が勢多く討たれて、戰ひ難儀なりける所に、正成士卒を從へ押寄せ給ひ、早く引取れよとて、入れ替つて敵を請取り、少々合戰して、敵を追返してぞ引取られける。其後正成顯幸を招き、敵將時光が始終の合戰の體を見るに、是れ良將にして、其働き、節に當り度に當れり。惜い哉正成の爲に頭を梟されんことを。我れ敵を謀らんこと、廿日を出づべからずとて、高畠才五に謀を委しくいひ含めらる。是に依つて才五城中に内通し、正成に恨みあれば、返忠仕らんといひ送りしかども、始の程は誠にもせざりけるが、寄手より様々の術をする事共、彼が方より日々に告げ知らする如くなれば、時光も、扨は詐ならずと悦び、諸士を集めて軍議しけるは、今既に城中兵糧盡きぬれば、遂に籠城叶ふべからず。幸哉高畠と心を合せ、味方の勢を忍ばせ置き、未明に城より切つて出で、敵

を遠く追拂はんは如何にといへば、皆此議尤に候と同じ、湯本・湯上に二百人の士卒を相添へ、高畠が陣へぞ忍ばせ入れにける。才五此由を大將に告げければ、正成大に悦び、早瀨吉太・牲川三郎・守屋平太に一千七百餘騎を相添へ、飯盛の山下に伏せ置き、高畠が陣へは、日田左京亮に、五百餘騎を相添へ差遣さる。日田才五が陣所に行向ひ、汝敵に內通するの由、慥に告知らする者あり。其故に城より却つて押寄すると見えたり。有のまゝに白狀せよといふ。高畠聞いて、某今何の恨あつて、敵に返忠仕らん。是皆讒者の申す所にて候と、樣々と陳じければ、正成扨は心安し。軍には勝ちたるぞとて、敵兵に向はるゝ。城將左衞門尉時光は、五千餘騎にて城に殘り留り、槇野次郎・岩田源次郎・芳野禪師房以下八千餘騎を出しければ、此勢、寄手と追つ返しつ相戰ふ。旣に合戰半の所、豫て城中に相圖せしことなれば、才五、己が陣に火を放つ。湯本・湯上が二百餘人の者共、一同に鬨を作り、切り廻らんとする所に、正成の本陣に殘し置かれたる軍勢共、高畠が役所をひた〱と取圍む。高畠が郎等共之を見て、こは何事ぞや。累代の君に背き、朝敵に與し給ふべき事やある。

才五殿は一代、御家は末代なればとて、高畠を檎にして、正成の勢に加はつて、二百餘の敵兵を、追詰め〳〵討取りける。斯くとも知らず槇野・岩田等、相圖の煙を見て氣に乘り、勇んで相戰ふ。時に正成士卒に下知し、鏃を揃へて散々に射させられければ、城兵等辟易して見ゆる所に、麓に伏せたる早瀨・牲川千七百餘騎、同音に鬨を咄と作り、面も振らず打つて懸る。槇野・岩田以下、前後の敵に切立てられ、右往左往に敗北す。岩田源次郎も、痛手三ヶ所負ひて、心ならず自害せり。芳野禪師房淸秀も、旣に討たれぬべく見えける所に、同宿の全秀・存秀等、防ぎ留つて討死する間に、漸々と逃延びて、辛き命を助かりけり。時光は城に殘つてありけるが、士卒下知して固く守り、靜まり返つて居たりければ、正成士卒を制し、城をば必ず攻むべからず。軍は是迄ぞとて、勢を引取り給ひけり。是等皆高畠と、心を合せての謀なりと雖、諸人に之を知らせては、後度の謀なし難きものぞとて、近臣等にも深く隱し、態と高畠を千劔破に歸し、蟄居せさせて置かれければ、諸人誠の謀叛人ぞと思ひしに、飯盛落城の後召出し、增秩を宛行はれければ、扨は又謀にてありけりと、皆人々感稱しぬ。

飯盛落城の事

斯くて日數を經ると雖、時光良將なれば、敢て寄手の謀に乘せられず。固く守つて居たりければ、正成も、種々謀を巡らされける所に、或夜風烈しきに、志貴右衞門が陣より、失火燃出で、焰天を焦せしかども、豫ての法令正しければ、志貴が一手の勢は、火を消さんと騷動す。其餘の陣々は、靜まり返つて大將の下知を待つ。然る所に正成諸陣に觸れて、勢を押出し給へば、士卒等も、扨は大將の謀にやと思ひけり。飯盛の城中には、又楠が如何なる謀をかなしぬらん。愈用心せよといふ所に、巽より風烈しく吹きて、正成の本陣に火燃え付く。大將少しも驚かず、士卒の騷がざるこそ神妙なれ。雜具に心付くべからず。其料をば與へんずるぞと下知し、火を防がせんが爲に、士卒一隊を分け遣さる。城兵等も、今は大將の陣に火かゝりぬる上は、謀にはあらず。此弊に乘つて切散らせと、我先にと打出づる。槇野庄司、思慮ある者なりければ、大に制し止めけり。時光も是を可なりとして、樣々と制すれども、士

正成、飯盛城を陷る

卒等耳にも聞入れず、後れじと出でければ、大將時光も、洪水を手にて防ぐが如く、如何ともすべき術なく、猶も制し留めんと、打連れてぞ出でたりける。槇野大に怒り、こは何事ぞや。大將を討たせては叶ふまじとて、同じく續き出でければ、一萬三千餘騎の軍勢共、悉く城を拂つて出でにけり。案に相違して、正成の先陣恩地左近太郎滿一、陣を二つに分けて、一同に喚いて懸る。時に正成の本陣より、太鼓を打出す。是に氣を得て恩地が勢、太山も崩れよと、無二無三に切立つれば、城兵等途を失ひ、一同に咄と逃行くを、恩地・先の一軍を以て追はしめ、己は二陣にあつて、本陣に軍使を馳せ、城を攻取り候はんといへば、正成尤なりとて、舍弟正氏・和田正遠が備を亂し、進んで、逃ぐる敵を追はしめらる。滿一は、逞兵四百五十騎を前後に進ませ、逃ぐる敵をば餘所に見捨て、城の追手へ攻登り、士卒等必ず高名せんとて、外城にて敵を討つべからず。能き敵は城中にこそあなれ。早く切入れよと下知すれば、士卒等、我劣らじと城中に込入るを、頓て火をかけ燒上ぐる。正成は城に足をためず、右の方なる山の尾崎に陣せらる。北條左衞門時光・槇野庄司・禪師房清秀以下、

討取る首級四百餘級とぞ聞えし。猶も餘黨等を尋ね捜さんが爲に、舍弟正氏・和田正遠・恩地滿一等を飯盛に殘し置き、翌日上洛し給ひけり。

小車妻新三郎死罪并護良親王配流の事

此の時陣中に於て、和田正遠の舍弟小車妻新三郎を、死罪に行はれしことあり。其故を尋ぬるに、此新三郎は、常に美女を愛し酒を好みけるが、正成と一族たるを以て、其權に誇り、此陣中に、攝州尼崎より遊女を招き、三日まで酒宴し戲れけるを、正成傳へ聞き大に歎き、和泉守正遠の陣へ使を遣し、此事知り給ひたりや。足下の舍弟など、斯く奢侈の行跡あるは、是只正成が武運傾きたる徵なり。譬ひ正成が子なりとも、陣中の制法を破りなば、何ぞ罪過遁るべき。如何思はれ候ぞといひ送られければ、正遠大に驚き、大將の本陣に來り、正遠が努々存ぜざる所に候。法に任せて、罪過に御行ひ下さるべしと申されければ、正成神妙なりとて、小車妻が所領を沒收せられけり。正遠涙を一目に浮め、某慾に御一門の數に連なりながら、斯る存外

護良親王鎌倉に流され給ふ

の行跡恥入りて候なり。國の爲に、新しきを存じ候はんやとて、正成に申受け、死罪に行はれければ、上下の諸士大に恐れて、敢て制法を犯すことなかりけり。さる程に立烏帽子の敵は、河野の一族に攻破られ、規矩・絲田等は、小貳大友に打滅され、東西悉く靜謐に及びければ、國々の諸士、我も〳〵と都に馳上つて、洛中に充滿す。先づ宗徒の諸將に、恩賞を行はるべしとて、足利治部大輔高氏に、武藏・常陸・下總を宛行はる。舍弟左馬頭直義に遠江、新田左馬助義貞に上野・播磨、嫡子義顯に越後、兵庫助義助に駿河國、判官正成に攝津・河內、名和長年に因幡・伯耆を恩賞ある。中にも赤松圓心は、さばかり大功を遂げたりしに、佐用の一所を賜はり、播州の守護職を、却て召放たれしかば、赤松大に君を恨み奉り、後終に足利にぞ屬しける。此時足利高氏兄弟、大塔宮の繼母准后に多くの賄賂を送り、宮及び義貞以下を讒せらるゝこと頻なり。宮此事を聞召し、足利を誅伐し給はんと、內々御企ありける所に、宮御隱謀の由、高氏讒し奉らる。是に依つて鎌倉に流罪あり。其後遂に直義の爲に、害せられ給ひけるこそ薄情けれ。

藤房卿與二正成一閑談　附　遁世の事

玆に萬里小路中納言藤房卿は、賢才の譽ありければ、事に觸れて君を諫め奉り給ひたれども、一つとして用ひさせ給ふことなし。然るに主上、出雲より差上げたる龍馬を愛せさせ給ふことを、藤房卿大に諫奏し給ひけれども、君御許容坐さねば、今は是迄と思ひ定め給ひける。同じき九月十三日の夜、河內判官正成を招き給ひ、木の間の月も晴渡り、いつよりは事變りて、又面白く覺えし故、和殿を請せしなりとて、互に歌など詠じて興せられけるが、其後藤房卿宣ひけるは、此度大塔宮を流罪に行はせ給ふこと、兵革再び起るべき其端と存ずるなり。其故は、天下の事大小となく、准后の計らひなれば、高氏又准后を誑かして、遂には天下を奪はんと相企めり。義貞も君を恨み奉れば、渠先づ朝敵とやならんずらん。今見給へ。近き中に亂賊出來りぬと覺ゆるぞ。吾之を思ふが故に、心中熱湯にて手を洗ふが如し。藤房苟も臣たるの道を盡し、屢諫奏し奉ると雖、叡智拙うして之を容れさせ給はず。然れば新

田か足利か、何れか天下を奪ふべし。此上は如かじ、出家せんにはと存ずるなり。和殿は弓箭の家に生れ給ひぬれば、君の爲に討死し給へ。扨もなり果てたる世の中ぞとて、涙をはら〳〵と落しけるを、直衣にて押拭はせ給ひければ、正成も涙に咽び、斯く迄公家一統の御世となしつるものを。逆臣の爲に奪れさせ給はんこそ、口惜しく候へ。正成に於ては、粉骨を盡し忠戰を勵まして後、討死仕るべく候。此上ながらも、今暫く朝に仕へさせ給ひ、猶も諫奏なされ、世の成行く樣をも御覽候へ。正成斯くて候はん程は、容易く天下は奪はれまじく候と申さるれば、藤房卿、さればとよ、和殿の宣ふことを、諸卿用ひ給ふまじければ、如何に思ひ給ふとも甲斐あるまじ。其上朝臣たれば、諸國の士も從ふまじ。今とても朝敵となり給ひなば、天下の士は、風に草の靡くが如くにてぞ候らん。和殿は良將たればなりと宣へば、正成承り、此上は、某も早く討死仕らばやと、存じ定め候なり。月も西に傾きぬ。夜も更け候ひなんとてぞ出でられける。同じき九月廿一日には、石清水に行幸（太平記に、建武二年三月十一日と書けるは誤なり、建武元年九月廿一日なり）あり。藤房卿も、時の大理なりける上、此度を名殘の供奉と思ひければ、

一際聲花(はなやか)に引繕ひ、君の供奉をぞし給ひける。其後同じき十月五日、遂に忍び出で給ひ、北岩倉に至り、出家遁世の身となり給ふ。御年卅九歳なり。君大に驚かせ給ひ、急ぎ召返して、政道輔佐の臣となすべしと、宣房卿(藤房父)に仰下されければ、岩倉へ人を遣して、其旨をいひ送り給ふ。藤房卿聞き給ひ、

何事の羨しさに歸るべき世にありとても厭ひこそせめ

藤房卿の遁世

と返事して返し給ひければ、父の卿、急ぎ岩倉へ尋ね行き給ひけるに、住み給ひける庵室の障子に、一首の歌を書殘して、早何國ともなく失せ給ひぬれば、父の卿も、悲歎の涙に暮れながら、すご〳〵と歸り給へば、君にも頻に御後悔坐しけり。藤房遁世の後は、何國に居給ふとも、知りたる者もなかりけるに、新田義貞北國に下向の後、義貞の家人畑六郎左衞門尉時能、越前國鷹巢山に城郭を構へ居たりけるが、猶も案内を見置んが爲、奥深く分入りけるに、谷川の淸く漲りたる流あり。其水上を尋ね見んと、靜に川上に至りけるに、差出でたる岩をかたどりて、松の葉にて葺きたる家の、見るも物憂き庵あり。賢くも斯る所に住みなせる人のありけりと思ひけ

れば、差覗きて見けるに、年の頃四十餘りにして、色靑ざめ、癯疲れたる法師の、落葉を集めて席とし、平かなる石の上に、法華經を置きたる計にて、外には一物も貯へたるなし。主の僧は、樒を手に携へ、外より歸り來り、谷川の水を結びて庵の內に入り、經の紐を解かれけるを、さしも荒き武士なれども、いと殊勝に覺えければ、つと入りて、如何なる人の、世を背かせ給へるにやと問ふ。彼僧、いと物靜にもてなして、足下には、如何なる人にやと宣ふ。さん候某は、新田左中將義貞の郞等、畑六郞左衞門尉時能と申す者にて候が、先年新田殿に從ひ、北國に下向仕り、當時は此鷹巢に栖籠り罷在候といへば、扨は猛き人々にこそ。愚僧は吾妻の者にてと計り宣ひて、經を讀み給ひしを、能々見れば、古見參らせし藤房卿の面差に、扨も似給ひつるものかなと思ひ、急ぎ歸つて脇屋刑部卿義助(義貞の弟)に語る。義助大に驚き、戀しく思はれければ、一條少將を伴ひ、彼處に至り給ひけるに、早僧は見え給はず、經を載せて置かれつると覺しき石に、

爰も又浮世の人の問ひくれば空行く雲に宿求めてん

と、一首の歌を書付け給へり。一條少將、筆蹟を能く見知り給ひ、紛るべきもなき藤房卿にて坐しけりとて、近邊の山々を尋ねられしかども、巡り合はずして歸られけり。此藤房卿は、遁世し給ひしより、侃山子と號し、風雲を樂み、住所を定めず居給ひけるが、爰も亦住むべき所にあらずとて、何國ともなく失せ給ひけるが、其後土佐國へと志して、都の方へ上り給ひ、懷しさのまゝに芳野に至り、古の雲井の交も忘れ難く、洞院大納言實世卿の方へ、御文を送り給ふ。實世卿披き見給ふに、

君が住む宿のあたりをきて見れば昔に濡らす墨染の袖

使は民家の童部なりければ、召寄せて問ひ給ふに、今日早朝に、西の方の野邊に出でて草を刈り候へば、窶せたる法師の、此文を屆けよと仰せ候ひしと申す。實世卿驚き給ひ、急ぎ參內して奏聞し、大和・河內・紀伊にある所の隅々へ仰せ、修業者を留め給ひけれども、其と覺しき僧もなかりけり。侃山子（藤房入道）は、其よりも船にて土佐國へ越し給ひけるが、如何なる前世の宿業にかよりけん、惡風に侵されて、海底の藻屑となり給ひけるこそ哀なれ。

斯樣に風説させて、藤房は名を變へて、京都妙心寺の住職となられたる記錄あり。能々併せ稽ふべきなり。

伊賀倉俊貞註記

新田義貞隱謀計略の事

爰に前亡相模入道の餘類等、東國・北國に起りければ、建武二年の秋、足利尊氏卿を關東に差下させ給ふ。足利殿東國に下向して、平氏の逆徒等を、悉く攻滅し給ひしかば、關東の諸士歸服して、威勢强大になり給ひけり。然るに兩雄は、必ず爭ふ習なれば、新田義貞と尊氏、日頃不快にして、互に滅さんとぞ企まれける。是に依りて新田殿も、內々樣々と思慮を巡らさる。舟田入道申しけるは、當時准后の御惡しみ深く候へば、君には遂に、朝敵とならせ給はずんば叶ふまじく候。然る上は、片時も早く思召立たれ候へかしといふ。義貞聞き給ひ、足利を滅さんことは、義貞が手裡にあり。然れども今朝家に、智臣勇臣多ければ、事大儀の計略なりと宣ひけるを、舟田聞きも敢へず、先立ちて某思慮を巡らし置候。赤松父子は、朝家を恨み奉れば、播

磨一國を與へて、味方に御招き候べし。名和伯耆守長年をば、入道請取りて誅し候はん。正成一人こそ、六かしき相手にて候へ。是は方便り賺し寄りて、力者に仰せて刺殺され候へかし。其餘は誰か一人、頭を差上ぐる者の候べき。其上にて主上を押籠め奉り、持明院殿を、御位に卽け給ひ候へかし。然らば足利兄弟は、東國にて誅せられ候ひなん。とく〳〵思召立たせ給ひ候へかしと勸めければ、義貞是に同じ、然らば楠を賺し寄せん方便に、我れ先づ正成が許に行き交を親しくせん。然らば正成、我方に來らざることあるまじ。栗生・篠塚・畑・亘理・池田・由良六人は、組手なるべしと定められ、或夜究竟の者共、只二十人召具せられ、忍びやかに正成の館に入り給ふ。樣々饗應あつて、夜更くる迄物語し給ひて、心置なき體に居給ひけるが、夜も更け候ひぬ。歸り候はんと宣へば、正成餘りに御供の小勢に覺え候。御用心あるべき時節なり。某が郎等共をして、送らせ候はんとて、逞兵三十人を呼出し、中門迄送り出でられければ、義貞大に悅び、忝き旨を謝し、手の郎等並に送の者を召連れて、宿所にぞ歸られける。恩地、正成の前に參り、今宵の新田殿の御入來こそ、心

得ず候と、忍びやかに聞えければ、さればとよ、定めて深き慮あつての事なるべし。此人隱謀の企ありと見えたれば、正成を味方に招かんとの謀か、又招き寄せて、誅せんとの術なるべし。旁心許すべきにあらず。されば送りて出でざらんは無禮なり。夜陰に送り出でんには、用心の程の心元なければ、御供廻の少く覺え候。某が手の者共をして、送らせ候はんとて、若黨共を呼出し、此者共と打連れて、送り出でしなり。是れ義貞の爲にあらず、正成が身の用心なりと宣へば、恩地大に感心をぞしたりける。案の如く三日を過ぎて、義貞、正成の宿所に使者を遣して招かれけるに、仰にては候へど、當時世上も騷がしく候。正成に於ては、朝家に仕へ奉る身にて候へば、誰にても朝敵となり給ひつる人に、矢の一つをも射んずるにて候。御用のあらんには、仰越され候へ。承り候はんといひて、使をぞ返されける。新田大に驚き、正成の智は神の如し。早我が心中を知りたるにやと宣へば、舟田、爭かさる事の候べき。某參つて連れ來り候はんとて、正成の許に行き、對面して申しけるは、足利兄弟東國にあつて、逆心を企てらるゝ條疑なく候へば、其旨上聞に達して、義貞罷下る

べく候。さりながら又准后、例の讒口を以て、義貞を却て不忠の者と申なし給ふべければ、楠殿の御思慮をも、承り度由を申され候。義貞に於て、何の御心置か候べき。倡(いざ)御出で候へといへば、正成、舟田が顔をつく〴〵と打詠め、心中を殘すべきにあらざれば申すに候。新田殿も此頃は、君を恨み給ふ氣色顯然たれば、左程に君の御爲を、思召すべしとも存ぜられず候。其上數度の功名を顯し給ひつれば、朝敵となるとも、天下の士靡き從はんとこそ、思召すべき人の、先日私宅に入り給ひ、何よりもしめやかに親しく御物語あり。今又正成を招き給ふこと、不審の其一なり。是れ大事にして、密事にあらざれば、御邊御出あつて、某に談ぜらるべきに、さはなくして招き給ふ。是れ二つ。又先日、新田殿の御入來ありし時、左樣の物語をも、端々し給ふべき所なるを、包み給ひし。是れ三つ。押して東國に御下向あらば、朝敵の名を得給はん。君へ奏聞し給はゞ、准后の讒口に懸り給ふべし。然れば何れとも分け難し。某とても、何とか思惟仕るべき。其程の御思慮あるまじき新田殿にも候はぬに、なるまじき事を談じ給ふにより、大に不審の端起れり。是四つ。先立つて荒々

しき御返事申しつれば、御憤もあるべき所に、さもなく候。是れ五つなり。新田殿に對して、私の宿意は候はねども、兩家の確執止まざらん程は、君を守護し奉り、正成も用心の爲、何方へも出でまじきと、存じ定め候と宣へば、さしもの舟田、胸塞りて覺えしかども、さあらぬ體にもてなし、義貞に對し、何の御用心か候べき。義貞が心中に於て、變ることは候はぬものをとて、苦笑ひしてぞ歸りける。其後正成、恩地をも招き、今は大亂近きにあり。朝敵となりなん人、天下をば奪ふべし。正成が謀を御用ひあらんには、左右なく天下をば奪はれじ。分國へ告知らせて、合戰の用意せよ。御邊の勢、又和田以下をも呼上すべし。某が郎從も、一千餘騎にて、五日が内に上洛せさすべしとて、恩地を河内へぞ下されける。

南朝太平記卷第八終

南朝太平記　巻第九

新田・足利確執附廷尉正成諫奏の事

さる程に新田・足利の兩家、互に牙を嚙み憤を懷きて、確執日々に增長し、遂に尊氏卿、義貞を討たんと奏狀を差上げらる。其狀、建武二年十月廿八日、京都に參着せし所に、義貞朝臣も、同じく奏狀を上らる。理非區々にして、何れとも決せざりける所に、洞院太政大臣公賢公進み出で、既に尊氏、大塔宮を弑し奉りぬれば、罪惡遁れずとは申ながら、片言を聞きて、訴を定むべからず。楠正成は、智謀古今に秀でたる良臣なり。彼が申樣をも御聞あつて、其上にて節度使を差下さるゝか、又は使者を差下され、尊氏が申樣をも御聞なされ候か、何れに付け宜しきに從はれ候ひかしと宣へば、主上實にもとや思召されけん、頓て正成を召され、此事を御尋ねあり、汝

が心中を殘さず敕答申すべしとなり。其時正成、公賢公に向ひ敕答申されけるは、是こそ由々しき御大事にて候へ。新田は在京仕り、足利は東國に罷在る事にて候へば、先づ足利兄弟の內、一人都へ召上され、兩方の申條を御糺明候べし。爭でか逆心を企て候べき。只兩家謂れざる確執によつて、事を朝敵に寄せて、滅さんと相巧む條、顯然として見えて候。然れば今より以往、水魚の思をなすべしと敕命をなし下されなば、などか違背仕らん。今兩家の內、何れをなりとも、誅伐の宣旨をなし下されなば、國々にある所の朝敵とならん者、新田・足利に限らず多かるべし。されば關八州の內に、新田が一族の所領をば、本給人に與へさせ給ひ、新田が分國にある所の足利が一族の所領をも、又本給人に附復あつて、先づ天下の亂れざる樣になさるべうもや候らんと申さるゝ時に、坊門宰相清忠進み出で、御邊の心中心得ず。察するに王位を輕々しく思はるゝと見えたり。新田・足利兩家、共に朝敵となるとも、何ぞ日本の諸士、朝恩を捨てゝ新田・足利に從はんや。尊氏既に大塔宮を失ひ奉りぬる上は、罪科遁るべからず。急ぎ節度使を下されて、誅伐なさるゝより外はあるべか

らずと、憚る所なく申されけるに、君是を許容坐して、義貞を討手として、差下さるべきに定まりけり。　正成退いて、洞院相國に向ひ、忍びやかに申されけるは、清忠の仰、義に當りたる樣には候へ共、時代相應を知り給はず。　右大將賴朝卿より以來、天下の權を執つて、諸士の奢身に餘れり。　然るに當時朝廷より出でて、古に歸し候へば、諸士多年の奢に習ひ、朝家を恨み奉る者、幾千萬人とか思召候ぞ。　義貞・正成に親しき者も、敵とならん事疑なし。　然りと雖義貞・某等に御任せ候はゞ、足利を滅さんこと容易かるべく候へども、公家の人々、御口入あらんずれば、天下は朝敵のものとぞなり候はん。　元弘に正成、天下の士に先立つて肺肝を碎き、夙に夜半に、寒に暑に、身を忘れて朝敵を滅し、君を御位に卽け奉りしものを、尊氏が爲に奪れん口惜さよ。　君の爲め國の爲め、今一往君を宥め奉り給へ。　足利を召されんに、來春はなとが上洛せざるべき。　其間には、彼が實否も知れ候はんものをと淚を流し、しほしほとしてぞ立たれける。　其後公賢公、山門にて此事を御物語ありければ、君を始め諸卿皆、正成の智慮の深きをぞ感ぜられける。

諸國朝敵蜂起附正成重ねて諫奏の事

義貞朝臣、節度を賜はつて東國に下向し給へば、正成も同じく罷向はんと宣ひけれども、新田殿固く辭し給ひければ、扨止みにけり。斯くて義貞、東國に發向し給ひけるが、數度の合戰に打負け給ひぬる由聞えしかば、主上も叡慮穩ならざりける所に、同十二月十一日、讃州の住人高松三郎賴重が早馬着京して、細川律師定禪、國中の勢を語らひ蜂起仕り、勢ひ强大になつて、都へ攻上らんと相催し候と告げたりければ、翌日諸卿評議あつて、楠判官正成を節度使として差下さるべき旨、敕使をぞ下されける。正成謹んで承り、敕諚にては候へども、四國の御敵は恐るゝに足らず候が、中國・九州・北國にも、亦逆徒出來りなんと覺え候。然れば正成、四國に渡り罷在候はんに、朝敵起つて道を差塞がれなば、都に如何なる大變出來り候とても、左右なく馳上ること、難かるべく候と申さるゝ。敕使驚き、さ程に諸國に朝敵となるべき者の候や、覺束なしと申さるれば、いやとよ近年は、天下の政道、准后の口入に落

ちて、赤松以下、君を恨むる者數を知らず。是等の者共に、尊氏内々米錢を與へて扶助し、己れが方人にせんと相巧めり。大塔宮此の事を知召し、法印良忠と御心を合され、足利を討たんと思召されしを、尊氏准后に屬して讒を構へ、宮を失ひ奉り、良忠に死を與ふ。加之足利書を送つて、諸國に味方を求む。今見給へ、中國・北國の早馬來らんずるぞと宣へば、敕使歸つて、此趣を叡聞に達せられければ、君も暫く默止し給ひける所に、義貞猶も合戰に打負けて、遠州へ引退く由聞え、備前國の早馬來つて、逆臣蜂起すと注進す。主上大に驚かせ給ひ、頓て正成を召され、汝が申す所、朕が肝に銘す。如何にしてか申しつる。心中を殘さず申すべしとなり。正成畏つて、敕諚にて候程に、申上候はんとて、准后の口入の惡きを始め、赤松が君を恨み奉る趣、小貳大友が不義、大塔宮の御事、諸卿皆尊氏が謀に落給ひし事共、悉く奏せられければ、諸卿は面を赤め、固唾を呑んで居給へり。主上御後悔坐して、猶此上にも、朝敵となるべき者ありやと敕問ある。正成承り、某が分國和泉・河内・攝津三箇國の外には、實の味方は一人も候まじ。北國・九州の早馬も、近日參ることぞ候はん

と申さるゝ。主上も大息を繼がせ給ひけるが、先づ四國下向の事は、汝が申に任すべし。彌忠功を抽ずべしと勅諚ありて、正成をぞ歸されける。

正成攝州發向の事

斯りける所に、丹州・能州を始め、國々の早馬來つて、朝敵蜂起せし由注進しければ、君臣大に驚怖あり、諸將を集めて軍議ある。判官正成進み出で、某備前・播磨に忍を遣はし候に、足利上洛せずんば、西國の敵は上り候まじ。然る上は正成罷下り、義貞に力を合せ、十死一生の術を以て、尊氏を攻滅し候はゞ、西國・北國の敵は、自ら滅び候はんと申されけれども、正成京都になくんば、誰か皇居を守護し奉るべきとて、許されず。正成退いて、猶も洞院相國を以て申されけるは、某は、手の勢一萬八千餘騎の内、一萬餘騎を從へ、是非に罷下り候はん。新田、尾州を引取りなば、近江より以東は、皆朝敵とこそなり候はん。足利卽時に上洛せば、西國・北國の敵も、一同に攻上り、四面悉く敵となつて、防くべき術候はじ。然れば東國の味方に力を合せ、早

く足利を退治すべきは此時なり。帝都の事、心元なく思召され候はゞ、殘る八千餘騎を、弟にて候正氏に相添へ、都に留め置き候はん。其上一子多聞丸、十歲に罷なり候を、相國へ質として進じ申候はん。又義顯以下の官軍多く候へば、何の恐れか候べき。又奥州の北畠殿顯家卿、定めて攻上られ候はん。然らば足利を中に取籠め討たんこと、いと易く候はんと申されけれども、君を始め、俄に天地も反覆する樣に覺え、正成帝都になくては、如何にしても力なしとて、匹田九郎を以て、遂に義貞をぞ召返されける。正成も今は力なく、分國に城々を構へ、都の根を強くせんと、和泉・河內・攝津の內に、十八箇所の城を築き、味方の勢の妻子を千劔破に籠置き、吾身は五千餘騎にて、在京をぞし給ひける。時に攝津國の住人多田左衞門尉義玄、一子を千劔破に入れんと難澁する由聞えければ、正成急ぎ攝津多田に發向せらる。是に依つて義玄・子供二人、並に老臣等が子供等を出し渡しければ、同廿六日都に引退かれけるが、其日は山崎に宿陣し給ひけり。

攝州生田合戰并足利殿御教書到來の事

斯る所に細川卿律師定禪、讃州より打つて出で、兵船に取乘つて、都を指して攻上られければ、赤松父子播州須磨に打つて出で、定禪の渡海より以前に、攝州まで發向し、吉例なれば、元弘の時の如く、摩耶山に取上らんと、所々の民屋に火を放ち、生國小野屋に陣を取る。楠廷尉正成は、山崎に陣せられけるが、此告を聞き、翌廿七日取つて返し、須磨の敵と一戰せんと馳向はる。赤松律師則祐是を聞き、何條さる事あるべき。楠は昨日、多田より京都に引取りたり。察するに當國の者共が、正成の下知に依つてぞ向ひつらん。いで追捲つて呉れんとて、手勢八百餘騎を、雀の松原に引隱し、一萬餘騎を張出して見せけるに、敵は菊水の旗なるぞ。すは楠こそ向ひたれと、上を下へと騷ぐ所を、矢尾別當顯幸・志貴左衛門尉、赤松が先陣浦上・別所が、未だ勢を備へざる所に、會釋もなく切つて入り、東西へ馳通り、南北へ駈立つるとぞ見えし。別所・浦上が勢、一同に咄と崩れけり。正成之を見給ひ、進めや者共と、

金鼓を鳴らして追懸けらる。宇野能登守、矢尾が進んで、逃ぐるを追ふを、能き敵ぞと走り寄つて、草摺を取つて引落さんとす。別當したゝかなる法師なれば、宇野を取つて引寄せ、鞍の前輪に押付け、首掻切り、猶も逃ぐるを追懸くる。赤松父子、取つて返し取つて返し戰へば、上月七郎・栢原彌八も討死し、別所六郎左衞門も、痛手負うて自害せり。律師則祐、豫てより雀の松原に隱し置きたる八百餘騎を魚鱗に立て、靜まり返つて押向ふ。正成逞兵一千餘騎を從へて、眞驀に打つて懸り、七顚八倒して戰はるれば、則祐が勢怺へ兼ね、是も同じく崩れけり。逃ぐるを追ふ事一里有餘、日既に夕陽に及びしかば、敵の首四百餘級切かけさせ、其夜に尼崎の城に入り、同廿九日引返して、歸洛にぞ赴かれける。然る所に細川阿波守和氏の郎等元澤源六・伊木四郎、足利殿の兩使として、御教書を帶し來りけるが、瀨川の宿にて行逢ひぬ。正成、譽田彌三郎數房を以て、使の趣を問はれければ、和田殿か恩地殿かを以て申入れ候はんといふ。譽田聞いて、和田・恩地は、時節此陣には罷り居らず候。某とても、矢尾別當が甥にて候へば、心を置かるべきに非ず。傍の人を除かれ候へと

いへば、兩使、人を除いて後、今般尊氏上洛を企て候こと、天下を奪はんとには候はず。尊氏君に對して聊も私なく、忠貞を盡し候所に、義貞が讒に依つて、朝敵の惡名を蒙れり。上洛仕つて、此旨を申開かんと欲する所に、討手として、義貞東國に罷向ふの間、心ならず味方の軍勢等、一戰を挑み候なり。是れ逆臣の最は義貞にあり。然れば君の御爲め、且つは天下の爲にて候へば、楠殿も某に力を合せ、新田誅伐の謀を巡らされ候へ。然るに於ては、畿内の五ヶ國・南海六州・伊賀・伊勢・近江の國を管領し給へ。直義を中國に居らしめ、尊氏鎌倉にあつて、朝家を守護し奉り候はんとの事にて候とて、和氏よりの內狀をも出しけり。正成あざ笑ひ轡を執り、使者に向つて目を瞋らし、正成富貴を好まば、何ぞ御邊の力を借らん。日本に唐土・天竺を添へて賜はりたりとて、慾に義を替ふべきや。天下を奪はんと巧まれしことは、三年以前より、正成が能く察せし所なり。兩使が首を刎ねたきものなれども、誅せんも不便なれば、とう〳〵歸れとてぞ申されける。斯くて同じき晦日、正成洛に歸り參內して、合戰の次第を奏し、其後尊氏が狀を進覽せられけるに、君大に叡感

あつて、四國・九州の管領職になし下されければ、正成忝き旨を述べ、退出をぞし給ひける。

正成對談義貞幷諸將手分の事

斯くて正成は、内裡を退出せられけるが、去廿四日、義貞歸洛し給ひしかば、對面の爲め、新田殿の宿所に入り給ふ。義貞悦び出向ひ、東國にての合戰の次第を物語あつて後、義貞宣ひけるは、楠殿と某一手になつて、近江に馳せ向ひ、摺針に陣を取り、敵を峠の難所に引受け、一戰に雌雄を決し候はんは如何となり。判官頭を振り、先陣未だ尾州の邊にあらば、尤にて候へども、早美濃に着きたりとも聞え、又伊賀路より宇治へ向ふとも聞え候。然れば味方小勢にして、而も疲れたるを、敵より懸つて戰はゞ、必定戰ひ利あるまじく候。早く君を叡山へ行幸なし奉り、心安く合戰を仕らんと申されれば、義貞聞き給ひ、仰にては候へ共、士卒力を落すべければ、一先づ宇治・勢田にて防がばやとぞ宣ひける。正成重ねて、新田殿の術、一理ありとは申

せども、其は分内廣く、諸方の口に遠うして、小勢の官軍互に力を合さんに、難儀にぞ候らん。味方は山門に取上り、敵を洛中に入れ置きて、正氏に川尻を差塞せなば、敵軍忽ち兵糧盡きて、士卒減ぜんは必定なり。其弊に乘つて攻擊ちなば、勝利を得んこと手裡にありと宣へども、一戰にも及ばずして、帝都を敵の馬蹄にかけさせんは、世の人口も如何なりとて、遂に都にて戰はるべきにぞ究まれり。斯くて其年も暮れ、建武三年の春立渡れども、內裏には朝拜もなく、節會も行はれず。只周章の外他なし。斯る所に、凶徒旣に近付きぬと聞えければ、正月七日、軍勢の手分あり。勢多へは、伯耆守長年を、三千餘騎にて差向けらる。山崎へは、脇屋右衞門佐義助・洞院按察大納言公泰卿・文觀僧正・大友千代松丸・宇都宮美濃將監・海老名以下七千餘騎にて差向けらる。大渡へは、總大將義貞・千葉・宇都宮・菊池以下、一萬餘騎にて向はるゝ。宇治へは、廷尉正成五千餘騎にてぞ向はれける。

新田義貞・名和長年口論并足利殿上洛の事

然るに義貞宣ひけるは、尊氏勢多より押寄すべければ、義貞勢多へ向ふべし。治承より以來、皆宇治より破れぬれば、楠殿向はるべし。敕諚にて候と宣ひしを、長年聞きも敢ず、新田殿は敗軍の將に坐せば、勢多へは某向ひ候はんと申さるゝ。義貞聞き給ひ、敕命を背き給ふかと宣へば、敕諚ならんには、召されて仰下さるべきものをといふ。其時正成進み出で、敕命にて候ぞ。伯州の申され樣無骨なりと宣へども、いや〳〵餘人は知らず、長年に於ては、今更人の下風には立たじものをといふ。正成重ねて、大事の前に私を立て給ふは、長年には似合ひ申さずと宣ふ。義貞も色を損じ、伯州を義貞の手に屬せよとは敕諚もなし。其上足利は多勢なり。長年の御勢は、僅か二千有餘にてぞ候らんと宣へば、いや〳〵敵は百萬もあらばあれ。長年が一命あらん程は、破られ候まじ。義貞の加勢をも受け候まじと怒らるれば、義貞も力なく、長年の向はるべき大渡へ向ひ給へば、長年は勢多の手へ向はるゝ。時に正成、勢多の手へは尊氏寄せ來るべければ、戰難儀ならんと思ひ、矢尾別當・志貴右衛門尉に五百餘騎を相添へ、加勢として、長年の陣へ差遣はさる。然るに長年、人の加勢は

尊氏兵を京都に進む

申受けじと固辭しけれども、菊水の旗を閣き、長年の帆掛船の旗を遣はされ候へなどと、樣々詞を盡していひ送られければ、長年も得心し、判官殿の加勢を受けまじき長年にても候はねば、菊水の御旗こそ宜しかるべく候とて、此勢を合せて、三千餘騎にて守られけり。さる程に征夷將軍尊氏は、既に江州に着きて、伊岐州の城を攻むべしとて、先づ民屋を追捕せられけるに、兵糧一粒もなかりしかば、鄉民を召捕りて問はれけるに、去極月十七日より、楠判官當國に發向し給ひ、所々の民屋を追捕して、鄉民に仰せ、國中の船數千艘にて、纔三日が中に、坂本へ運び取り給ひ候。殊に足利殿方の人々の所領をば、闕所なりとて、是非をいはせず奪ひ取り給ひ候。其上海道筋の者共は、北近江の方、又は所々へ緣を求めて、逃げ行き候へば、糧はあるまじく候とぞ申しける。是は正成東國に罷向はんと議せられしかども、朝廷許し給はねば、敵を糧に疲らさんとの術なり。其上軍に打負けなば、君を山門へ行幸なし奉らん爲の用意なり。伊岐州には、山法師の籠りたりければ、山名三河守以下五頭を以て攻落させ、將軍は勢多へ向ひ給ふべしとて、軍使を差遣はされけるに、帆

掛船の籏・菊水の旗、凡そ四五十流差上げて、勢の程四千計もや候らんといふ。足利殿、扨は新田にてはなかりけり。名和・楠こざんなれ、打捨てゝ宇治より向はまし。いや〳〵正成如何なる術をなして、美濃・尾張迄も出張し、先後より立挾まんとや巧むらん。又打破つて通ることも叶ふまじ。如何はせんと評議あつて、仁木・桃井・土岐・武田・荒川・小笠原等、一萬二千餘騎にて楠を押へさせ、此方より合戰を好むべからずと下知して、將軍兄弟は、江州より伊賀路へ廻つて、寄せんとぞ向はれける。然る所に思ひの外八幡山に一城を構へて、菊水の旗押立てたり。正成は宇治にあり、義貞は大渡にありと聞えしかば、足利勢は淀に廻つて、八幡山の山下に陣を取り、城を攻めんと議せられしかども、正成は宇治にありと聞ゆれば、此小城一つを攻めても益なし。又宇治には正成あれば、是に向はんも物好なりとて、仁木義長・細川清氏・今川五郎入道心省を、三萬餘騎にて請手となし、將軍は、大渡へぞ向ひ給ひける。

京勢敗軍の事

斯くて將軍は、猶も諸方に手を分ちて、淀は畠山上總介、一口へは吉見三河守を差向け給ふ。然るに去元弘三年十月、北畠顯家卿、奥州に下向の時、准后腹の第三の宮義良親王を伴ひ下り給ひけるが、此度陸奥・出羽の官軍を催し、多勢にて上洛し給ひける程に、不破の關を越えて、入洛し給ふべき由聞えけり。斯る所に、細川定禪を大將にて、赤松以下の西國勢、攝津・河内邊まで攻上りけるが、同九日の酉の刻、將軍の御陣へ申しけるは、明十日の午の刻以前、山崎を攻破り、煙を揚げ候べし。同時に御合戰候べしとぞ告げたりける。さる程に正成は、敵陣に忍びを入れ置き、義貞の陣へ軍使を遣はさるゝこと、櫛の齒を引くが如し。十日の子の刻、一夜討して、十死一生の軍を仕らんとなり。翌十日の寅の刻、又大渡に軍使を馳せて、山崎へ、細川定禪二萬餘騎にて寄せ來る由聞え候。其の御陣に、さまで大勢は入るまじく候。菊池・宇都宮以下を、山崎へ遣はされ候へ。此方より加勢を遣したく候へども、今夜の合戰に士卒後れなば、惡かりぬべく候とぞいひ送られける。義貞聞き給ひ、仰承り候ひぬ。山崎は程近く候へば、合戰若し難儀ならんに於ては、某罷向ふべく候へば、御

心安かるべしとなり。卯の下刻に使者馳せ歸りて、此の旨を述べければ、正成、扨は味方敗軍と覺ゆるぞ。山崎は京家の輩多ければ、敵は定めて强かりなん。其の時義貞向はれなば、足利其弊に乘つて、川渉りして攻懸らんずるぞとて、又軍使を替へていひ遣されけるは、未だ卯の刻の內に、御勢を遣されなば、敵知るべからず。夜明けなば、勢の通路を、敵より能く知り賺し候べし。然らば京に坐す越後守義顯殿に、結城親光を差添へ、山崎へ差下されよかしとなり。其使未だ歸らざるに、勢を遣はされしにやと、重ねて軍使二人を馳せらるゝ。辰の刻に及んで、山崎の軍始まりしかば、同下刻、正成究竟の兵十二人を從へ、宇治より馳行き給ふ程に、鳥羽の秋山に着き給へば、早山崎の軍破れ、放火の煙天を掠め、敗軍の勢群り來りしかば、豫て思ひし事よ。今日の內は恢ふべき合戰なるに、又公家の人々の、不覺の負しつるにこそとて、軍使二人を宇治に歸し、山崎の味方敗れぬれば、これより參內して、追付き宇治に歸るべし。其迄は少しも騷ぐべからずといひ遣し、直に參內を遂げ、山門に行幸坐すべき由を奏し、其より馬を飛して、宇治に馳せ歸り給へば、未の下刻に及び

けり。

正成被三引二取宇治一事

斯くて廷尉正成は、河尻を差塞がせんが爲め、一千餘騎を八幡山に籠め、又一千餘騎を飯盛の城に籠めて、君の御跡を慕ひ、山門に落ち行くべしとて、平岡・生地・丹下を、八百餘騎にて先陣に打たせ、我身は六百餘騎にて中軍に備へ、後陣は齋藤・新庄・本庄の者共七百餘騎、又十町計り引後れて、平野・內藤・新藤等、五百餘騎にて打つたりけり。正成は馬廻逞兵三十餘人相從へ、前後の陣を馳せ廻つて下知せらる。旣に木幡峠を打越えければ、敵の雜人等、民家に打入り〳〵亂暴す。正成、敵に手を指すべからず。防がんとせば、打散らせとて通られければ、百騎二百騎群り居たる敵兵共、菊水の旗を見て、すは楠ぞ。大事の命を取られなと、方々の山林に逃隱れて、近付く敵一人もなかりけれども、敵前後にあれば、心許すべからずとて、嶺々を取つて、勢を備へてぞ引かれける。然る所に川一筋を前に當てゝ、勢の程三千計にて、河原に

備へたる敵あり。正成見給ひ、此敵を打散らさでは通られまじと、先陣の生地・丹下を、敵の上なる山に登せて、精兵の射手三百人を、山の半腹に下し、散々に射させらる。敵は的になつて射立てられ、大に漂ひ騒ぐ所を、齋藤・本庄等得たり賢しと駈立つる。正成も、六百餘騎にて靜々と懸り給へば、敵兵等一支もせず、咄と崩れて逃げ行くを、追捨にして引返さる。是よりして、前後に近付く敵なかりけり。

廷尉着陣坂本の事

斯くて河内判官正成は、醍醐・山科邊まで引返し給ふ所に、仁木義長・桃井直常等、坂本へ落ち行く敵を追懸け、首少々取つて勇み進んで歸りけるが、端なくも行逢ひたり。判官頓て速水小平太を以て、正成只今君の御跡を慕ひ、馳せ參り候なり。爰にて一戰を挑むべけれども、正成は君の御事心元なく、先へ心の急ぎ候。又旁も、敗軍の士を討ち給ひたりとて、さまで忠功にもなり候まじ。重ねて參り合ひ候はん時、雌雄を決し候はんといひ遣されければ、仁木・桃井之を聞き、我々兩人、楠殿の御

芳恩を深く蒙り候へば、何ぞ情なく軍をば仕るべき。重ねて參會仕るべしと返事して、河原を西へ引き行けば、正成は東坂本へと急がるゝ。既に三町計行過ぎ給ふ所に、名和と一手にありし矢尾・志貴も、五百餘騎にて行逢ひたり。是等跡より懸りなば、仁木・桃井は討たるべきに、彼等義を守りしが故に、士卒をば損せず、身を全うして引返しけりと、諸人之をぞ感じける。斯くて正成は、漸く其夜の亥の刻計り、坂本に着き給ふ。爰に正成、豫て足利一家の所領の江州にありけるを、關所と號して奪ひ取られける。兵糧を南岸の圓宗院に差置かれし。其兵糧六千八百餘石なり。又大津に兵糧三千石ありけるを、園城寺の衆徒の心中計り難しとて、祐覺に仰せ、數十艘の船を連ね、其夜に坂本へ運び取らせらる。近鄕の庄官公文等が、種々の珍物を送りけるを、思ふやうあり、同じくは糧に替へて給はれと宣ひしかば、我劣らじと米穀を持運ぶ事、千六百餘石なり。郎等共は、こは如何に。俄に慾心深くなり給ひしぞや。遙々と河州までは、如何にして取運ぶべきと呟きけるに、其上に猶も黃金百兩を出して、米を買取り給ふこと、千二百餘石、凡て二千八百餘石。是を山門

に上せ置き給へり。大津より運ばせられし兵糧三千餘石・大豆二千三百石をば、翌十一日、職事を以て諸軍勢に配分せらる。兵糧六千八百餘石・大豆七千石をば、正成預り候とて、是は曾て出されず。されば古今に良將多しと雖、何れか此人に比ぶべき。其智の明なること、宛も神の如くなりとて、諸人之を感稱せり。

南朝太平記卷第九終

南朝太平記 巻第十

三井寺落城幷官軍京都に寄する事

さる程に主上、山門に臨幸ありしかば、急ぎ東坂本を攻むべしとて、細川律師定禪・同刑部大輔賴春・同陸奥守顯氏を、三井寺に差遣はさる。斯る所に建武三年正月十四日、北畠源中納言顯家卿、多勢を率して坂本に着陣し給へば、官軍氣を得て、勇み進むこと甚し。然れども此勢に配分すべき糧なかりける所に、楠判官正成、豫て貯へ置かれたる兵糧二千石・大豆千石を送られければ、諸人感稱せずといふ事なし。頓て諸將評議あつて、同じき十六日、三井寺の敵を攻落し、堂塔僧坊悉く一片の煙と燒立てらる。是に依つて此處を山徒三人に給はりければ、其後坊舍を毀ち竹木を伐取りけるに、新羅明神の森を伐り取りける者、忽ち眼昏み衂血(はなぢ)たり、手足を切つ

て苦みしかば、此森の木は伐るべからずとて、止みにけり。加之當寺の鐘は、俵藤太秀鄕より傳はりたる靈鐘なりけるを、軍終りて後、衆徒等、寺の上一坂に埋み隱し置かれけるが、其年の四月、土中より後夜の鐘たしかに聞えければ、方々に隱れ居たる衆徒等是を聞き、扨は天下武家の有となりて、寺を再興あるべき瑞相にやとぞ悅びける。さる程に三井寺の敵、都を指して落行きしかば、義貞は逃ぐるを追ふに如かずとて、一萬餘騎にて追上られけるが、顯家の陣へ軍使を馳せて、逃ぐるを追うて攻め登り候はん。跡を黑められ候へかしといひ遣はさる。黃門聞き給ひ、遙々と東國より上りて、疲れたる小勢を以て、荒手の大勢と戰はんに、爭でか勝利を得べきぞとて、坂本に引歸し給ふ。正成大に驚き、義貞の方へ軍使を馳せ、京都多勢向ひ候はゞ、危き合戰にて候べし。早々引取り給ふべしといひ送らる。新田殿は、顯家卿に見放たれ、憤り思はれければ、判官殿も、早々續かれ候へといひ捨てゝぞ馳せられける。正成之を聞き、此上は是非なしとて、千種頭中將忠顯を、八百餘騎にて、相坂に備へさせ、兩方の山へ射手を多く上せらる。正成は三千餘騎を三つに

分け、山科に控へられけるが、日岡に備へられたる名和伯耆守長年、其勢三百餘騎なりければ、餘りに小勢なりとて、志貴右衞門尉に五百餘騎を添へて、加勢として差遣し、正成は、粟田口まで進み候はん。長年は山科に御控へあれと宣へば、何ぞ楠殿に、長年劣り候はんや。先陣仕り候はんとて進まれければ、正成も力なく、黨の者三十人・軍使二十人を相從へ、長年の陣中に至り、義貞の陣へ、段々と使を馳せられけるが、敵多勢なりと聞きて、二十人の軍使を從へ、義貞の陣中に來らるれば、新田殿大に悦び、あれ見給へ。足利愚將にして、勢を遣ふの術を知らず。十萬に及べる勢を、只一手に備へ候ぞやと宣へば、正成、實味方の勝利と覺え候なり。さりながら七つに分け給ひしは心得ず候。敵は一つに立て候へば、味方も三つに分けられ候へと諫めらる。義貞、されば候。某一謀をなして、逞兵千餘人敵中に紛れ入れて候が、合圖の刻限を極め置きて候と宣へば、正成大に悦び、扨は必定御勝利候ぞ。今日の内に坂本に引取り給ふべし。山科に待ち候とて、其より義助脇屋の陣に至り、又先陣にて眞如堂の前に備へたる由良・長濱が陣に入り、其より山科に引返さる。京勢之

を見て、敵の先陣に、菊水の旗の顯はれ見ゆるぞ。楠も寄せたるにこそ。如何なる目ざましき事をやせんずらん。懸るべからずとぞ怖れける。是は旗笠驗を敵に見せて、正成も寄せたりと思はせん爲の術なり。

官軍京合戰の事

官軍の總大將新田左衞門督義貞は、錦の御旗に、中黑の旗を差添へて、三條河原の東の岸に、西に向つて控へらる。斯くて兩陣入亂れて、雷霆山を劈き、天地を反覆するが如く、喚き叫んで戰ふ所に、豫てより紛れ居たる千餘人の者共、此に顯れ彼に隱れ、千變萬化して戰へば、又楠が、如何なる術をかなしつらん。犬死すなといふ程こそあれ。十方に落行きければ、足利殿も、丹波の方へぞ落ちられける。細川卿公定禪は、四國の勢を從へ、赤松と一手になつて、千本を下りに敵向ふと聞きて、右近馬場に控へて待たれける所に、下京に煙數多見えて、鬨の聲頻に聞えければ、倡や他の勢を交へず、一軍して、味方の恥辱を雪がんと、中御門を東へ向ふ所に、河

原に錦の旗を押立て、多勢にて控へたるを、無二無三に切つて入り、旗差を討取り、旗を奪へ取り、二十町計り追懸けて後、取つて返し、河原を下りに行く所に、新田義貞を始め、宗徒の官軍、二條河原より四條邊まで支へたり。定禪願ふ所の敵ぞと、喚いて駈けられければ、官軍散々に戰ひ負け、東を指して敗北す。正成此由を聞き、さ思ひつる事よ。早く引取り給へといひつるものをとて、三千餘騎の內より、千五百餘騎を勝りて、駈出でらるゝ所に、長濱六郎左衞門尉、三十騎計りにて落來るに、粟田口にて行逢ひ、新田殿は如何と宣へば、某も存ぜず候といふ。扨は討たれたるにやと、長濱と打連れ、名和と一手になつて進み給へば、義貞・義助兄弟、取つて返し〳〵引來らる。伯耆守長年之を見て、三百餘騎にて切つて入り、爰を詮と戰はる。正成續いて五百餘騎にて、靜々と懸り給へば、京勢又敗北す。官軍氣に乘つて、取つて返さんと勇みけるを、正成大に制し止め、我身と長年とは、逃るを追うて進まれけるが、伯耆守は、今は引返さんといはれけるを、いや〳〵敵の追立られし兵、早々にはよも歸らじ。然れば味方の敗軍等、如何程もあるべければ、今一追追うて、味方

を助け給へやとて、猶も進んで追懸け、東山を後に當て、暫く備へ居給へば、敗軍の味方、雲霞の如く落ち來る。夜旣に更けゝれば、正成も長年も、共に引返されけるが、義貞粟田口に待付け、打連れて引取り給へば、山科に、菊水の旗を押立て、正成の勢千四五百騎待ち居たり。義貞見給ひ、楠殿の慮深きことは、今に始めずとはいひながら、驚き入りて候と大に感じて、其夜坂本にぞ引取られける。さしも東方の大軍敗北せしに、細川の一族、安々と敵を追落せしこと、神妙の至りなりとて、將軍大に感稱し給ひ、御自筆の書添へられ、錦の直垂を兵部少輔顯氏に賜はりし。されば其頃は、律師定禪を、世人鬼神の如くにぞ申しける。

官軍重ねて京軍の事

然る所に、大智院宮彈正尹宮、公家には洞院左衛門督實世・持明院入道源雄、武士には島津上總介貞久入道・仁科・高梨以下七千三百餘騎、東國より上つて、同じき廿日東坂本に着き給ふ。是に依つて諸將會合して、合戰の評定あり。廿三日に寄せらる

べしと定まりしかども、顯家・實世・義貞三人、先陣を爭ひ給ひしかば、其日の評定は止みにけり。主上此事を聞召され、正成宜しく計ふべしと仰出されしかば、正成、祗覺と心を合せ、諸將前後を爭ひ給ふこと、さりとては長なし。大津・赤山・今道、三の道より向ひ給ふに、大津は追手、赤山・今道は搦手なるべし。鹿谷より向はれん人々は、引下つて戰ひ半ならん時、敵中に切入り給へとて、三將に鬮を取らせられければ、顯家卿は追手、搦手の赤山は實世卿、鹿谷は新田殿にぞ定まりける。楠廷尉・結城九郎・名和伯耆守は、山法師と一つになつて、宇都宮公綱が籠つたる、神樂岡の城を攻むべしと定めらる。是は山徒は歩立なれば、平場にて騎馬に駈立てられぬべし。城を攻めんには、山谷の歩行に慣れて宜しからんとぞ思慮せられける。さる程に合戰は、廿七日の辰の刻と定められける故、宵より山科・赤山・鹿谷に陣を取り居たりけるが、逸雄の若大衆共、又卯の上刻、神樂岡に押寄せて、只一息に攻落す。正成衆徒を神樂岡に控へさせて、三千五百餘騎にて押寄せらる。先陣は橋本八郎・早瀨右衞門一千餘騎、其內より五百餘人に、輕々としたる楯を持たせ、其餘五百人は、

弓の兵となしにけり。中軍は正成五百餘騎、後陣は矢尾・志貴一千五百餘騎、次は名和・結城四百五十騎、其次は千種忠顯八百餘騎とぞ聞えし。先陣既に出雲路の民家に火をかけたり。上杉修理大夫・足利尾張守、八千餘騎にて向はれけるが、敵は楠なれども小勢なり。後陣は伯耆守、又は公家法師原と覺ゆるぞ。楠を追立てなば、後陣は戰はずして敗すべきぞ。懸れや者共とて、鬨を作つて切つて懸る。五百餘の楯の者共、俄に楯の掛金を掛合せたれば、さながら石壁の如くなり。京勢之を事共せず、押破らんとする所に、五百餘人の弓の者、鏃を揃へて散々に射る。京勢是に漂ふ所を、正成得たり賢しと、一千餘騎にて駈立てられしかば、京方の八千餘騎、一同に咄と崩れ、二百餘人討たれて、十方に逃げ散りけり。

結城一族合戰附小筋直垂并葛西討死の事

斯くて廷尉正成は、北畠殿の陣、車大路に軍使を馳せ、早く合戰を始め給へといひ送らる。然れども顯家卿は、義貞遲しとて待ち給ふ。斯りける所に、新田殿軍勢を

押着け給へば、正成も馳せ來り、直に懸り給へと勇められる。義貞申すにや及ぶ。迫捲つて捨て候はんとて、敵中に駈入らる。顯家卿は、豫ての約の如く新田を待ちしは、法を破らじが爲なりと宣へば、正成、いや〳〵、敵は只一つに備へて候へば、義貞を待つ中に、若し敵備を分つ事もありぬべければ、心の急ぎ候べし。然らば義貞來り給ひたりとも、味方の負たるべし。勝つべき圖あらば、何ぞ約を變せざらん。顯家懸り給はずんば、義貞に替りて、正成駈けんと存じ候ひしとぞ語られける。新田殿は逞兵を前後に立て、二條河原より眞横樣に駈通り、七顚八倒して戰はる。結城・白川の上野入道と共に、白河の常住院の前中御門の河原口を駈けられし時は、如何なる鬼神なりとも、面を向ふべしとは見えざりけり。小山・結城が一族二千餘騎、上野入道と、爰を詮と戰ひけるが、入道も小山・結城も、共に一族なりしかば、互に名乘り合ひ〳〵、命を義に替へて戰ひける程に、敵味方百餘騎討たれて、相引に引退く。敵味方一家にて、同じ紋なりしかば、共に皆小筋の直垂を着たりけるが、後々の合戰には、同士討する事ありぬべしとて、小山・結城の輩は、右の袖を裂きて、兜螯にぞ

附けたりける。足利殿は、丹波の方へと落ち給ひけるが、敵手繁く追懸けしかば、上杉兵庫入道を始め、二階堂下總入道行全・三浦因幡守・曾我太郎左衞門入道以下、返合せ〳〵討死しける間に、河原を下りに、七條を西へ、桂川を越えてぞ落ち給ひける。爰に京勢の中に、越前國の住人白河小次郎と云ふもの、敵の首に緋縅の鎧を添へて持來り、敵の總大將新田義貞を討つて候とて、實検に備へし所に、紛るべくもなき義貞の首なれば、將軍感悦斜ならず、諸人も亦悦ぶこと限りなし。然れども是れ義貞の首にあらず、葛西判官三郎左衞門が首なりけり。判官存日義貞に顔色といひ骨柄といひ、少しも替らざりけるに、緋縅の鎧着たりけるを聞ける、新田重代の鎧薄金と同毛なる故、義貞を討取りたりと思ひ誤りしも理なり。さる程に官軍は、今日の合戰に打勝つと雖、楠正成の諫に依つて、京中に足をためず、早く坂本に引取らる。京方には、敵今日も利を得たりと雖、大將義貞討たれたる故、敗北したると覺ゆるぞとて、又悉く引返さる。白川が高名を、羨しと思ふ者共や多かりけん、あらぬ者の首を拾ひ首して、或は楠判官の首と號し、又は顯家・忠顯・長年の首なん

どとて待出しければ、皆獄門の木にぞ梟けられける。

間杉平次の事

玆に廷尉正成の郎等に、間杉平次とて、究めて奇妙の泣手あり。其故を委く尋ぬれば、北條滅亡の後、正成暫く赤坂に居給ひつる時、或夜安間三郎・松原五郎高安入道等、正成の前にて樣々の物語しけるが、松原申しけるは、間杉平次とて、空泣を仕る者の候が、如何なる勇剛の者ともいひ、彼が泣くを聞きては、落涙せずといふ事なし。極めて不思議の者にて候といふ。正成聞き給ひ、是も亦一藝なり。召抱へてんものをと宣へば、松原、其こそいと安き事にて候。世に隱れて、摩耶の麓に微なる住居をして罷在候なり。召寄すべく候とてぞ立ちにける。其後五六日を經て、松原、間杉を倶ひ、正成の前に出づる。正成見給ひ、御邊は奇妙に空泣きすると聞きてあり、一泣仕り候へ。聞かんと宣へば、承り候とて、何ごとやらん搔口說きて、さめ〴〵と泣きければ、正成も不覺の淚を流し、是は希代の名人なりとて、頓て召抱へられけ

り。國中の諸人是を聞き、楠殿程の良將の、童しき事をもし給ふものかなとぞ私語きける。宇佐美彌次郎正安此事を聞き、心得ず思ひければ、或時志貴右衛門尉が許に行き、謂れざる松原が口入を以て、此頃泣男を召抱へられたりと聞き、是れ國家の費にして、世の聞えも長氣なし。然れば彼を招き寄せ、能々樣子を窺ひ見て、國の費たらんに於ては、君に諫言を申し、泣男を討つて捨つるか、追放つかに仕らん。是れ忠臣の道なりとて、僞り賺して、間杉を招きける。平次何事やらんと出て來る。宇佐美之を見て、御邊は間杉殿にて候か。某は宇佐美彌次郎正安とて、大將の乳母子にて候が、御邊は奇妙の泣手なりと聞きつるなり。如何樣の泣きやうなれば、御所領を賜はりしぞ。承らんといへば、さん候。某の泣き候には、如何なる鬼神にても候へ、泣かさずといふ事候はずといふ。正安頭を振つて、如何な〳〵、人にこそ寄るべけれ。此正安は泣き申さじ。其上能く泣けばとて、泣くが武士の家業なるか。女童にも劣りたれば、所領の盜人、國の費といふ者なり。己れ其座を立たすまじ。討つて捨てんと怒りければ、間杉大に驚き、大將の仰にてこそ、召抱へられ候へ。某

が身に誤は候はぬものを。理不盡の御仰かなといふ。志貴聞きて、宇佐美殿の仰尤なり。さりながら彼能く人を泣かさば、謀の助となる事もありぬべければ、大將の深き慮あつて、召抱へ給ひつらん。如かじ彼を泣かせて、我々涙を流さずば、此座にて討つて捨て給へといへば、正安此議尤なり。とく〳〵泣けよ。聞かんとて、太刀の柄を碎けよと握り、白眼み詰めてぞ居たりける。間杉聞きて、某如何に泣き候とて、左程に泣かじと思ひ詰め給ふ人々の、爭でか一滴の涙を落し給ふべき。只今討たれんは治定なりとて、暫く涙を流しけるが、扨も是非なき次第に候。旁に討たれ候て、それを歎くには候はねども、某は大切なる命にて候故、甲斐なき身の、今まで存命(ながらへ)候ぞや。せめては仔細を語り申さん。其後とく〳〵首を刎ねられ候へ。某が父は、丹波の久下兵部丞が母方の一族、間杉右衛門次郎貞喬と申す者にて候ひしが、去ぬる延慶二年、守邦親王に將軍宣下ありし時、鎌倉にて普恩寺相模守殿の郎等、赤澤九郎と申す者と口論し、敢なくも討たれ候なり。其時某未だ四歲なりつるを、母が懷に抱き、本國を立退きて、摩耶山の麓に落來り、微なる柴の庵を引結び、

影を隱して明し暮し候ひしが、空しくなりし父が事をのみいうて、母と二人、晝は終日泣明し、夜は終夜泣暮し、天にあこがれ地に伏して、餘りに歎きの積りし故、母は其より病にそみ、次第々々に弱りつるが、汝如何にもして成人し、父の敵赤澤を討つて、亡父の孝養にも備へ、母が冥路の暗をも照らせよかし。是のみ思ひ殘すぞとて、某が十五歲の春、母も空しく成り候ひし。其よりは某只一人、世に便なき身となりて、猶も泣明し泣暮して、年月を送り候ひし程に、覺えずも泣くことを得て候なり。父が敵赤澤九郎は、鎌倉滅亡の後、土岐周齋坊に仕へて、美濃に罷在ると傳へ聞き候なり。然るに此度當家に召出され、所領を給はり候ひぬれば、年來の本意を遂せんことも近きにありと、賴もしく思ひ候ひしに、今旁の手にかゝり、空しくなり候はんこと、さりとては口惜し。八幡大菩薩も捨果て給ひぬるか、旁も義を知り給へる人々ならば、此道理を聞きてたべ。哀れとは覺さずや。扨もなり果てたる身の上ぞやと、坐を叩き伏倒れて、聲を揚げてぞ泣きにける。さしもの志貴・宇佐美も、始終の哀共を聞屆け、實に理至極せりと、共に淚に咽びける。平次少し顏を振揚げ

て、人木石にあらずとかや。旁も某が一言の耳に入りて候か、落涙の體の見え候といふ。宇佐美之を押へ、今の御邊が物語を聞きて、爭でか落涙せざるべき。尤なり理なりといへば、平次大手を叩き打笑ひ、それ見給へ。泣かし申して候なり。今申せしは、皆僞にて候ぞや。是にても泣き給はずば、此上如何程も術の候ぞやといふ。兩人大に驚き、扨も希代の泣手ぞや。如何様にも能き謀の便とぞならんずらん。明將の深慮を以て、召抱へ給ひぬるものを、我々が拙き心を以て、兎や角思ひしは、皆是れ智の至らざる故ぞとて、先非を悔ゐて、志貴、間杉を様々と饗應し、引出物を與へて歸しけるとぞ聞えし。然るに此度、官軍坂本に引返せしかば、其夜亥の下刻に及んで、楠正成、義貞の本陣に至り、近習の者共を除き、忍びやかに私語かれけるは、新田殿を始め、宗徒の諸將を討ちたりとて、似せ首をして京都に梟け置き候由、忍の者共來つて、告げ知らせ候なり。是に付き能き術の候。某が家人に間杉平次とて、奇妙の泣男候へば、明日僧を仕立て、彼者に倶はしめ、今日の戰場にて歎かせ候はん。然らば京勢怪みて、事の様を尋ねんか、其時彼者、是は楠殿のゆかりにて候

が、昨日正成は、矢に當つて死し給ひぬ。義貞・顯家・忠顯・長年以下、宗徒の人々討たれ給ひ候故、御跡を弔ひ候はんが爲め、其遺骸を求め候なりとて、常々楠が情を深く蒙りしなんど語り候はゞ、俱ひし僧も、共に泣き候べし。然らば足利兄弟に、此旨を告げんは治定なり。尊氏・直義も、扨は宗徒の官軍、討たれたるに紛れなしと、心を兎して ぞ悦ぶらん。其處を夜半過ぐる頃、下部共に松明二三千燈させて、四方の山々へ行かしむべし。兄弟之を見て、すは官軍は落ち行くぞ。追懸けて討留めよと、諸方へ勢を分けてぞ遣し候ひなん。其跡へ、味方一手になつて押寄せ候はゞ、足利兄弟を討取るべし。討泄らすとも、容易く京を追落し候はんものをと宣へば、義貞是こそ能き謀にて候。さりながら其泣男一人こそ泣かめ、俱ひし僧は、いと可笑しかりなんとて打笑ひ給ふ。正成、さればとよ、彼が泣くを聞きては、如何なる者も、落涙せずといふことは候はずと宣へば、新田殿、扨々希有の男を御扶助あるものかな、とく〳〵と急ぎ給ふ。正成それより諸將に此の由を談じ、陣所にぞ歸り給ひける。

間杉僞つて剃髪の事

斯くて楠正成は、傍り近き里に律院のありければ、彼の寺僧を悉く請じ、右の術をいひ聞かせ、深く賴み給ひけるに、戒法を破るにて候へば、叶ひ候まじと固辭しければ、然らば寺には得こそ歸し申すまじけれとて、禁籠して置き給ふ。是は此謀を世に泄らさじが爲なり。其後間杉を招き、謀の次第を委くいひ含め給ひければ、畏つて候とて、白き絹を天卷し、萌黃絨の鎧の爽かなるに、山鳥の羽にて矯めたる矢を負ひ、村滋藤の弓を持ち、鹿毛なる馬に乘つてぞ打出でける。爰に和爾里に來迎院とて、念佛寺のありけるに、彼寺の門前に馬を駐め、さめ〴〵と泣き居たり。寺僧怪しみ、如何にや如何に、痛手にても負ひ給ひつると問ふ。間杉馬上にて、弓杖に縋り、いやとよ、手も負ひ申さず。某は楠殿の家人間杉の平次と申す者にて候が、幼少の頃より廷尉に仕へ參らせて、寵愛甚だしく、晝は終日膝元を離れず、夜は終夜席を同じうして、厚恩を蒙りしに、昨日の合戰に敢なくも、正成討たれさせ給ひて候。其

時しも御傍を離れ、神ならぬ身の悲しさは、斯くとも思ひ寄らず、逃ぐるを追うて、紫野の方まで馳せ行きて、其よりは直に引返し、坂本まで引取り候處に、大將討たれ給ひぬと聞きしかば、今は何をか期すべきぞ。同じ戰場の土とならんと、千度百度取つて返し候ひつれども、人々懷き止め、樣々制し諫めし故、心ならず、扨止つて候なり。今宵つくづくと案じ候に、某討死仕りたりとて、君の冥土の助けともなるまじければ、之を菩提の種として、出家遁世の身ともなり、亡君の御跡をも弔はんと、思ひ返し候なり。法師になして給はるべしと、聲を揚げて泣きけるが、餘りに泣入り、馬より落ちて、絶え入る計に泣きければ、寺僧等内に舁入れて、水藥など與へければ、人心出來にけり。平次涙を押へながら、此上は疾く法師になしてたび給へとて、頓て剃髮をぞしたりける。平次重ねて、切めては亡君を始め、宗徒の大將達の死骸を尋ね、密に葬り參らせて、御菩提をも弔ひ奉りたく候が、旁も共に尋ねて給はらんにやといへば、其こそ出家の役なればとて、寺僧四人打連れて、昨日の戰場にぞ至りける。

足利殿京都沒落の事

斯くて平次は彼所此所と屍骸を尋ね求めけるに、昨日京勢の中に討たれたる者共の、親又は子供の、其死骸を求むる者共多かりけるが、彼法師のいと哀れに歎くを聞きて、怪み尋ぬる者多かりし故、然々の由語りければ、聞く人涙を流しける。尊氏兄弟卽時に之を傳へ聞き、昨日義貞・正成以下討死したりとて、首共を持參せしが、分明ならず思ひしかども、先づ味方の勢を勇めしめんが爲め、獄門に梟けしなり。憖に實否を聞き定めよとて、伊勢左京亮・石堂彌四郎を差遣はさる。兩人も死骸を尋ぬる者の體に見せ、彼僧に、事の由を問はれければ、然々の由語りて、覺々とぞ泣きにける。兩人も覺えず淚に咽びけるが、急ぎ歸つて此由を申上ぐる。將軍兄弟大に悅び、宗徒の輩の、多く一同に討死せしは、實しからずと思ひしに、扨は疑ふべくもなし。山門を攻落さんことは、一戰の中にありと勇み給へば、諸軍勢も泰平を唱へて、悅ぶこと限りなし。間杉は、其夜の亥の刻計りに坂本に歸り、正成に斯くと

語りければ、いしくも謀り課せたりとて、雜人共二三千人に、松明を燈しつれさせて、方々の山々へぞ遣はされける。將軍兄弟之を見給ひ、官軍は今宵落行く〳〵覺ゆるぞ。一人も泄らさず討留めよとて、鞍馬寺・小原口・嵯峨・仁和寺の方までも、千騎二千騎差遣されければ、京中の勢は、殘り少なになりにけり。正成は、猶も敵の樣を窺ひ知らんが爲め、足輕の兵五十人づつ落人に似せ、勢多・小原の方へ差遣されけるに、敵兵共支へ止めんと、方々に充ち滿ちて候といふ。正成、扨は思ふ圖に仕課せたりとて、諸將に觸れて、既に備を出し給ふ。先陣は千種忠顯・名和伯耆守・結城九郎凡そ一千五百餘騎。二陣は北畠源中納言顯家卿七千餘騎。三陣は洞院實世一萬餘騎。四陣は義貞一萬餘騎。五陣は正成三千五百餘騎。廿九日の卯の刻、二條河原に押寄せたり。豫ては忍びやかに、尊氏の東寺の陣へ不意に押寄せ、無二無三に切入りて、尊氏を討たんと議せられける所に、先陣の忠顯、終夜の酒宴に沈醉せられけるが、手の法令正しからざるか、三條二條の河原面、此彼に火をかけて、鬨を咄とぞ揚げたりける。尊氏兄弟は、前後も知らず伏し給ひけるが、大に驚き、又例の楠目に、

尊氏、丹波に奔る

方便かられぬるこそ安からねとて、未だ敵の旗先をも見給はず、尊氏は、丹波の方へと落ち給へば、直義は、攝州の方へぞ逃げられける。大將旣に斯の如くなる上は、諸勢、主を捨て親を跡に置きて、我先にと落行くを、追懸け〳〵討取りたり。義貞は一萬餘騎にて、將軍塚に陣し給へば、正成は整々として、三條河原に控へらる。今日所々より集る所の首數七千三百餘級、生捕二百餘人、前代未聞の事共なり。生捕の者共に尋ぬれば、足利殿は、丹波の方へ落ち給ひしといへば、正成諸將に會し、新田殿、明日丹波へ向ひ給へ。正成先陣仕らんと申さるゝ。義貞聞き給ひ、某が勢も、大に疲れて候へば、四五日人馬の足を息めてこそと宣へば、正成、いや〳〵、逃ぐるを追ふに如かずとは此時なり。味方疲れ候へば、敵も疲れ候なり。討つべき敵を討たざれば、敵又蘇る者にて候ぞ。諸卒の疲は僅の勞、足利を討たんは、末代までの善事なりと諫めらる。然れども義貞は、諸卒の兵糧なしなんどいうて進まれず。正成重ねて、三日の糧を持ち給へ。假初の働きにも、三日の糧を持ち給はぬは、不覺にこそ候へ。正成が勢の中には、さなき者は候まじと宣へば、御本場の近ければこそと

宣ふ。よし〳〵此上は、顯家卿御向ひ候へと宣へば、節度は、新田こそ給はられて候へ。顯家は朝の御大事なれば、上洛したる計なり。義貞向はれずんば、誰にても武家の輩向はれよとて、曾て許容し給はねば、此事も止みにけり。是は去る十六日、義貞僅一萬の勢を以て、數十萬の大敵を破ること、希代の良將なりとて、主上限りなく叡慮あつて、勾當内侍といふ美女を、義貞に下されけり。是より義貞心迷ひ、一夜の別れを悲みて、千年をも過す計に思はれければ、左右に事を寄せられけり。されば其夜も、都にある體にもてなして、忍びやかに東坂本に歸り給ひしとぞ聞えし。先の夜足利殿、落人を討留めさせんが爲め、方々へ遣されたる軍勢は、山法師共、野伏と一手になつて、追懸け〳〵討取りしかば、落延びしは希なりし。所々にて討取りし首一千餘級、志賀の閻魔堂の前にぞ梟けにける。斯くて正成は、間杉に、若干の恩賞を與へらる。後に間杉左兵衛尉といひしは此者なり。

義貞、勾當内侍に通ふ

南朝太平記卷第十終

南朝太平記　巻第十一

八幡寄手出ニ降人一井宇都宮公綱降参の事

楠判官正成は、豫てより八幡山に、恩地左近太郎滿一を、一千餘騎にて籠め置き給ひける所に、武田式部大輔・小笠原孫八・下條・上條以下六千餘騎にて、十日計攻めけれども、士卒のみ討たれて、城には少しも氣を屈せず。然るに去廿七日より、正成、八幡の援兵として、和田和泉守正遠を、三千五百餘騎にて差遣さる。斯る所に足利殿、正成の奇妙の術に碎かれ、廿九日に都を落ちて、丹州に赴き給ひしかば、正成諫めて、義貞と共に、丹州に向はんと宣ひしかども、義貞用ひ給はざれば、正成も力なく、二月朔日、山崎に發向し給ひしが、朝敵既に敗れたるに、八幡の寄手、今に城を取巻きたるは、必死と思ひ定めしと見えたり。之を討たんとせば、味方も多く討たる

べし。一蒸蒸して、敵の勇氣を拔かんにはとて、近邊の野伏共に下知し、燒松を三千餘ともし連れさせて、飯盛より山崎へ、勢の加はる體を見せたりければ、武田、式部大輔・小笠原孫八大に驚き騷ぎ、迚も叶ふまじとや思ひけん。翌二日降人になつて出でたりける。　爰に宇都宮治部大輔公綱は、今度足利殿に屬し居られける所に、去る廿九日、將軍に從ひて都を落ちられけるが、忍びやかに正成の陣へ使者を遣して申されけるは、某事、此度東國に於て、大敵に前後を圍まれ、既に討たれぬべく候ひしかば、命を全うし、重ねて忠義を盡さんが爲め、一旦足利に降りたるにて候。此罪を免許あるに於ては、御味方に參つて、忠戰を抽づべく候。先年も楠殿の吹擧による者なれば、此度も御一諾を待ち候とぞいひ遣されける。正成使者に對面し、急ぎ馳參り給ふべし。天氣の事は、正成宜しく申沙汰仕らん。御心安かるべしとて、使者を返されければ、和田正遠・恩地滿一、正成の前に參り、公綱が如き不義の者候へば、味方互に心を置合ひて、却て禍の出來り候なり。我々出向ひ、卒爾の體にもてなし、軍門に曝し候はんといふ。正成聞き給ひ、兩人の申されやう、其理なきに非

ずと雖、其は流を窺つて、源を知らざるなり。其故は、公綱は英雄の士なりと雖、文學を學ばずして、仁義を知らず。されば伊尹の如き大賢だに、殷王の小善を惡み去り、夏王の不善を見て、又殷に歸せり。韓信は英雄の士なりしが、項王諸將を侮りし故に、韓信去つて高祖に服す。是れ臣の是非は、王の善惡に依るものなり。伯夷叔齊が餓死せしは、賢なるが故ならずや。宇都宮何ぞ賢なるべき。四海一統に歸せん時、守文の難きことを、主上叡慮にかけさせ給ひなば、新田・足利何ぞ雅意を働かん。君御身の奢を思召さず政正しく、士を懷け民を憐み給はゞ、藤房の如き賢臣、何ぞ去つて隱るべき。然らば天下の士、君を恨み奉るべからず。天下の士恨みずんば、逆臣爭でか興るべき。斯くして大塔宮四海を守り給はゞ、公綱が如きは、禁門の警固にぞ候ひしならん。然らば、何故にか降人とはならん。是れ其罪宇都宮にあらずして、君の所爲なること明らけし。正成に於ては、死を一途に定めて、忠戰を遂げんと欲す。公綱如きの輩、何ぞ忠義の志あらんやと宣へば、正遠も滿一も、感涙を押へて立ちけるが、諸士に向ひ、殿は天晴智仁勇の三德を兼ね給ひ、呂望・子房の地位

に至り給ひぬれども、子路の志あつて、人の爲めに肉を傷はれ給はんかというて、涙を流しける。是に依つて宇都宮公綱・紀淸兩黨の者共、旗を卷き兜鍪を脫ぎて、山崎の陣に來りければ、正成使者を添へて、京都に差上せられけるに、新田殿は、早坂本へ引取り給ひて、都には居給はず。正成此事を聞き給ひ、又天下は、朝敵の者となりなんずるぞとて、頭を搔いてぞ怒られける。

宇都宮公綱降る

兵庫合戰并足利殿西國下向の事

廷尉正成は、猶も思慮を巡らされ、松浦・櫻井・深谷次郎を大將にて、攝津・紀伊・和泉三ヶ國の兵船百八十餘艘、兵庫浦へ差向けて、民屋を燒立てよ。其煙を見て、敵は兵庫へ集まらんとなり。此勢、二月二日の曉天、和田御崎に着きて、三手に分れて揚りたり。其一手は、松浦が勢七百餘騎、兵船五十艘にて、和田御崎の北の內海より押上れば、櫻井が七百餘騎は、是も兵船五十艘にて、御崎の南の外海より押上る。此の二手の勢は、兵庫の宿に亂入し、民屋に火を放つて、暫時の煙と燒立つる。深谷次郎

は一千餘騎にて、八十艘の兵船を、和田御崎に浮べ、陸に備へて控へたり。此時足利直義の軍勢共落集つて、八千餘騎にて居給ひけるが、京都の軍に心後れしたる者共なれば、士卒駭き騒ぎ、やれ楠こそ寄せたれとて、何と見定めたることもなく、十方に落行きたり。細川清氏六百餘騎、敵は小勢ぞ。引く所を討取れと、一手になつて追懸くる。寄手は、櫻井引けば、松浦は返し合せて相戰ふ。松浦引退かば、櫻井返し、斯の如くして、次第々々に引いて行く。細川は、敵の舟に乘る所を討取れと、會釋して追行く程に、和田御崎に至る所に、深谷が勢一千餘騎、入替つて防ぎしかば、細川が勢、案に相違してぞ覺えける。深谷が勢は、松浦・櫻井が勢千四百餘騎、易々と舟に乘つて後、西の宮の渚に船を一面に並べ、中なる道を一文字に、洲崎を指して引いて行く。細川が勢、追討たんとすれば、敵兩方より、雨の降る如く散々に射たりければ、さしもの淸氏力なく、牙を嚙んでぞ引取りける。斯くて尊氏卿も、兵庫に落來り給へば、大内・厚東も、兵船五百餘艘にて來着せり。足利殿大に悅び給ひ、此勢を合せて、翌十一日攻上り給ふ所に、新田義貞・北畠顯家・楠正成以下の官軍と、同

國瀨川の河原にて行合ひ、爰を詮と戰ふ程に、細川賴春も、痛手負ひて引退かる。斯くて兩陣相引に引退き、人馬の足を休めける所に、夜更けて赤松圓心、足利殿の前に來り、密に申されけるは、此陣を打破つて都へ攻入り候とも、大功はなし難く候。暫く西國へ御落あつて、重ねて御上洛候へかし。其上官軍は、錦の御旗を先立て候に、味方是に對向の旗なき故に、朝敵の名を蒙り候。所詮持明院殿の院宣を申下し、錦の御旗を先立てられ候へ。去年味方利を失ひしことは、大將軍西に候ひし故、關東より御上洛の時、每度戰に利を失ひ候ひし。今西國より攻上らせ給ひなば、洛中の敵は、大將軍の方に向ふべく候へば、旁御本意を達せらるべく候。先づ摩耶の麓へ御退き候へと諫めければ、將軍許容し給ひ、熊野別當四郎法橋道有が、其頃未だ童形にて、藥師丸太平記に、將軍、丹波より津の國へ越し給ふ時、藥師丸を京へ上せ給ふとあるは誤なり。其上道有が末と書けるは、未だと書くべきを誤りて、末に作れる者なりとて御供したりけるを、院宣を窺ひ申して見よかしとて、忍びて都へ上し給ひ、夜半に及んで、瀨川を引拂ひ給ひ、十二日の卯の刻、兵庫に着陣し給ふ所に、其日の酉の刻計より、誰の乘り始むるともなく、我先にと船に乘込みしは、慌しかりし分野なり。

尊氏、西國に退く

戌の刻計に、御座船を出さる。相從ふ船三百餘艘なり。時に俄に西風吹き出づる。是はたつというて、追手なりければ、寅の刻に、播磨の室津に着き給ふ。其渡りは播磨灘とて、順風ならでは渡海せざる所の大事の渡りなれば、若此風なくては、浮沈たるべき所に、是れ神佛の御加護なりとて、直義朝臣太刀一振と佛舍利とを、龍神に手向けて、海底に沈め給ひしとぞ聞えし。

正成忠言同北畠殿と會談の事

さる程に、將軍尊氏西國を悉く靡け從へ、多勢を以て攻上らるゝ由聞えしかば、主上、義貞・忠顯・正成・長年を召され、先づ東國を敵になしては叶ふまじければとて、北畠黄門顯家卿を、鎭守府將軍になされ、奥州へ下さるべきに定まりぬ。左中將義貞には、十六ヶ國の管領を許され、足利討伐の院宣を下さる。正成・長年は、都にあつて守護し奉るべしと敕諚ある。此時正成、坊門宰相清忠に向ひ、此度は東國の勢をも召上せ、足利追罰のことを御急ぎ候べきに、顯家卿の東國下向は、如何候らん。新

田殿、追手の大將にて候はゞ、北畠殿は、搦手に御向ひ候へかし。北畠殿奥州御下向は、味方二萬餘の弱(よわり)にて候はずや。若敵强くして、勝に乘らん時、數百里の道を隔て、又東國より上洛し給はんことは、大儀の計略にて候はん。又都には、義顯・忠顯・長年以下、宗徒の人々候へば、心安かるべく候なり。正成は、新田殿と共に、西國に罷向ひ候はんと申さる。清忠聞き給ひ、公儀旣に定まりぬる上は、今少し遲くこそとて立たれければ、正成も是非なく退出し給ひけり。斯くて正成は、翌日北畠殿の亭に至り、今般の戰功に依つて、大將の位に備はり給ふこと、目出度存候なり。隨つて義貞西國下向のこと、今廿日の內にて候はゞ、敵の城廓未だ調ふまじ。又諸國の兵も、一偏には、足利に隨ふこともあるまじければ、必定味方の勝にてぞ候らん。然れども義貞女色に迷ひ、軍事を忘れ給ひぬれば、廿日卅日の內には、よも西國に下向はし給はじ。然れば漸々として、播州邊までも下着し、城々を攻めて疲れたる所へ、尊氏大軍にて攻上らば、必ず味方敗軍たらん。其時は君重ねて山門に行幸坐すべし。某は討死仕るべし。殿は早速多勢を催し、再び上洛なされ、王化を助け給へ。

是ぞなからん跡迄の、兼言にて候ぞと、涙をば流されける。其後猶も傍近く居寄り、御存の如く義貞は、さる將にて候ひしかども、主上勾當の內侍を下されてより色に迷ひて、彼人の心中醉ひるが如し。其上君の御政、人望に背きしに依つて、諸國皆足利に靡き從ひ候なり。正成夙に夜半に、此事を案じ候に、兎角足利と御和睦あつて、所領等元の如く、忠あらば重ねて恩賞あるべしとて、足利を召上せられ、義貞と年來の確執を忘れ、水魚の思をなすべしと、敕諚なされ候べし。正成御使を承つて、祕計を巡らし候はん。然らずんば足利、終には天下を奪ひ候はん。義貞若し敕命に應ずまじくば、正成承つて誅伐仕り候べし。新田とても、忠臣には候はず。正成御使として、此事を取計り候はゞ、足利も此春の敗軍に懲りて、敕諚に從ふべきは治定なり。其上にて尊氏、又敕命に背きなば、謀り寄せて刺殺し候はん。事いと易く候ひなん。此の如くに仕り候はでは、世の治ることはあるまじく候。此事密に泄らさず奏聞あつて給はり候へ。若し君此事を御用ひなくんば、聲花に討死して、忠貞を顯はし候はんと、涙をはら〳〵と流し給へば、顯家卿、如何樣にも天氣を窺ひ、密

に奏聞を經候はん。然れども尊氏は、よも上洛は仕るまじと宣へば、其事候。足利難澁仕らば、愚息多門を尊氏が方へ渡し候はん。君の御爲ならんには、などか實子を捨て候はざらんと宣へば、顯家卿も感涙を流し、後日に此事を奏聞し給ひけれども、正成が申す所一理ありとはいひながら、天子、朝敵に對し和をなさん事、其先例を聞かず。九國の者共が一味したりとて、何程の事のあるべきぞ。義貞に力を合せ、朝敵誅伐の謀を巡らすべしと、勅諚ありけるこそ是非なけれ。

足利殿自二西國一上洛附佳瑞の事

さる程に將軍尊氏卿は、赤松が注進に依つて、四月三日太宰府を進發あつて、長門の府にて、暫く御逗留あり。然るに去元暦の古、源義經、壇浦の戰に乘り給ひし當國串崎の船十二艘は、平家追討の後、義經此船に於ては、日本國中の津泊にても、公役あるべからずと、自筆の下文を與へられしを、十二艘の船頭の子孫、今に之を帶すとかや。今般も厚東が申沙汰するに依り、此船を以て御座船と定めらる。尤佳例に

尊氏直義九州より攻上る

相協へり。同じき五月五日、備後の鞆に着き給ひ、爰にて合戰の評定あつて、將軍は海上を御上りあり。舍弟左馬頭直義は、陸地より上り給ふ。此手の先陣は、太宰小貳賴尙、二千餘騎にて進みしが、旗の橫紙に文檜笠(あやひがさ)を附けたり。是は御眷屬御靈影向ありて、蟬口に御座の故に、昔より此家の故實なりと聞えし。同じき十日鞆を立ち、船地陸地、同日に進發し給ふ。御船五十餘町を過ぎて、向ふを屹と見渡したれば、兵船多く漕ぎ來る。中にも先船には、二つ引兩の紋付きたる幕を引きて漕ぎ向ふ。之を見て、誰いふともなく、楠正成が謀にて、味方と號して向ふぞと、いふ程こそあれ。こは如何にと上下周章(あわて)騷ぐ所に、さはなくして、西國の細川の人々・土岐伯耆六郎・伊豫の河野の一族以下、其勢五千餘騎、兵船五百餘艘に取乘つて、漕ぎ參りけるにぞありける。同じき十五日、備前の兒島に着き給へば、加地筑前守渚近く、假の陣營を作り、風呂などしつらひ、他事なく饗應し參らせしに、其夜の滿月なるに空を見上げたれば、足利家の紋の如く、黑雲二筋引渡し、數刻見えし程に、軍勢皆合掌して、暫く之を拜す。加之此度不思議の吉兆ども多かりし。其故は、太宰府に

御坐せし時、博田櫛田宮、住吉の社の下女に託して宣はく、我れ將軍を都まで送るべきが、路に合戰なくては叶ふまじ。白旗一流・鎧・御劍・征矢幷に上矢の鏑を添へて獻ずべしと、神託あらたに下りしかば、足利殿悉く之を調進し給ふ所に、使者の見る前にて、神託を口走りし女、頓て弓押張り、上矢の鏑を取りて番ひ、汝等我を疑ふこと勿れ。いで〳〵其證を見せん。武將今般四海の主となり給ふべくば、此矢一つも外るべからずとて、樗の木の細き枝を射ること三度に及びけるに、一つも外れざるこそ不思議なれ。又天神の仕者御靈合戰の度每に、光を耀し給ふ。其餘の佳瑞計ふるに遑あらず。又諸勢上下兜鍪の眞向に、南無三寶觀世音菩薩と書附けて、每月十八日、觀音懺法を讀ませられけるとぞ聞えし。斯くて陸地の勢は、播磨の懸河に陣を取れば、海上の兵船は、室の泊に漕着くる。然るに室と兵庫の間の海は、をしてには播磨灘とて、以前足利殿九州下向の時の如く、勝れたる順風を得ずしては、渡されざる難所なる故、日を待ちし程に、旣に陸地の勢は進むと雖も、徒に日を送る所に、五月廿三日の戌の刻、雨交りに西風少し吹出でしかば、將軍大に悅び給ひ、是れ天

の與ふる所なり。早く纜を解くべしと宣ひしかども、海上の事は、其道を得たる船頭共の意見を御聞き候へかしと申しければ、足利殿、此儀尤なりとて、御座船串崎の船頭、千葉大偶守が船をきはしの船頭、大友小貳、長門・周防の船頭十餘人を御前に召されて、御尋あり。船頭共承り、此風今は順風にて候へども、月の出潮には、風替つて向ひ候べければ、御出船は中々思ひ寄らず候といふ。玆に上杉伊豆守重能の乘船、今度船と號し、船頭は長州阿武郡椿浦の孫七と申しけるが、是こそ目出度順風にて候。其故は、雨は風の吹出でてより降り候へば、月出でなば、雨は降り止み候ひなん。風は少しこはく候とも、追風にて候はんと申す。足利殿、再三御感あつて、孫七を左衞門尉になされ、古、九郎義經、渡邊より出船せしは、大風なりしか共、順風なればこそ渡りつらめとて、雨の止むをも待ち給はず、只一人の船頭が申條を許容あつて、御座船を出さるゝ。兵船五千餘艘と聞えしか共、其夜御供に出し舟、三千艘には過ぎざりけり。月の出潮を待ちて、室より五十町東なる杓子浦といふ處に船を掛けらるゝ。風は强かりしか共、順風なりしかば、皆帆を上げて馳せける程に、難なく

廿四日の暮程に、播州大藏谷の澳に、碇を下してぞ掛り給ひける。玆に新田左中將義貞は、播州に馳向つて、合戰中なりける所に、尊氏多勢を率し、海陸二手に分れて攻め上らるゝ由聞えしかば、小勢を以て大敵を凌がん事は、叶ひ難しと思はれしかば、諸方の勢を引拂はせ、五月廿三日に、兵庫迄引退かれしに、早軍勢落失せて、二萬騎にも足らざりしかば、急ぎ京都に飛脚を馳せ、加勢を賜はるべしとぞ乞はれける。

尊氏播磨に上陸

正成諫奏附淸忠被レ失二面目一事

義貞朝臣の早馬に依つて、主上大に驚かせ給ひ、楠河内判官正成を召され、急ぎ兵庫に馳下つて、義貞に力を合すべしと勅諚ある。正成畏つて承り、勅命を違背仕るにては候はねども、此度は義貞朝臣、合戰に怠ある故に、斯くはなり來り候なり。最前尊氏九州に落行きし時、義貞、備中の邊までも追懸けて下られなば、中國は悉く王化に從ひ候はんに、兵庫より歸京ありしは、何の用にて候ぞや。其後赤松入道圓心、備前・播磨兩國を賜はつて、降參せんと申したりしも、勅許なし。是は君の御誤に

て候ひし。義貞日を經ず、西國に下向し給はゞ、味方多く出來り、足利滅亡に及ぶべきに、京都に滯留すること五十餘日、其間に足利、又勢ひ强大になりて候なり。又赤松が味方を計り、綸旨を欺き候を、義貞大に憤り、之を討たん爲に、僅なる小城に數萬の勢を勞せさせ、大敵九州にあるを忘れ給へり。正成之を思ふに、心中安らず、義貞の陣に使を遣す事、七度に及び候ひき。義貞是に依つて、勢を西國へ分ち遣され候ひし。然らば敵の赤松は小勢なれば、義助に五六千の勢を添へて殘し置き、其身西國に向はるべきことなるに、さはなくして赤松が小城を、數萬騎にて之を攻め、敵將尊氏が請手として、義助に一萬にも及ばざる勢を差添へ向けちれしは、何事にて候ぞ。是れ大敵來らば、逃げ退かんと見えて候。足利向ふと聞えなば、義貞は播州に一城を築き、勢を入置き、備中邊に下られなんに、海陸二手の敵なれば、目に餘る程の事は候まじければ、軍は味方の勝利にて候はん。然らば怯弱の尊氏、又舟を返して、逃げ歸り候べきに、何の術もなく、兵庫まで引退き、海陸の敵を一所に受けて、戰はんと申さるゝ條心得ず。多勢の敵は、餘多に分けさせ度事に候。陸の敵と合戰

を挑み候はゞ、海上の敵、西宮・葦屋の灘より打つて上らずといふ事や候べき。兎角義貞朝臣を召上せられ、又山門に行幸候べし。正成は河内に歸り、河尻を差塞ぎ、敵を兵糧に疲らし、先後より挑み立て攻め候はゞ、一戰に勝利を得べくと申さるゝ。諸卿此事如何あらんと、重ねて僉議し給ひけるに、坊門宰相清忠進み出で、正成が申條一理ありと雖、節度使未だ一戰にも及ばず、其上一年の内に、二度まで山門に臨幸あらん事も、亦帝位の輕きに似たり。逆徒多勢にて攻上るといふとも、何程の事のあるべきぞ。每度大敵を小勢にて攻敗ること、偏に聖運の、天に叶はせ給へる故を以てなり。只々時を移さず、楠罷向ふべしと申されしかば、正成も力及ばず、御前を立たれけるが、坊門清忠・千種忠顯・坊城經顯三人を閑所に招き、佞奸の臣とは、此清忠卿の事なるべし。此人、君の傍にあつて、萬事に口入し給ふに依つて、天下の亂出來れり。今般も正成が申す所、理に當つて覺え候へども、清忠の邪言に依つて、君を始め奉り、諸卿皆理に迷ひ給へるなり。正成は討死して、二心なき所を世に顯はし候はん。然らば天下は、尊氏が掌握に落ち候はん。顯家卿をも、都に留め給へと

申つるものを、淸忠の支へにて、君許容坐さぞ。今は後悔にぞ候らん。赤松が降參のことも、亦貴邊の妨げられしと聞えしなり。當時の朝敵は、足利には非ずして、准后と淸忠との二人なり。足利が陣に馳入りて、討死を遂げんよりは、淸忠の眞向を梨刻に切碎き、自害せんと、千度百度思へども、却て不忠の惡名を得ん悲しさに、存念を晴らさぬなり。正成は數年の戰功を空しくして、討死を遂ぐるとも、子孫忠臣を飜さず時を窺ひ、君を再び御位に卽け奉れと、遺言仕り候ひなん。今は是迄にて候ぞと、淚を流して立たれければ、諸卿も興覺め色を變じ、詞なうしてぞ居給ひける。主上此事を聞召し、大に御後悔なされしかども、一度下りし綸命なれば、扨止ませ給ひけるとぞ聞えし。

正成兵庫發向の事

さる程に楠廷尉正成は、三千八百餘騎を相從へ、卽日京都を打立たれけるが、嫡男多門丸、其頃は庄五郎正行とて、十一歲にて、千劒破に居られけるを、深き慮あつて、

正成、正行に遺誡す

豫て京都に呼寄せ置かれければ、相具して出でられけるが、櫻井宿にて、正行を傍近く招き寄せ、鬢の髮を撫上げて宣ひけるは、今般の合戰に、正成は討死と思ひ定めたり。汝は是より故鄕に歸つて身を全うし、能く郎從を扶助すべし。委しく我心中をいひ聞かせ、庭訓を殘すべし。君の御心正しからず、義貞又忠臣にあらざれば、天下を平治せんこと叶ひ難し。正成討死を遂げなば、天下は必ず尊氏が有とならんずるぞ。然りとて身命を助け、一旦家を立てんが爲め、降人に出づること勿れ。其の爲に家の子郎從多く附置くなれば、敵寄せ來らば、金剛山に引籠つて防ぐべし。夫れ所領の多からん事を願ひ、家の富貴ならん事を欲するも、世に人と呼ばれんが爲ならずや。苟も敵に降參し、數ヶ國の領主になりたりとて、何の面目かあらん。されば君子も、不義にして富貴なるを、浮べる雲に譬へ給ふ。穴賢君に不忠をなすべからず。是れ汝が第一の孝行ならん。又弟共を憐れみ、水魚の思をなすべし。父が如くに郎從を扶助せよ。辛き目を見すべからず。郎從は主を賴み、主は郎從を賴みて、君の御用には立つ者ぞかし。諸事母に語ることなかれ。和田殿・矢尾・恩地を以

て父と思ひ、毎事此人々の計らひに任すべし。十五になりなば、義と理とに心を付けて、學文に怠る勿れ。強ちに文字を知り、諸語を覺えんと思ふべからず。文の義理を曉すべしとて、國を治るの道、法禮の式、自筆に書き給へる卷物一卷、箱に入れて渡し給へば、正行は兎角の事をもいはず、わつと叫んで平伏し給ひければ、父を始め乳母夫郎從等、漸々と賺し宥めけり。正行いはけなき身ながらも、涙を押へ、父上に別れ參らせて、河內へは歸るまじ。わらはも是非に御供し、討死仕らんと申さるれば、正成も涙に咽びながら、汝を故鄕に歸す事、不便なるに非ず。君の御爲め家の爲を思ふに依つてなり。さ程にいひ甲斐なき心にては、行末降參不義の行跡をやせんずらんと、或は怒り或は宥めて宣ひければ、然らば兎も角も仰に從ひ候はんとて、涙に咽ばるゝ。正成大に悅び、けなげなり／＼。是は祖父刑部大輔正俊より相傳の家寶、力士といへる太刀なり。父を戀しく思はん時は、之を見よとてぞ渡されける。矢尾・恩地を始め、數百人の郎從共、俄の事の出來たる樣に、物をもいはず、差俯きてぞ泣き居たり。

正成被レ遺二金言一事

斯くて正成、和田和泉守正遠・恩地左近太郎滿一・矢尾別當・湯淺孫六を傍近く招き、旁は正行に從ひ、千劒破に歸り、正行を守立てられよ。我戰死せば、天下は必ず足利のものとならんずらん。然らば當家を味方に屬せんと、樣々謀を巡らすべし。必ず謀に乘るべからず。足利兄弟、天下を治る器にあらず。君をも失ひ奉る迄の事はあるまじければ、時を待ちて、君を再び御世に卽け參らせよ。其とても叶はざらん時には、當家も君と共に亡ぶべし。正成一戰の功に依つて、一門に賜はる所の國四ヶ國、其外數ヶ所を領す。是れ莫大の君恩にあらずや。其厚恩を忘れ、大逆の賊徒に從ひ、何ぞ不義の富を受けん。義に、一命と家とを替へて、美名を後天に擧げんと思ふなりと宣へば、暫くあつて正遠、某退いて愚案を巡らし候に、討死と思ひ定めさせ給ふ事も、餘りに御心短くや候らん。四ヶ國の勢、晝夜を分たず馳參らば、明日明後日には、馳せ參り候ひなん。其勢二萬は候べければ、伊丹・尾崎邊にて防ぎ戰はんに、

などか勝たで候べき。一先づ殿は虚病を構へ、千劍破へ引籠らせ給ひ、正遠兵庫に罷向ひ、義貞に力を合せ、一戰を挑み候はん。叶はざらん時は、河内に退き候はんに、何條事の候べき。其時新田殿は、山門へ行幸をなし奉られなん。當家謀を以て戰はせ給ひなば、足利を追落さん事、五十日の内にありと、覺え候へと申さるれば、滿一、和田殿の仰、理に當つて覺え候。名將の死を輕くし給はん事は、卒爾の御働きにや候らん。當手の二萬餘は、金鐵の兵にて候へば、尊氏の上洛、今五日延引あらんには、陸地の敵を新田殿に防がせ、海上の敵を當家請取り、去年より用意の大船三艘、凡そ敵船にもあり難き大船にて候。其餘三ヶ國の兵船を揃へ、兵軍に馴れたる勢を選み、滿一罷向ひ候はん。舟をば難波の浦尼崎邊に揃へ、殿は兵庫西宮の間に陣せさせ給ひ、謀を以て戰はせ給ひ候へかしといふ。廷尉聞き給ひ、足利を滯留させんは、いと安き謀あり。其故は、尊氏、豫て和を成さんと思ふ心あり。正成此事を取計はんと、使を遣さば、尊氏如何樣にも申請くる旨あるべし。其使往返の間に、十日を過さんは安かるべし。然れども正成、敵を防ぎ兼ねて討死といふにはあらず。謀はい

くらもありぬべけれども、君の御行跡惡ければ、足利亡びたりとも、新田又天下を奪ひなん事、掌を指すが如し。足利にも御懲なく、義貞にも亦十六ヶ國の管領職を賜はりし、足利滅亡の後召返されんには、義貞恨みを懷きて、天下を覆さんは治定なり。加之正成にも、九州の管領を賜はりし。兩家、中國・九州を管領せば、戰功ある諸士に、何を以てか忠賞を行はれん。然らば諸士彌憤りて、義貞に屬せば、味方利を失はん事必せり。義貞天下を奪ひなば、古の頼朝の如くならん。然らば何としてか、再び公家一統の世とはなすべきぞ。之を思ふが故に、正成死を思ひ極めたり。新田を亡ぼさんが爲にこそ、討死とは思ひ詰めしなり。正成世にあらん程は、義貞も亦亡ぶまじければ、新旁我深慮を能々御心せられよ。正成、新田を攻滅し、四海を奪はんこと、今年の内を出づべからず。見よ〳〵、掌を指すが如くならんずるぞ。正行を始め旁を殘し置くは、此の爲なり。足利愚なれば、吾子孫の根を枯らす程の事はよもあらじ。君をも失ひ奉る程の事はあるまじ。只諸國の新田の子孫殘り居て、一日も天下は穩なるまじきぞ。其間に、當家も同じく謀をなし、本望を達せんと

せば、味方必ず利を失ふべし。正成が常にいふ龜六の術を行ひ、敵に頭を差出すべからず。官軍大方亡びなば、高上杉の奢高き者共、互に威を爭ひて、同士軍に及ぶべし。其時、軍慮を巡らして攻め討ちなば、足利を滅しなん。此事廿年を過ぐべからず。正成が今の詞は、符を合せたるが如くならんずるぞとて、涙を流し給ひける。矢尾顯幸申しけるは、近年の御厚恩、身を以て報じても餘りあり。年老い齡既に傾きて候へば、早晩迄の命をか保ち候べき。下﨟の諺に、去りがけの駄賃とや申すことの候。是非御供して、討死候といふ。正成聞き給ひ、潔く候。さりながら正行を賴むに候。足利使を以て樣々賺さんに、承引せずんば、多勢を以て押寄せんか、其時防戰の術を盡されんは、大忠にてこそ候はんと宣ふ。滿一涙を押へ、仰尤にて候。某正澄公より仕へ奉り、當時給はる所の所領一千餘貫、此御厚恩、山よりも高く海よりも深し。然れば御供して討死仕りたきものなれども、君命を奉る上は、御曹司を守り立て奉らんと存ずるなり。矢尾殿も仰に從ひ給へといへば、別當、誤りて候とてぞ止みにける。其後正成、和田源太光元・恩地新介興武を招き、汝三人は、年若き

者共なれば、晝夜正行が傍を離れず、守立つべしと下知し給ふ。凡そ軍勢三千八百餘騎の內、五百餘騎をば召具すべし。其餘は正行に從ひ、故鄕に歸るべしと定め給ふ。舍弟正氏も、妻子の方へ文細々と書き送り、二千餘騎の內より二百餘騎を、今度の供と定めらる。五百餘騎の者共は、討死と思ひ定めしことなれば、妻子の方へ文を書き、記念(かたみ)を添へて、我も〳〵と故鄕に送る。哀れなりし事共なり。正成は、多門庄五郞の手を取りて、最も名殘惜氣にて、母に孝行を盡し、弟共を憐み、郞從を能く扶助せよ。家人に疎まれなば、弓矢を取ること叶ふまじきぞとて、泣々別れ給へば、正行は顏をも擡げず、淚に咽ばれけるを、乳母夫安間七郞正岑、御門出の忌々しく候とて、漸々と賺しけり。正成兄弟・志貴・橋本・安間・神宮寺・平野・丹下以下、都合七百餘騎、義を金石に比し、命を鴻毛に類し、一つ枕に骸を曝さんと、戰場に向はるれば、庄五郞正行は、和田・恩地・湯淺・矢尾を始め、三千二百餘騎を從へ、故鄕の方へ引返さる。哀れなりし事共なり。

南朝太平記卷第十一終

南朝太平記 巻第十二

楠正成對㆓面新田義貞㆒幷敕使至㆓兵庫㆒事

さる程に楠判官正成兵庫に着陣し、先づ新田殿の陣所に至り給へば、左中將大に悦び、急ぎ對面し給ふ。實に此度の義貞が軍の次第、さぞいひ甲斐なく思ふらめと宣へば、正成聞き給ひ、今更人の非をいひて何かせんと思ひ給ひ、天運時至らば力なく候。但中國にこの軍立は、前々に樣替つて覺え候と答へらる。新田殿重ねて、誠に恥しく候。向後軍旅のことに於ては、楠殿の仰に泄れまじく候上は、宜く御意見に預るべく候。就ては此度御手の勢の、何よりも少く候は心得ず候。傳へ聞く所は君横邪の御政坐すと、某が謀の拙きとの、御心に叶はざる故に、討死と御覺悟の由、風に承つて候。君も楠殿を股肱と賴み思召され候に、世を早うし給はんは、却て不忠と

や申さん。良將の御誤とや申さん。是非思召止まり給へと宣へば、正成打笑ひ、所所の城々に勢を分け候ひし程に、僅七百餘騎を召連れ候。又討死の事は、大敵に向つて戰はん時、十死一生の軍を仕らでは、勝利を得難きものにて候。さるに依つて此度は討死ぞと、士卒を勇むる計りにて候と宣へば、義貞仰尤に候。軍の道は、楠殿に任せ申すにて候とて、其より樣々饗應し給ひけり。斯る所に其日の酉の刻、京都より敕使兵庫に下着せらる。是は正成討死を思ひ定められしことを、君御後悔坐し、義貞をも正成をも召返し、山門へ臨幸あらんが爲なりけり。義貞朝臣、正成に向ひ、此上は召に應じ、今夜引取り候はんと宣ふ。正成聞き給ひ、敕命の上は、御引取りなされ候へ。正成に於ては、分國にて候程に、敵の勢をも見ずして、都には歸り候はじ。さりながら今夜引取らせ給はんは、如何に候と宣ふ。義貞の執事船田長門守も、夜中にて候へば、明日歸陣然るべく候はんといひし故、此事も止みにけり。

西國勢手分并官軍勢配の事

さる程に足利尊氏卿は、廿四日の暮程に、大藏谷の澳に懸り給へば、四國船を本船にて先に走らし、兵船共も、淡路の瀬戶・須磨・明石の澳に碇を下す。夜になりしかば、數千の舟の舳艫に點す篝火は、滄海の波を燒くかと怪まる。陸地の勢は、一の谷を前に當て、昔土肥次郞實平が陣取りたりし鹽屋の邊より始めて、後は大藏谷・猪名・見野邊まで、一片に篝を燒續けたり。海陸兩陣、互に見渡されし程に、明日兵庫の敵と合戰のこと、談合の使者、夜の中に往復數度に及ぶ。此處にて合戰の手分あつて、追手の大將軍は左馬頭直義、副大將は高越後守師泰・三浦介・大友・赤松以下、播磨・美作・備前三ヶ國の軍勢なり。山の手の大將は斯波尾張守高經及び厚東以下、周防・長門の士卒なり。濱の手は小貳賴尙、筑前・豐前・肥前の勢を相從へてぞ向ひける。さる程に新田左中將義貞は、翌廿五日の未明、旣に打立たんとし給ふ所に、敵船早雲霞の如くに見え來る。新田殿楠に向ひ、敵を見ざる以前にこそ、帝都迄も引くべけれ。大敵を見ながら、戰はずして引行かんは、無下にいひ甲斐なく候へば、一軍仕らんと宣へば、仰尤に候。海陸の內一方の敵は、正成請取り候はんと宣ふ。義貞聞き

給ひ、徽勢を以て、多勢を御防ぎあらんこと如何なり。千葉・宇都宮・菊地を差添へ候はんと宣へば、人の加勢をうけんと思はゞ、手勢を召具侍り候はん。正成如何に小勢なりとも、人より先に敗軍は仕らじとて、兄弟の勢七百餘騎にて、湊川の西の宿に陣を取り、直義の請手として備へらる。先鋒は志貴右衛門尉三百餘騎、中は正成二百餘騎、後陣は正氏二百餘騎、整々として控へたり。新田殿は、舍弟脇屋右衞門佐義助を、五千餘騎にて、經島に控へさせ、大館左馬介氏明を、燈炉堂の南の濱に差遣し、我身は二萬五千餘騎にて、和田御崎に陣を取り、堅固に備へてぞ待たれける。斯くて海上の兵船は、短夜の明け易きをも待兼ねて、廿五日の卯の刻、細川の人々、四國の兵船五百餘艘を本船として、昨日の如く帆を揚げて追風に任せ、官軍の控へたる湊川と兵庫の島を、左に見なして馳せて行く。是は敵の跡を塞がん爲の術なり。足利殿の御座船には、今度持明院殿より院宣を賜りし故、錦の御旗に日を出し、天照大神八幡大菩薩を、金の文字にて打つて付けられたるが、日に耀きて、光り渡つてぞ見えたりける。御座船を出さるゝ時に、例の如く鼓を鳴されし程に、

數千艘の兵船共、皆一同に帆を揚げて、淡路の瀨戸五十町を、狹しと艫り合ひて、一片に漕雙べたり。陸地の勢も同じく打立ちて、一谷を馳越す程に、辰の終に、兵庫の島近く見やりたれば、楠と覺しくて、菊水の旗を飜し、湊川の後の山より里まで陣を取り續け、楯を雙べて控へたり。播磨海道の須磨口も、沓の子を打ちたる如くに備へたり。濱の手は、官軍の總大將新田義貞かと覺しくて、和田御崎の小松原を後に、當て、中黑の旗を差連ね、三萬餘騎もあるらんと見えて、汀に三切に陣を取る。先隊は五百騎計りと見え、二陣は二千騎計り、次は松原をかけて、多勢の體にて備へたり。

湊川合戰の事

斯くて巳の刻に及びしかば、西國勢山手・須磨口・濱の手より同時に押寄する。中にも濱の手小貳が勢二千騎計、勇み進んで懸り向ふ。殊に一町計り先を、五百餘騎又是に進んで、五十騎計り向ひし中に、武者二騎、十丈計り先立ちたり。一騎は小貳が一族對馬の小次郞、黃縅の鎧に、河原毛なる馬に乘れり。今一騎は、是も小貳が一族武

藤豐前次郎、黑き馬に紅の母衣かけて、乘りたりけるが、共に究竟の若者なり。舟と陸との間、一町計を隔てたれば、棧敷の前の見物の如く、御座船より皷の亂聲聞えしかば、船中より作始めし鬨を、陸地の大勢請取りて三度作り、上矢の鏑を響かせしかば、武藤・對馬二騎駒の鼻を雙べ、敵中に切つて入る。是を合戰の始として、海陸の敵味方、喚き叫んで戰ひし程に、山川も崩れ坤軸も碎くる計なり。然る所に海上の勢、悉く陸に揚り、新田殿の勢の東へ靡くを見て、赤松筑前守貞範、舍弟律師則祐、三千餘騎にて楠に打つて懸る。正成の先陣志貴右衞門尉、三百餘騎を先後に立て、魚鱗に備へて直驀に切つて入り、敵中を駈破る。赤松の勢戰ひ兼ね、只雷霆の落懸りたる心地して、蜘蛛の子を散らすが如くに逃散りたり。正成兄弟、後陣より靜々と懸り向はれければ、二陣の細川、三陣の島津、怺へず喘と崩れたり。大將左馬頭直義は、須磨の上野に陣し給ひけるが、楠は良將なりとて、士卒さのみ恐るべからず。五百にも足らざる小勢を以て、爭か味方の多勢に敵すべき。取籠めて討取れよ。莫大の恩賞を行ふべしと下知して、一戰に打散らさんと懸り給ふ。楠勢七百餘騎、又駈合

湊川合戰

せて、一擧に死を爭ひしかば、寄手若干討たれ漂ひ騷ぐ。正成士卒に下知し、敵將直義と見ば、引組んで刺違へよと進まれば、軍勢等八方に目を配つて、此に顯はれ彼に隱れて相戰ふ。然れども直義は、敵の旗先を見給ひたる計にて、太刀先をだに見給はず、逸足出して逃げられしかば、士卒何かは勇むべき。又上野に逃退く。正成猶も駈けんと思はれしかども、上野より段々に續いて、九州の軍勢共、家々の旗を靡し備へたれば、味方の疲れたる小勢を以て、大敵に向はんは如何なりとて、菊水の旗打立て居給ふ所に、逃るを追うて諸方に分れ散じ、軍勢共歸り集まりしかば、腰兵糧など遣せて、暫く士卒の息をぞ續がせられける。斯る所に後の方、和田御崎・經島に控へし新田殿の軍勢共、海上の敵を、陸へ上立てじと懸りけるを、正成見給ひ、あれ見よや旁、義貞は、海上の敵を、陸より妨ぐ術は知り給はざると覺えたり。さながら味方敗するが如し。今に打負けなんずるぞと宣へば、宇佐美河内守、仰尤に候。新田殿の軍立の、無下に拙うも候ものかなとぞ申しける。扨味方の勢を數へらるゝに、五十餘人討死す。正成宣ひけるは、兵庫和田御崎へ、敵多く打上りたるぞ。味方

を引戻せよとて、始めの湊川へ引退き、備を堅めて居給ひける、

左馬頭直義與楠合戰の事

斯る所に左中將義貞、正成の陣に軍使を馳せ、御陣殊の外隔り候へば、早く生田の方まで引取り給ふべしとなり。正成聞き給ひ、仰承り候。間近き敵を追拂ひてこそ、引退き候はんずれとぞ、返事し給ひける。足利殿の一族細川相模守清氏は、古へ正成に親み、寄合戰の意見など、時々聞きし者なりしかば、其好を忘れず、使者を遣して申しけるは、清氏今公の堅陣に對して、勢を立つると雖、古の好を忘れ奉らず候。御覽候へ。新田旣に敗軍に及び、御後には御味方なく候。然るに何を便にか、其陣に御控へ候ぞ。引くべく所を引かざるは、良將にあらずとこそ承つて候。早々御陣を引かれ候へかしとなり。正成快げに出向ひ使者に對面し、舊友の信を變ぜられず、御懇志を盡され候段、祝着に候。味方は如何に敗軍にも及び候へ。正成に於ては、今朝より典廐の勢を、形の如く追散らして候。味方の諸勢は兎もあれ角もあれ、

正成は猶も戰を決して、忠貞を顯はし候はんとてぞ、使者を歸し給ひければ、仁木・今川・山名・一色以下、正成といふ古狐の骨張が、如何なる謀をかなさんずらん。敵の術に乘せられて、不覺の死をすべからずとて、進み得ず。大將直義は、敵の小勢に駈立てられしことを無念に思ひ、敗軍の士を集め、又討つて懸らるゝ。敵に息をつがすなと下知し給へば、豫て死儲けしたる軍勢共、なじかは以て勇まざらん。面も振らず敵中に、喚いて咄と駈入れば、前以て追立てられて、臆病神の付きたる者共なる故、後陣より崩れ立ちて、我先にと逃げて行く。楠方彌氣に乘つて、短兵直ちに進んで追懸くる。此時討たるゝ者數を知らず、血は野徑に溢れて、數條の川となり、骸は道路に横はつて、一塚の山をなす。目ざましかりし事共なり。直義大に怒り、いひ甲斐なき者共かな。直義に續けやとて、旗本の逞兵二百餘騎を前後に立て、一文字に打つて懸り給ふ。志貴右衞門尉相懸りに懸つて、爰を詮と相戰ふ。志貴は、直義と組んで勝負を決せんと思ひ、敵中に駈入りて、此に顯はれ彼に隱れ、千變萬化して尋ねけれども、其と覺しき敵にも巡り逢はず。是れ直義の武運强きに依つてな

り。然る所に楠正氏、二百餘騎を從へ、旗の手を龍粧に進め、香象の波を踏んで、大海を渡る如く、横合に靜々と懸けられければ、足利勢怺へず、咄と敗北す。直義も亦力なく逃げられけるが、乘給へる所の馬は、三川黑とて、勝れたる名馬なりしかども、矢を多く射立てられ、敢て働かざりければ、蓮池の堤にて、直義既に討たれ給ふべかりけるを、藥師寺十郎次郎、返し合せて防ぎ戰ふ程に、郎等四人矢場（やには）に討たれ、我身も數ヶ所の痛手を負ふ。此間に直義は、乘替に乘り、漸々逃延び給ひけり。敵の旗笠印など奪ひ取り、大に悦び、典廐こそ味方に降參し給ひたれ。是れ見よやとて、二つ引兩の旗を差上げて、士卒一同に咄と笑ふ。寄手は之を見て、堅唾を呑み牙を嚙み、哀れ左馬頭殿の不覺なりとぞ呟きける。

志貴右衞門尉與₂高師直₁合戰の事

足利尊氏卿は、未だ船中に坐しけるが、執事高右衞門尉師直の方へ、軍使を以て、陸地の味方大に戰ひ疲れたりと見ゆ。直義討たすべからず。速に敵を追退くべしと

下知し給へば、畏つて候とて、師直、三千餘騎にて眞前に進む。是に劣らじと仁木頼章・舍弟義長三千餘騎、細川相模守淸氏二千餘騎、畠山・吉良・桃井四千餘騎、皆馬少なれば步立になり、太鼓を打たせて懸り向ふ。正成之を見給ひ、味方の勢、今は大に疲れぬらん。暫く士卒を休ませ、敵を間近く引付けて、馬武者にて駈散らさんと、前に敵ありともせず、緩々として休息せられけるが、諸卒に向ひ、哀れ正成が勢程大剛の者は、唐土天竺にもあるべからず。直義が多勢の目に餘りつるを、三度まで追散らし、今は後に敵一人もあらざれば、引くとも自由なるべきに、疲勞せるをも顧みず、又大敵に向はんと、勇むこそ健氣なれと感じ給へば、士卒悅ぶ事限りなし。志貴右衞門、正成の本陣に馳せ來り、某事は一年河州にて、矢尾顯幸に一城を取られ、指頭の嘲弄を蒙つて候へば、一番に討死して、御覽に備へ候はんと存候へ共、敵臆病にして手に合はず候故、今まで存命仕候。願はくは只今向ふ師直と、組みたく候といふ。正成聞き給ひ、さ思ふべからず。御邊の武勇高名、勝げて計ふべからず。世人の知る所なりとて、大に稱美し給ひけり。師直、士卒に向ひ、正成は、今日討死

と定めたると覺ゆるぞ。百萬騎を以て戰ふとも、尋常の如く軍をせば、楠、屑とも思ふまじきぞとて、精兵の射手を揃へて、眞前に進ませ、三千餘騎を魚鱗に立て、金鼓を鳴らして相近づく。師直圍を取つて。敵は皆騎馬の兵ぞ。味方は步立なれば、四度路に戰ふべからず。あだ矢な射そ。近々と引付けて、馬を射て跳落させよ。是れ正成が常にいひし術ぞと不知して、靜々と懸り向ふ。正成、豫ては敵步卒なれば、騎馬にて驅散らさんと下知せられけるが、敵の師直を見て、先鋒に進むは師直と覺ゆ。渠は合戰を心に持ちて向ふなれば、左右なく馬武者にては、破られまじきぞとて下知し給へば、先隊の志貴右衞門、射手を進めて懸り向ふ。二陣は正成七十騎、態と馬にも乘らず、手々に馬を傍に引かせたり。師直馳廻つて下知し、散々に射させければ、志貴が勢射落され、死傷する者數を知らず。されども右衞門事共せず、曳々聲を出し、突兵直ちに進んで、三千餘騎の眞中に破つて入り、縱橫無碍に驅立つれば、正成の七十餘騎、ひた〳〵と馬に打乘り、得物々々を提げ、一同に咄と喚いて懸る。跡より正成、步卒を從へ、靜々と懸らるれば、師直が勢、たまらず咄と崩れけり。續い

て進みし仁木・細川・桃井・畠山が勢も、波打際にて旗打立て太皷を打つて、勢を一所に集められければ、方々より馳集つて、五百餘に及びけり。されども士卒大に疲れければ、湊川の北の在家に込入り、暫く息つぎ、今一軍と氣を勵まし、寄せ來る敵をぞ待たれける。

卿公定禪加二直義手一并須賀壹岐守使者の事

斯くて廷尉正成は、我身を始め、諸勢鐵石にあらざれば、戰ひ疲れたる上に、深手淺手負はぬ者もなかりしかば、今は是迄ぞとて、富田七郎正武が弟竹童丸とて、十八歲になりけるを、故鄕に歸り、合戰の體を語るべしとて、河內に歸し給ひける。斯りける所に、細川卿公定禪、新田義貞に打勝ちて、氣色ばつて居られけるが、湊川の合戰、味方難儀に及ぶ由を聞き、急ぎ直義の手に馳せ加はられければ、大將直義大に氣を得、此勢を合せ、又士卒を進めて懸らるゝ。正成又打つて出で、今は最後の合戰なるぞ。思ふまゝに働けよとて、東西に馳通り、南北に駈破り、敵を弓手に相付け妻手に受

けて、死狂ひに戰ひしかば、寄手數百人討たれしかども、多勢なれば事共せず、喚き叫んで相戰ふ。されば天維地に落ち坤軸碎けて、世界反覆するが如くぞ見えし。直義の勢、又戰ひ屈して引退く。正成も亦相引に引きて、味方の勢を顧み給へば、士卒殘少なに討なされて、七十三人にぞなりにける。此者共も、痛手數ヶ所負ひしかば、倡や心靜かに自害せんとて、又始の在家に込入りて、最後の用意をぞし給ひける。正成宣ひけるは、今朝辰の刻より、今申の上刻までに、大敵を驅靡けしこと十六度、軍は心の及ぶ程しつ。今は自害して、冥土黄泉の道に赴くべしとて、諸士の働き、志貴を始め、其々に感稱し給ふ所に、門を荒らかに敲く者あり。誰と問へば、足利殿の御使實は島津家の使者なれど細川賴之如此加筆す須賀壹岐守にて候といふ。平井五郎出會ひたり。須賀申しけるは、將軍兄弟申せと候。京勢悉く敗れ候所に、小勢を以て、味方の多勢を毎度靡け給ふこと、良將の譽れ、前代未だ聞かず。末代に類あるべくも候はず。古、楠殿と尊氏、朋友の交深かりしかば、今以て何ぞ疎意を存すべき。味方の勢を引取らせ候はん。御命を全うせられ、河州に御歸陣候べし。重ねて一戰を期し奉り候となり。是は直

義の謀にて、正成若し存命なれば、味方に屬することもやあらんとの術なり。正成莞爾と笑ひ、仰忝くは候へども、命を惜み候はゞ、數百萬騎を以て幾重に取卷かれ候とも、打破つて通らんに、何條事の候べき。先づ御使の程、悦入りて候とてぞ歸されける。足利殿聞き給ひ、扨は討死と思ひ詰めたるこそ、勢を損じては益なしとて、濱邊の方に打集め、見物してぞ居給ひける。

正成兄弟自害附莊嚴寺靈牌の事

斯くて正成を始め一族十六人、相從ふ兵五十餘人、六間の客殿に二行に並居て、高聲に念佛し、正成は、弟正氏と刺違へて伏し給ふ。正成の舅南江備前守正忠・正成の從兄弟惠美太郎正遠・宇佐美河內守正安・神宮寺太郎兵衞正師・安西五郎正光・富田七郎正武・河原九郎正次・矢尾新助正春・伊藤兵部義和・江田四郎高次・箕浦兵衞次郎朝房・岡田四郎兵衞友治・三石藤內行隆、凡宗徒の輩四人、其の餘の士卒五十餘人、一同に腹をぞ切りたりける。爰に菊地肥後守は、正成と日頃交り深かりければ、舍弟七

郎武吉太平記に、武朝に作るは非なり。武朝は武重が曾孫にて、後入道して法名常朝と號す。弘和年中に至つて存命す。爰に死するは武吉なりを差遣はす。武吉湊川へ馳せ來りける所に、正成の自害し給ふ所に來かゝつて、いさゝせ給へ。一方打破つて落ち候はん。兄肥州勢を備へて、相待ち居候といふ。正成聞き給ひ、今は死を思ひ定め候なり。此由肥州に申してたべと宣ふ。武吉頭を振り、武門に生れたる者が、此際を見捨て、爭て歸り候はんとて、郎等に、汝等は歸つて此旨を告ぐべしといひ付け、火を取つて家に差付け、腹搔切つてぞ伏したりける。和田和泉守正遠の次男五郎正隆・橋本八郎正員兩人は、正成の命に依つて、未だ自害をもせず居たりけるが、正成・正氏の首を取り、遙に敵を招き、高尾張守に之を渡しければ、尾張守之を請取つて、涙を流しながら、各は命を全うして、立退かれ候へかしといひしかども、思ひも寄らず候とて、歸つて刺違へ、焰の中にぞ伏したりける。惜いかな正成は、智仁勇の三德を備へ、古今に類なき良將なりしかども、愚君に仕へて、諫奏用ひられざりしかば、其諫むまじきを知りて、終に湊川の土となり給ふ。其靈牌、今に至つて兵庫莊嚴寺にあり。其牌面に題して、贈正三位羽林中郎將前河攝泉三州大守橘姓楠正成

之座とありとかや。さる程に湊川の合戰破れしかば、足利殿は、御下向の時の兵庫の奥の御堂に陣し給ふ。然る所へ高土佐守師秋が弟尾張守師業、楠兄弟の首を持參し、實檢に備ふ。尊氏、正成の首を見給ひて、尋常の將なりせば、君を恨み、當家に與する事もあるべきに、死後の對面こそ殘念なれとて、涙を流し給ふ。直義も來會し給ひ、あたら良將の惡主に仕へて、亡びけるこそ殘念なれとて、涙をぞ流しける。

岡部遠江守討死并義貞歸京、主上山門に臨幸の事

さる程に海陸の寄手一つになつて、義貞をも討取れと、雲霞の如くに群り懸る。義貞、心は矢猛に勇み給へども、士卒若干討たれ、又は逃げ散りて、殘り少なになりしかば、江田・大館・里見・鳥山の人々、入替り〳〵戰はれしかども、寄手は目に餘る程の多勢なれば、悉く戰ひ敗れ、京都を指して敗北す。義貞も既に危かりけるを、武藏國の住人岡部六彌太忠澄が後胤岡部遠江守乘澄、（太平記に、小山太郎と書きしは誤りなり、）義貞の、馬に離れ給

へるを見て、己が馬に義貞を乘せ、我身は徒立になり、長刀取り延べて、敵數多討取り、其身も遂に討死す。此間に大將義貞、虎口の害を免れ、僅六千餘騎にて帝都に歸陣せられ、合戰の次第、正成の討死の旨上聞に達せらる。主上大に驚かせ給ひ、義貞を御前近く召され、正成討死の事共直に聞召され、龍顏に御淚せきあへさせ給はざりけるが、暫くありて御淚を抑へさせ給ひ、藤房と正成、常に朕が不德なるを諫めしかども、藤房は、其身其器に當りしかば、理とも思ひし。正成は武臣の身として、朕が非を擧ぐること、己が功に誇りてにやと思ひしに、藤房は世を遁れぬ。正成は討死しぬ。今先非を悔ゆると雖歸らず。今よりして、何者か朕をあはれとも思ふべきと、御落淚頻なれば、之を承りける諸卿、皆直衣の袖をぞ濡されける。斯くて同じき廿七日（太平記に、十九日に作るは非なり）山門に臨幸ありて、公家武家三萬二千餘騎、鳳輦の先後に供奉し參らする。頓て道場坊祐覺、兵糧九千餘石・大豆七千餘石、軍勢に配當す。是は去年十二月、正成江州の兵糧を運び取り、三千石を諸勢に分ち遣し、殘る兵糧を藏に納め置かれけるが、今此の用に立ちけるなり。主上此事を叡感あつて、正成其糧

を都にも運ばずして、今まで當所に置きつるは、朕再び此山に來らんずることを、豫て察したるにやとて、御後悔淺からず、御淚を流させ給ひけるぞ忝き。斯くて尊氏卿は、數十萬騎を從へ、同じき廿九日に上洛あれば、直義翌晦日に入洛あり、將軍は東寺を御陣所と定め給ひけり。

南朝太平記卷第十一終

南朝太平記 巻第十三

攝州城々六ヶ所開渡附矢尾別當顯幸の事

既に義貞、京城を指して敗北せられしかば、足利殿悦び給ふこと限なし。時に上杉伊豆守重能申されけるは、今年の春、味方都を落ちし事は、正成攝津・河内の兩國に、數ヶ所の城々を構へし故、味方兵糧に盡さ候ひしに依つてなり。此度は先づ、兩國の城々を攻落し候へかしと申されば、此儀尤なりとて、兩國の城々を攻めさせられけるに、神内に楯籠りし藤江入道も、澁川刑部少輔を賴みて降人に出づる。其外多田攝津次郎以下凡そ六ヶ所の城、皆足利殿に降りけり。尼崎の城には、矢尾別當顯幸が從弟平野孫太郎・水谷又四郎・湯淺彥九郎、五百餘騎にて籠り居りしを、細川阿波守和氏・石堂四郎、七重八疊に取巻きて、晝夜息をも繼がせず攻めけれども、城

兵様々術(てだて)を變へて防ぎしかば、寄手討たるゝ者數を知らず。直義此事を聞き給ひ、平野・水谷が方へ、使者を以て申されけるは、故正成とは、舊友の好(よしみ)淺からず。多門丸、味方に對して不義の行なくば、何ぞ兵を差向くべき。然れども兵糧運送の道を差塞ぐに依つて、勢を遣せし所なり。正成既に討死の上は、其城の陷らんこと近きに在り。急ぎ開渡され候べしといひ送られければ、平野、此旨を顯幸に問ふ。別當聞きて返事しけるは、正成・正氏討死仕候へども、未だ舍弟正季・和田正遠・恩地左近太郎、數ならねども此の別當、死殘つて罷在り候へば、得こそ城をば渡し申すまじけれ。又當國御發向の事、庶幾する所に候。一戰に死を爭ひて、主人正成の跡を慕ひ、後馳(あとはせ)に冥土黃泉の族に、急ぎ候はんとなり。直義此由を聞き給ひ、渠等は必死の敵なり。攻落さんとせば、却て味方の珍事出來すべしとて、急ぎ細川・石堂を呼返さる。是に依つて尼崎一城計ぞ殘りける。

竹童丸歸二故鄉一幷判官正成首送二千劒破一事

正成の首級を河内に送る

爰に左馬守直義は、將軍の御前に出で給ひ、正成存日某に謀り候ひしは、宗徒の敵、餘多討取りたるに、殘黨勇を屈せず、弔合戰を心に懸けんには、宗徒の首を敵國に送るべし。是れ一つの情なり。又空しき首を見ては、如何なる勇士も氣弱り、心茫然として、味方に降る者にて候ぞ。又さなきとても、出張せんと思ふ者も、此歎に心弱り、廿日卅日の中には、打出さゞるものぞと申候。是れ幸の術にて候。然れば此度正成が首を、故郷に送り候はゞ、妻子郎從等、歎き入り候はんと宣へば、尊氏卿、此儀尤なりとて、世瀨川入道祐隣を使者として、正成の首を持たせ、故郷にぞ送られける。　さる程に竹童丸は、湊川より千劒破に歸り、人々の最期の體、合戰の次第、泣々語りければ、此方を始め幼き人々、泣き悲み給ふこと限なし。竹童申しけるは、某も御最後の御供仕らんと、千度百度申しゝかども、志貴殿を始め、人々の勇氣なる働を、歸つて委しく語るべしと、仰の重く候ひし故、歸り參り候なりとて、頓て自害せんとしたりけるを、人々取付き、こは如何にと押止む。竹童淚に昏れ乍ら、君に契約し奉りたれば、諍ひ搦め給ひたりとて、何まで斯くて候べき。只死してたべといふ

を、御邊若年なれば、さ思ひ給ふも理なれども、多門御曹司坐せば、存命へて忠を盡されんこそ、實の志ならめと諫めければ、誠に過つて候とて留りけるが、翌日の夜、終に腹搔切つて死しけるこそ哀なれ。斯る所に同じき六月三日、世瀬川入道千劔破に下着し、安間七郎・生地兵衞を以て申しけるは、尊氏朝家に對して弓を引くこと、本意にはあらず候へども、咎なくして、無實の讒に沈みし故、力なく斯樣に罷成來り候。元より楠殿とは、古親しく相馴れ申し、其好今に忘れ難く候へば、爭か私の遺恨候べき。然るに此度御最期を遂げられしこと、尊氏歎き入候。其故は、古の好忘れ難く候其上、尊氏罪なきの旨、楠殿を以て上聞に達し候はんと、豫て思ひ候所に、世を早くし給ひし事、殘念の至りに覺え候。御最後の合戰にも、每度當手の多勢を靡け、勇み振ひ給ふ事、爭か項王も及び候べき。味方に討たるゝもの、宗徒の輩卅五人、郎從千三百餘人、疵を蒙るもの數を知らず。斯る良將は、前代未だ聞かず、末代にも類あるべからず候。尊氏追悼の餘り、後室賢息達の御悲歎を思ひやり、驗を送り候なり。今より尊氏に寇し給はずんば、河内・和泉・攝津三ヶ國に、發向することと候まじと

演舌す。和田・恩地返事しけるは、誠に御情の程忝く候。將軍に對して、正成宿意なしと雖、綸命に依つて、合戰を挑みたる計にて候。以來君と御合體の事もあるべく候へば、其節は正行常に參上し、御芳志を謝すべく候とて、請文を遣し、使者を都に返しけり。其後楠正季・和田和泉守正遠、諸士を集め、敵の志を奪はんが爲に、其首を故鄕に送ること、故判官殿の常に宣ひし術なり。味方の氣を弱らして、當國に押寄せんとの謀にあるらん。故殿の宣ひし謀を以て、直義我々を欺かんとするは、猿の智にも劣りたりとぞ笑ひける。家子郎從共、故殿の御面影、今一度拜み申したきと歎きしかども、叶ふまじきとて見せざりけるを、恩地滿一、いや〳〵、皆親しき郎從なれば、結句恨を含むこと多かるべしとて、諸士を集め、正成の首を拜ませ、忠勇の道を勸めければ、愈勇氣をぞ勵ましける。正成は家嫡庄五郎正行、父の面影を見て、歎の餘りにや、自害せんとし給ひけるを、家人共見付け、色々と宥めければ、誤りしと思ひ給ひけん、其より心を取直して、父の遺命に任せ、遂には讎を報せんとぞ勇みける。

名和長年戰死

四宮河原合戰附愛曾武勇附八々王名劔の事

さる程に主上、山門に御坐ありしかば、將軍は東寺に御坐あり、直義は三條坊門に坐して、多勢を差向け、叡山を攻めらるゝ程に、合戰暫も止む時なし。六月晦日、新田義貞京都に押寄せ、相戰はる。此時名和伯耆守長年、三條猪熊に於て、豐前國の住人草野左近將監が爲に討死す。其後數度の合戰ありけるに、今州四郎範國、四宮河原に向はれしを、相坂口へ向ひたる仁木右馬助義長、範國に近付き、今日は逃げずづくの戰にて候はんといへば、勿論に候とて、引分れて、終日追つ返しつ戰はれける所に、仁木戰ひ負けて引退く。是に依つて伊勢國の愛曾といふ大剛の者只一騎、相坂の手より馳せ來る、今川四郎範國は、前の戰の隙なさに、斯くとも知らざりけるに、安藝入道、範國の後に控へたりけるを、愛曾一文字に走り來り、入道が兜鍪の鍬を切落せば、入道は耐らず、馬より百と落つる。並んで控へられたる五郎範氏(範國の子)が、三十六指したる大征矢を、拂切にぞ切つたりける。範國驚き、馬を立直して、愛

會が兜の鉢を切破れば、愛會は、馬の平頸にひらみ、太刀にてはつしと拂ひけるに、範國の左の籠手の二の板を切つて、前なる官軍の中へ逃入りしかば、是より戰も止みにけり。範國の郎等殿村平三は、愛會と知音なりけるが、後に其兜鍪の鉢と半首とを取出し、今川殿は、如何なる劒を持ち給ひてかありけん。某が隨分試したる兜の半首を、切破り給ひけるが、鉢卷切れて、頭に少し疵を被り、眼の昏みたれば、退きしぞやと語りけり。範國其より此太刀を、八々王と名付けらる。八を二つ重ねたる故なりとかや。此太刀は、國吉が打ちたる名劒にて、籠手と共に、駿州の今川家、代代傳へて、家寶とせられけるとかや。

楠正季死去

楠正季卒去附高師直發二向河內一
幷成相・高橋等軍の事

斯る所に千劒破には、故正成の舍弟正季、風の心地とて伏しけるが、病痾次第に重つて、針藥施すに驗なく、同じき七月三日、廿八歲にて遂に卒去せられけり。此正季は、

正成・正氏の弟なりしかども、兄にも似ずばさらを好みて、遊樂に財を費し、自らの勇に慢じて諸士を侮り、慾心深うして民を貪り、其上に色に迷ひて美女を愛し、妾六人迄ありしとかや。兄の正成此事を聞き大に怒り、我れ今君恩に依つて、四ヶ國を領すと雖、貞女一人の外を持たず。今正季が奢侈法に過ぎたり。加之私慾を專として、民を養ふ心なし。是れ盜賊にあらずや。正成親しきを以て、何ぞ盜賊を扶助すべき。是れ不忠の至りなりとて、父正澄より讓り與へられし所領、悉く取上げられけり。正季の母は、正成には繼母なりけるが、此事を恨み、樣々と歎きければ、正成此由を傳へ聞き、舍弟正氏を呼びて宣ひけるは、母の斯く仰せ候こそ、身に取つて慨しく候。正成には繼母にて坐せば、仰に從ひたく存ずれども、道に違ふの科発れ難し。又仰に背きぬれば、不孝の罪を蒙りなん。此上は正季が所領百六十貫を、母上に差上くべし。是にて渠を御扶助候べしとぞ宣ひける。正氏畏つて、仰の如く母上女性にて、愚に坐し候故、某にも此事に就きて、道ならざる事を、樣々宣ひ候へども、所存を申候はんには、不孝の罪遁れ難く、又申さゞらんには、道に違ひ候べし。

扨こそ如何とも辨へ難く、今迄申出しも候はぬなりと申されしかば、正成、尤に候。某とても、彼者心をだに直し候ひなば、何ぞ領主とせざらんやと宣ひけるが、近年は奢侈遊興をも止め、専ら道を嗜まれければ、今年の春、正氏養子とせられけるなり。然るに去る五月、正成四十三歳正氏卅二歳にて生害を遂げ給ひしかども、未だ千劔破に正季居給へり。和田正遠・恩地滿一あり、其外無二の忠臣等、幼子庄五郎正行を守立て、一度は本意を達せんと思ひ居る所に、計らずも正季卒去せられしかば、諸士國民に至る迄力を落し、悲の聲を呑む。將軍の執事高師直、此事を傳へ聞き、當時京勢の兵糧減ぜり。是れ天の與ふる所なれば、楠が領内の糧を奪ふべしとて、師直二萬餘騎を引率し、七月下旬河内半國に勢を發し、稻を刈取らせて後、京都にぞ引取りける。和田・恩地安からず思ひ、同じき八月廿六日、渡邊より河舟數多上せ、其勢四千餘騎にて、攝津の地に發向し、稻を刈取り、一日一夜が程、舟にて河内に運ばせけり。其折節備中の成相・高橋、備後の山中・三吉の者共二千餘騎、足利殿の催促に依つて上りけるが、兵庫に着きて、此事を聞き、一當あてゝ見んとて陸地に上り、

西の宮の小松原より進みけるを、恩地左近太郎八百餘騎、矢一つも射ず、馬武者にて駈破る。歩立西國勢、なじかは怺ふべき。二百餘討たれてひた崩れに崩れ、這々船に逃乗りけり。

安倍野合戰附尊氏卿被ㇾ遣ニ河州使節一事

和田正遠等高師直と戰ふ

此事京都に聞えければ、高師直大に怒り、二萬餘騎にて都を立つ。豫てより京都に居たる忍の者共走り歸つて、和田・恩地に此由を告げしかば、正遠・滿一・顯幸等、海上は、紀泉兩國の船にて稻を運ばせ、其外河舟にて河内に運ばせて後引返す。斯る所に高師直、二萬餘騎を引率し、其日の酉の刻、攝津芥川に着し、翌廿八日の拂曉、渡邊の橋を打渡り、河内路に發向す。時に和田・恩地、二千餘騎を二手に分け、安倍野に備へて待懸けたり。師直が先陣山口七郎、敵は小勢ぞ、討取つて高名せよと勇み懸る。河州勢の先陣平岡八五・丹下與一、魚鱗になつて駈通れば、山口が勢、四度路になつて漂うたり。其時後陣より、和泉守正遠、菊水の旗を靜に進めて懸りければ、京

師直敗走

勢散々に駈亂されて引退く。大將師直天王寺にて士卒を下知し、一戰せんと勵む所に、天王寺の東の在家より、矢尾別當顯幸一千餘騎にて、一聲鬨を咄と作り、無二無三に切つて入る。京勢思寄らざる事なれば、こは如何にと騷ぐ所に、此彼(こゝかしこ)より五百騎三百騎前後より發し、喚き叫んで攻懸れば、師直が勢防ぐべき術(てだて)なく、輪違の旗の手、東西に漂ふとぞ見えし。一同崩れ立ちて、渡邊の橋へ逃懸りければ、河に浸つて、溺れ死する者數を知らず。大將師直も辛き命を助かり、京都にぞ逃上りける。是に依つて又尼崎に城を築き、西國の通路を差塞ぎければ、足利殿大に驚き、楠に八幡を取られては叶ふまじとて、赤松が一族に、丹波の久下・萩野等を相添へ、八幡山に籠置かる。其後直義朝臣、恩地が方へ使者を以て、廷尉討死の後、申送りたる約の如く、全く楠殿に恨なければ、幼年の正行を養育の心をこそ存ずる所に、忽ち約を變じて、攝津に發向を企てられしは何事ぞやと、いひ遣されければ、恩地、仰せ承り候。然れども紀州は、故正氏領國にて候故、正氏自殺の後は、舍弟正季遺跡を續ぎて、領主となり候所に、此度熊野の八庄司共を語らひ、山門を御攻め候は如何に。是

足利直義高師直を罵る

れ約を變ぜられたるに候はずや。其上師直多勢を率し、河州に發向し、苅田をし民屋を追捕す。是に依つて領國の民の困窮を救はん爲、攝州に發向し、民屋を追捕して、河内の諸民に返し與へ候。然るを物にも馴れぬ西國勢共、一戰をと兵を進め候ひし程に、打散らして捨て候ひき。其跡へ、師直多勢にて河内に發向せれし間、一防ぎ仕りたる計にて候。當家に於て、會て約を變じ候はずとぞ返事したりける。直義朝臣も、師直が恣なる事を仕出して、西國の糧道は斷たれぬ。其上楠攻上りやせんずらん。是程まで仕課せたる天下を、又敵の物となさんこそ口惜しく候へ。さあらんに於ては、當家の滅亡にてぞ候はん。是皆師直がなす業にて候。正成討死したりと申せども、和田・恩地等の智臣、多く國を守り居候所に、いはれざる手差をして、糧道まで斷たれぬる事、毛を吹いて、過代の疵を求むるにて候はずや。師直が不覺、如何計にて候ぞなんどと、度々將軍へ申して憤られければ、尊氏卿も、楠又攻上りやせんずらんと、安き心もし給はず。師直も亦此事を傳へ聞き、安からず思ひければ、如何にもして直義を、失はんと思ふ心の付きたりけるが、果して後には、天下の大亂

とぞなりにける。和田恩地は、大和・河内に、運を兩端に窺うて、心を決せざる者共多かりければ、此等を能々制し調へける程に、攻上るべき評議もなし。八庄司等も如何思ひけん、京都より逃歸つて、又楠方にぞ降りける。

主上還二幸京都一附新田殿北國落の事

是に依つて足利殿兄弟、種々思慮を運らされけるが、斯くして數月を經なば、又難儀に及ぶべしとて、上杉伊豆守重能の猶子帶刀左衞門に、大高次郎重成が家子大高彌太郎を差添へて、忍びやかに山門に差遣さる。此帶刀は辯舌利根の男なり。大高は又淨土寺の忠圓僧正の弟子靜悟坊圓輝が弟なりける故、忠圓僧正に就きて宣ひけるは、尊氏高恩を蒙り乍ら、爭か君を傾け奉るべき。義貞が讒に依つて、止む事を得ざる所にて候。都に御還幸候はゞ。全く天下の政道を、公家に任せ參らせ候はんとて、大師、勸誘の起請文をぞ遣されける。主上も、正成は討死しぬ。義貞に合戰の怠ある故、斯の如くにては、行末捗々しかるべしとも思召さゞりければ、竊に都に御

後醍醐天皇京都に御還幸

新田義貞一族北國へ落つ

出あるべきに、事定まりけるに、義貞此事を洩れ聞き、急ぎ參內して、大に君を恨み奉り、涙を流して樣々奏聞せられけれども、主上も止む事を得給はず、東宮に天子の御位を讓らせ給ひ、三種の神器を似せ物にして、春宮の御方へ渡し參らさせ給ひ、義貞以下の官軍は、春宮に供奉して越前に落下り、北國を攻從へ、重ねて大軍を催し、上洛を企つべし。都に還幸の事、嘗て實儀にあらず。尊氏を欺きて、暫く時節を待たんと思ふが故なりとて、同じき十月十日、主上は今路を西へ還幸なる。供奉の人々には、萬里小路宣房・勸修寺經顯以下の公卿殿上人、武臣には江田・大館・菊池・宇都宮以下、凡七百餘騎なり。春宮は、一宮中務卿親王・洞院實世・三條泰季・御子左爲次少將行尹・同甥行實太平記に、雙太夫行房子息伊尹と記せるは誤れる、なり。行實は行房が子なり。行尹は行房の弟なり其外新田の一族七千餘騎を召具せられ、北國へと志し、戸津を北へ行啓ある。哀なりし事共なり。足利左馮頭直義、法勝寺の邊まで出向ひ、三種の神器を渡さるべき旨を申されければ、主上豫て御用意ありける似せ物を渡さるゝ。其後主上を花山院へ入れ參らせ、四門を閉ちて、警固の士を置き、菊池・宇都宮以下の武士を、諸大名の方へ一人づつ預けら

れしかば、思の外の事共かなと、後悔すれども甲斐ぞなき。

後醍醐天皇南方へ御潜幸

主上潛幸南方附稻荷明神靈驗
并諸士馳參東寺事

さる程に主上は、花山院に押込められさせ給ひ、供奉の諸士は、禁籠に及びしかば、思の外の事共なり。斯る所に、菊池肥後守武重（太平記に、掃部助武後に作るは非なり。武後は武重が弟なり。此時主上に從ひ京に出づるは武重なり。）日吉加賀法眼等も、本國に逃下る。爰に花山院に伺候しけるが、主上に志を通じ奉り、同じき十二月廿一日の夜、主上を盜み出し奉り、其夜は梨間の宿に落着き、翌廿二日（太平記に、八月廿八日に作れるは大に誤れ、八月には主上未だ山門に御坐ありしなり）主上を張輿に召せ參らせ、供奉の人々少々にて、白晝に南都に通らせ給ひ、內山迄と急がせ給ひしかども、供奉の人々も、早晩しか習はぬ態なれば、程なく日も暮れぬ。道はいと闇くて、行先も覺えざりければ、如何せんといひ合へるを、主上聞召し、何處の程ぞと御尋ありければ、侍從忠房、稻荷の御前にて候と奏せらる。主上叡聞あつて、

烏羽玉の暗き闇路に迷ふなり我にかさなんみつの燈

と詠ぜさせ給ひければ、御社の上より赤き雲一村出で來り、（太平記に光物と記せるは僞なり、）行幸の道を照らしけるこそ不思議なれ。是に依つて安々と、大和の內山に着かせ給へば、雲は金の御嶽の上にて消失せけり。其より漸々として其夜の曙に、賀名生に落着かせ給ひければ、御供の人々、爰にて供御なんど進め奉りて、少し生きたる心地ぞ附きたりける。さる程に先帝花山院を拔落なされしかば、洛中の騷動いふ計なし。諸士我も〳〵と、將軍の御所東寺に馳參る。尊氏卿は、少しも驚き給へる氣色もなく、宗徒の人々に對面あつて、此間先帝花山院に御坐の故、警固申す事其期なきに依つて、以の外武家の煩となれり。然れども先代の鎌倉の沙汰の如く、遠島に遷し奉らんも恐あれば、如何とも思ひ煩ふ所に、今の御出は、大儀の中の吉事なり。定めて潛に畿內の中に御坐あるべきか。御進退を叡慮に任せられ、自然と落居せば然るべからんか。天運の定まる所、何ぞ淺智の强弱に據るべきと宣へば、之を承りける人々、誠に天下の將軍と仰がれ、武家の棟梁となり給へる御果報を、珍らしく申すも愚なれど、

斯る大敵の先帝を取逃し奉りて、少しも驚かせ給はぬ不思議さよと、人々申合ひにけり。

楠正行參內并京都綸旨御教書到來河內事

楠正行參內

さる程に主上は、賀名生に御坐あつて、刑部大輔景繁を敕使として、高野山の衆徒を賴ませ給ひしかども、大衆の中に、將軍方に心を寄するもの多かりしかば、衆徒の心一致せずして、終に賴まれ參らせず。景繁其より吉野に行向ひ、大衆を語らひける所に、滿山の衆徒等、一味同心して敕命に應じ、三百餘人にて御迎に參上しければ、楠庄五郎正行も、和田・恩地・三輪・牲川以下を相從へ、賀名生に馳參し、腰輿を警固し奉つて、頓て吉野へ臨幸なし奉る。主上、正行を御前近く召され、先年見しより成人しつるものかな。汝が父正成が忠義諫奏、新しく思出で、後悔すと雖、臍を噬むに益なし。汝幼年なりと雖、父が忠功を繼ぎて今又朕を助く。二代の忠深うして、其賞を知らずとて、御淚を龍眼に浮べさせ給へば、正行は、兎角の敕答にも及ばず、

御前に平伏して歎かるゝ。之を見て、庭上に並居たる恩地・牲川以下の郎従等、皆袂をぞ濡しける。其後正行、折付けたる一通の文を取出し、是こそ父正成が、最後に故郷へ送りたる文にて候とて、四條大納言隆資卿に奉られければ、隆資頓て叡覧に備へらる。其文に曰く、

今度隼人差遣候事非二別事一。我等最後近々に覺候。願くは貴殿成長之器量見屆度候へ共、義の重き所更難レ遁候。愈勤レ學無二懈怠一勤二忠功一成長之後我等心中可レ被レ察候謹言。

猶々此巻絹一疋従レ君拝受、具足は祖父より着古し候へ共、永きかたみと送候。

建武三年五月日　　正成　華押

楠庄五郎殿

主上之を叡覧あつて、猶も御涙せきあへさせ給はず。御前に居たる人々も、皆感涙を流し、故判官未だ存命あらんには、世は斯く迄には成果てまじきものをとて、各申合はれけり。斯くて和田・楠、主上を守護し奉る。是よりして吉野を南朝と號す。

新田義貞
義顯戰死

花洛には光嚴院御位に坐す。之を北朝と號す。天に二つの日なしとは申せども、地に二人の帝坐す世となりにけり。さる程に新田左中將義貞は、北國に落下り、合戰を挑み給ひけるが、官軍勝利なうして、一宮中務親王義貞・嫡子越後守義顯以下、金崎の城にて生害を遂げ、越前の城々、多く將軍方へ攻落されければ、東國の官軍共も、或は城を棄てゝ落去り、又は降人に出でて、命をぞ助かりける。尊氏卿、時至りぬと悅んで、持明院殿の綸旨に御教書を添へて、河內に差遣さる。是は正行、主上を押籠め奉り、味方に屬せらるゝに於ては、大和・河內・紀伊・攝津・和泉五ヶ國の守護國司を恩補あるべし。若し敕命に應せずんば、勢を差向け追伐せんとなり。是れ直義の計らひなり。和田・恩地返事しけるは、綸旨再三拜見仕り、御教書の趣承り候。正行未だ幼少にして、後室は女性なれば、正成の遺命を背かじと歎き候。將軍に對し、恨み申す事なしと雖、君今此地に坐すを、何ぞ情なく押籠め奉るべき。武命に從はざるとて討手を下されば、命を限り防戰して、正行と共に、死を急ぎ候はんとぞ返事しける。將軍此事を聞召し、扨は味方に志ありと雖、正成の後室が申す所を、憚ると

覺えたり。終には降參せんずるぞと宣へば、直義いや〳〵左樣には候まじ。和田・恩地等、事を後室に寄せて、禮を演べ義を含んで報ずと雖、心は少しも變ぜずして、故正成が弔合戰を、心に持つと覺え候。然れば多勢を以て攻むるとも、容易く二年三年の内には、退治し難く候らんとて、勢を差向けらるゝ迄もなく、結句八幡を楠に取られざる樣に、能々守るべしと下知し給ひ、用心甚だ嚴重なり。此時南朝には、和田・恩地を召され、逆徒を追落すべしと敕諚ありしかども、當時官軍を數へ候に、二萬騎には過ぎ候はず。此微勢を以て、變る術もなく攻め候はんには、勝利を得難く覺え候。義貞何の謀もなく、小勢を以て京都を攻められし故、遂に味方の負となりて候。定めて逆徒、此表へ寄せ來り候はんか、其時は猶も山林へ引籠り、時を待つて本意を達し候はんと敕答申し、退出をぞしたりける。

南朝太平記卷第十三終

南朝太平記卷第十四

南朝怪異附後醍醐天皇崩御の事

海内二つに分れ、南朝に屬するを宮方と號し、北朝に從ふを武家方と號す。斯くの如くにして、一日も天下穩ならず。晝夜接戰して止む時なし。然るに北畠顯家卿、延元三年奥州の多勢を率ゐて、攻め上り給ひけるが、道々の合戰、悉く勝利を得給ひしかども、濃州黑血川の敵軍を破る事を得給はず、伊勢より廻つて、南朝へと赴かれけるが、五月廿二日、高師直に戰ひ負け、安倍野にて遂に討死し給へり。加之同じき閏七月二日、官軍の總大將新田左中將義貞朝臣、生年卅八歲にて、越前の國足羽の合戰に討死を遂げられしかば、宮方の勢は、中路に梶を絕え、暗夜に燈を失ひたる心地して、力を落して見えしかども、義貞の舍弟義助・義助の家嫡左少將義宗・次

北畠顯家戰死
新田義貞戰死

男左兵衞佐義興を始め、江田・大館以下の一族、兒島三郎高德、西國に菊池・松浦・三角・櫻山、四國に土居得能、畿內に和田・楠あれば、さりとも一度は聖運の開かるゝ事もやと、末を賴みに待み居けり。斯る所に芳野には、延元四年七月より、樣々の怪異共多かりければ、諸人如何なる事かあるらんと、互に私語き居る所に、或日の暮方より、東の山の端に、黑雲一村立出でけるが、其例樣ならずして、態と作れるが如くにして、色々に變じければ、是こそ希代の珍事かなと見る所に、暫くありて雲の內より、日傘を開きたる程の光物出で來つて、筋違に西の方へ飛行きて、雲の內へ入りけるが、其通りし跡は、虹の如くなる筋五つ迄殘つて、其色靑赤なり。此時四方の山輝きて、草木もあり〳〵と見えて、白晝より猶勝れり。諸人こは何事ぞと、忙然と虛空を詠め居る所に、雷の如くに鳴り出で、半時計り山川も崩るゝ計りに聞えけり。是只事にあらず、如何なる凶事か出來んと、諸人怪み思ひけり。爰に吉田兼好法師の和歌の門弟松翁といへる人も、南朝に居られけるが、其頃不思議の夢をぞ見られける。其故は、主上藏王堂の艮の方へ行幸ならせ給ひ、御快けにて、四方の梢を叡覽なさ

後醍醐天皇崩御

れけるに、御姿を拜み奉れば、早晩(いつ)よりも、御龍眼の內、冷まじく見えさせ給ひしかば、如何なる御叡慮やらんと、愼み居たる所に、上の山の草木、動き騷ぐと見えしに、大龍一つ出で來り。頭を垂れて伏し居たるに、主上頓て此龍に召して、遙に虛空に登らせ給へば、供奉の人々も、續いて登るべき樣もなく、忙然として、皆々遙に見上げ居ると覺えて、夢は覺めにけり。是は怪しき夢かなと思ひながら、心中に祕して口外には出さゞりける所に、同じき八月九日より、主上御不豫の事ありけるが、日々に重らせ給ひける程に、業病遁れ難しと、思召し定められけるにや、朕早世の後は、第八の宮（號㆓義良親王㆒後村上天皇是なり。太平記に七宮に作るは非なり）を、天子の位に卽け奉るべしとて、同じき十五日の夜、左大臣經忠の亭に移し參らせられ、三種の神器を讓り御坐し、御後の事共、いと濃かに遺敕あつて、同じき十六日夜の丑の刻、遂に崩御なりにけり。（太平記に、延元三年八月十六日に作るは誤なり。南朝の延元四年八月十六日なり。北朝の年號曆應二年に相當れり）御遺敕に任せ、御形を改めずして、山鳩色の御衣に御冠を召させ、後鳥羽院より御傳へありける三揃といへる御劍を、玉體に添へ奉り、藏王堂の艮なる林の奥、塔の尾といふ所に、圓丘を高く築きて、北向に葬り奉る。御年

五十二歳。惜しかるべき御齡なり。御葬送の夜は、何處ともなく音樂幽に聞えければ、供奉の月卿雲客、悲歎の涙を押へながら、耳を峙てゝ拜し奉る。山中伺候の人々は、盲人の杖を失ひたる心地して、何と思ひ分けたる方もなく、如何になり行く世の樣ぞやと、泣き悲み給ふ事限りなし。

楠正行參二内芳野一附陰謀人被レ誅事

爰に楠正行は、今年未だ十四歳、幼少なる上に、後見と賴みたる叔父七郎正季・和田和泉守正遠・恩地左近太郎滿一以下、宗徒の老臣打續き病死しければ、足利殿時至りぬと悦び給ひ、正行の郎等岡・高田・大富以下を、內々相語らはれけるに、皆逆心を起し、京方に一味同心して、內應せんと相巧む者、十四人に及びけり。岡・高田、又將軍の下知に依つて、八幡林吉太を相語らふ。是れ京方に一味して、軍勢を引入れ、楠を滅しなば、河州にて三千餘貫を給はるべしとて、將軍の御教書に、師直が添狀をぞ送りける。八幡林、忠心を變せずして、大將正行に、忍びやかに此事を語りければ、

正行大に感悅し、志貴・早瀨に密談し、是等兩人幷に吉太を、僞つて京方に一味せさせけり。此者共、敵を思ふまゝに方便りて後、京都へ僞つて約をなしければ、正行若し芳野に參りなば、後に殘り留つて、千劒破の城に火を放つべしとなり。又正行、芳野へ吉太を召具せば、正行が陣へ御勢を引入れて、討たせ申候はん。若し用心堅固ならんには、合戰の半、吉太後矢を射候はん。然らば何ぞ討取らで候べきとぞいひ送りける。其後吉太等が方より、千劒破に使を馳せ、京都より多勢を發し、芳野を攻めんと相催し候。其御心得候べしと、何共なくいひ遣す、正行態と大に驚きたる體にて、宗徒の人々を集め、此事如何あらんと評議せられけるが、主上は旣に崩御なりぬ。此上は芳野殿へ參上し、あれにて軍の評定すべし。各も吉野殿へ出合ひ給へとて、諸士に相觸れらる。正行は父正成の時より、忍の兵を數十人京都に入れ置き、其の外本國の商人共を都に入れ置き、武家の取沙汰を、悉く注進するやうに調へ置かれたる事なれば、商人共の方よりも、何事とは存せねども、京勢南方へ發向仕り候。竊に承り候へば、御內にも外樣にも、京方に內通の者の候由聞え候と注進

す。其外忍びの者共も、追々に注進す。早瀨・湯淺を千劍破の城に殘し置き、一千七百餘騎にて、芳野の皇居へぞ馳せ參られける。さる程に山中伺候の公卿殿上人、主上既に崩御ありければ、今は何を賴みにか、斯くてあるべきぞ。如何ならん深山にも分入りて、隱遁の身とならばやとぞいひ合はれける。斯る所に楠正行、芳野に馳せ參じ、皇居を守護し奉らる。翌日和田和泉守の嫡子新三郎高家も、今年十三歲なりけるが、二百餘騎にて馳せ參る。健氣にぞ見えたりける。正行は、遺敕の綸旨を謹んで頂戴し、其後當山の執行吉水法印宗信に向ひ、諸卿退散の由を聞き、畏つて申されけるは、此の如く御遺敕ある上は、當今に對し奉り、誰々も命を義に替へて、忠義を專として逆徒を滅し、一度花洛に還幸なさるべき謀をこそ、心にかけ給ふべきに、人々の退散の催は心得難く候。法印宜しく申させ給へと、長生しくも禮儀正しく、理非分明に述べられければ、法性寺左兵衞督殿太に感じ、年の程にも似ず、辯舌明かに、賢々しく、禮儀正しく、綸旨を頂戴したる體、實に正成が子程ありけるよ。彼ぞ成長の後、朝敵をば亡さんずるぞと宣ひける。和田・楠、多勢を以て守護せられ

ければ、諸卿も頼もしく思ひ、退散の儀を止められけり。正行芳野に馳せ參られければ、內々の隱謀人共、時を得たりと悅び、皆々芳野に參りけり。楠正行先づ渠等を討取つて後、八幡へ發向すべしとて、高田が討手には、山本・杉山兩人を定め、坂井・生地兩人を、大富が討手に定めらる。是等は故正成の時、精兵の勇士廿八人選び置かれける者共なり。其內十人は、最後の供をして、湊川にて討死しぬ。殘る十八人をば正行に仕へさせて、忠功を勵むべしと、遺言ありし者共なり。是等十八人に、又勝れたる勇士十人を加へて、廿八人を、叛逆人十四人の討手に差當て、相從ふ軍勢には、三增倍の兵を分けてぞ置かれける。皇居も心元なしとて、和田新三郎高家・同御園兵衞を、七百餘騎にて差遣さる。渠等參內して、何ともなく世上物騷しく候へばとて、皇居を守護し奉る。斯くて彼隱謀人の方へ、用事ありとて招かれけれども、岡平七・高田紀內太夫は、病と號して來らざりけれども、二人を討たんは最安しとて、殘る十二人の者共は、正行の宿所に來る所を、路次にて前後より取圍んで、悉く討取り、郎等共をも、過半討取りぬ。其餘の者共は、十方に逃行きけり。岡・高田が陣

所へは、志貴・湯淺・恩地馳向つて、安々と討取りぬ。山中に來り集り居たる國々の諸士、思ひ寄らざる事なれば、大に驚き周章騷ぐ。正行豫て使者を定め、謀叛人の次第、陣々に觸れさせければ、諸陣悉く靜まりけり。皇居にも、豫て此事上聞に達しければ、新帝大に驚かせ給ひ、如何なる事ぞと、和田高家に尋ねさせ給ふ。高家畏つて、豫ては正行、事他聞に及ばん事を怖れ、奏聞仕らず候へども、此の如くの隱謀人の候と奏しければ、和田宜く守護仕るべきの由を仰下さるゝ。事既に靜謐に及びしかば、帶刀正行、一千餘騎にて參內し、八幡の逆徒誅伐の爲、發向仕るべき由を奏聞せらる。諸卿悉く正行の忠功を感ぜらる。又八幡發向の事は、世上未だ靜ならず。今夜は是にて御番を勤むべしと宣へども、當山に於ては、何事か候べきとて出でられけるが、此時木澤孫六をして、和州の住人岡五郎を討たせらる。其外大島九郎・飛鳥庄司・大富右馬次郎以下、和州の士十二人を誅せらる。是等も隱謀の聞えあるに依つてなり。

八幡合戰幷正行歸ニ陣千劒破一事

正行、高師泰を襲ふ

爰に將軍の執事高武藏守師直が弟越前守師泰、芳野に發向せんと、二萬餘騎を引率し、旣に八幡山に着陣しけるが、京方へ一味せし和州の者共、返忠顯はれて、討たれぬる由聞えしかば、師泰も力を落し、今日は八幡に滯留し、明日は京都に引取らんとて、打解けて居たる所に、其夜の寅の刻、楠正行片野に着き、直に進んで押寄せたり。京勢大に驚き騷ぎ、夜討こそ寄せたれと、周章漂ふ所に、正行の本陣八百餘騎、鬨をも作らず、洪水の俄に漲り來るが如く、師泰が陣に駈入れば、早瀨右衛門·志貴右衛門太郎後に續いて、五百餘騎にて亂れ入る。京勢一戰にも及ばず、右往左往に逃行くを、ひた追に追ふ程に、淀川に追箝められて、流れ死する者數を知らず、相州の住人水谷大膳亮覺綱も、紀州の湯淺新次郎が甥御調權太と組んで生捕られぬ。敵の首を得ること千百餘級、生捕八十七人なり。大將師泰も、主從十一騎、物具する間もなく、赤裸にて白晝に京都に逃歸る。淺猿しかりし事共なり。正行は八幡に足を

ためず、飯盛の城まで引入れ、翌日芳野殿に參りて、奏聞せられけるは、此度逆徒等、不意に皇居を襲ひ奉らんが爲に、八幡まで罷下り候。さるに依つて老臣等へ申合せ、謀を以て、一戰の內に大敵を追散らして候。此度の儀は、和州の諸士、京方に內應し、敵を引入れんと仕候へども、聖運、天に叶はせ給へるに依つて、親しき者の方より告知らせ候故、岡・楢原・大富・池上・岸井戸以下、悉く討取つて候へば、皇居に於ては、心元なくも候はざりしかば、師泰を追散らして候と奏せられければ、諸卿大に感じ、正行、年にも足らずして、少しも色にも出さず、多くの國人を誅伐し、其上師泰が堅陣に駈入りて、多勢の敵を追散らせしは、正成が子程ありけるよと、皆々感稱し給ひける。斯くて正行千劔破に歸陣し、母上に對面し給へば、母上淚を流し、三十餘日見參らせざりし程に、成人して見えられ候者かな。此度は國の者共、逆心を挾んで、君を傾け參らせんとせし事を、豫て知り給ひながら、自らには何とも宣はず、さり氣なくして參內ありしに、珍事出來りぬと聞えしかば、如何計りの心遣とか思ひ給ひしぞ。豫てより夢計りも、斯くと知らせ給ひなば、斯程には驚くまじ

きものを。親の思ふ程、子は思はざるものぞと思ひ待りき。母ながらも女性にて候へば、斯くは知らせずして、行ひ候ひしにこそ。和殿の賢さよ。正成の子程ありけるよと、今更感心せしぞや。父上もさぞ草の蔭にて、悅び給ふらんとて、淚に咽び給へば、正行も袂をぞ濡されける。其後正行、八幡林を招き、此度忠功の賞として、紀州に於て闕所の地七千五百貫を恩賞せらる。是は京都よりの御教書に載する所の三千貫に一倍して六千貫、殘る所の一千貫は、敵を謀りし賞なりしとぞ聞えし。其餘の闕所の地を以て、此度戰功ある輩に、悉く分ち與へらる。時に志貴右衞門太郎申しけるは、故判官の領所攝津の地、當時敵に奪はれて、御手に入らず候へば、其變りとして、少々は御領に召置かれ候へかしと諫めければ、正行聞きて、命を捨て忠戰したる人々に、何を惜み候べき。旁なくんば、正行一日も安穩ならんやと宣へば、之を聞きける諸人淚を流して、末賴もしくぞ思ひける。されば故恩地左近太郎滿一、常にいひけるは、早晩正行成人し給ひて、馬を乘り廻して士卒を下知し、一戰を快くし給ふを、命ながらへて見たき事よ。明將の子にて坐せば、末如何ならん。

恩地左近太郎病死

父にや勝り給ふらん。それ故命の、人に勝れて惜しきぞといひけるが、滿一病床に伏して發熱し、侵され浮れて妄言せしにも、あれ見よ、あの馬に召されしは、帶刀御曹司殿に候な。軍立の能さよ。あ駈け給ひたりなんどと稱美して、其後少し人心地付きぬる時は、正行の戰場に赴き給ふを、見ずして死なん口惜しさよ。滿一死したりとも、汝等忠心を飜さず、君の爲に一命を捨てよと細かに遺言しけるが、終に病死したりしなり。正行今年十四歲、成長の後は、猶父にも勝りやし給ふらんとて、聞く人舌を震はせけり。

正行軍評定附起請文の事

さる程に南朝の興國五年（北朝康永二年に當る）三月十八日、楠帶刀左衞門尉正行十八歲、和田新兵衞高家十七歲、紀伊・河内の間にありける恩地七郎が城に引入りて、領國の軍勢を集められける所に、高武藏守師直、五千餘騎にて押寄せ、日々に揉立て〳〵、息をも續がせず攻めたりけり。元來恩地が小澤の居城は、紀州の山中にて、嶮岨重々に續

き、要害自然の城郭なれば、師直も攻倦んで、京都に加勢を乞ひしかば、其勢の下るを待付けてこそ戰はめとて、向陣を取つてぞ日を送りける。然る所へ河州の入江兵庫助、近邊の野伏共を相催し、二千餘の勢を以て、師直が陣へ不意に押寄せしかば、師直散々に戰ひ負け、京都を指してぞ逃上りける。翌年は正行、和田・恩地以下を相從へ、京都に攻入らんと催されけれども、事叶はずして、終に河内に引退き、其より和泉・河内・攝津・紀伊の四ヶ國の間に、七ヶ所の要害を築き、勢を分けてぞ守られける。斯くて其翌年、正行廿歲に及びければ、又或時和田正遠の嫡男新兵衞尉高家・三男新發意源秀を招き、足利は父の讎といひ朝敵なれば、何ぞ共に天を戴かん。然るに正行近き河州に居ながら、逆徒退治の沙汰にも及ばざるにより、いひ甲斐なく思ひばこそ、先年備後三郎高德も、當家へ一往の屆もなく、不意に京へは寄せつらめ。早晚までか時を待つて、敵を餘所には詠むべき。攝津の地に發向して、京勢を招き下し、一戰せんと宣へば、源秀聞きて、仰尤に候。故判官殿の怨敵と申し、殊に朝敵にて候を、何を待つといふ期もなく、敵を守り居候はんこと、餘りに穩便に候。思召

立たせ給はゞ、和泉・河内の者共、誰か仰に背き候べきといへば、正行、さらば宗徒の老臣に談ずべしとて、一族功臣等を集めて、意見を問はれければ、安間入道了願進み出で、時今少し早く候。故判官の御遺誡に、廿年過ぎてと仰置かれし事、今以て感心仕り候。其故は、今年既に八ヶ年に及び候に、足利が家子郎等共、侈高うして軍事を忘れ、餘多の所領を得ながら、尊氏兄弟が下知を輕んじ、慾心盛にして、互に所領を押領して、一身の榮を好む。是れ山賊强盜にも勝り候はずや。當時義兵を擧げられなば、尊氏が威を借り、事を武名に寄せて、和泉・河内を奪はんと、雲霞の如く馳下り候ひなん。故廷尉の廿年と宣ひしは、爰なるべし。今四五年も過ぎ候はゞ、高・上杉の者共、侈彌高くなりて、其人なくば、其國は闕けなん。其人亡びなば、其所領は明きなんと思ひ、互に同士軍仕らん。其弊に乘つて、味方軍を發せらるれば、御本意を達せられん事、何の疑か候べきといふ。正行、さればとよ、故廷尉の無病なるに事變りて、明幕病痾身を苦しむれば、存命幾程もあるべからず。若し時來らざる以前に、病に侵され相果てなば、不忠不孝の至りならんと宣へば、了願、仰を返すにて

は候はね共、時至らざるを知りながら、待たずして家を亡し給はんは、孝行にては非ずして、不忠不孝の至りならん。若し時至らずして早世し給はゞ、聖運開かるまじき時なるべしと思召すべし。本意を達せずして早世し給はゞ、御舍弟達に、事を讓らせ給ふべし。兎にも角にも、敵を亡す謀こそ肝要に候といへば、正行も理に服し、時至るをぞ待たれける。斯くて貞和三年（太平記に、貞和二年に作るは非也）正行廿二歳（今年は南朝の正平二年、而して北朝貞和三年なり。然るに太平記十六卷正成下向兵庫の段に、延元元年正行十一歳。是に因つて見れば、正平三年廿三歳。又廿六卷參㆓吉野㆒の段に、正成死する時正行十三歳。是に因る時は、正平三年廿五なり。然れども今年は、正平二年にして廿二歳なる事明けし。則ち正成死後十二年に當る。太平記に、正成の死後十三年に作るは大に非なり）に及びけるが、君の御政を見るに、萬不順の事多けれ共、今は再び王化に服せん事難かるべければ、兎角討死と定め、亡父の十三回の來るを待つに、猶遲しとて、今年を十三年に準へ、佛事作善、心のまゝに營みて後、一族老臣を集めて宣ひけるは、熟思案を巡らすに、足利方の者共、同士討せん事も、程あるまじとは思へども、君の御政正しからざれば、再び聖運開かるる事難かるべし。其故如何となれば、山中伺候の公卿の所領、近年は尊氏が家人等奪取りて、領する所の地多し。之を望んで、又味方に降らんと申す者多きが故に、正

行之を執し申すと雖、一事も曾て御許容なし。是は其鄕の所領、彼は其別當の所領なんどとて、事叶はず。當時は慾を以て集まる習、是れ第一の計略なり。今より後、忠ある者に行はるべき闕所の地、一向に是なし。人を懷くるの道は缺けたるに非ずや。正行如何樣の謀をなしたりとて、本意を達する事叶はざるの證是なり。正行又日を逐うて病重り、年を積みて氣力衰ふ。如かじ尊氏が堅陣に駈入りて、骸を軍門に曝さんにはと宣へば、新發意源秀、諸人の意見をも待たず進み出で、御諚尤もに候。當時の公家の政道にては、本意を達せん事思ひも寄らず。只當家・公家の政に係はらず、直に忠賞を行はれば、素懷を達せられんこと、立處にありといふ。正行、いや〳〵其は足利に等くして、朝敵に同じからんと宣へば、安間了願、此上は一先づ義兵を擧げられ、足利が術のやうを御覽なされ、其後奏聞を經らるれば、君も爭か思召直されで候べき。先づ攝津に御發向あり、京勢の體を御覽候へといふ。志貴右衞門太郎、斯程の一大事を思召立ちたる上は、面々同心に神に誓ひ、存亡を殿と共に究めよといへば、此儀尤なりとて、諸士一同に起請文を書く。其文に曰く、

凡捨身報恩者人倫之法也。爲朝亡命者良臣之節也。此故我等先主故判官正成輕一命於戰場之時、致遺言於子孫曰、可扶亡朝危、使君再奉即九五之位云々。依之今正行且欲顯爲臣之道、且成爲子之術、擧義旗於中華之西南。類身於一毛比義於金石。郎從何爲不善之哉。然則一家一族幷郎從等數百人、感志以爲臣之義與正行共榮共亡事、今於神前堅約期契於將來、若所申定有僞則違變之士也。

此の如く盟詞を書して載する所の連判百四十三人、又別に一書あり。連判八百九十二人、又和田・恩地・志貴・湯淺以下の者共の手の郎從等も、皆々此の如くに契つて、誓詞を連載す。潔くぞ見えたりける。

正行渡邊合戰の事

是に依つて正平二年八月廿二日、楠帶刀左衞門尉正行、態と五百餘人の小勢を以て、攝州中島に發向し、近邊の在家を燒拂ふ。是は態と楠は小勢なりと、敵に思ひ侮ら

正行、赤松範貞を破る

せて京勢を僞引下さんとの術なり。其頃は赤松入道圓心が嫡男信濃守範貞、攝州の守護にて居たりけるが、此由を聞き、敵に足をためさすなとて、手勢八百餘騎を率し、國府を立ちて中島に押寄する。正行之を見給ひ、五百餘騎を三手に分けて向はるる。先鋒は和田新發意源秀二百餘騎、中は正行百五十騎、後陣は恩地・湯淺百五十騎、太鼓の拍子に人馬の足並を揃へ、靜々と懸向ふ程に、敵も川一つ渡せば、味方も川一つ渡して相戰ふ。赤松が先陣三百餘騎、和田に駈立てられて敗北す。赤松信濃守範貞、入替つて戰はんとする所に、正行百五十騎にて魚鱗に立て、透間もなく懸らせければ、赤松の勢戰ひ兼ね、東西に漂ふとぞ見えし。ひた崩れに崩れて、河に追はめらるゝ者三百餘人、信濃守も辛き命を助り、漸々としてぞ逃延びられける。正行は、二百餘の首級を得給ひ、其日天王寺迄引退き、翌日は千劔破へ引返さんとぞ議せられける。さる程に赤松兄弟は、又勢を催し集めて三千餘騎、其夜取つて返して押寄せ、恥辱を雪がんと怒られけれども、浦上・上月等諫めて、以前も粗忽の軍をして敗軍に及び候ひき。只々明日の曉天に押寄せ給へと制しければ、赤松兄弟是に

同じ、寅の上刻に府を立ちて、卯の刻に川を渡り、天王寺に押寄せたれば、楠は早其夜に引入れたりと見えて、人音もせざりければ、赤松が勢、あはれ代々の弓取かなと感じける。諸勢既に引返さんとしける所に、範資が舍弟筑前守貞範、何の仕出したる事共もなく、此まゝにて引取らんは、無下に口惜しき次第なり。天王寺邊まで打入り、近邊の民屋に火を放ち、其勢に引取らんと、渡邊の川を渡り、三千餘騎を八手に分け、所々に火をかくる。時に正行は、東の方古宇津の在家に楯籠れり。赤松、扨は楠未だ引かざるにこそ。押寄せて打散らせよと、備を亂して攻懸る。正行、精兵の射手を二百餘人選み出し、散々に射させて、楯の端の四度路になる所を、三百餘騎の者共、得たり賢しと打つて懸り、縱横無碍に駈立つれば、赤松が三千餘騎、一同に咄と崩れ、主を捨て親を跡に置きて、我先にと逃げて行く。正行、二百餘騎の勢を、備を亂して之を追はしめ、三百餘騎を二手に分け、跡より備を亂さず追かけしかば、赤松が勢又渡邊の川へ追はめられて、水に溺れて死する者數を知らず。信濃守も、既に討たれぬべく見えけれども、佐田新次郎・東條左衞門尉父子三人・吉川・後藤の者

共、返合せ〳〵討死しける間に、範資も危き命を助かり、漸々として逃延びけり。新發意源秀、河を渡して追懸けんと進みしかども、正行、長追は無益なりとて制せらる。今日も亦首を取ること三百餘級、其日の午の下刻に、天王寺を立ちて、千劔破にぞ歸陣せられける。

南朝太平記卷第十四終

南朝太平記卷第十五

正平二年八月京勢南方發向附軍評定の事

さる程に赤松信濃守兄弟は、思の外なる負軍を仕出して、急ぎ京都へ早馬を馳せ、片時も早く、御勢を差向けられ候べしとぞ告げたりける。將軍兄弟大に驚き給ひ、宿老の輩を集め、此事如何あらんと評定あり。仁木左京大夫賴章進み出で、渠は故正成が家業を繼ぎて、智謀無雙の者に候へば、一旦に退治なされんこと難かるべく候。然れば一先づ和睦の使を遣はされ、楠が所存をも御覽候へかしと申さるれば、將軍、さればとよ、此數年、渠を味方に招かん爲、種々謀を廻らすと雖、終に承引せず。今又攝津に出張して、威を振ふこそ安からね。只敵の勢强大ならざる前に、討手の勢を差向くべしとて、細川陸奥守顯氏を大將となし、佐々木六角判官氏賴・舍弟

山内判官定詮・同六郎左衞門尉氏泰・長九郎左衞門尉・宇都宮三河入道・松田次郎左衞門尉・村田・目賀田・靑地・奈良崎・安保肥前守忠實を始めとして、坂西・坂東の諸士凡大名十一頭、都合三千七百餘騎を差向け給ふ。此勢八月十九日に都を立ちて、南方にぞ發向したりける。豫て正行の、京都に附置かれける忍共、千劒破に走り歸り、此由斯くと告げければ、正行宗徒の者共を招き、如何あらんと評定せらる。和田和泉守兄弟・恩地・安間以下、異議區々なりけるを、正行、いや〳〵和田殿は、泉州岸和田の城に歸り給へ。恩地・早瀨をば、赤坂の城に籠置き、正行は千劒破に引籠り、敵の術を見て一戰し、敵兵深々と亂入せば、渡邊の川へ追欲めてくれ候はんと宣へば、皆此儀に同じ、宗徒の輩は、面々の居城にぞ歸りける。

譽田合戰の事

さる程に細川顯氏・佐々木・赤松以下の人々、天王寺に向はれけるが、和田・高家泉州に起つて、武威益盛なる由聞えしかば、急ぎ京都に飛脚を馳せ、敵勢强大に候へば、

諸勢一同に數を盡して寄せ來り候はゞ、味方無勢たるに依つて、防ぎ難く候はん。早々御勢を差向けらるべしとぞ乞はれける。是に依つて京都の周章大方ならず。梶井二品親王は、比叡山の中堂にて、七佛藥師の法を行はる。是は去る建武年中、奥州の多勢攻上りし時、此法を修せられしに依り、平定の佳例なりしとぞ聞えし。同じき廿二日、顯氏、泉州堺の浦に發向せらるゝ所に、和田詐つて退引きしかば、細川も退きて、其後藤井寺にぞ陣せられける。斯くて陸奥守顯氏、諸將を集めて宣ひけるは、和田・楠等勢を盡して、秋山彥六楯籠つたる河州矢尾の城を攻めんと打立つ由風聞す。是に依つて其思慮を巡らし候に、是より金剛山へは、行程七里を隔てたり。然れば和田・楠、遙に山を離れて出でたらん時、味方差違うて金剛山の麓へ押寄せ、跡を追切つて、楠一家の者共を、一戰に討取り候はんと申さるれば、皆々是上策にて候はんと同じける程に、此儀にぞ極まりける。智ある者は之を聞きて、謀既に諸人に知れぬ。若楠に泄れ聞えなば、如何なる謀をかなして、却て味方計られやせんずらんと、囁く者も多かりけり。寄手の陣に附置きたる忍共、千劔破に此事を告げし

かば、正行究竟の幸なりと、和田・恩地・贄川・福家・橋本以下、七百餘騎を引率し、同じき九月十七日の卯の刻に、矢尾の城に押寄する體を見せ、民屋少々燒拂うて、爰には暫くも足をためず、元の方に引返して、千劒破をば後に當て、譽田の森の陰に、勢を伏せてぞ待懸けゝる。天王寺の寄手之を見て、すは楠は、矢尾の城へ寄せたるぞ。正行が首を軍門に曝さん事、今日の中を過ぐべからず。敵の跡を追切つて、分捕高名せよ者共と、楯をも用意せず、射手をも備へず、備を亂して馳向ふ程に、目前に敵のあるをも知らず、譽田の八幡に陣を取つて、敵を西に相待つとて、先駈の勢三千餘騎、譽田河原に馳集つて、馬に水飼ひ、士卒の息を休めて居る所に、譽田の後なる山陰より、菊水の旗二流差上げて、山谷も崩れよと一同に鬨を作る。後に敵あるべしとは思ひも寄らず、寄手の勢驚き騷ぎ、馬を尋ね從者を呼びて、太刀よ鎧よといふ程こそあれ。逃道を求めて、我先にと落ちて行く。長尾卿房主從二騎、村田が一族六人、小具足計りにて、誰が馬ともいはず、打乘り〳〵馳せ出で、時移るまで戰ひけるが、續く味方なければ、悉く討たれにけり。其間に細川陸奧守顯氏、三百餘騎を前後

正行、細川顯氏を破る

に立て、爰を詮と戰はれしかども、諸國の集り勢共なれば、我も〳〵と逃行く程に、顯氏も力なく、東を指してぞ落ちられける。

目賀田彈正忠信良・安保肥前守忠實勇戰の事

爰に佐々木六角判官氏頼・舍弟山内判官定詮は、七百餘騎にて、東の方なる道を引かれけるが、少し馬の駈場の好かりける所にて、皆返し合せて、討死せよと下知して、馬の鼻を雙べ、喚き叫んで相戰ふ。氏頼が舍弟六郎左衞門尉氏泰・粟生田小太郎・楢崎太郎左衞門尉以下廿餘人、敵中に切つて入り、電光の激するが如く、四面を拂ひ八方に當つて、終に討死をぞしたりける。青地・楢崎・儀俄・馬淵は、餘りに戰ひ疲れ、痛手數多負うて引いて行く。爰に目賀田彈正忠信良は、敵餘多に相當つて、火を散らして戰ひ居しが、味方前後に一人もなかりしば、主從只二騎、西の方なる田の中を落ちて行く。敵は群り立ち、遁さじと追懸くる。彈正數度馬を控へて、返さんとしたりしが、敵は多勢なり、我身は只二騎なり。如何すべきと思ふ所に、藤繩目の鎧に、

薄紫の母衣懸けて、鴇毛なる馬に乘りたる武者、先行詰まつて控へたり。彈正、馬を馳せて、誰ぞと問へば、安保肥前守忠實なり。目賀田悅び、如何に安保殿。僅の敵に打負けて、逃ぐるも常の習なり。只返すべきを返さず、助くべきを助けざるを、武士の名折とは申すなり。倡や安保殿、敵を一散らし追散らして、味方を心易く引かせんと思ふは如何にといへば、安保莞爾と笑つて、元弘・建武より以來、三百餘度の戰に、未だ人に勵まされたる事なければ、忠實に勝る者はあらじと思ひしに、御邊は、日本一の大剛の人かな。いざ返さんといふより早く、三騎の者共馬の鼻を雙べ、喚と喚いて懸りければ、さしも剛强の河内武者も、兩方の手先を、手痛く捲り立てられて、三町計ぞ引きたりける。安保は素より、合戰の競後れを、能く知つたる古武者なれば、彈正に吃と目配せして、味方の勢に追付かんと、北を指して引いて行く。河内勢も、之を追留めずして引取りしかば、大將顯氏を始め、諸國の大名、危き命を助かり、天王寺まで引退き、爰に楯籠つて京都の加勢を乞ひ、今一軍せんとぞ議せられける。

正行、芳野皇居參內

正行、昇殿を許さる

正行任官昇殿并中風再發の事

さる程に楠帶刀正行は、思の儘に勝利を得、翌日芳野殿へ參られしかども、病氣發りしかば、先づ千劔破に歸陣し給ひしが、數日經て、病氣少し平癒しければ、芳野の皇居へ參內せらる。主上、何よりも龍眼美しく、正行を御前近く召され、汝が父正成、忠功を專らとし、心力を盡しつるに、汝相續ぎて忠戰を勵み、大敵を靡かしぬる事、忠賞最重かるべしとて、叡感殊に淺からず、從四位上を經て、左衞門督になさる。是は故正成、昇殿を望み申しけれども、心中にのみ籠めて申出さゞりしかば、先帝も敢て知召さゞりければ、終に其御沙汰にも及ばざりしかば、正成死後に聞召し、御後悔坐しけり。されば故天皇、山門に御坐在りし時、正三位の中將になされ、正行をも昇殿と思召されしかども、幼少なりしかば、其沙汰もなかりしかば、此度の賞として昇殿を許され、舍弟正之を大和守に任ぜられ、和田新兵衞尉高家を、和泉守になされ、恩地を、兵衞尉にぞなされける。正行は、一戰に利を得給ひしかども、公家の

政道正しからざれば、參る味方もなかりし故、都へ攻上らん事も叶ひ難し。又河內に居らんも詮なしとて、宗徒の者共を集めて評議し給ひけるは、此度勝利を得ると雖、京都多勢なれば、物の數ともすべからず。父廷尉の宣ふ如く、攝州に發向して城を攻めさせ、川尻を差塞ぎて、京都を惱さんに、京都向はゞ、勢の多少を見て、或は戰ひ或は河內へ引返して、敵を國中へ僞引入れ、謀略を以て相戰ひ、敵引きなば又打出でん。斯くして四五度も惱しなば、謀如何程もありぬべしと宣ひて、既に打出でんとし給ひける所に、大將正行中風再發して、身心惱亂しければ、出陣し給ふべきやうもなく、樣々療養をぞし給ひける。是に依つて和田和泉守高家、紀州の勢を率して、川尻を差塞ぎ、舍弟新發意源秀は、尼崎に楯籠り、兵糧運送の道を差塞ぎしかば、洛中の勢は糧に盡き、大に苦しみ惱みけり。京勢は、北なる山邊に餘多の城を築き、赤松信濃守、二百騎三百騎づつ差分けて守らしむれば、和田兄弟は、海邊の城に據りて、合戰暫くも止む時なし。楠大和守正之は、京方に內應の者多ければとて、大和に發向し、逆心の者共の、城々をぞ攻められける。

吉良・今川・土岐・佐々木以下南方發向
附庄・早瀨忍の事

さる程に細川陸奥守顯氏は、楠に戰ひ負け、相從ふ兵大半討たれ、落ち失すると雖、楠程の小敵に打負け、さのみ遠引をすべきかとて、猶も天王寺に陣を居ゑて、都へ使を遣し、加勢をぞ乞はれける。將軍兄弟、大に驚怖し給ひて、急ぎ援兵を差下さんと、催し給ひけれども、師直兄弟は、虛病を構へて下らず。諸國の勢は、自國の敵を捨兼ねて、上洛せず。さありとて、捨置くべきにあらずとて、吉良・今川を大將として、山名・佐々木・土岐・一色を始め、二萬餘騎をぞ差向けられける。京都にありける忍の者共、千劍破に此事を告げしかば、正行重ねて、さらば實否を知るべしとて、板持十郎次郎といふ忍の上手に、早瀨右衞門・庄左近七郎兩人を添へてぞ差上されける。庄・早瀨は、形下賤にして、商賣人に似たればとて、二人ながら、商人になりたりける。早瀨は大名なれば、人も能く見知りたるらんとて、兩眼に爛れ藥とて、一夜に

目の崩るゝ藥を付け、顏に大なる灸をして、藥を付けたれば、誰れ見知る者もなかりけるに、綴(つゞり)とて、見苦しき衣を着、南都の墨針・ひいな・筆なんどの品々を、張籠に入れ背に負ひて、郎等五人、同じやうの商人に出立たせたり。斯くして多くの大名の家々に入りて、取沙汰を聞出しける所に、攝州發向のこと定まりしかば、河内に歸つて、此旨をぞ告げたりける。

正行京都逆寄附尊氏卿都落の事

さる程に左衞門督正行は、智謀父にも劣らざる良將なれば、同じき十月二日に千劔破を立ち、三千餘騎を引率し、忍んで八幡に陣せらるれば、四條中納言隆資卿、紀州勢に野伏共相交へて六千餘騎、宇治里に陣せらる。和田和泉守高家・舍弟新發意源秀、一千六百餘騎を引率して、尼崎に、堅固に備へて控へたり。斯くとも知らず京都の勢は、同じき三日南方に發向す。先陣は、佐々木佐渡判官入道道譽・土岐大膳大夫、三番は山名父子、四番は仁木一色、五番は吉良三河守・今川五郎入道心省、六番は細

川相模守清氏なり。先陣、其日は芥川に着けば、後陣は山崎に支へたり。正行は八幡に在つて、其日合戰の評定せらる。安間入道進み出で、今夜山崎の敵を打散らし候はんといふ。正行聞き給ひ、某が思慮する所はさにあらず。敵の多勢、攝州に發向して、城々を攻めん其間に、差違うて都に上り、尊氏兄弟を討取るべし。是れ根を斷つて、葉を枯らすの謀にあらずやと宣へば、皆此議にぞ同じける。安間は、先づ目の前の敵を追散らし、逃る敵に追縋つて、洛中に攻入り候はゞ、將軍兄弟を追落し候はん。味方差違うて攻上り候はゞ、南方發向の勢、跡より取つて返し候べし。然らば由々しき大事にて候はん。先づ今夜亥子の刻計り、山崎の宿を燒立て、逃ぐる敵と共に、都へ亂入仕らんといふ。正行重ねて、山崎の敵を追拂はんは安けれども、翌日白晝に、小勢にて洛中へ攻上らば、敵に多少を見透され、而も疲れたる微勢を以て大敵と戰はゞ、大に危き合戰なるべし。只敵を南方へ通して後、味方、京都へ攻上らば、足利兄弟を討取らん事、案の內にありと宣へば、皆是に同じけり。京勢は攝州に下着して、細川陸奧守顯氏・赤松兄弟と會合し、合戰の評定一決して後、城々を攻

正行、京都に攻上る

むべしとて、着陣の日より兩日は、敵の軍立を見て合戰をすべしとて、人馬を休めてぞ居たりける。さる程に正行は、同じき六日の子の刻に、八幡を打立ち給ふ。先づ尊氏の御所七條朱雀へは、恩地・高安六百餘騎、先鋒として二つに分る。次は正行七百餘騎、是も二手に分けらるゝ。直義の宿所西三條へは、志貴先陣として三百餘騎、後陣は安間了願・早瀨右衛門八百餘騎、高武藏守が宿所針唐橋へは、丹下・庄・木澤一千七百餘騎にてぞ向ひける。恩地・高安は二手に分れて、恩地、表の門より向ひけるが、門を荒らかに敲き、攝州より、合戰の注進の使者にて候。御門を開かれ候へといひしかども、宵の酒宴にや醉伏しけん、番兵等能く靜まりて音もせず。恩地仕濟したりと思ひ、築地の上をば跳越えて、城戸を開けて下知しければ、究竟の早業共、五人まで內に飛入りて、門を開かんとしけれども、鑰の差して開かざりければ、恩地只築地を越えよと下知して、我もくと乘入りけるに、搦手より寄せける高安、早內に入りて火を掛けたり。御所中に在合ふ者共、こは何事ぞと周章騷ぐ所を、寄手の軍勢、追懸けくゝ討取りけり。近習の者共、大將尊氏の寢所に來り、夜討の入

足利尊氏死地を遁る

りて候、今は叶ひ候まじ。一先づ一方打破りて、御落ちなされ候へと、大將を中に引包み、逞兵三十四人大庭に切つて出で、打破つて通らんとしけれども、皆討死して、尊氏卿と入江大和守・津々木新五と、主從三人に討なされ、又本の所へ逃歸る。裏門へ向ひたる者共計、少々遁れて落失せけり。尊氏卿も、甲は取りて着給ひしかども、鎧も着給ふべき間もなく、太刀計取りて、自ら戰ひ給ひけるが、既に薄手二ヶ所負ひ給ひぬ。今は遁れつべうもなし。自害せんと宣ひけるを、戸崎刑部走り參り、此方へ御入り候へと、頓て御手を取り參らせ、湯殿の後に至り、築地に橋を掛けて、走り登つて見るに、人家の裏にて人もなし。願ふ所の幸なりと悦んで、大將を始め、主從七人の人々登り越し、橋を此方へ取つて後、町人などの落行く體に見せてぞ逃れ給ひける。寄手の勢、追懸け參られければ、六人の者共返し合せ〳〵、防ぎ戰ひける程に、四人は討死して、津々木・入江が外は、御手を引く人もなし。主從三人、虎口の害を遁れて、丹波の方へと落ち給ひけるが、桂川を渡り給へば、其夜も既に明けにけり。

其より天龍寺に入らせ給ひ、生きたる心地ぞ出で來らせ給ひける。是迄も楠寄せたりと知り給はず、只御內の大名中に、逆心の者あつて、夜討に寄せたりとぞ思召されける。尊氏卿の御臺所も、此時害せられさせ給ひぬ。凡そ御所中の男女、或は討たれ、又は燒死する者、八百餘人に及びけり。

三條典厩拔落附大樹兄弟御歸洛の事

爰に左典厩直義は、持佛堂に詣して、曉の看經して坐しける所に、志貴・早瀨押寄せて、門戶を破り攻入つて、狼狽へ廻る者共を、追懸け追詰め討取りたり。然るに直義は、謀才深き人なりける故、一年(ひとゝせ)備後三郎高德が隱謀より、樣々思慮を巡らされけるが、都近き所に楠あり、又此頃の人の心、味方とても賴み難しとて、持佛堂の中、板敷の下に、大なる穴を掘らせられ、其間四十餘間にして、町人の田邊彥七入道寂正といへる、富裕の者の內倉中へ出づる樣にし給ひしを、人曾て知らざりける。直義有合ふ者共に向ひ、今は遁れぬ所ぞ。汝等能く敵を防げ。奥に入りて心靜に自害すべ

足利直義觀音寺に奔る

しとて、御臺所と共に、女房達五人・近習の士六人を召具し給ひ、持佛堂に入りて自害の體に見せ給ひ、彼穴より拔出でてぞ落ち給ひける。寂正が許に厩を建て、常に馬七八疋も立置かれければ、御臺所をも馬に乘せ、小原の方へ落し參らせられけり。志賀・早瀨、生捕の者共に問ふに、典厩は、持佛堂に入りて御自害候といふに、誠ぞと思ひ、其死骸を求めんが爲、燒けたる跡にて、持佛堂の灰を掃除させけるに、死骸はなくして、堂の下と覺えたる所に、大なる穴あり。人を入れ見するに、寂正が家の內に出でたり。扨は直義は、此穴より出でたりとて、諸人大に驚きけり。執事高武藏守師直が宿所も、寄手に一味の者あつて、豫て相圖をしたる事なれば、役所より火をかけて切り廻る。寄手の勢は是に氣を得て、喚き叫んで攻戰ふ。師直は三百騎計にて、丹下が手より切つて出で、爰を詮と戰ひし程に、我身も痛手四ヶ所まで蒙りながら、難なく駈破つて、江州を指して落行きけり。師直が舍弟越前守師泰は、將軍兄弟、師直を失はんとし給ふぞと心得ければ、在合ふ兵二百騎計にて、師直が宿所に馳向ひけるが、早火のかゝりたるを見て、兄と一所に討死せんと、無二無三に進みけ

るを、郎等共大に制しければ、其より是も近江にぞ落行きける。其頃在京の軍勢、四萬計もありけるが、三ヶ所の煙を見て、何と思ひ分けたる事もなく、命こそ大事なれと、心々に十方に分れ、落行きけるこそ薄情なれ。正行は、三ヶ所の勢を一所に集め、辰の刻に引拂ひ、鳥羽に陣を取りて、吉野へ合戰の旨を注進せられければ、主上叡感淺からず。大和大路へ落ちける勢は、大半隆資卿の手へ討取られしとぞ聞えし。又持明院の主上上皇は、近江の武佐へ行幸なる。然る所に尊氏卿は、丹波の高山寺の城に坐しけるが、楠又向ふと聞えければ、高山寺をも落ちて、若狹に廻り、其より江州に至つて、主上上皇を始め奉り、直義・師直等と參り合ひ給ひ、頓て三萬騎になりしかば、急ぎ上洛せんと催し給ふ。正行此由を傳へ聞き、吉野殿へ使者を參らせて、御心易かるべき軍勢一二千を、皇居守護の爲に殘され、其餘の士卒を賜はり候へ。江州に馳せ向ひ、足利を討取るか、東に追下すか、二つの內に決すべく候と奏せられしかども、攝州に敵あれば、皇居の事覺束なしとて、何の用共なきに、軍勢一萬五千餘騎、芳野に召置かれて、一人も上らせられざりしかば、正行涙を流し、今の御政道

にては、爭か聖運を開かるべき。足利入洛せば、敵陣に駈入りて討死せんと宣ひけるを、恩地兵衞・安間入道、先づ謀を以て、敵を一當あて御覽候か、又は河內へ引退き、御心中の通りを、奏聞せられ候へかしと勸めければ、正行、此上は近江に發向し、勢多を越えて一戰し、謀を以て雌雄を決すべしと、軍議一決して、明日丑の刻、鳥羽を打立たんと宣ひける所に、尊氏早勢多を越えて、大津に着き給ひし由聞えける故、此上はとて、千劔破に引取り給へば、大樹御兄弟は、頓て歸洛し給ひけり。

南朝太平記卷第十五終

高師直被ㇾ奪ニ辨内侍ㇳ事

爰に其頃南帝に仕へ參らせられし辨内侍と申せしは、形の最艶なるのみならず、心ばせ優しくして、敷島の道に心を寄せ、衣通姫の流れを汲み給ひけるを、高武藏守師直、如何なる折にか見初めけん、樣々心を盡しけるに、先帝崩御の後、密に文を作り、山中を忍び出でさせ給へ。御迎を參らせんと、千度百度いひ遣しけれども、御返しもし給はざりければ、師直も樣々思慮を巡らし、三位行氏卿の許へ通ひける女のありけるを求め出し、引出物多く與へて、色々賺し賴みければ、此女俄に德付きたる心地して、安々と領掌し、行氏卿後基兄、内侍伯父なりの許に行きて、北の方の側近く參り、斯樣の事の侍る。共に計らはせ給ひて、本意を遂げさせてたび候へかし。然らば所領を

も多く附け參らせ、三位殿の官位をも、進め參らせんと宣ひ候。若し此事聞入れさせ給はずば、御身の上、安穩には渡らせ給ふまじといひければ、さらぬだに高師直とだにいへば、今の世の人の怖れぬものもなきに、いと賴もしく聞えければ、北の方も樣々心を巡らし、辨內侍の方に、古へ仕へし女に、梅枝とてありけるを招き寄せて、如何にもして、能々調へよかしとて、文細々と書き認め、術を委しくいひ聞かせければ、梅枝慾に心引かれ、命を神にかけて肯せけり。師直大に悅び、究竟の若者共を選み出し、廿餘人梅枝に添へて、吉野の山中に差遣はす。梅枝若黨共を道に留め置きて、一人忍びやかに內侍の許に行きて、三位殿の北の御方より、御使に罷り候。山里の御住居、さこそと思ひやり參らする每に、御戀しさも彌增(いやまし)に、袂も干し敢ず侍り。此度住吉へ詣で侍りし程に、逢ひ參らせん事を思ひ、河內國とやらん高安の邊に、相知りたる人の侍ふにより、其にて待ち奉り侍る。果敢なき世の中といひ、まして亂れがはしければ、此度ならでは、爭か相見參らせんなどと、細々と申して、御文を參らする。內侍限りなく悅び給ひ、急ぎ御文を開き見給ふに、黑み渡る迄に書き

給ひて、輿に、

逢見んと思ふ心を先立てゝ袖にしられぬ道芝の露

と、一首の歌を書き給へり。内侍涙を押へ、誠の母君に捨てられ參らせしよりは、其にも勝りて、思ひ給ひし御情の忘れで、朝夕戀しう思ひ參らすれとて、君に御暇を乞ひ、女房二人・靑侍三人召具せられ、取敢ず出給ひける所に、道にて若黨共出逢ひて、北の方は、高安に待たせ給へども、人多くてむづかしければとて、住吉へ御通り候か。是へ御出候はゞ、あれまで具し奉れと仰置かれ候へばとて、人數多く出でて取留む。こは心得ぬ事かな。住吉まで遙々と、何としてか行くべき、御輿を返せと宣へば、靑侍共、頓て輿を返さんとするに、只住吉まで急ぎ給へと引立つる。こは理不盡の所爲かな。如何にも叶ふまじと引留むる。物の心をも辨へざる荒夷共、さないはせそといふまゝに、三人共に討取つたり。內侍は最怖しく、消え入る計りにて、鬼に取られ給へる心地して、聲を限りに泣き給ふ。武士共は情なくも、今夜住吉まで急ぐべし。武州も其まで出向ひ給ふらんといひ罵りて、飛ぶが如くに、石川まで着き

ける所に、楠左兵衞督正行、吉野殿へ參るに行合ひたり。若黨共はつと思ひ、傍なる木陰に立忍ぶを、正行心元なく思ひて、事の樣を問はせられけるに、局方の住吉に詣でさせ給ふといへば、扨はとて過ぎなんとするに、內侍の泣き給へる聲を聞き、押して御輿の邊へ立寄り、如何にやと問ひ給へば、斯樣々々の事に侍ふと答へ給ふ。正行、扨こそ思ひつる事よ。芳野殿に參つて奏すべし。其程は皆召取れと下知し給へば、今は叶はじとや思ひけん、若黨共四人、太刀打振つて懸りけるを、大勢中に取籠めて、四人共に討取りければ、其餘の者共は、跡をも見ずして逃行くを、若者共追懸けて、悉く搦めけり。

楠正行詠歌附辨內侍・吉田宗房卿秀句の事

斯くて楠正行は、芳野の皇居に參內し、事の由を奏聞し給ひければ、主上叡聞坐し、梅枝を樣々賺して問はせられけるに、女の淺猿さは、ありのまゝに一事も泄らさず白狀す。頓て梅枝を尼になし、歸つて此有樣を申すべしとて追放たれ、若黨共は、悉

く死罪にぞ行はれける。此度正行參り合はざりせば、内侍は辛き目に逢ふべきを、賢くも計らひつるものかなとて、内侍を正行に賜はらんと敕諚ありけるに、正行畏つて、

とても世に存命ふべくもあらぬ身のかりの契をいかで結ばん

と奏して、辭し申されければ、諸人其時は心得難く覺えしが、後にぞ思ひ合はせける。此内侍は、右少辨俊基朝臣の息女にて坐しけるが、父俊基朝臣、相模入道崇鑑が爲に害せられ給ひて後、母君さへ世を厭ひ給ひければ、其より三位行氏卿の許に坐しけるを、先帝船上より御還幸の後、召出されしかば、御宮仕へし給ひけるに、又天下亂れて、皇居も定まらざりしかども、離れ奉らで、此芳野の山中迄も參り、君に仕へ奉られけり。されば先帝の御時、或夜四條中納言隆資卿・洞院左衞門督實世卿・吉田中納言宗房卿、其外の公卿數多候し給ひけるに、御酒給はらんとて、此内侍の御土器持出で給ひけるに、如何し給ひけん、取落して、二つ計りに破れければ、先帝御氣色惡しく見えさせ給ひけるに、内侍取敢ず、

さかづきの破れてぞ出づる雲の上

と宣ひければ、君御心よげにて、誰にてもつけ候へかしと勅諚ありければ、宗房卿、

星の位のひかりそへばや

と附け給ひしかば、君甚だ御入輿あつて、夜も既に明けなんとするまで、人々御酒たべて候ひけるに、山烏の聲の聞えければ、隆資卿、

還幸と鳴くや芳野の山烏かしらも白し面白の夜や

と詠じ給ひしかば、君彌御叡感あつて、人々退出し給ひけるとぞ聞えし。

住吉合戰附山名三河守兼義討死の事

さる程に武藏守師直は、正行に支へられ、辨內侍を奪ひ得ざりしかば、大に怒り憤り、河州に發向して、楠を退治仕り候はんと申しければ、將軍許容し給ひ、然らば多勢を催し、來春は師直罷り向ひ、正行を誅伐すべし。さりながら當時、助の勢を差下さずば、天王寺をも追落されぬと覺ゆるぞとて、同じき十一月廿三日、山名伊豆守

時氏兄弟を、六十餘騎にてぞ差下されける。細川陸奥守顯氏大に氣を得、元の天王寺に陣を堅うして守られければ、山名兄弟は、住吉に陣を取つてぞ居られける。左金吾正行此旨を聞き、渡邊の川より此方に城を構へられなば、勇々しき大事なり。敵の不意を擊たんには如かじとて、同じき廿六日の子の下刻、在合ふ勢を引率し、千劔破を立ちて、河内の府中に着けば、五百餘騎になりぬ。斯くして辰の刻には、和田・湯淺・安間・恩地等馳集りて、三千餘騎に及びけり。正行、野瀨・花田を打過ぐるとて、板持・野上・松原といふ三人の忍びを呼寄せ、思ふ樣あれば、汝等は泉州に行き、石津・萬代・深井の在家に火を放て。然らば和田高家も急ぎ馳せ來るべし。住吉の敵は、和泉より和田向ふぞと心得て、住吉の松原濱の手より押出し、遠里・小野の邊へ打出でん所を、正行不意に山名が陣に駈入りて、一時に雌雄を決すべしと宣ひて、野伏百餘人を相添へて、泉州にぞ遣されける。是は去ぬる夜より、高家の方へいひ遣されけるに、只今罷出づべしと返事はありながら、泉州の出馬の遲き故に、出陣を告げんが爲、又敵を謀らんが爲、一謀にて、二つの術をせられしなり。正行は、萬塚より、三

千五百餘騎を五軍に分けらるゝ。先陣は恩地・丹下七百餘騎、二陣は和田・新發意源秀・安間了願、三軍は志貴・早瀬・湯淺七百餘騎、靜まり返つて押寄する。山名兄弟は、案の如く石津の在家に火のかゝりたるを見て、岸和田より、高家向ふぞと心得、手を分けて戰へといふ程こそあれ。赤松は、遠里・小野に陣すれば、土岐・佐々木は三千餘騎にて、安倍野の東西に陣を張る。細川奥州は、新手に入替らんが爲め、天王寺に堅く備へて待たれたり。山名兄弟は、四千餘騎にて、瓜生野の南の方に駈出づる。正行は、敵思ひの外多勢なりとて、一二の陣を一手になし、靜々と押懸からる。山名が勢、すは菊水ぞといふまゝに、旗の手に氣を呑まれ、周章騷ぐ所に、和田新發意源秀、金洞の上に洗皮の大鎧を着し、大太刀小太刀二振帶び、六尺計りの長刀の、金の蛭卷したるを小脇に掻挾み、莞爾と笑うて進んだり。安間了願は、唐綾縅の鎧に、同毛の五枚兜鎣の大鍬形打つたるを猪首に着、紅の大笠印を吹亂させ、小太刀一振帶びて、柄の長さ一丈三尺ありける鑓を、馬の平頸に引そばめ、兩人、諸卒に先立つ事三間計りにして進みしかば、次に恩地・丹下、長刀を馬上に横たへ、士卒を下知して進

んだり。山名が勢、和田・安間に突立てられ、漂ひ騒ぐ所へ、多勢喊と切入れば、山名が勢散々に戰ひ負け、我一にと敗走す。時氏の舍弟三河守兼義、取つて返して戰ひしが、終に譽田將監光康に討たれぬ。原四郎太郎・舍弟四郎次郎・綿貫下野守・箕浦四郎實俊・同藤六・大甘六郎・小松原刑部左衞門尉・野木與一兵衞を始めとして、宗徒の者共四十餘人討死す。山名伊豆守時氏も、自ら手繁く相當つて、痛手數ヶ所負はれけるを、高山・小林・猪野七郎を始めとして、譜代恩顧の若者共、命を輕んじて相戰ふ間に、伊豆守危き命を助り、漸々落延びられけり。之を見て住吉の松原に控へたる赤松筑前守、矢一つだに射ず、天王寺を指して引退く。さしも京方にて、鬼神ともいはれつる赤松兄弟だに、山名を捨殺しつるこそ薄情けれ。安倍野に控へたる土岐・佐々木等も、十町餘り駈出でしが、一戰に打負けて、一同に敗走す。此の如く京方の諸陣悉く崩れ立ち、我先にと逃ぐる程に、渡邊の橋よりせき落され、水に溺れて死する者數を知らず。漸々死を遁れたる軍勢共、這々京都へ逃上る。淺猿かりし事共なり。

京勢多被ニ生捕一附正行情深き事

此度渡邊の橋よりせき落されて、水に溺れし兵數百人ありけるを、引揚げて、悉く生捕りけり。先づ宗徒の者共には、山名が手にて小林右馬助・桐野刑部・久米兵衛・江原藤内左衛門・澤原十郎・八木十郎太郎・板屋三郎以下四十二人、細川が手には、高島八郎・三山彌八・小澤平次・小笠原孫次郎等を始として廿八人、赤松が手には、柏原源太・三日月三郎光・伊藤十郎次郎・羽川又太郎・宇野七郎・田原一郎・魚住孫八以下廿一人、土岐が手には、稻葉兵庫正久・明智大五・坂田左近・日根野彌太郎・富田九郎等廿三人、佐々木が手には、永原越前守・野州刑部・馬淵十郎次郎・高宮九郎八郎・瀨多九郎常氏・一子犬王丸・同田法師・矢橋橘次・高宮・小牧・志那・長濱等四十六人、凡そ生捕五百餘人其內侍百五十八、其餘は雜色下部なり。手負三百餘人ありとかや。各誅せらるべきの由申せしかども、正行、いやいや、何れもさせる朝敵にあらず。本國に歸しなば、謀の種とぞならんずらんとて、死を宥し、侍百五十人に、何れも小袖一重を與へ、雜色

下部に至るまで、分々當々に小袖を下し與へ、鎧・太刀・刀・鞍・具足、尋常に仕立て與へられければ、時の人、これを美談とせずといふ事なし。されば五百餘人の内十四人は、正行の情の程を感じ、正行に屬し、四條繩手にて、一所に討死しけるこそ哀れなれ。

本宮返忠附八幡落城同早瀬右衞門討死の事

住吉の合戰に、京都の勢戰ひ負け、命のあるを勝にして、漸々逃取りしかば、將軍兄弟、安き心もし給はず。如何あらんと評定し給ふ。其時直義宣ひけるは、何とぞ謀を廻らし、八幡の城を攻落し、味方の城となしなば、南方征伐の便ともなり、且は都守護の爲にてもあるべければ、忍んで人を遣し、八幡の衆徒を語らひて、見候はゞやと宣へば、皆此儀に同じ、即ち社僧を師直が方に呼寄せ、忍びやかに語らふに、拙僧は出家の身にて候へば、叶ひ難く候。本宮太郎左衞門・木澤與一こそ親しく候が、芳野殿の聖運開かるべくもなしとて、力を落して罷在候なり。所領を賜りなば、一

定味方に參るべく候といふ。師直大に悅び、本宮・木澤返忠して、八幡を攻落しなば、所領は望に任すべし。和僧も所領一所の主たるべしとて、頓て判形を出しけり。社僧判形を持ちながら、態と隱して、此事を本宮に語りければ、本宮は、流に棹す心地して、忽に同心す。其時彼僧、師直が判形を見せければ、本宮、所領を給はらん事は、忝く候へども、總領湯淺孫八を亡されんには、一味仕りても何かせん。湯淺が今までの罪過御免あつて、本領安堵の御教書の上に、直義朝臣の添狀、師直の私の判を給はり、某に新恩三ヶ所、河州にて給はらば、木澤をも、味方に申進め候はんといふ。彼僧悅び、又武州が方に來り、此由斯くといひければ、師直彼法師を相具し、將軍の御所に參り、此旨を申しければ、謀なりぬとて大に悅び給ひ、尊氏兄弟、御教書を出されければ、師直も、私の判を出しける。社僧悅び、本宮に見せければ、本宮之を見て木澤を呼寄せ、此旨を知らせければ、木澤も早速同心をぞしたりける。然れども師直、楠に、斯樣の事にて、謀られたること數度なれば、二人の中一人は、此方へ來り給へ。さなきに於ては、勢を八幡に差向けん事、叶ひ難しといひ送れば、兩人尤と

や思ひけん、本宮は、一子を忍んで京へ上しぬ。木澤は、降人に出る體にて、京都へぞ出でたりける。師直、扨は誠ぞと悦んで、松井山城守氏種・神保十郎左衛門立重を、二千餘騎にて、八幡山に差向けらる。本宮豫ての約の如く、百餘人を、我後所より城中へ引入る。寄手は相圖を定め、俄に鬨を作り、喚き叫んで攻懸る。城兵等、こは如何にと駭き騒ぐ所に、本宮太郎左衛門尉、我役所に火を掛けて、咄と喚いて駈出づれば、城の大將早瀨右衛門尉、腹巻計り取つて打かけ切つて出で、爰を先途と相戰ひ、七顚八倒して防ぎしが、多勢の中に取籠められ、郎従百餘人と共に、同じ枕に討死して、落城にぞ及びける。恩地・安間煙を見て、八幡に力を合せん爲め、飯盛の城より打つて出で、翌七日の卯の刻、八幡に馳向ひければ、木澤・本宮等、豫て京勢にや告げたりけん、河州より勢の來らんずるつま〳〵に、軍勢を差向けて待懸けたれば、飯盛勢は、早速に引取りけり。京都の忍び共、千劔破に走り歸り、今曉京勢共、鳥羽の方より發向仕り候程に、先づ注進仕らん爲め、馳來り候所に、早八幡落城に及び候故、先づ飯盛へ此事を知らせ候へば、夜明にこそ、勢をも出すべけれと宣ひ候とい

ふ。正行、扨は早瀨は討死に極れり。哀れ八幡を引き候へと、頻にいひつるものを。謀叛人は誰とか聞くと問ひ給ふ。仔細は存ぜず候といふ。正行思ふやうあり、本宮にてぞあるらんと宣ふ。其智の明かなること、宛も神の如くなれば、皆人舌を震はしける。

本宮軍意見附京都勢南方發向の事

さる程に將軍兄弟は、本宮・木澤が忠功莫大なりとて、賞祿厚く宛行はれ、其後南方發向の評定あり。本宮申しけるは、謀を以て戰ふ時は、小を以て大を挫く事、良將の常とする所にて候。ましてや多勢を以て、小敵と戰はんに、謀を以てせば、勝たずといふ事や候べき。某累年南方に候ひて、楠二代の術、能存じて候ものをといへば、執事武藏守、賴もしゝゝ。師直多勢を率し、南方に發向し、是非楠を誅伐せんと思ふは如何にといへば、本宮聞きて、某一大事を敎へ申し候べし。楠は常に忍びの者と號し、奇妙の者共を、數多都に附置き候が、或は商人又は乞食法師などとて、

樣々の形に變じ、洛中の取沙汰を日々に聞きて、千劔破に告げ知らせ候故、味方の術は、却て敵の謀となり候なり。然れば先づ彼忍びの者共を、御退治なされ候べし。次に南方御發向の事、以前度々南方に向け給ふ人々、渡邊の橋を越え候により、楠が勇を恐るゝ上に、又大河後にあるを恐れ候。是れ先づ味方利を失ふ其一つにて候。其上、楠、渡邊には、大敵を小敵にて防ぎ戰ふ術を、能く仕覺えて候。又味方、天王寺・安倍野・住吉に陣を取り候故、先陣敗北仕る時、後陣怺ふべき要害の地候はず。扨こそ毎度河水に溺れて、多く勢を損じ候。然るにより、某愚案を巡らし候に、此度に於ては、越後守殿師泰は、渡邊より泉州堺に着陣あつて、西國より海上を渡る味方を、待付けられ候へ。楠不意に寄せ來らば、早速勢を出さずして、敵の多少謀の程を見課せて後、一時に雌雄を決せられ候へ。又武藏守殿は、多勢にて飯盛の城を攻められ候へ。然らば必定、正行後詰をぞ仕らん。其時城兵の切つて出でざるやうに、味方五千計りにて、飯盛を取圍ませ、南の方四條繩手を前に當て、伊駒・外山の峯に取登り、鳥雲に備を設け、打下し〱戰ひ懸つて敵を惱しなば、味方勝たで候べきか。又武

州は、飯盛より三十町計り此方に、多勢にて堅固に御控へ候べし。然らば如何なる正行とも申せ、敗軍仕らで候べきと申せば、將軍兄弟感心し給ひ、先づ楠が忍びの者を、尋ね出せよと下知し給へば、河州より來りたる町人共を置くべからずとて、或は生捕り又は死罪に行はれしかども、忍びの者一人もなくして、實の和泉・河內の商人・細工人等、多く橫死にぞ會ひにける。忍びに名譽を顯はしたる板持十郞は、己は京に、上下八人にてありながら、伊賀の者なりと僞り、あらぬ者の首五つ取りて、楠が忍びを討つて候とて、正行の判形を取添へて差上げければ、褒美として砂金廿兩を給はりし故、是より板持、京中を怖るゝ方なく走り廻りて、取沙汰を聞出し、千劔破に注進をぞしたりける。斯くて高越後守師泰は、河州に發向すべしとて、手勢三千餘騎を引率し、同じき十二月十四日の未明に都を立ちて、淀の津に着陣す。此手に馳加はる人々には、武田甲斐守百五十騎、逸見孫六入道百三十騎、是等は鳥羽に陣を取る。厚東駿河守は二百餘騎にて、赤井河原に陣し、宇都宮三川入道は、七百餘騎にて大渡に陣を張る。赤松信濃守は、五百餘騎にて伏見に着けば、近邊の公事武

者三百人馳加はつて、七百餘騎にて控へたり。小早川備後守は三百餘騎にて、一口に陣を取る。其勢凡て五千八百餘騎とぞ聞えし。斯くて同じき十八日の戌の刻、高武藏守師直、七千餘騎にて八幡に着く。此手に加はる人々には、仁木左京大夫頼章、二千餘騎を率し、眞木鄉葛葉の里に陣を取る。今川五郎入道心省は、一千餘騎にて鹿島に陣し、細川河波將監淸氏、百餘騎にて山崎に着陣す。武田伊豆守氏信は、千五百餘騎にて櫻井に陣し、高刑部大輔は、二千餘騎にて葉室に陣し、同播磨守は、一千餘騎にて水無瀨に着く。宇都宮遠江入道・蓮智千葉介貞胤は、兩勢合せて六百餘騎にて、芝田鄉に陣を張る。南遠江守は、七百餘騎にて天地河原に陣を取れば、同次郎右衞門尉は、七百餘騎にて淀河に船を浮べ、奇道に備へて向ひたり。其外佐々木佐渡入道道譽五百餘騎、同六角判官八百餘騎、同黑田判官五百餘騎、長九郎左衞門尉信綱三百餘騎、土岐周濟坊・明智兵庫助七百餘騎、萩野尾張守朝正五百餘騎、松田備前二郎一千餘騎、須々木備中守八百餘騎、宇都木平三七百餘騎、曾我左衞門一千餘騎、谷川兵庫助三百餘騎、赤松筑前守範貞八百五十餘騎、原四郎太郎・同四郎次郎・同四

郎三郎五百餘騎、凡そ其勢二萬七千餘騎、山野一片に陣をぞ取つたりける。

木澤入道忠貞の事

木澤孫六入道淨賢、千劒破に使者を遣はして申しけるは、一族本宮太郎左衞門が方より、足利殿の御敎書なりとて、入道に逆心を進め候。內々の御謀の如く、僞つて敵方に一味仕り、術に乘せて討ちたくは候へども、本宮といふ不覺人が、累年の御厚恩といひ、遁れ難き重恩を忘れ、隱謀を企て候。然れども入道も、若し本宮に一味やせんと、暫くの間も疑はれ候ひなば、以來如何なる忠功を勵み候とても、皆仇事にてぞ候はん。さるに依つて入道が二心なき心底を顯はし、身の存亡を、君と共に定めんと存じ、足利殿の御敎書二通、執事武藏守師直が添狀、又本宮が狀をも、封をも切らず、其まゝにて差上候とて、本宮の使者一人、師直が使者一人、二人の使者を召取つてぞ送りける。正行其忠心を感稱し、神妙々々とぞ宣ひける。正行諸臣に向ひ、定賢・忠貞の行跡、感ずるに餘りありとはいひながら、先づ僞りて陰謀に與し、當家

へ斯くと通じなば、正行何ぞ疑ふべき。能き謀いくらも出來り、師直を討取らんこと、案の中なるべきに、是ぞ殘心の至りなりと宣へば、平三郎左衞門、仰尤にて候とぞ申しける。斯る所に正行の、京都に附置かれたる隨一の忍びの名人板持十郎立歸り、昨十八日の夜の戌刻計り、師直八幡に着陣仕り候。渠等兄弟、諸國の大名相集つて、三萬餘騎もや候らん。此度は師直手向ひ候が、辨の內侍を奪ひ得ざりしことを憤り、千劒破を攻落すか、師直河州に骸を曝すか、二つの中に決せんと、廣言を吐き候なり。其御心得候べしとぞ告げたりける。

南朝太平記卷第十六終

南朝太平記 卷第十七

楠正行遺誡幷南帝正行館へ被レ遣ニ敕使一事

さる程に左衞門督正行は、京勢多く八幡に着きぬと聞えしかば、一族老臣等を集め、合戰の評定あり。和田和泉守高家・故恩地滿一が子安間了願進み出で、此度は敵兩方より、手を分けて向ひ候なれば、先づ味方の城々に兵糧を籠め、二ヶ月計り戰はんに、諸國の取集め勢疲れて、多くは逃失せ候はん。例の如く其弊(つひえ)に乘つて、謀を以て戰ひ候はゞ、味方勝たずといふ事や候べきといふ。正行聞き給ひ、旁の宣ふ所理に當れり。さり乍ら當時の御政道を見るに、爭か聖運開かるべき。我父建武に討死を遂げ給ひしも、心中今思ひ當りたり。某を殘し置き給ひしは、諸卿後悔あつて、能き謀も出來んと、思ひ給ひたるなるべけれども、猶も朝政正しからず、又武の謀を

正行、戰死を期す

なし給はん人々にも非ず。正行又多病なれば、世に存命ふべしとも覺えず。若病に冒され世を早うせば、無念の至りならんか。さるに依つて正行に於ては、此度討死候ぞ。舍弟正時（始は正之）・正儀は、命を全うして千劔破に引籠り、幼子多門丸を守立てられよ。正行討死の後、諸卿も爭か理に服はざらん。亡父正成の遺言に、少しも背き給ふべからずとて、悉く遺誡を殘し置き、郎等三百八十六人の內、二百八十餘人は、家の爲に殘し留め、百人を勝つて戰場へ向はんと、自筆に姓名を書付けらる。暫くあつて舍弟大和守正時、誰かは今の世に存命へたく存ずべき。春日大明神も照覽あれ。正時に於ては、是非御供候ぞと、詞を放つて申さるゝ。正行大に驚き、此上は力なし。八幡も知見あれ。正儀留まらずんば、父兄に對して不孝の至り、未來迄も勘當ぞと宣へば、正儀淚を流し、兎角の返事にも及ばず。正行に相從ふ人々には、舍弟大和守正時・和田和泉守高家・同新發意源秀・同新五郎正朝・同紀六左衞門父子二人・野田四郎・金岸兄弟・畠山與三・同六郎・河邊石掬丸・楠右近將監正忠（七郎正秀子）・關地良圓・安間了願以下、其勢三千五百餘人なり。其內正時の郎從廿八人、和田高家の郎等卅人、

正行參內

同源秀の手の者廿三人、皆悉く必死ぞと約しける。さらば打立てよとて、同じき廿七日、千劔破を立ちて、吉野の皇居に參內し、合戰の旨を奏聞して後、飯盛の城に兵糧を入れさせ、合戰の用意頻りなり。斯くて翌廿八日、正行吉野を打立たんとし給ふ所に、正行の心中、叡聞にや達しけん。四條黃門隆資卿を敕使として、仰下されけるは、正行此度討死と思ひ定むるの由風聞す。汝朕を恨むる仔細何事ぞや。故正成討死の後、天下皆尊氏に屬して、朝敵となると雖、汝が武略父に劣らず。忠心を勵むに依つて、此山中に居し、今迄も玉體恙なき所なり。其忠功の厚き事、異國本朝に未だ聞かず、前代に例なし。まして況や末代に於てをや。天下再び王化に歸せん事、汝が忠戰に依らずして、誰か其功を立てん。然れば身を全うして、逆徒誅伐をこそ心懸くべき所に、死を一途に思ひ定むる條、叡慮驚き思召す所なり。朕を恨むる所あらば、速に申すべし。忽ち望に任すべし。其とても心中に恨を殘しなば、先づ皇居に參り、朕を害して後、汝が心に死を任すべしと仰下されければ、正行淚を流し、敕諚の趣、身に餘つて難有く候。正行何ぞ君を恨み奉り候はん。是れ皆佞臣の虛說に

て候なり。次に此度敵陣に向ひ候事、先日京都へ攻上り、足利を追落し候ひし時、諸國の武士、味方に參らんと申す者共候ひつれども、忠なくして賞を望むの間、一向御承引なかりし、是に依つて運を四方に窺ふ者共、悉く敵に與し、多勢にて寄せ來り候なり。此時十死一生の戰をせずんば、爭か勝つ事を得候はん。是れ君の爲に忠を專とする所にして、一塵も君を恨み奉ること候はず。此旨宜く漏らさず奏せしめ給へと宣へば、隆資卿聞き給ひ、今度高經・直常等、味方に降らんと申せしを、御許容なかりし事、御謀の足らざるには似たれども、渠等に大國多く給はらば、尊氏が二の前たるべく候。其上既に往を咎めずとこそ申候へ。只々謀を巡らされ、天下一統の大功を、立てられ候べしとてぞ歸られける。其後敕使度々立ちて、味方の小勢を以て、大敵に向はん事、大に然るべからず。河州には數箇所の要害を構へ、正行は吉野に在つて、敵の虛を見て、合戰を仕るべしと仰下さるゝ。正行謹んで承り、敕諚にては候へども、勢を數多分け候はゞ、正行が傍には、用に立つ兵は候まじ。然れば敵味方の分限を知る者にて候故、城々に勢何千と積り、多勢を以て城々を押へさせ、師直是

へ押寄せ候はゞ、戰ひ難儀にぞ候らん。合戰は正行に御任せ候べしとぞ、敕答し給ひける。敕諚の趣、理に當りたりといへども、討死と思ひ定められたれば、斯く敕答申されけり。重ねて敕使を下され、明日八幡への發向は延引すべし。謀漏る時は、戰に利なしといへり。定めて敵は、飯盛をぞ攻めんずらん。其時敵の分限を見計らひ、十死一生の合戰をすべしとなり。正行謹んで敕答申されけるは、爭かさのみ敕諚を背き申すべき。明日の發向は延引仕り候べしと、敕答をぞし給ひける。

正行參二内芳野殿一附軍評定の事

斯る所に、赤松信濃守範貪、謀を以て中島の城を攻落されければ、越後守師泰、此弊に乘つて、貞和五年正月三日、攝州に發向し、遠里・小野・堺・津・天王寺三ヶ所に陣を取る。武藏守師直は、同四日に八幡を立ちて、高豐前守・千葉・宇都宮・荻野以下に、飯盛の城を取圍ませ、正行は必定、飯盛の後詰せんずればとて、飯盛の南四條繩手を前に當て、鳥雲に陣を取る。先づ縣下野守を大將として八千餘騎、飯盛山の尾崎より、

四條畷の合戰

南へ續きたる峯々に陣を取りて、敵山續きに寄せ來らば、防ぐべきとの術なり。河津・高橋兩勢は、秋篠や外山の峯に取登つて、東の尾崎へ打出でんと控へたり。武田伊豆守は、先手の先陣として、四條縄手の田の中に控へたり。細川阿波將監清氏、打物の衆を勝つて八百餘騎、只一備になして控へたり。佐々木佐渡判官入道は、味方を出し引離れて、伊駒山の南に打上り、三千餘騎を五つに分けて控へたり。仁木・佐佐木・土岐・明智・黑田・目賀田等は、清氏が陣より三町計り退きて、十八に備ふれば、其より十餘町退きて、大將武藏守師直、四武の陣を備へたり。されば正行、公望子房が再誕なりとも、此堅陣に駈入りて、戰ふべしとは見えざりけり。さる程に師直、旣に河州に亂入せし由聞えしかば、芳野殿には、重ねて楠正行を召され、公卿取々に評定あり。先づ師直が受手として、正行に、大和・河內・和泉・紀伊にある所の勢を、悉く從はしめ、飯盛の方へ差向け、師泰が陣したる和泉の堺へは、正時・高家を大將として、紀伊・和泉の勢を差向くべしと議せらるゝ。其時正時進み出で、存ずる仔細候へば、此度に於ては兄正行に離れ、戰場に向はん事、努々思ひも寄らず候と申さるゝ。

其時正行、多からぬ味方を、追手搦手に分け候はゞ、彌微勢となりて、惡かりぬべく候。泉州には、和田高家究竟の者共を、城々に籠置き候なれば、怖るゝ事も候はず。先味方の勢を一つにし、師直を追拂ひ候はゞ、師泰は戰はずして、敗すべきにて候。先陣は正行仕り候はん。後陣の大將を、御定め候べしと宣へば、洞院左兵衞督實世進み出で、敵は四條繩手を前に當て、峯々に陣し、後詰を待つ由聞え候。其へ味方何の術もなく驅入りて戰はんは、由々しき大事なるべし。然れば味方は、飯盛の峯續の尾崎を取りて、次第に押寄せ、若敵寄せ來らば、要害の地に相付きて戰ふべし。敵來らずんば、峯と峯と對陣して、謀を以て戰ひ、又は夜討をかけて惱さんに、諸國の取集め勢、爭か百日も怺ふべきと宣ふ。正行重ねて、仰理に當りたるやうには候へども、味方、師直と對陣して日を送る間に、搦手の師泰、多勢を分けて城々を押へさせ、直に芳野に分け入らば、御大事にて候らん。此度は木澤・本宮、敵に一味仕り候へば、是程の謀は存ずべきにて候。兎角大將を御定めあつて、飯盛の峯々に對陣せられ候へ。其時正行四條繩手より、師直が陣に驅入り、一時に雌雄を決し候はんと宣

ふ。實世頭を振りて、いや〳〵其は必勝の術にあらず。替る謀もなく、多勢の中へ駈入らんには、危き合戰なるべし。父正成ならば、何とぞ謀を出されなんものを。能々謀を巡らさるべしと宣へば、正行只々罷向ひ、敵の術を見課せてこそ、兎も角も謀を仕り候はんと宣ふ故、主上叡聞あつて、合戰の道は勇士に任すべしとて、總大將は、四條中納言隆資卿に命ぜさせ給ひ、和州・紀州の勢一萬六千餘騎、吉野・十津川・宇多・內郡の野伏共、七千餘人をぞ差添へられける。正行宿所に歸つて宣ひけるは、洞院殿の、父正成ならば、如何樣の謀もありなんと、宣ひける愚さよと語られれば、安間了願、御心中を知り給はざれば、理に候とぞ申しける。

正平三年五月五日合戰の事

さる程に北朝の貞和四年、南朝正平三年五月五日、搦手の大將四條中納言隆資卿、紀州の湯川・玉置・芋瀨・安田等の八庄司・和州の布施・筒井・萬歲・大富・初瀨・楢原以下、吉野十八鄉の者共二萬三千餘騎、一勢々々引分けて、峯々を取つて押寄する。師直

之を見て大に仰天し、思ひしよりは大勢なりといへば、本宮騒がず、敵は多勢ともいへ。正行は居ず候。旗の紋を見候へば、皆紀州・和州の者共にて候。帥立(いくさだて)も相違して候といふ。本宮、其は御疑あるべからず。夜前往生院に、忍の者を三人差遣し候が、二人は見出されて討たれ、一人は逃歸り候が、楠が旗は古に變らずと申候。哀れ大將は、公家の人々とこそ存候へ。然らば今見給へ。楠は平場よりぞ寄せ候はん。正行如何に鬼神ともいへ。此堅陣に駈入りて、何とて利を得候はん。正行も、内々君を恨み奉れば、只無二無三に、討死とや思ひ定め候らん。然らば軍は大事にて候べし。但他の勢を以て當方へ差向け、我身は、越後守殿の手へや向ひ候はん。兩條の内は逃れ候まじといへば、師直も色を變じ、力なし。今日迄の命にてこそありつらめといへば、諸大名色を損じて見えけるが、陣中私語き合ひ、何となく色めきて見ゆる所に、追手の山陰より、菊水の旗をさゝせ、正行三千五百餘騎にて寄せ來らる。之を見て、すは楠ぞといふ程こそあれ。陣中上を下へと騒動す。師直諸陣に下知し、楠平場より寄せたれば、軍には勝ちたるぞ。皆々騒ぐまじと制しければ、

漸々陣中靜まりけり。縣下野守は、搦手の先陣にて備へけるが、己れが向うたる方の合戰を心に懸けずして、平場の先陣武田伊豆守を差置きて、思慮なく楠に討つて懸り、散々に戰ひ負けて引退く。二番に細川阿波將監、入替つて戰ひけるが、是も叶はで引退く。

丹下・平岡等勇戰并四條黃門敗軍の事

搦手は黃門隆貧卿の大勢、峯々に陣を取りて控へたるが、先陣の十市・中津川の者共が備へたる山の麓に、正行の後陣平岡・庄司・丹下兵衞次郞、千餘騎にて陣しける所に、仁木四郞次郞義長・太田・萩野・部戶・横川の者共も、七千餘騎を三つに分け、十市・中津川が手へ討つて懸り、暫く兩陣の旌旗、東西に靡き合ふぞと見えし。十市・中津川が軍勢共大半討たれ、咄と崩れて逃げければ、丹下・平岡が備へたる上の峯に、仁木四郞次郞が勢、陣をなす。丹下・平岡等、かさに敵を受けて、惡かりなんとは思ひしかども、大將の下知なければ、力なくて控へたり。大將正行は、又丹下・平岡が退か

ざる不審さよと思ひ居給ふ所に、小旗一揆の中より、長崎彦九郎・松田左近將監兄弟・同次郎秀盛（太平記に小次郎に作るは非なり）・河匂入道・高橋彈正（太平記に新左衛門に作るは非なり）・舍弟八郎次郎以下、宗徒の兵四十八騎、山壇を傳ひ下りて、岸の嶮き所を前に當て、下り挙に散々に射る。丹下・平岡、惡き奴原が擧動（ふるまひ）かな。一戰に驅散らせよと下知しけれども、岸高うして人馬足を立て難し。さらば少し退きて、足輕にて會釋せよと、少し退かんとしける所に、一軍に立ちたる勢なれば、色めき立ちてぞ見えたりける。爰に佐々木佐渡判官入道道譽は、元來虧盈を見て雌雄を計らん事、恐らくは孫子が智謀にも劣るまじと思ふ程の古武者なれば、敵の色めくを見て、時分は能きぞ、懸れよと、六手の勢を唯一手になし、飯盛山の南の尾崎より鬨を作つて、咄と懸る。浮足になつたる勢なれば、戰ひ兼ねて引退く。丹下・平岡鹵嚙をなし、大將金吾殿を見捨て、何處へか逃行くべき。返して討死せよ者共と制しければ、恥ある者共返し合せ、二百餘人ありけるを、丹下・平岡一所に集め、道譽と組んで勝負をせよと、四目結の旗を目蒐け、直驀に討つて懸り、火水になれと切り立つれば、佐々木が勢戰ひ疲れ、本の陣に逃退（にげの）

く。丹下・平岡、軍には勝ちたれども、士卒多く討たれ、殘る者共も、朱になつてぞ控へける。爰に山の手の官軍は、十市・中津川の者共が居負になりたるを、二陣の湯川庄司・芋瀬九郎、之を言甲斐なく思ひ、横なる峯に立渡つて、追來る敵を、横矢に射ける程に、進み兼ねて見えたりけり。時に中國の住人杉原小三郎・有地右馬允等二千餘人、傍なる嶮岨に取上り、湯川・芋瀬が陣したる峯を直下して、差詰め引詰め散散に射る。湯川が勢、射竦められて働き得ず。熊野の新宮六郎・鈴川十郎以下二百餘人、平場の勝負を決せよと、無二無三に切入れば、杉原・有地・成相等、戰ひ負けて逃退く。十市・中津川等も、又仁木が手へ討つて懸り、京勢を追拂ひ、元の峯に備へけり。此の如く山の手の合戰は互角なりしを、大將中納言隆資卿、伊賀平次國枝を招き、追手の合戰心元なし。物見して來るべしと下知せらる。國枝畏つて馳行きけるが、元より臆病なる男なれば、四條繩手を遙に見やり、色を變じて逃歸り、追手は、味方負けたりと見えて、楠僅の勢にて、矢軍する體にて候が、四方は皆敵にて候といふ。黄門を始め、正行扨は必死と思詰めたるにこそと、陣中周章騷動す。本陣の

四條隆資卿敗走

騷ぐを見て、京都の諸陣一同に鬨を發し、太皷を擊つ。されども山々に備へたる官軍共は、靜り返つて居たりけるに、大將隆資卿の陣、怺へず咄と敗しけり。是を見て京勢は、雲霞の如くに競ひ懸る。官軍は、大將旣に敗しぬる上は、紀州・和州の者共、皆悉く敗北す。此時丹下・平岡と、楠正行の陣と、十餘町隔りたり。細川の一族共は、正行の手へ討つて懸れば、佐々木を始め宗徒の者共八千餘騎、丹下・平岡を眞中に取籠めて、餘さじと攻立つる。丹下・平岡も、今日を限りの合戰なれば、士卒を進め勇み懸つて、大勢を東西に駈靡け、南北に馳通る程に、京勢も手負死人三百餘人に及べり。平岡庄司は、主從二騎、敵十四五騎に取籠められ、終に討死すれば、丹下兵衞次郎は、痛手四ヶ所蒙り、我身も朱に染みながら、主從廿二人にて、多勢の中を駈破り、大將の陣に馳着きければ、正行大に悅び、感稱し給ひけり。

上山修理亮高元討死の事

さる程に細川が勢、正行に戰ひ負け、右往左往に逃行けば、仁木左京大夫賴章、入替

るとぞ見えし。忽崩れて敗北す。大將正行は備を亂さず、師直が本陣を目蒐け、進み給ふ所に、千葉介貞胤・宇都宮遠江守入道・同三川入道、只一手になつて、正行の勢を駈破らんと、先に進んだる足輕の兵を追捲くる。例の如く八十四人の輕卒共、二手に分れて、左右の方へ揆と引く。正行は猶も備を亂さず、魚鱗になつて駈立つれば、千葉・宇都宮戰ひ負けて逃退く。爰にて向ふを屹と見やりたれば、師直が本陣へは、六七町もありぬべし。今は近邊に敵はなし。されば爰にて氣を息め、兵糧をつかへよとて、面々に竹葉取出し、暫時息つぎ、殘りし士卒を計ふれば、二百八十餘人なり。師直之を見て、敵は小勢なりと雖、代々の良將にて、而も一途に討死と思ひ定めたるぞ。然れば味方の取集め勢を以て戰ふといふとも、利あるまじ。只一方缺けて、落ちば落せよと下知しけるを、本宮來つて、正行は引くまじく候。今度の師立は、常に變り候へば、一定討死を思ひ詰めてぞ候らん。然らば今見給へ。是へ寄懸け候はん。只切所を前に當て、精兵を以て射立てさせ給へといへども、宗徒の大名は、何條降參不義の奴が、一往御前の能き儘に、何事をかいふやらんと、私語き

笑ふ者多かりけり。斯くて正行は、緩々と氣を休めて後、いざや今一軍と、太鼓を打たせて進まるゝ。始め本宮が詞を用ひざる人々、細川讃岐守賴春を始め、今川・佐佐木・土岐・萩野以下の大名十六人、備を亂して切つて懸る。楠勢は、猶も備を魚鱗に立て、敵中を衝破つて、太山も崩れ坤軸も碎けよと、喚き叫んで切り立つれば、只雷霆頭を碎くかと怪まる。松田次郎左衛門尉は、和田新發意に討たれ、南次郎左衛門（又高南とも號す。高階氏なるを以てなり）は、正行の中間犬王に討たれぬ。此の如く大名二人、目の前に討たれしかば、何かは以て怺ふべき。諸勢崩れて、ひた逃に逃げける程に、結句大將師直が本陣に崩れ懸れば、本陣の勢も、狼狽して敗北す。郎從等師直が前に來り、今は叶ひ候まじ。只御引き候へと、聲々にいふ所に、本宮又馳來り、一足も御退きあるべからず。敵は皆馬に離れ、歩立の兵となり、其上戰ひ疲れて候へば、如何なる正行とも申せ、身に矢の立たぬ事は候まじ。只々矢先を揃へて射させられ候へ。落殘りたる御勢は、皆義心鐵石の人々にて候が、猶敵よりも多勢にて候ものをといひければ、師直是に力を得、今日正行を討つて、日頃の憤を散ずるか、師直討死するか、二つの

上山高元師直に代つて戰死

中に決すべしと、四方を白眼み齽齘をなし、返せ〳〵と下知しければ、雜賀次郎取つて返して相戰ひ、關地良圓に組んで討たれぬ。土岐周濟坊も、取つて返し討死す。今は楠と師直があはひ、僅半町計りになりける所に、上山修理亮高元（太平記に六郎左衞門に作るは大に誤）れ、師直是にありと名乘りて、暫く防ぎ討死す。士卒等悦び勇み、敵將師直を討ちたりと、聲々に喚き叫ぶ。京勢是に氣を失ひ、大崩れに崩れて逃げける程に、都迄逃上りしも多かりけり。此時楠追纏つて攻立てなば、師直も討たるべかりしを、師直を討取りぬる上はとて、敵を追捨て、士卒等上山が首を手玉に突いて悦びけるが、能能見れば、師直にてはなかりけりとて打捨てけるを、大和守正時走り寄り、塞りたる目の上瞼を引上げて、己れは上山と見るは僻目か。餘りに剛なるが優しきにとて、小袖の片袖を引切りて、彼首を押裹み、岸の上にぞ差置かれける。畠山與三職後、膝口を射られて立ちけるが、扨は師直未だ討たれざりけりとて、向ふを屹と見上ぐれば、輪違の旗一流打立て、敵將七八十騎が程控へたり。あれこそ師直よ。いざ懸らんといふを、和田紀六左衞門正資、敵は馬武者なれば、何としてか追付くべ

き。味方逃ぐる眞似をなし、敵を僞引きて近付き寄せ、師直を討取らんといへば、尤といふまゝに、我先にと逃退く。高播磨守師冬、西なる田の中に、三百餘騎にて居たりけるが、遁さじと追懸くる。楠勢、敵を近々と引受けて、取つて返して戰へば、播磨寺散々に打負けて、狼狽へ廻つて逃げたりけり。

正行兄弟死節の事

さる程に楠正行、播磨守を追立て、逃る敵に目もかけず、殘兵四十六人にて、師直が陣に近付きたり。師直も色を變じて見えける所に、本宮太郎左衛門、軍の下知を某に任せ給へとて、師直が傍に百餘人置きける强弓の兵の、落散りて十八人ありけるに、太刀打の兵五十餘人引具して、岡を下りに馳向ひ、差詰め引詰め射させけるを、楠勢無二無三に切懸れば、本宮又歩立になり、岡に上りて、下り拳に射させけるに、正行の眉間の眞中、涎掛の外れ二矢射られて、其矢を拔くべき力もなし。舍弟大和守正時は、唐胴引合せ十六字に射通され、立竦みて乾に百と伏す。野田四郎・同子供

二人も痛手負うて倒れ死す。闕地良圓は、野間左近將監康藤と戰ひけるが、康藤、左の肘を打落されながら、片手打に切る太刀に、良圓諸藤薙れて、些とも更に働き得ず。正行今は是迄ぞとて、舍弟正時と刺違へて伏し給ふ。正行今年廿五歲なり。其外和田和泉守高家・楠左近將監正忠以下、思々心々に、枕を雙べ討死す。新發意源秀は、師直に組まんと、敵中に紛れ入り、本宮と組んで取つて押へ、首を搔かんとしたりしに、敵大勢落合ひしかば、本宮が咽笛に喰付きけるが、其所を離さずして、終に首を討たれぬ。本宮も、大剛の者に喰付かれ、其疵を煩ひて、三日の中に死しけるこそ恐しけれ。飯盛の城は、本宮が計らひにて、數重に取圍ませ、堀を構へ逆茂木を引きたれば、恩地以下、三百餘人の城兵等、打つて出づべきやうもなし。正行は討死し給ひたりと覺えて、味方敗したるぞや。今は誰が爲にか命を惜むべきとて、三百餘人の者共、城に火をかけ、同じ枕に自害してぞ伏したりける。

大塚・草原以下義死并和田新五郎最後

同三宅・味澤の事

爰に大塚掃頭助は、平岡庄司が手にて、痛手負ひたりけるを、郎等共放れ馬に乘せ、東條を指して落ちたりけるが、一里餘り過ぎて、川水など結び、人心付きたるに、大將は何所にぞと問ふ。郎等共、殿は跡に坐し候といふ。大塚大に怒り、主を捨て何處へか落行くべき。御最後の御供申さんと、馬を返して馳行きける所に、草原兵庫・瀨高大五郎・保谷兵内・栗生才次兵衞四騎、打連れて落行きけるが、是を見て大塚に詞をかけ、同じく取つて返しければ、正行の最後の所へ行懸り、敵中に駈入りて、皆討死をぞしたりける。此時正行、三宅・味澤二人を近付け、汝等は未だ手も負はず、急ぎ故鄕に歸つて、我々が最後の樣を語るべしとて、委しく遺言をいひ送らる。三宅・味澤承り、大敵の中を遁れ出でん事、叶ふべくも候はねども、仰を背くは無禮にて候へば、如何にもして千劒破に歸り參り、御最後の體、仰の旨を傳へて後、急ぎ追付き奉るべし。死出三途の川にて、御待ち候べしといへば、正行、自害は止む

和田正朝戰死

るとも、留まるまじければ、汝等が心に任すべしと免さるゝ。是より二人、戰場を逃行きける所に、和田新五郎正朝（太平記に、新兵衛に作るは非なり。初め高家を新兵衛と號しけるが、高家和泉守になりて後は、弟正忠を新兵衛と號す。爰に落つるは新五郎正朝なり）如何思ひけん、同じく續いて落ちて行く。二人の者共是を見て、我々は君命なれば力なし。御邊は、同死と誓ひたる人の、落ち給ふは心得ずといへば、正朝聞きて、命を全うして、再び本意を達せんをぞ、實の忠臣とはいふべけれと答ふ。二人は其を聞捨にして、主なき馬のありけるを、一疋づつ分捕して乘行けば、正朝聲を揚げて、其馬を我に與へよといふ。二人からからと打笑ひ、我々は大事の使者に參るなり。御邊は歩立にて供せよといひ捨て、馳せて行く。斯る所に、安保肥前守忠實・青木次郎・長崎彥九郎三騎馳來り、正朝と追つ返しつ戰ひしが、終に安保が爲に討たれぬ。正朝は、正行の宗徒と賴まれたる一族なりしに、遁れぬ命を生きんとて、一所に尸を曝さずして、戰場を逃去りけるこそ薄情けれ。

南朝太平記卷第十七終

南朝太平記卷第十八

南帝御二没落芳野一附伊賀局勇力の事

さる程に四條中納言隆資卿、飯盛の軍に打負け、主從八騎にて芳野の皇居に參内し、合戰のやうを奏せられければ、南帝後村上天皇大に驚かせ給ひ、正行兄弟討死せし事、天、朕を滅す所なり。早く玉體を、寶劍に伏せ給はんと敕諚ありけるを、諸卿、樣々申留め奉る。隆資卿、重ねて奏聞し給ひけるは、山中に參り集りたる勢、七千に、よも不足は候まじ。隆資、彼等に心を合せ、逆徒寄せ來らば、一防仕り候はんと申されければ、既に其儀に定まりけるに、湯川庄司・芋瀨庄司等申しけるは、此度諸手の合戰は、互角なりしに、隆資卿闘逃をし給ひし故、正行討死仕り候ひき。あれ體の臆病なる人を大將として、合戰を仕り候はんに、何ぞ敗軍せで候べき。恐れながら我々の存

じ候は、故正成千劔破籠城の時、大塔宮を始め、賀名生の奥に御坐して、北條も存じながら、攻むべきやうなく候ひし。良將の仕置きたる事に候へば、暫く皇居を彼所へ移され、二心なき者共二千餘騎計にて、皇居を守護せさせられ候はゞ、敵襲ひ來り候とも、御怖れあるべからず。其上未だ小次郎正儀、千劔破に殘り居候上は、故正成より以降、兵糧用意多く仕り候はんずれば、一年にはよも盡くる事候はじ。死殘りたる正行の郎從等、敵を引受け、聲花なる合戰をぞ仕らんずらん。然れば國々の勢を、本國へ御歸しあつて、己々が居城を相守るべしと命ぜられ候はゞ、君の御厚恩といひ、故正成・正行の情深く受けたる者共にて候へば、別心は存すまじく候。若し二心あらんには、皇居に召置かれ候とも、危き御事にて候べしと、傳奏を以て申しける所に、楠小次郎、使者を以て、兄正行死去仕りて候故、功臣等多く同死仕りて候へば、逆徒等千劔破へ寄せ來り候べければ、是にて敵を防ぎ候べし。君は賀名生へ皇居を移され候べし。正儀斯くて候上は、叡慮安かるべく候と、奏聞せられければ、此上はとて三種の神器を、內侍典司に取出させ、主上は寮の御馬に召され、女院・皇后・准后・內

後村上天皇賀名生に御臨幸

親王を始め參らせ、月卿雲客步行跣の體にて、天の河の奥賀名生へと志し、同じき十日猶山深く分入らせ給ふ。爰に新待賢門院の御方に候ひける伊賀局と申せしは、故新田左中將義貞の郎從篠塚伊賀守といふ大剛の者の女なり。此時女院の御供には、捗々しき武士も候せずして、女房達計なりけるが、吉野川の橋一間計り陷落してありければ、こは如何せんと呆れ果て、早聲々に泣惑ふ。伊賀局甲斐々々しく人々に力を添へ、其邊の松櫻の大なる枝共を引折り〳〵、打渡しければ、こは人間の所爲ならず、まして況んや女の身にてをやと、其勇力の程を感じ、皆々舌をぞ振はしける。斯くして女院を負ひ奉り、人々をも渡しけり。女院も其勇力の程を感じ思召され、其後園邊六郎といふ大力の士に仰せ、其時の大さなる木の枝を折らせて、御覽ありけるに、曾て叶はざりければ、彌諸人感じけり。されば女院の御所は、皇居よりは西の方にて、山に續きたる所なりけるに、去年の春の頃、變化の者ありとて、諸人怖るゝ事限りなく、形を見定めたる者もなし。適行逢ひたる者共は、皆絶入しければ、皇居より宿直の人多く遣され、蟇目など射させられければ、其程は靜まりけり。其後

六月十日餘りに、草葉も搖がぬ程暑かりけるに、伊賀局、庭に出立で給ひけるに、月の差出でていとあかゝりければ、

涼しさを松吹く風に忘られて袂にやどす夜半の月影

と打ずさみ給へるに、松の梢の方より、からびたる聲にて、只より心靜なれば、則身を涼しといふ古き詩の下の句をいひしかば、局驚き見上げ給ひしに、さながら鬼の形にて、翼の生出でたるが、眼は月よりも光り渡りぬれば、如何なる剛の者といへ、忽魂を失ひぬべし。伊賀局、少しも騷がず、如何なる者にかあるらん。怪しやと問へば、變化の者、猶も打からびたる聲にて、某は藤原基遠にて候。女院の御爲に命を奉り候ひしに、切めてはなき跡を弔はせ給ひてこそ、御惠みとも申すべけれ。其さへなく候へば、罪業により、斯る形となりて、苦しさの堪へ難さに、恨みをなし奉らんと存じ、此春の頃より、後の山に候へども、畏れ奉るによりて、御前には參らずといふ。局、さは聞及びしなれど、世の中靜ならざれば、君も思召し過し給へるなり。其事計りならば、啓して弔ひなん。さるにても御法には、如何なる事かよかるべきと

問ひ給へば、さん候。御弔には、只法華經にしくはなく候。さらば歸らんといふに、局猶も取鎭めたる體にて、歸る所は何處かと問ひ給へば、露と消えにし野の原にこそ、なき魂はうかれ候へといひ捨て、北を指して光り行くを、局、遙に見送りて後、女院の御前に參りて啓せられければ、實に思ひ忘れてこそ過しつれとて、翌日吉水法印に詔あつて、御堂にて、三七日法華經を供養し給ひけるに、彼亡靈大佛果を得てやありけん、其後は敢て見たる者もなかりけり。其後正行の舍弟左馬頭正儀の室となられけるとぞ聞えし。

康村・長重狂歌幷怪木生ふる事

爰に瀧口長重といふ者あり。さる者なりけるが、如何思ひけん、人より先に賀名生を指して落行きけるを、斯くとも知らで、跡にて人々尋ねけれども見えざりければ、源康村取敢ず、

三吉野にありと聞えし瀧口が落ちては名をも流れけるかな

と詠じければ、哀れ長重が不覺ぞやと、諸人口々に笑ひける。長重之を傳へ聞き、安からず思ひしかども、如何ともすべきやうなくてぞ止みにけり。其後吉野川の水上の邊に堺目を論じ、朝廷に訟へければ、康村に仰せらる。是に依りて康村、堺目を見に行きて歸らんとするに、年老い氣力衰へしかば、打休み〳〵しける程に、訴人は早く參りて、決斷所に待居ける程に、大理の康村を尋ねさせけれども、未だ歸り給はずといふ。遙に待たせて後に、漸々と歸りければ、長重日頃の意趣を晴さんと思ひ、

吉野川其源を正す身の老いにけりとてなどやすむらん

と、賀名生落の返しをして、悦びけるとぞ聞えし。此度逆徒襲ひ來り、君は賀名生の山中に臨幸あつて、淺猿しき御住居に叡慮を惱まさせ給ひ、芳野の皇居は、敵の爲に燒拂はれて、一片の焦土となりしかば、心あるも心なきも、悲まずといふことなし。されば斯樣の珍事出來るべき故にや、不思議の事共多かりけり。中にも近年、先帝の御廟の後に、異なる木の怪しく、見も馴れぬが生出でけるを、知る人なくて、其年三尺餘りに延びける儘に、諸人見付けゝれども、何れの木とも名をさしていふ人なし。

木の皮は櫻の如くにして、葉は桂に似て、其よりは大なり。翌年の春二月、花の咲けるを見れば、開きたる所五寸計りにして、花の椿の形して、手入の紅にも猶勝れり。しぼみ散りて、秋の半に實のなりけるが、花の色の如くに赤うして、大きなる柿の如くなり。主上の叡聞に達しければ、古老の山人數多召出され、尋ねさせ給ひけれども、知れる者なかりしかば、典藥頭に勘へ申すべき旨、命ぜさせ給ひしかども、何れの書にも見え候はずと奏しければ、斯る怪木は其まゝ置くべしとて、周を嚴しく圍はせ、番を付けて守らしめ給ひける。斯る所に源康村が下部の童、或夜竊に此實を盜み取りて喰ひけるに、其味の香しきこと、物に準へていふべくもなしと悅びけるが、見る内に頭より足先まで只赤くなり、心身惱亂しけるが、あら苦しや堪へ難やと泣叫びて、終に三日が中に死しけるこそ不思議なれ。其木も其年の極月、雪に會ひて枯失せぬれば、諸人怪しみ思ひけるが、斯る事の出來るべき前表なりけりと、後にぞ思ひ合はせける。

芳野炎上附御託宣の事

さる程に正行既に討死を遂げられしかば、南帝を取り奉らんと、同正月八日、高越後守師泰、泉州堺を立ちて、石川河原に向城を取る。高武藏守師直は、同十五日、平田莊に陣を寄するの所に、西大寺の長老、御合體の事を取計らるゝと雖、其事相調らずして、同廿五日橋寺に陣を移し、直ちに進んで芳野に押寄せ、皇居を始め、多くの伽藍を燒亡す。猿淺しかりし事共なり。斯くて寄手退きしかば、其後假屋を作つて、本尊を移し奉る。爰に何某の法眼とかやいひし法師、終夜御前に通夜して、搔口說きけるは、今は佛力も失せさせ給ひけるにや、斯く淺猿しき御有樣を拜み奉るものかな。柔和の御姿を、引替へさせ給ひつる御驗もなかりけりと、覺々と泣きて打眠りけるに、夢ともなく幻ともなく、柔和の御尊體にて顯はれさせ給ひ、よしや恨みずともあれ、此土に濟度方便は、迷へる衆生を導かんが爲ならずや。佛も之は衆生なり。衆生は終の佛なり。罪を作りし上にこそ、又罪をも與へめ。差向ひては本意にあら

ず、其と知らるゝ事の、などかなからんとて、

　恨みなよ扨やは止まん梓弓まゆみ月ゆみ年はふるとも

といひ捨てさせ給ひ、曉の月の、山の端に隱れさせ給へるが如くなりけるに、法眼打驚きて、其事を委しく記し、奏聞せられけるに、諸卿も覺束なく思はれければ、深く藏め置き給ひけるに、翌年より尊氏・直義兄弟の中不和になりて、直義南朝に降られけるが、其翌年の二月、師直が一族悉く滅び果てけるこそ不思議なれ。其頃如何なる嗚呼の者がしたりけん、

　楠の迹のしるしを來て見れば誠に石となりにけるかな

斯くの如く高札に書きて、正行の墓所にぞ立置きける。

楠正儀軍評定并安間與一討高和州事

さる程に高越後守師泰は、此弊に乘つて、楠正儀をも退治すべしとて、石川河原に向ひ、城を取つて對陣す。千劒破には、正行宗徒の者共二百餘人を殘し置かれければ、

其勢猶も三千餘騎に及べり。是に依りて大將次郎左衞門尉正儀、諸臣を集めて評定あり。爰に和田和泉守高家の嫡男和田五郎、今年十一歳なりければ、故父八郎後見として、座上に罷居たりけるが、左右を顧みて申しけるは、此度師泰當國に罷向ふといへども、惡行人の目を驚かすを以て、諸勢渠に親まず。當國の下民等に至るまで、渠を疎み候。是れ當家の私なき政道に、其厚恩を忝く存ずる者共にて候へばなり。其上奢侈第一の者にて、終夜美女を愛し、大酒に耽り候へば、間を伺ふに能き便にて候はずや。然れば忍びを以て、敵の怠を見すまし、謀を以て戰はゞ、遠く追退け候はんと申されければ、橋本小八郎進み出で、當時味方には、宗徒の人々討死を遂げ、殘る者共、多くは所々に籠城仕り候へば、小勢を以て大敵を追拂ひ候とも、京勢重ねて攻下り候はゞ、味方の難儀たるべしといふ。富田林次郎某は、和田殿の仰、理に當つて覺え候。師泰を追退けんに、京勢重ねて下るとも、半年には過ぎ候ひなん。其間には、味方疲れを休めでや候べき。其上故正成・正行の兩君、後度の合戰を恐れて、目前に討つべき敵を討たずして、守り居給ひつる事や候。是れ居負にて候はずやと、理

非分明に申しけれども、是非の決斷なくして、其日の評定は止みにけり。故正行は斯る時には、面々の申條を書付置き、翌日總議を押合せ、其次の日、面々の議に構はず、決斷の議をいひ出されし。程經て、其は誰が議を用ひてありしが、合戰に利ありし。其時は誰が議を用ひしが、能謀なりしとて其人を感稱し、少しも我謀とは宣はざりき。然れば當時も、斯の如くぞあらんずらんと思ひ居しに、十餘日過ぎて、暫く時を待つべしといひ出されければ、家子郎從を始め、外様の者共は、よくも父にも兄にも劣りたる大將かなとぞ私語きける。又例の嗚呼の者がしたりと見えて、

　楠が正時までは正しくて今正儀がまさなかりけり

と一首の落書を、千劒破の城戸口にぞ立てたりける。爰に安間與一といへるは、正行と一所に討死したりし安間了願が嫡子にして、恩地左近太郎滿一が孫なりけり。然るに了願、戰場に向ひける時、與一を近付け、庭訓を殘しけるは、我は金吾殿と同じく討死すべし。此後如何なる情なき御計らひありとも、小次郎殿（正儀）を恨み參らすべからず。多門丸殿（正行長子）を守立つべし。所以ある人の子なれば、如何なる良將にや

なり給はんずらん。相構へて木澤・本宮が如くに、不義の行跡をすべからず。草の陰にて能く見んずるぞと涙を流す。與一泣く〳〵、御心安く思召され候へ。此度の御供は、御許しなければ力なし。多門殿・小次郎殿へは、如何やうの事ありとも、二心を存すべからず。某を木澤等が如く、思召され候こそ口惜しく候へ。只今戰場に向ひ給ふ人にあらずんば、腹搔破つて、二心なき所を御目にかけ候はんものをとて、泣々別れけるが、此度師泰、石川河原に對城を築きて日を送りけるに、與一熟々と思案しけるは、亡父も、某を、木澤・本宮が如く、二心あるべき者と見給ひぬればこそ、珍しき遺言をば聞きつらめ。我長生して後、如何なる無道の心か出來んずれば、師泰と刺違へて、忠心を顯はさばやと、色々思慮を巡らし、夜々石川河原の敵陣に忍び入り、師泰を窺ひけれど、叶はで日をぞ送りける。斯る所に同五月十六日の夜、師泰が嫡子、一方の大將たる高大和守、師泰が陣に來り、酒宴して遊び居しが、曉天に及んで、己が陣所に歸らんと、供の者共を呼集め、馬引出させ、打乘らんとしける所を、安間、能き敵ぞと太刀引そばめ、物蔭より走り出で、和州が只中を突通せば、百と伏し

て死したりけり。是を見て郎等共、與一を中に取籠め討取りたり。與一今年十九歳、哀れ大剛の勇士かなと、諸人之を美談せり。

足利右兵衞紀州發向附小澤城攻

同和田重遠智略の事

爰に將軍尊氏卿、未だ治部大輔とて、鎌倉に坐しける時、妾の腹に、一人の男子誕生し給ふ。然るに尊氏上洛の後、武州東勝寺の住僧に預けて、渇食となし給ふ。其後尊氏、天下の權を執り給ひしかば、暦應元年の春、東勝寺の僧圓林、彼若君の十三歳になり給ひつるを、相具して都に上り、何とぞ此旨を披露せんと企てしかども、吹擧する人もなかりしかば、北小路の玄惠法師に賴置きて、圓林は歸國せり。其後法師、事の次（ついで）を以て、左兵衞督直義に、此事を語られしかば、若君十六歳の時、直義始めて呼出し、對面あつて、交親しくなり給へり。是より直義、時々將軍に申させ給ひけれども、尊氏許容坐さゞりける所に、紀州の早馬來りて、和田・恩地等蜂起して、近國の宮

方馳集りて、猛威を振ふ由注進しければ、將軍大に驚き給ひ、誰をか追手に差向くべきと評定せられけるに、直義申されけるは、若君直冬其器に相當れり。其上親しきを將とせんには、誰か蔑し申すべきと宣ひしかば、尊氏卿許容し給ひ、直冬始めて御對面あつて、右兵衛佐に補任せられ、討手の大將として差向けさせ給ふ。是に依つて直冬、多年の蟄懷一時に開け、若干の軍勢を相從へ、同五月廿八日に門出あつて、其日は東寺に宿し給ひ、吉良・石堂・桃井・上杉・仁木・荒木・宇都宮・武田・河越以下二千餘騎を引率し、同六月朔日、紀州猿川の後なる、恩地が城にぞ向はれける。遙に城の方を見上げたれば、松柏茂りて、四面巖壁を削りなせり。前には谷川深うして、而も巖高ければ、流るゝ水の波の音に、匹馬の聲も聞分けず。常には大木を抛渡して、一人ならでは通り得ぬ、圓木橋の通路なるに、要害の爲に此橋をだに引きたれば、寄手大に呆れ果て、城を見上げて控へたり。城中には、和田・恩地以下の一族相集りて三百餘騎、心を一つにして楯籠りしかば、如何なる多勢を以て攻むるとも、落すべしとは見えざりけり。然れども俄の事故、兵糧の用意少なければ、始終持ち怺へ難け

れぱとて、宗徒の輩寄合ひて評定をしける所に、和田小次郎重道進み出で、某に十日の暇を與へられよ。敵を方便り僞引寄せて、石弓を以て討殺し候はんといふ、恩地聞きて、其謀は如何にと問ふに、斯樣々々と答へければ、恩地大に感じ、謀の相圖を堅く約しけり。斯くて和田小次郎は、馬草を商ふ土民の體に姿を變へ、夜に入りて城中を忍び出で、敵陣に紛れ入り、上杉彈正少弼朝貞の郎等磯田源八といふ者に近付き寄り、樣々の物語をしけるに、源八、小賢き男にて、渠を計り、城中の案内、又忍び寄るべき道もあるや、尋ねばやと思ひ、汝は當國の者なるか。何と此城へ忍び寄るべき閑道やある。竊に我に知らせよといふ。重道聞きて、さん候。某は此山中に、年久しく住居仕り候所に、今般和田・恩地の人々に追出され、妻子も散々になり果て候ひぬ。今は朝夕の飢を助かるべき術もなく、世に住詫び候へば、我々が爲には、恨み深重なる怨敵とこそ存じ候へ。然る上は御尋ね候こそ幸にて候へ。安々と攻寄るべき閑道の候。某案內仕り候はんといふ。源八、實ぞと思ひ、先づ大將に此事を語り、此事なりなば、恩賞厚く行ふべし。汝爰を立去るべからずとて、急ぎ上杉彈正

少弼の役所に行き、此旨を告げしかば、朝貞大に悦び、今夜一夜討して、功名を顯すべしと、大將直冬に此由を談ぜらるゝに、諸將皆是に同ぜられければ、逞兵五百餘人を選み出し、同じき四日、目指すも知らぬ暗き夜に、彼重道を案内者として、小澤の城に押寄する。其夜は殊更小雨降りければ、城中には靜まり返つて待ち居たり。重道は、思ふ圖に仕課せたりと悦びて、此方へ〳〵と聲を揚げ、眞先に立ちて急ぎけるが、諸勢も是に從つて進む程に、城戸の下十間計り隔てたる、芝生の平地に着きたりけり。爰にて暫く息を休め、腰兵糧を遣ひける所に、和田先立ちて、城の案内を見て參らんと城中に馳入り、斯くと告げて又立歸り、門櫓に上り大音揚げて、只今旁を案内仕りつるは、實の草刈には候はず。和田小次郎重道と申す者にて候。山路といひ暗夜といひ、難儀仕り候に、是迄の御送り、忝くこそ候へ。さりながら敵方にて候へば、御禮として、矢一筋進上仕り候なり。受けて弓勢の程を御覽候へと、三人張に十三束二つ伏を、差詰め引詰め射たりければ、矢場に射倒さるゝ者數を知らず。寄手大に悔ゐ怒つて、迚も遁れぬ所ぞと、喚き叫んで攻上る。城兵は豫て相圖の事

なれば、大石を落しかけ、大木を投懸けゝれば、五百人の寄手共、殘り少なに討殺され、這々本の陣所にぞ逃行きける。此後は寄手攻めんともせず、城を守つて居たりける所に、城中兵糧盡きしかば、皆拔々にぞ落失せける。寄手は斯くとも知らず、四五日は圍み居たりけるが、城中の材木に、諸鳥の群をなすを見て、扨は敵は落ちたるぞとて押寄せて、頓て城を燒拂ひ、其より歸陣せられけり。和田・恩地等は河州に逃下つて、千劒破の城にぞ籠りける。

京都諸將確執附足利左兵衞降ニ參南方ニ事

斯る所に京都には、將軍の舍弟足利左兵衞督直義、高武藏守師直が侈を惡み、上杉伊豆守重能・畠山大藏大輔直宗・大高・齋藤以下の者共と心を合せ、師直を誅せんと謀れける所に、其企忽露顯せしかば、直義は政務を止め、細川顯氏の錦小路堀川の宿所に移り、貞和五年南朝の正平四年十二月八日、御年四十二歲にて御髮を落し、惠玄禪門と號し、幽閉閑疎の住居とぞなり給ひける。將軍の嫡子左馬頭義詮を、鎌倉より呼上せ

參らせ、天下の政務を任せ參らせらる。猶も師直が計らひとして、上杉・畠山を越前に流し、配所にて誅しけり。然るに右兵衞佐直冬は、直義と一味たるにより都を落ちて西國に赴かれけるが、九州の者共を語らひ、蜂起すと聞えしかば、尊氏卿、師直以下を引率あり、觀應元年貞和六年二月改元十月廿八日、西國に進發ある、然るに廿七日の曉、慧源入道京都を忍び落ち、南都の內侍原法眼好專が許に入り給ひけるが、將軍の御敎書來りて、好專を誘はるゝ由聞えしかば、慧源大に怖れ、和州の越智伊賀守が方に落來り、南朝に降を乞はれければ、南朝頓て罪科赦免の綸旨をぞなし下されける。

南朝太平記卷第十八終

南朝太平記卷第十九

洛中騷動の事

爰に將軍尊氏卿は、執事高師直が奢侈を惡み、豫て直義朝臣と心を合せ、師直を誅せんと、色々術を巡らされけれども、師直に挾まれて、如何ともし給ふべきやうなかりければ、猶も種々の計略を構へ、終に師直・師泰を始め、高家の一族を悉く誅せられ、將軍は觀應二年二月廿七日の夜歸洛あつて、上杉朝臣の宅に寄宿せらる。舍弟直義入道は、八幡より上洛あつて、錦小路の本宅に入り給ふ。此間師直を誅せられん謀に、暫く敵味方になり給ふと雖、何か御隔のあるべきなれば、同三月六日、將軍錦小路の亭に入り給ひ、初めて和睦の御對面あり。樣々の饗應善盡し美盡さる。宰相中將義詮朝臣は、同十日の夜、丹州より入洛し給ひ、直に錦小路の亭に行き向

ひ、武衞禪門に對面あり、御悅大方ならざりけるに、當時人の威を見ては猜み憤り、己れを立てんと思ふ。石堂・上杉・桃井は、樣々讒を構へて、將軍父子に附從ふ人々を失はゞやと巧み、仁木・細川・土岐・佐々木は、入道の方にて、人を人ともせざる上杉・石堂等を誅せんと、種々の謀をぞ巡らしける。讒者眞を亂すが故に、羽林相公（名義詮尊氏嫡）と武衞禪門と、不快の由聞えけるが、洛中の騷動斜ならず。是に依つて慧源將軍に對面し、心底を盡して、政務の事を謝せらるゝ。是れ更に身の爲に非ずと雖、相公不快の上は、速に辭し申す所なり。每事口入すべからざるの旨演舌し給ひ、西岡に引籠り給ひけり。然るに同廿二日の半更より、洛中物騷しく、武士東西に走り廻る。或は將軍拔落し給ふともいひ、又は相公、今夜逐電し給ふとも風聞す。然れども皆空言にして、其實を尋ぬれば、佞奸の輩、邪曲少々露顯するが故に、仁木右馬助・土岐刑部少輔・細川刑部大輔・春日雅樂助等、己が國々へ逃下りしに依つてなり。翌廿三日、政務の事、入道固く辭し給ふと雖、昨日より上杉彈正少弼朝定、將軍の御使として、往返七八度に及んで、終に本の如く禪門の沙汰たるべきの旨落居せり。是に依つて將

軍・禪門・相公三人、重ねて御合體ありぬれば、洛中も靜謐すべき所に、翌廿四日の夜、仁木兵部少輔・細川阿波將監國淸も、一向合戰の用意して、本國に逃下れば、洛中猶も穩ならず。淺猿しかりし事共なり。

赤松天寶林寺屬南方附陸良親王の御事

爰に赤松天寶林寺律師則祐は、初めより上洛せずして、赤松に居たりけるが、故兵部卿護良親王の若宮陸良親王を申賜はつて、和田・楠と牒じ合せ、都へ攻上らんとぞ企てける。其故を委しく尋ぬれば、故兵部卿親王、號二大塔宮一過にし元弘年中、十津川に御坐ありし時、竹原入道が女を、夜のおとゞへ召され、只ならぬ身となりけるに、程なく鄕民共心を變じければ、宮は十津川を拔落し給ひし故、彼女房は十津川に殘りて、絕えぬ思ひに沈みながら、正慶二年の秋、宮の忘れ形見に、若宮生產坐しけり。然るに公家一統の御世となりしかども、斯くと申上ぐべき便もなく、其上幾年月を經ずして、建武二年に、宮誅せられ給ひしかば、其より人目を憚りて、深く隱し養育

せしに、又天下大に亂れ、後醍醐天皇芳野皇居に御坐ありしかども、未だ宮御幼稚なれば、母儀の閨中にして、年月を送り給ひける。然るに大塔宮に附從ひ奉りし平賀三郎・片岡八郎は、宮薨去の後は、出家遁世の身となり、片岡は快心と號し、平賀は專心入道とぞ號しける。其後曆應四年の頃、平賀・片岡兩人打連れて、熊野參詣しけるが、故親王の古も懷かしさに、竹原が館に入りて問ひければ、早入道は、身罷りて候と答へければ、兩人共に淚を流し、南無幽靈出離生死頓證菩提と廻向して、其より入道が甥戶野兵衞が許へ行き、修行者なりと僞りて、一夜の宿を借りければ、兵衞悅び、客殿に請じ入れ、樣々饗應して後、旁は定めて聞及び給ふらん。一年大塔宮、此山中に忍び坐せし時、某身不肖には候へども、無二の忠心を以て、叔父竹原入道と心を合せ、黑木の御所に宮を入れ奉り、恙なく守護し奉りしに、熊野別當武家に屬し、野心の者多く出來りしに依りて、又此所を忍び出でさせ給ひき。其後御本意を達せられ、公家一統の御世となりけるに、如何なる業因の御報にや。武臣の爲に害せられさせ給ひぬれば、恐れながら某如きに至るまで、悲歎の淚に袖を濡し、

每日御後世を弔ひ奉り候が、今日は尊儀性靈の七回忌に相當り候故、賤しき身ながらも、志を以て、今朝七口の僧を請じ、御菩提を弔ひ奉り候。御僧達も逆緣ながら、御跡を弔ひたび候へと、淚と共に語るを聞きて、間を隔てたる傍に、女房の聲してさめ〲と泣く。片岡・平賀目配せして、斯る忠節の者こそなけれ。此女性は、正しく宮の妾竹原が娘ござんなれと、坐に袖を濡しけるが、片岡入道淚を押へながら、如何に兵衞殿、我々を見知り給ひつるや。古の片岡八郞・平賀三郞にて候ぞや。親王不慮の害に遇はせられし後、我々も世を捨て候が、當年は宮の七回忌に相當り候故、靈佛靈社を順禮して、御菩提を弔ひ候が、今日は都にて、相應の追善をも營まばやと存候ひしに、兎角して日數を經、今日爰に來ること、世三の値遇と存ずるなり。竹原殿の御事、又御息女も、只ならぬ身にて坐せしかば、其事の聞かまほしく、尋ね申しで候へば、今はなき身と承り候ひし程に、餘所ながら此事の承りたく、立寄りて候と、墨染の袖を顏にあて、さめ〲と泣きければ、兵衞も淚を押へ、其宮の御事候よ。旣に生長坐すに付きて、唯人ならぬ御身なれば、如何なる目をか見んずらんと存じ、

某の計らひとして、竹原が子供にも忍ばせ、彼女房が行衛を知らずと披露せさせ、某の方に隱し置き奉りて、今年九歳にならせ給ひ候といふ。平賀・片岡大に悅び、兩人一旦形を變へ、斯る身とはなりたれども、若宮成人坐さば、忍びやかに御供し、芳野殿に奏聞を經、天下を一統して、故親王の舊恨をも散じ奉らばやと存ずるなり。今とても生殘りたる宮の、故舊の者共多かるべしといへば、兵衞大に悅び、其より三人相共に、種々謀をぞ巡らしける。斯くて南朝の興國三年十一月八日、戸野兵衞重友・平賀・片岡三人心を合せ、御母堂には隱し、若宮を具し參らせ、吉野の皇居に參り、四條中納言隆資卿を以て奏聞せられければ、主上大に叡感あつて、早く官軍を催し、朝敵退治の謀を巡らすべしとて、二品親王の宣旨を蒙らせ給ひける。赤松律師則祐は、播州赤松に居たりけるが、將軍と快らざる折なれば、此事を傳へ聞き、心に案じけるは、某父子、先年師直に與し、渠が重代の太刀懷劍を得たりしかば、尊氏兄弟、某を無二の師直方なりと思ひ給はんずれば、幸此宮を取立て奉るべし。其時勢來らば、運に乘じて宮を武將と仰ぎ、某日本を奉行せん。又宮方となりて強く軍せば、將

軍もなどか免し給はざらん。然らば宮を捨奉るか、よし又大塔の若宮なれば、養育し奉るとも、苦しからじと思案して、平賀・片岡は舊友なる故、忍びやかに使を送り、此事をいひければ、平賀・片岡大に悦び、芳野殿へ奏聞を經ける所に、楠正儀强ひて申し進むるにより、君御許容あつて、宮を播州に下し給ひしかば、則祐悦び、世に深く隱し、天下の變をぞ相待ちける。然る所に師直兄弟誅せられて後、尊氏・直義暫く和睦のやうなれども、洛中穩ならずと聞えければ、又隱謀を企て、和田・楠と牒じ合せ、天下を覆さんとぞ催しける。

南帝與尊氏卿父子御和睦の事

然るに佐々木佐渡判官入道道譽は、江州に逃歸りて逆心を企る由聞えければ、觀應二年七月廿八日の辰の刻、尊氏卿江州に進發し給へば、武衞・禪門・宰相中將殿、河原の邊まで打送りて歸り給ひ、相公は翌日、赤松誅伐の爲、播州に發向し給ひけり。斯る所に同晦日の夜、直義入道都を忍び出で、北國を指して落ち給ひしかば、同八

月三日、義詮朝臣は、播州より歸洛あり。將軍は同五日、江州石山より歸京坐しけり。太平記に、此時將軍父子京に居給ひしやうに書きしは誤なり。將軍猶も細川陸奥守を、北國に差遣され、早く歸洛あるべき旨、懇望し給ふと雖、桃井直常以下同心せざるの間、將軍江州に進發し給ふ所に、入道大に利を失ひ、東國に落ち給へば、將軍は歸洛し給ひけり。然るに尊氏卿、京都の物騷がしきに付きても、南方の敵、隙を窺ふことありぬべしと思慮し給ひ、去る三月より、南方と和睦の事を望み給ふ。是に依つて南帝楠正儀を召され、此事如何あらんと敕諚あるに、是こそ願ふ所の幸にて候。詐つて御和睦候べし。其上にて、尊氏を追落さん謀は、如何程も候べしと申されければ、君も御許容坐しけり。同八日、法勝寺の慧鎭上人、南方に參りて、和睦の事を取繕はるゝと雖、聞召入れられず、空しく追上さるゝ所に、將軍又二階堂三川入道を播州に差遣し、此事を說かしめ給ふ。是に依つて赤松律師則祐、南方へ申入るゝの間、芳野殿御許容坐す氣色坐せしかば、今は和議成就せん事疑なしとて、一向直義入道征伐の謀を巡らされけるが、猶も京都心元なしとて、相公義詮を都に殘し置かれ、將軍は翌十三日、直義誅伐の爲め關

東に進發ある。同十一月朔日、赤松妙善律師則祐上洛す。是れ南北の御和睦、事なりしに依つてなり。南方の使僧忠雲僧正、此間宇治まで來着し給ひけるが、同二日に入洛あり。翌日相公、賀茂の親承法印の坊に於て、忠雲僧正に對面あり。南帝の綸旨二通相渡さる。一通は敕免、一通は直義追討の綸旨なり。太平記に、十月三日北帝の綸旨を賜りたりとは大に非なり南帝の綸旨なる事明けし。十月三日といへるも非なり。其綸旨の文に云ふ、正平六年十月廿四日、左中將具忠とあり。公家の事は、一圓に南方の御沙汰たるべし。武士の事は、今まで召仕候上は、管領すべしとの敕許なり。同八日、四條隆資卿・洞院實世卿出京あつて、京都の事を沙汰し給ふ。同廿四日頭中將具忠、南朝の御使として入洛せらる。是れ主上も、早く京都に還幸あるべしといへども、北國・東國未だ靜謐せず、其上今年塞りの方なれば、明春出御あるべきとの御事なり。是に依つて同十二月廿三日、北朝の劒璽内侍所を南朝に渡されて、太平記に、正平六年閏二月に作るは非なり、北朝の觀應の年號を廢し、南朝の號を用ひ正平六年とし、同廿八日、北京崇光院に、太上天皇の尊號を奉らせ給ひ、院御所と號し奉る。さる程に尊氏卿は、關東に進發あり、同十二月薩埵山にて、直義入道と合戰に及びけるが、禪門戰利なうして、伊豆御山

南北朝御和睦

足利直義死去

に落ち給ひける所に、又和睦の儀を取計る人々ありしかば、重ねて兄弟御和睦あり。正平七年正月六日、將軍・禪門諸共に鎌倉に入り給ひけるが、同二月廿六日、延福寺に於て、御年四十七歲にて、鴆毒に侵され、逝去し給ひけるこそ哀れなれ。

宮方京攻附細川頼春討死の事

さる程に南帝（後村上）は、正平七年二月廿六日、都に還幸あるべしとて、芳野の皇居を出御あり、東條の城に、一夜御逗留なされ、翌廿八日、住吉に行幸あつて、同閏二月十六日（太平記に、十五日に作るは非なり）天王寺に行幸あり。然るに一向合戰の御用意ある由聞えければ、洛中曾て穩ならず。是に依つて義詮大に怖れ給ひ、皆法勝寺の慧鎭上人を使として、其眞僞を正さんが爲、南方に差遣はさるゝ所に、主上上人を近く召され、天下未だ靜謐せざるが故に、非常を誡めんが爲に、官軍を召具せらるゝ所なり。何ぞ君臣和睦の上に、今更異變あるべきやと、勅答あつてぞ返されける。斯る所に同十九日の夜、洛中何となく物騷がし。曉に及んで南帝八幡に着御あり。翌廿日の早旦に、（太平記廿

七日に作るは非なりに、伊勢國司中院右衞門督顯能、三千餘騎にて、東寺口より押寄せらる。楠左衞門尉正儀・和田五郎正隆は、五千餘騎にて、七條大宮へ押寄する。千種少將顯經忠顯の子日來丹波に居られければ、五百餘騎にて、唐櫃越より、內野を指して押寄せらる。義詮大に驚き給ひ、有合ふ勢を從へ、七條大宮邊に打出で給ふ。此度楠は、千劒破を出でられける時、故和田源秀鑓を用意せられつるは、正儀が感心せし所なりとて、和田も楠も、鑓五十本、柄をば二間半にして、中間共に持たせたりけるが、和田・楠兩手にて、百本の鑓を卅本づつ一組にして、太刀の兵・弓の兵三人一揆にして、三段に立てたりけるが、一枚楯の裏に、算を繁く打ちて、梯の如く拵へたりけるを、民家の垣に打懸け〳〵、射手を登せて、敵を目の下に下見し、散々に射させたり。京勢の先陣細川讃岐守賴春、的になつて射立てられ、辟易して見ゆる所を、和田・楠五百餘騎、轡を雙べて駈破る。賴春も武功の人なれば、中を開いてやり通し、馬の足を立替へて、前後を顧みず、駿馬に鞭ちて、咄と喚いて懸けられしかば、楠勢其猛威にや怖れけん、先駈の兵六七騎、勇氣に怯んで引退く。逃ぐるを急ぎ拉ぎ、敵の着たる兜鍪の

細川頼春戰死

足利義詮近江に逃る

鉢、馬の三頭、二つ三つ丁々と打ちて、鞭に鐙を合する所に、頼春の乘られたる馬、敵の打太刀にや驚きけん、弓杖三杖計りぞ飛びたりけり。頼春鞍壺に乘直つて、鐙を踏直し給ひける時、敵透間をや窺ひけん、鑓を以て内兜へ突込んだり。突かれて振仰ぎける所に、小家の軒に出でたりける竹の端(はな)に、兜の錣を引懸けて、拔かんとしける所を、鑓の者共走寄り、馬の太腹を突いて刎落させ、透間なく取圍む。頼春伏し乍ら、敵二人の諸膝を薙いで切据ゑ、起直らんとする所を、和田五郎正忠、今年十六歳になりけるが、走り懸つて首を討つ。此頼春は、時の侍所にて、武威を都鄙に振はれしに、今日は七條油小路に骸を曝し、戰場の土となられけるこそ哀れなれ。頼春討たれて、京方既に敗れければ、義詮朝臣は、江州四十九院に落下りて、軍勢を集めて、再び本意を達せんとぞ催されける。

兩上皇新院遷二幸芳野一附中納言局詠歌の事

斯くて翌廿一日、藏人右衞門佐光資、敕使として參上し、兩上皇(光嚴院・光明院)・新院(崇光院)・春宮

直仁を、南山に遷し奉るべしとの敕諚なりと、奏せられければ、皆々只呆れさせ給へる計りにて、御涙に伏沈ませ給ふ。夜に入りしかば、雨少し降りけるに、御車を差寄せたれば、兩上皇・新院・春宮御同車にて、其夜は東寺に着御ある。御供には、教言朝臣・實言朝臣（太平記に、實春に作るは非なり）・北面康兼計ぞ御供には候しける。斯くて翌朝三院を、八幡まで御幸なし奉り、其より東條に移し奉りて、同六月、賀名生（初號ニ穴太一後改ニ賀名生一）へ還幸なし奉る。梶井宮二品親王尊胤も、同じく捕はれさせ給ひ、垂髮一兩人・坊官一人を從へられ、南方に赴かせ給ひ、金剛山の麓に押籠められさせ給ふ。三院は、崩れ傾きたる庵室の、見るも淺間しきに所々を、篠にて嚴しく圍ひなし、猶も棘枳を隙なく植ゑたる内に押籠められさせ御坐せば、餘所の見る目もいと悲しく、櫻より外は、御心を慰むべきものもなかりければ、翌年の春、中納言の局、

かゝる世もよしや芳野の山櫻宿の物とてかざしにもせん

と奏し奉られけるぞ優しき。

梶井宮拔落附律師元祐の事

梶井二品親王は、同五月、南山に遷されさせ給ひ、柴の庵に住ませ給ひ、山本三郎承りて、嚴しく守りけるが、程なく二月計りありて、御邪氣の心地出來らせ給ひ、日に添へて重らせ給ひければ、警固の武士山本、如何はせんと驚きて、峯通る山伏もがな、祈らせばやとて、士共を所々に分けて尋ねさせけるに、翌日殊勝氣なる山伏を、三人具して來れり。宮悅ばせ給ひ、御枕近く召して祈らせられけるに、二日計りありて、御病氣忽平癒しければ、御布施など賜はりて、御悅び限りなし。武士共にも御酒下されければ、夜深くるまで謠ひ舞うて遊びけるが、山伏は曉御暇を賜はつて、また闇きに歸りけり。辰の刻計りに、宮の御坐さぬといふ程こそあれ。扨は彼山伏に、盜み出されぬるこそ安からねとて、關々へ人を走らし、山伏を止めけれども、宮は早虎口を遁れさせ給ひ、其夜與福寺まで落延びさせ給ひけり。是は御門徒の律師元祐といひしもの、豫て謀を巡らし、宮と心を合せ參らせ、己は山伏となりて、大なる

笈を負ひけるが、此笈の中に宮を入れ奉り、落行きけるとぞ聞えし。

源相公歸洛の事

さる程に義詮朝臣、江州四十九院にありて多勢を催し、近日上洛の由聞えしかば、楠正儀、節刀を賜はつて江州に罷向ひ、誅伐仕り候はんと奏しけれども、北畠准后、支へ給ふに依りて許されず。楠も力なく止みける所に、相公義詮、三萬餘騎を引率し、同三月十日、四十九院を立ちて攻上らる。之を防んが爲に、大津に控へられたる中院宰相中將具忠、敵の多勢に聞逃して、八幡を指してぞ引かれける。正儀は、先立ちて此事を聞き、八幡の皇居に參り、既に中院相公、戰はずして引取られ候由、敵は勝に乘りて、追懸け參り候はん。某今夜山科邊まで罷り向ひ、切所に勢を伏せて、義詮が通らん所を、不意に喚と駈入れば、勝利疑候まじと申されしかども、諸卿僉議あつて、敵は多勢の由聞ゆれば、小勢を以て、始終の勝利叶ふまじ。正儀若き將なれば、又討死せんも計り難し。八幡は究竟の要害なれば、敵寄せ來るとも、怖あるべか

らずと制せらる。然る所へ北畠右衞門督顯能、使者を以て使を馳せ、某も大津へ引入れられ候由、顯能京都に罷在り、大敵を防ぎ候はん事、叶ひ難く覺え候。急ぎ和田・楠を加勢に賜はるべしと奏せらる。正儀は、既に十死一生の合戰の圖は外れぬ。京にて敵を防ぐとも、利あるべしとも思はざりしかども、罷向ひ候はんと進まるゝ。諸卿重ねて僉議あつて、楠向ひなば、討死をやせんずらん。兎角北畠金吾を召返さるべしとて、京都に敕使をぞ立てられける。同十五日の早旦、相公の勢、眞如堂神樂岡邊に充滿しけるが、未の刻に及んで、東山雙林寺阿彌陀峯に陣を取る。相公は、長樂寺の上の山に陣し給ふ。其勢雲霞の如くなり。顯能は、京にて一戰をと勇まれしかども、敕諚なれば力なく、淀・赤井までぞ引かれける。斯る所に相公、東寺に陣を移さるゝ由聞えければ、正儀又皇居に參り、明日義詮東寺に移り候由、忍びの者告知らせ候。然れば北畠殿は、宵より桂川を打渡り、川の向に兵を伏させられ候へ。正儀は、東山蓮華王院七條八條の間に懸り、明卯の刻、義詮、河原へ打出でん所を、一手に蓮華王院より駈出づべし。斯くして敵の騷動せん所へ、東山より駈出なば、勝利

を得べく候。北畠殿・中院殿は東山に着し、先手の勢を打散らし給ふべし。然らば義詮を討つか、京を追落すか、二つの內に候はんと申されしかども、危き合戰なるべしとて、敕許なし。正儀、然らば淀・赤井に打越え、顯能と一手になり、桂川を渡して戰はんに、今夜寄すべしとは思ひもよらず、宿なんどと犇き候はん。其上、京中の民家へ打散り居候はん所へ、押寄せ候はゞ、味方の勝利疑候まじと申されけれども、當城は前に大河あつて橋船もなく、後は河州にて分國なり。斯る要害を出でて戰はんは、武略の足らざる所なりとて、御免しなかりしかば、楠大に悔え怒り、あら口惜や。武の家に生れん者は、討死を期すべき事なるに。今見よ。大敵に取卷かれ、飢死せんずるぞと、歯を切つて高聲に申し、陣所にぞ歸られける。同じき廿一日、相公、東寺に陣を移し給へば、顯能は淀を引きて、八幡の山下にぞ陣し給ひける。然る所に、正儀の乳母の夫、眞木右近申しけるは、如何に敕許なければとて、何時まで守り候べき。一夜討なされ候へといへば、正儀是に同じ、和田・安間以下五人十人づつ、忍びやかに陣中を出でける所に、如何してか叡聞に達しけん、宰相中將實勝を敕使

として、大に制せさせ給ひければ、力なくして止みにけり。

南朝太平記巻第十九終

南朝太平記卷第二十

板倉平三大渡先陣幷荒坂山合戰
附土岐康貞討死の事

さる程に義詮朝臣は、東寺に陣を移し給ふ所に、細川陸奥守顯氏、四國勢を率して上洛し、赤松妙善律師則祐も、官軍を引替へて、是も京都に馳加はりければ、相公愈力を得、同三月廿四日、陸奥守顯氏を總大將として、軍勢を差向けらる。（此時義詮は、東寺にあり。太平記に自ら向うて洞峠に陣すとは誤なり。）足利民部少輔氏經・舍弟左近將監氏賴（尾張守高經子）・甥兵部大輔詮經（家長子）七千餘騎にて、翌廿五日、大渡に打莅む。右衞門督顯能、河より向ふの岸の上に陣取りて、橋引落して侍懸けらる。是に依つて京勢如何はして渡さんと、暫く時を移す所に、板倉平三泰義、赤絲の鎧に、薄紫の母衣掛けて、栗毛なる馬に乘り、只一騎、川端

に歩ませ出で、昨日今日出來りたる川ならばこそ、皆々驚きもせらるべけれ。都より豫て此河ありとは、思ひ儲けしことならずや。さる元弘・建武より以來、數度の合戰に、河を渡し先を駈けし兵多しと雖、誰か鬼神にて候べき。いで先駈して、名を後代に殘さんと、小舟に掉し、流れを切つて押渡る。斯波兵部大輔詮經、板倉打たすな續けやとて、同じく河を渡さるれば、我劣らじと七千餘騎、一同に咄と押渡る。顯能暫く支へて拒まれしかども、小勢なれば叶はずして、終に繩手を引越えて、園寺口にぞ陣せられける。和田・楠は三千餘騎にて、荒坂山を支へらる。此へは細川陸奥守顯氏・同相模守清氏・土岐大膳大夫賴康・舍弟三河守康貞初名惡五郎六千餘騎、喚き叫んで攻懸る。楠方は、峯々に取登りたれども、未だ陣々を分けざりしかば、土岐・細川が勢に捲り立てられ、先陣は颯と散る。和田・楠少も騷がず、峯より峯に傳ひ、精兵の射手を以て散々に射させければ、寄手射白まされて進み得ず。正儀士卒を下知し、土岐三八百餘騎にて懸けゝれば、寄手谷々に捲り落され、死傷する者數を知らず。土岐三河守康貞は、天下に隱れなき打物の達者なりけるが、卯の花絨の鎧、同毛の兜袰に、

渡り三尺計りに、金にて桔梗を打つて附けたるを、猪首に着なし、金作の太刀二振帶びて、練貫の白綟かけ、貳き者共の擧動かな。懸れや懸れと下知して、眞先に進みけるを、和田五郞正忠、得たり賢しと向ふ。細川淸氏の郞等鬪左近、和田を目蒐けて打つて懸る。正忠が郞等堺平次左近が只中を射通せば、三川守走り寄りて、鬪を引起さんとしたりけるを、平次二の矢に、康貞が脇立のわぼの板を射通したり。三河守事共せず、射られたる矢を、脇立ながらかなぐり捨て、左近を引立て、二三町落行くを、和田五郞遁さじと追懸けしが、正忠も兜の吹返を、首の骨かけて射込まれたれば、目にかけたる敵を討泄らしぬと、安からず思ひけるに、三河守、春雨に、穿ちたる岸を飛越ゆるとて、片岸を踏崩し、谷へ百と落ちければ、正忠走り寄りて、長刀を取延べ、一人の敵を討取りたり。されども敵多勢なれば、楠方にも士卒多く討死しぬ。此上は明日の合戰に討死し、父兄の後を追ふべしと議せられければ、主上大に驚かせ給ひ、度々敕使を以て召されし故、此上は力なしとて、夜半に八幡へ引入れらるれば、翌日敵入れ替りて、荒坂山に陣をぞ取つたりける。

八幡落城附宰相中將實勝朝臣北方の事

さる程に京勢は、數度の合戰に打勝ち、八幡を十重廿重に取卷きければ、山上は次第に兵糧減じ、叶ふべくもあらざりしかば、急に勢を催し、後詰せよとて、楠次郎左衞門尉正儀・和田五郎正安を、忍びて河州に歸し給ふ。然るに和田正安、道より俄に病出して死しぬ。舍弟和田正兄は、痛手負ひぬ。正儀一人樣々計略を巡らし、勢を催すと雖、吉野十八鄕の者共も、左右に事を寄せて參らず。紀州には、安田・阿瀨川・芋瀨・中津川、和州には、越智十市・楢原が外は參らざれば、後詰せん事もなり難く、伊豫の土居得能が方へ急を告げ、九州の直冬の方へも、飛脚を馳せ、菊池が方へも使を馳せ、八幡へも、今十日待たせ給へ。後詰仕り候べしと、申送られしかども、其程過ぎぬれども、後詰の勢も來らざれば、今は城中怺へ難く、同五月十一日の夜、諸勢主上を供奉し參らせて、大和の方へ落ちて行く。主上も士卒に紛れさせ給はんが爲め、御鎧にて御馬に召されけるを、敵手繁く追懸けしかば、法勝寺左衞門督、取つて

返し〳〵防がるゝ。四條從一位大納言隆資卿、六十一歲にて討死し給ふ。其外閒明院大納言・三條中納言雅賢卿・宰相中將實勝朝臣も討死せらる。翌十二日、南都の招提寺に入らせ給ひ、御茶を召上られ、其より三輪を過ぎさせ給ひ、宇陀の水分の宮に移らせ給ひ、辛うじて賀名生に落着かせ給ひけり。此時東國・北國の官軍等、豫て南帝の敕に依つて、八幡に力を合せんが爲め、美濃・尾張の邊まで馳着きける所に、八幡は早落城に及びぬる由聞えしかば、皆己が國々にぞ歸りける。此度討死し給ひし實勝朝臣の北の方の、歎きの程を傳へ聞くこそ哀れなれ。此人は洞院左衞門督實世卿の息女にて、心ばへ優しく、形の最も目出度く御坐しければ、君に奉らんと、深窓の中に冊き給ひけるを、宰相中將實勝、餘所ながら見初め給ひ、色々心を盡し給ひしかども、人目繁ければ、力なく過し給ひけるに、一年(ひとゝせ)彌生の頃、高間山の櫻花を餘所ながら見給はんとて、實世卿女房達を伴ひ給ひ、高根の方へ、山路を傳ひ登らせ給ひ、人目なき所なれば、彼方此方と遊び步き給ひけるに、實勝朝臣、豫て姬君の乳母と心を合せ、茂みに隱れ居給ひけるを、斯くとも知り給はで、乳母と共に、尾上

の方を詠めやらせ給ひ、高間の山の名もいちじるくこそあれ、花は只雲とのみ見ゆるは、心あてにやと戯れ給へるを、猶彼方よりは、能くこそ侍らめ、茂みを出で離れなば、岩切り通す吉野川も見えぬべしとて、此方へ〳〵と誘ふを、實勝朝臣つと出で給ひ、岩橋渡りして參らせん。此方へと搔負ひ給ひ、乳母と共に逃行き給ひけるを、知る人更になかりけり。斯くて姬君見えさせ給はぬといふ程こそあれ。大に驚き騷ぎ、手を分ちて、谷へもや落ちさせ給ひつると、方々を搜り求むれども、見出し參らせず。斯る深山には、天狗などの住むといへば、若しや取り參らせしと、谷峯殘らず尋ねけれども、見え給はねば、實世卿も、泣々歸り給ひけり。其後實勝の許に居給ふ由聞えければ、實世卿大に怒り給ひ、君に訴へんと宣ひしかども、世上亂れたる最中なれば、只穩便にして坐せと諫めければ、力なく止み給ひけるに、程なく主上八幡へ行幸ありしかば、實勝朝臣も供奉せんと出立たれけるが、都も靜謐に及びなば、御迎ひに參りなんと、北の方を樣々慰め給ひ、立出でんとし給へば、北の方、

何となく心に掛る白露の置き別れ行く袖のけしきを

と泣々聞えければ、實勝朝臣、

別路の露にはあらぬ嬉しさを頓て袂につゝみこそせめ

と打詠じて、立別れ給ひしかば、心も空に浮かれ、待詫びさせ給ひしに、此度八幡にて討たれ給ひしかば、絶え入る計りに泣き給ひ、黄昏時の覺束なきに、忍び出で給ひて、河音の幽なる方を心ざし、菜摘川の河淀の、月さへ疎き山陰の、岩の面に筆を染めて、

山陰の闇きやみ路に迷ひなん菜摘の川に身を沈めなば

と書付けて、身を投げ給ひけるに、家人共多く尋ね來り、敢なき形の、岩の狹間に掛り給へるを取上げ參らせしに、少し息の通ひ給ひければ、藥など用ひ、様々療養しけるに、人心出來にければ、皆々倶ひ歸りけるが、其後終に姿を替へ、佛道に入り給ひしぞ哀れなる。

南朝官軍寄二京都一事

爰に山名伊豆守時氏・同右衞門佐師氏父子、武家の政道を恨み、南方に屬して牒じ合せ、文和二年五月上旬、伯耆を立ちて、同六月二日、丹波の志宇治に陣を取る。南方よりは、四條中納言隆俊・法性寺左衞門督康長を大將として、和田・楠・赤松彈正少弼氏範以下の官軍を差上し給ふ。然るに去る八幡籠城の時、正儀の後詰延々に及びしを、諸卿いひ甲斐なく思はれければ、兎角支へ申す人々多かりし故、大和・河內・紀伊の勢は、隆俊・康長に屬すべし。泉州の勢は和田に屬せよ。和田又楠に屬すべからずと命ぜさせ給ふ。正儀の家子郎從大に怒り、故廷尉、先帝に仕へ奉られしより以來、今に至つて既に三代、忠功誰人か上に立たん。然るを恩賞こそなからめ、累代管領し給ふ國々を、召離れんは何事ぞや。速に奏聞を遂げ、天氣に依つて足利と和睦し、佞奸の公家原に思ひ知らせられ候へといへば、正儀淚を流し、旁が申す所理ながら、君の非を擧げんは、天の冥見も怖れあり。故判官殿・金吾殿の、草の陰にて聞き給はん所も恥かしゝ。君の政正しくば、怯弱の尊氏に天下を奪はれ給はんや。又父兄、豈討死し給はんや。正儀、君を傾けんと思はゞ、足利を賴むまでもなく、大和・河

義詮敗軍坂本に退く

內・和泉・紀伊の內には、一日も足をためさす參らすまじ。其上正成・正行、不義の心あらば、是程取りよき天下を、などか奪ひ給はざらん。正儀苟も父が子なり。不義の行あらんには、末代の瑕瑾、父祖に不孝の罪遁るべからず。今國々を召上げらるる共、四ヶ國にある所の家子郎從を算へんに、河內半國に及ばんか。是れ莫大の御恩なり。譬ひ正儀が命を召さるゝとも、爭か背き申すべきと宣へば、諸士忠心の程を感じ、皆淚をぞ流しける。斯くて同九日、官軍手を分つて洛中に亂入す。相公義詮は、東山に陣し給ふ。山名が勢は、七條より北を、大路切に打つて出る。二條大納言敎忠卿、錦の旗を先立て進み給へば、四條・法性寺・和田・楠、二條より南を小路切に打つて出で、河原表にて追つ返しつ相戰ふ所に、京方は散々に戰ひ負け、坂本を指して敗北す。申の刻に及んで、土岐・長山以下が宿所を燒拂ふ。其後伴野出羽守が土御門・油小路の宅にも火を放つ。此日高武藏守師直が子武藏將監師詮・荻野尾張守・赤松妙善律師則祐、京方の加勢として上着しけるが、京方敗軍に及びしかば、西山に取登つて陣を取りけるが、如何思ひけん、同十一日、赤松は本國に引歸す、翌

十二日、山名西山に押寄せて、攻戰ふ程に、師詮は自害し、阿保・荻野等は、丹波を指して落行きけり。

恩地正一遁世并尊氏卿父子歸洛の事

さる程に宰相中將義詮は、主上の供奉し參らせて、濃州垂井に落下り、皇居を守護し居給ひけり。官軍は、一戰に京都を攻落せしかども、馳來る勢もなし。斯る所に、同七月廿三日、赤松律師中國の勢を率し、攝津西宮に着き、國府に充滿せし由聞えしかば、楠正儀、敵に足をためさせては惡かりなんとて、京都を引拂ひ、國府に馳向はるれば、翌日、山名父子も京を立ちて、丹波路に懸り、本國に歸りしかば、翌廿五日、南方の官軍、悉く己が國々に引取りけり。爰に恩地左近太郎滿一が子に、源左衞門尉正一といふ者ありけるが、主人正儀に向ひ諫めけるは、殿は正成の御子、正行の弟君にて坐せば、下風を望み、餘光を慕ふ者多うして、既に五百騎の大將にて坐さずや。然れば此度の利に乘つて、足利を追討し給ひなば、大功一時に成就しぬと

恩地正一遁世

覺え候ひしを、何となく在京し給ふ所に、義詮又多勢になり、旣に上洛の由聞え候ひし。然る所に赤松、攝州まで着陣の由を聞き、早速歸陣し給ひしは、何事にて候ぞ。和田以下の宗徒の輩に、仰付けらるべき事ぞかし。正一之を察し候に、妻子の恩愛を思ばせ給ふが故ならずや。傳へ聞く故正成公は、先帝に賴まれ奉らせ給ひ、赤坂に籠らせ給ひしより、四海一統に及ぶまで、妻子に對面を許されずとこそ承り候へ。今殿は、正成・正行兩公の薫德に依つて、五百騎を從へ、諸侯の列に備はり給へば、只大功をこそ御心に懸けらるべき事なるに、色を重んじ給ふは、敗軍の機顯はれて、當家滅亡の基にて候はずやと、詞を盡して諫めけれども、許容の氣色なかりしかば、終に出家入道して、諸國修業の身とぞなりにける。是は正儀、其頃篠塚伊賀守が娘伊賀局に相馴れ、其離別を惜まれける故とかや。さる程に將軍尊氏卿は、東國に於て、新田の人々に打勝ち、上洛に赴き給ひしかば、義詮大に悅び給ひ、頓て京都に還幸なし奉るべしとて、父子共に供奉し參らせて、同九月廿一日、土御門の內裏に還幸なし奉らるゝ。然る所に同晦日、西國の早馬來り、右兵衞佐直冬、南帝の

綸旨を賜はり、山名と一つになつて、攻上らんと企てらるゝ旨を告げしかば、討手として、宰相中將殿を、播磨の國へぞ下されける。

楠正儀忠貞附渡邊九郎自害 并足利右武衛入洛の事

然る所に越前の足利修理大夫高經・越中の桃井播磨守直常、山名が方へ飛脚を馳せ、急ぎ都へ攻上られ候へ。同時に京都を攻落し候べしと告けければ、直冬・時山山名大に悦び、文和三年十二月、七千餘騎にて攻上らる。將軍此由を聞召し、宗徒の勢は、義詮に附けて播州に下し置きぬ。味方小勢にて京にあらんに、又西國・北國の敵に牒じ合せ、楠攻上りなば、由々しき大事ならん。傳へ聞く所は、南方の諸卿に讒せられ、正儀恨を含む由。然れば楠味方になりなば、攝津・河內・和泉・大和・紀伊五ヶ國の守護國司職を宛行はゞ、味方に降る事もやあらん。然らば後代までの能き便といひ、南帝をも取り奉らんと思ふなりとて、天龍寺の應藏主とて、辯舌利口の僧のあ

りけるを、河内にぞ下されける。此僧は、正儀の郎等渡邊九郎が母の甥なりける故、九郎を以て、丹下・志貴等を語らひしかば、丹下・志貴同心して、此事を恩地に語る。恩地又和田の人々に、斯くと語りければ、和田が老臣寺刑部大輔、是こそ天の與にて候へ。迚も聖運開かるべくもなしといへば、此議に同じて、正儀の乳人馬木右近に語るに、右近も是に同じぬ。凡六十餘人、皆是に同じければ、さらば金吾殿に申すべしとて、和田・恩地・志貴・丹下四人、正儀の前に出で、斯くといひて、足利家の御教書を見せければ、正儀涙を流し、故正成・正行の遺言を汝等は知らざるや。某は父の顏をだに覺えざれども、旁が親の常に語りし所なり。當家の存亡は、王法と共にすべし。是父兄の遺言なり、誰か當家の輩に、父兄の恩を受けざる人やある。不忠不義の至り、是より大なるはあるべからず。汝等身を立てんと思はゞ、先づ正儀が首を切つて、京都の獄門にかけて後、思ふまゝに恩賞に預るべし。京都の使者何處にかある。搦め取つて、芳野殿へ參らせんと、氣色變つて見えければ、四人は赤面して詞なく、面々の宿所にぞ歸りける。其後馬木を招き、如何なれば彼使僧を、此方へ

は渡さぬぞ。御邊も朝敵なるかと怒らるれば、馬木右近大に怖れ、宿所に歸つて、一味の輩と評定しけるが、金吾殿の、君を思召す如く、我々も亦楠殿を思ふが故にこそ、此企にも及びつれ。此上は大將の仰に從ふべしとて、彼僧を搦め出し、六十餘人の者共も、太刀を帶せず、囚人の如くにして、客殿の庭に列居て、重科と思召さば、如何やうとも罪せさせ給ふべしとぞ申しける。正儀見給ひ、旁斯く惡事を思立ち給ふこそ、當家の滅亡、朝家の御大事なれ。其源は渡邊九郎より事興れり。斯く大勢に知らせずとも、某に密に知らせざるぞ。正儀に對し、隱謀はあるまじけれども、朝廷に對し、逆心を企てぬれば、不祥ながら切腹せらるべしとて、渡邊に腹を切らせ、其首と彼僧とを、芳野殿へ差上げられければ、代々の忠臣かなと、大に叡感なされ、大將の任は暫く、河内守護國司職の事は本の如くたるべしと敕諚あつて、彼僧を都へ返すべしとて、楠に下されけり。是に依つて正儀、彼僧を京都に追返されければ、尊氏卿、代々智仁勇の三德を兼ねたる武士かなとぞ、感じ給ひける。是に依つて尊氏卿、如何ともし給ふべき術なく、同廿四日（太平記に、正月十二日に作るは非なり）主上を取り奉り、江

州武佐寺に落ち給ふ。斯くて其年も暮れしかば、文和四年正月十日、尾張修理大夫高經・桃井播磨守直常、北國の勢を率ゐて入洛せらるれば、同廿二日、左兵衞佐直冬、山名伊豆守時氏と共に、丹波路を經て入洛し給ひ、大内の舊跡大極殿の額門の跡に、敷皮布きて坐し給ひ、鎧弓征矢をば龍崎に持たせられ、我身は黑革の腹卷に夷弓持ちて、草鞋に差畢皮を着せられければ、見物の京童部共、天下の武將にはなり難き出立かなと、憚る所なく笑ひけるとぞ聞えし。

南方諸將軍評定の事

さる程に尊氏卿は、三萬餘騎になり給ひしかば、同二月四日、東坂本に着き給へり。都相公義詮も、七千餘騎にて、同日の早旦に、山崎の西神南の北なる峯に陣し給ふ。都には直冬を大將として、尾張・桃井以下の勢、七條より九條までの、小路々々に充滿たり。一手は、山名伊豆守時氏父子を大將にて、伊田・波多野以下の者共、淀・鳥羽・赤井・大渡に陣を取る。河より南には、四條中納言隆俊・法性寺左兵衞督康長を大將に

て、和田・楠・吉良・石室・赤松氏範以下、八幡山下に陣しけり。然る所に山名父子、南方の兩大將へ軍使を立て、敵多勢ならば、待つて戰はんと存せしに、小勢にて候由。此方より打散らし候はん。然らば御勢を、川より此方へ渡され候へ。一手になり候はんといひ送らるゝ。兩將此儀尤なりとて、川を渡し、山名と一手になり給ふ。其後諸卿會合して評定あり、楠正儀進み出で、見る所は、敵兵六千計りと見えて候。是程に小勢なるべしとは思はれず候。定めて一萬二三千は候べし。察するに、乾の方の谷々に隱し勢ありと見えて候。あれ程の小勢にて、佐々木入道妙善律師・細川頼之などの武功の者共、何ぞ斯く近々と陣せんや。又隱し勢なく候共、峯嶮しくして上るべき便なければ、西北の尾崎より、弓の兵降下つて、下り拳に射て漂ふ所を、眞倒に駈落し候はんに、味方怺へ候まじ。妙善律師當國にて、此術にて數度勝利を得たりと承る。一度利を得たる謀は、度々する者にて候ぞ。然れば此方より寄せんは、危き合戰にて候べし。只日毎に足輕を出し、敵の分限を見計らひ、僞引寄せて一戰をせられ候へかしと宣へば、山名伊豆守時氏大に感心し、扨て若年なりと申せ

共、故廷尉の息程候ひけり。日本を敵にうけ、數年南方の國々を、安穩に治め給ふこそ理なれと申されけるに、子息右衛門佐師氏進み出で、道譽則祐が術も、能知り賺し候ものを、楠殿は御身に引當て、敵を深み給ふぞや。其上大將相公は、大臆病の人にて候なり。楠殿は御存候まじと申さるれば、諸將皆此儀に同じ、只寄せて雌雄を一時に決し候はんと勇みし故、四條・法性寺兩大將も、事は多分に隨ふべしと同せられければ、正儀眉を顰め、又此度の合戰も、捗々しからじとぞ呟かれける。

南朝太平記卷第二十終

南朝太平記 巻第廿一

正平十年二月合戰の事

さる程に神南の陣には、西の尾崎を、佐々木・赤松等が手の者共堅めたり。南の尾崎は、細川右馬頭賴之以下陣を取る。北の岸には、大將宰相中將義詮朝臣、本陣を居ゑらる。斯る所に山名右衞門佐師氏、西の尾崎へ押上りて、敵味方入亂れ、爰を詮と相戰ふ。南の尾崎右馬頭賴之の陣へは、和田・楠以下、二千餘騎にて進んだり。後陣は山名伊豆守時氏、四千餘騎にて續いたり。楠は疊楯を手にて持たせられたれば、敵、雨の降る如く射けれども、事共せず攻寄する。豫て足輕共に熊手を持たせたれば、鹿垣を一時に引破る。是を見て秋間・須々木以下の究竟の者共、火水になれと戰ひしかば、正儀の先陣三百餘騎、色めき立ちて逃退く。正儀少しも騷がず、旗本の勢

を魚鱗に立て、靜々と討つて懸り、無二無三に切入れば、賴之の勢怺へ兼ね、崩れ立つ所を、山名が執事小林民部丞、得たり賢しと士卒を下知し、喚き叫んで攻立しかば、悉く谷底へ捲り落され、死傷する者數を知らず。小林は氣に乘りて、曳々聲を揚げて追懸くる。楠は、始めの細川が陣に打上つて、菊水の旗打立て、先の敗軍の勢を集めらる。右衞門佐師氏是を見て、懸れ〳〵と下知しければ、逸雄の若者共、震々雷々として戰ふ程に、佐々木・赤松が陣も崩れ立ちしかば、相公の陣も、纔百騎計になりにける。されども正儀の察せられし如く、細川右馬頭・同陸奥守を大將にて、六千餘騎を、深谷の內に隱し置かれけり。正儀、山名が陣へ使者を馳せ、義詮が陣を見候に、佐々木・赤木・細川の者共と見えて候。荒手の敵に懸り給はんは如何に候。以前の敵を追立て、其勢に御懸り候はんは格別、是程の敗軍に、本陣の能く靜まりて候は、いかさま賴む術や候らん。今暫く御待あつて、敵の術を御覽候へといひ送られければ、師氏聞きて、一陣破れて殘黨全からずといへり。況や早兩陣の大備、既に敗れ候上は、勝利掌の中に候と、事可笑しげに返事して、士卒を從へ打つて懸る。義

詮、今は叶はじとや思はれけん。馬に打乘り、落方を求め給ふ所に、赤松則祐走り寄り、七寸を控へて、こは何事の候ぞ。則祐討死仕りて後こそ、左樣の御態は候べけれと、諫め申して後、帷幕を颯と打上げて、いひ甲斐なき者共かな。大將の御前にて潔く討死せよ。死ねや死ねと、身を揉んで下知せらるれば、我も〳〵と切入りて、今日限りと相戰ふ。其外谷を隔てゝ一陣に控へたる平位新左衞門・櫛橋三郎左衞門・浦上七郎兵衞等、横合に切懸る。山名が勢、手繁く荒手に切立てられ、少し漂ふ所に、細川が隱し勢、漸く戰場に馳着きて、太山も崩れ天維も落ちよと喚き叫び、一擧に死を爭ひしかば、山名が勢咄と崩れて敗走す。左衞門佐師氏は、小林民部丞・舍弟五郎が跡に控へたるを討たせじと、取て返して戰はれけるに、佐々木が郎等目鹿田左衞門馳寄せて、師氏の內兜を目蒐けて丁と切れば、左の眼を、小耳の根へ切付け、目昏み膽消えけれども、太刀を取直し、目鹿田が涎掛の透間へ、鋒を入るゝとぞ見えし。目鹿田は急所を突かれて死したりけり。山名は太刀を倒に杖きて、少し心を休めんとせられけるに、敵の射る矢五筋まで、馬に中つて百と伏せば、師氏馬より下立た

れたるに、又矢一つ來つて、兩眼の間を、後の緜附の本へ、矢先白く射付けたり。

河村彈正賴秀最後丼楠正儀退口高名の事

師氏今は恷ふべくもあらざれば、自害せんとせられける所に、河村彈正走り來り、師氏を己が馬に掻乘せ、福間三郎左衞門が、彼方に休み居たるを招き、馬の口を取らせ、鞭をしとゞ當てければ、馬は勇んで馳せて行く。河村爰を引きなば、大將遁れ給はじと取て返し、大音揚げ、山名殿に一騎當千と賴まれつる河村彈正賴秀ぞ。寄れや者共といふまゝに、三尺六寸の梅華皮作りの太刀を打振りて、射向の袖に差翳し、一方は山の岸、一方は谷にて、九折なる嶮岨に、濃紅の緜懸けて、只一騎控へたれば、勇み進んだる若者共、四五十騎懸り向ふ。河村千鳥足を踏んで、散々に相戰ひ、敵三騎切て落し、四人に手を負はせけるが、我身も痛手數ヶ所負ひて、終に討死をぞしたりける。細川右馬頭は、六千餘騎の隱し勢を、二千餘騎引分けて楠に對し、麓に陣を張らせ、一千餘騎は備を亂して、山名が勢を追はしめ、三千餘騎は備を堅うし、賴之下

細川頼之敗走

知して靜々と進まれければ、南方の兩大將四條中納言・法性寺左兵衛督、一戰にも及ばず落行かる。正儀之を見給ひ、怯弱なる公家の人々の擧動かな。斯樣の敗軍の時、生きんと思へば死し、死なんと思へば生くるものぞ。細川が勢を打散らさずんば、味方一人も、爭か安穩なるべきや。和田殿先陣して討死と思ひ定め、一戰を遂げられよと仰あれば、和田、仰にや及ぶ。あの敵打破りて捨て候はんと、三百餘騎を魚鱗に立て、靜かに懸り向へば、楠正儀、五百餘騎を一手になして續かるゝ。勝誇つたる細川が勢、などかは以て怺ふべき。杉形になつて走り向ふ。和田が勢、物馴れたる者共なれば、敵間近くなるや否、面々に楯をかばと捨て、咄と喚いて駈けたりけるに、細川が勢騷ぎ立ちて、右往左往に敗北す。正儀は、逃ぐる敵を和田に追はせ、五百餘騎を魚鱗に立て、靜々と引かれけるを、敵兵多く附慕ふ。正儀下知して、あれ體の取集め勢を討たんとすれば、味方の備亂れて、不覺の死をするものぞ。近付かば射て落せよと下知して、和田が後陣に打たれけるが、敵は南方の兩將、又は山名を追つて川邊を上りに進みければ、今は河の渡には、然々の兵もなし。然れども敵急

に追來れば、正儀、川の瀨より下し、下の方に勢を備へ、馬武者を百騎計殘し置き、是に精兵の射手百餘人附置きて、其餘の勢は、靜に川を渡させける。敵手繁く追懸くるを、百餘人の弓の者共、差詰め引詰め散々に射る。射られて漂ふ所を、百餘騎の逞兵等、眞驀に駈立てしかば、蜘蛛の子を散らすが如く、四角八方に逃散りたり。此勢三百餘騎の者共、靜に河を渡しければ、一人も討たるゝ者なく、安々と引いて行く。敵も味方も之を見て、正儀の智勇の程をぞ感じける。

正儀詐被乞和事

さる程に楠南の軍に、東方打勝ちしかば、將軍尊氏卿は、山門より東山に陣を寄せ給へば、仁木左京大夫賴章は、嵐山に取り上る。義詮は楠南を動かずして陣し給ふ。官軍は又本の如く、直冬を大將にて、東寺・淀・鳥羽・大渡に充滿たり。斯くて日毎に相戰ふと雖、合戰は互角なり。時に同二月廿二日の朝、楠正儀は、八幡より兩使を以て、直冬の陣へいひ送られけるは、某忍を以て、東山の陣を見せ候に、用心淺間に

候由、一夜討なされ候へ。案内者の兵二百人參らせ候はん。又忍びの兵百餘人、豫て敵陣に入れ置き候はん。渠等其時陣々に火をかけ、五騎十騎づつ切廻らば、勝利を得候はんとなり。直冬悅び、桃井直常を招き、此事を語り給ふ。直常使者に對面し、然らば某が勢を以て、阿彌陀峯、嵐山の敵に懸らせ、某は、將軍の陣に切入り候べし。其餘の陣々へは、高經父子が勢を差向けられ候へ。勝利疑候まじといふ。其より足利高經に談じ給ふに、高經承引せず。其故は、直常には先に內談あつて、高經を外樣になし給ふといひ、直常計り宗徒の請手となり、高經を末々の敵に當つべきやうやあると、之を憤りしが故に、此事も止みにけり。是に依りて正儀、南方の總大將の陣に行き、此間敵は日々に勢重なり、味方は次第に減じ候。此分にては、始終如何候らん。さるに依つて、東山の陣へ一術なされ候へと、數度申候へ共、東寺の諸將、和せざるが故に事ならず候。所詮義詮が陣へ一夜討して、聖運の程を試み候はんと申さるゝ。法性寺左兵衛督康長聞き給ひ、正儀の申條尤には候へども、直常・高經・師氏は、當世無雙の良將なり。此輩同心なきは、定めて上策にてはあるまじと

正儀詐つて降を乞ふ

存候と宣へば、楠聞きて、渠等を良將と仰せ候や。此度神南にて懸るべき圖を脫し、駈けまじき所を駈けて、味方の負を仕出され候。某が申す所不審に思召れ候はゞ、今見給へ。義詮を追散らして見せ候はんと申されば、康長も怒れる氣色にて、兎角の詞も出されず。正儀も不興氣にてぞ立たれける。斯くて正儀は、赤松が山崎の陣所に使を遣はし、忍びやかにいひ送られけるは、當家二代、君の爲に命を捨て、正儀又忠貞に私なしと申せども、朝に佞人あつて、讒を專と仕るに依り、領國を召放たれ、面目を失ひ候事、定めて聞き及び給ふべし。當時攝津・河內・和泉・紀伊・淡路に四國を給はらば、將軍家に參り、忠戰を勵み候はんとなり。赤松信濃守大に悅び、御敎書を申受けんは安かるべけれども、四國は細川の領國なれば、如何あらんとて、賴之に斯く談じ給ふに、其こそ泰平の基なれば、四國を去り、渡し候はんとて、兩人相公に申されば、先づ將軍に伺ひ申すべしとて、東山の御陣へ申送らるゝ。將軍大に悅び給ひ、頓て御敎書をぞ給はりける。其後楠、使者を以て、南方の官軍を討取り、直に芳野の內裡へ押寄せ候はんと申送らるゝ。神南山崎の人々は、楠をこそ怖

しく思ひしに、味方になりたる故、夜も安く寢られ、目出たし〳〵とぞ悦ばれける。

正儀夜討の事

正儀は斯く謀り課せて後、板持・早風・富田林・村雲・生駒・小鷹・新庄・早飛以下、奇妙の忍十四人、其外忍に馴れたる兵三百餘人、五人六人一與にして、神南・山崎の陣々へ、宵より忍ばせ置かれけり。斯くて同三月五日、神南へは和田・丹下・志貴七百餘騎、櫻井の佐々木道譽が陣へは、早瀨・安間・志宇智六百餘騎、山崎へは湯淺・富田四百餘騎、後陣は正儀六百餘騎、何れも合詞合印を定め、卯の上刻に押寄する。陣を三隊に分けて、先陣は忍ばれん程は忍んで、敵の陣中に入れとなり。富田は百五十騎にて、賴之の陣財寺へ押寄せければ、湯淺は後陣に控へたり。三宅は山崎の在家に引入りて、財寺の合圖を待つ所に、先に入置きたる忍び共、財寺の在家に火をかけて、鬨を咄と揚げければ、富田百五十騎を前後に立て、無二無三に切つて入る。敵兵共火に驚き、鬨の聲に狼狽へて、我先にと逃げて行く。細川右馬頭賴之は、將軍方にて、良

將の譽ありしかども、主從三騎赤裸にて、太刀計り取つて、水無瀬を指して落行かる。財寺の火を見て、山崎の在家に紛れ居たる忍び共、三ヶ所に火を掛けて、此に顯れ彼に隱れ、不意に起つて切廻れば、赤松が勢も、皆赤裸にて北げて行く。櫻井・神南の陣へも、豫て入れ置きたる忍び共、方々に火を放てば、寢そびれたる敵兵共、先後に迷へ度を失ひ、右往左往に北げて行く。大將相公も、暫は行方知れ給はざりけるが、兵庫に落着き給ふ。其日討取る首數、千三百餘級・生擒百三十七人なり。南方の兩將を始め、山名以下の諸將、こは何事ぞと驚きけれども、仔細を知らざればとて、勢を一騎も出さゞりけるが、楠夜討したりと聞えしかば、翌六日の辰の刻、兩將三千騎を率し、河を渡して山崎に馳着くる。暫くあれば山名父子も、西岡の敵を追拂うて、是も山崎に馳來る。斯くて南方の兩將及び山名・正儀の陣へ軍使を馳せ、當時無雙の計略、驚入候と賀せらるゝ。正儀は、敵の集め置きたる兵糧少々運び取り給ふ。午の刻より兩大將、山崎・神南・櫻井等の敵陣の兵糧を、諸軍勢に配當せらる。正儀は、巳の刻に山崎を立ちて、三千餘騎にて、酉の刻に、八幡の陣に歸らるゝ。山名が

執事小林民部、七百餘騎にて、財寺に陣すれば、兩將は其日に、本の陣所に引返し給ふ。正儀は、終に兩大將山名に對面せられず、兩將の方へ使を以て、斯く勝つべき圖の候を知り給はず候。以來御心得候べしといひ送らる。康長聞き給ひ、此度の働き、實に以て名譽に候。但某に知らせ給はざるは、楠殿も不覺候と宣ふ。使者丹下兵三郎、仰に候へども、正儀先日此謀を申入候へ共、山名・桃井は、當世の良將たりなんど仰せられ、此圖を見付け給はぬ大將達在す故、正儀が一孤の勢を以て、忠義に備へんと思ふなり。諸勢心を一致せば、義詮を討取らん事案の内にありと、郎從共に向ひ語り候ひきといへば、兩將兎角の詞なく、面を赤めて居られけり。尊氏卿は、東山より、神南・山崎の煙を見給ひて、又例の楠奴に、謀られつると覺えたり。狐の子は顏白とやらん、渠に度々化さるゝこそ安からねと宣ふ。既に陣々震動して、敗北せんとしたりしを、土岐・仁木以下馳廻つて鎭めける。此時東寺より押寄せなば、尊氏又敗北し給ふべきを、諸將和せざるが故に、長詮議にて止みにけり。楠又東寺の諸將と山名が陣に使を馳せ、義詮が行末、何處にありとも聞えず候。後は攝州にて赤

松が國なれば、五日過ぎなば、敵蔓り候はん。哀れ臆病神の覺らぬ前に、諸將心を一つにし、東山の敵を追拂はれ候へといひ送らる。然れ共高經・直常不和にして、大將の下知を用ひざれば、直冬何ともいひ出さるゝ事もなし。山名は、稍に敵を拂はれ、餘りに無念に思ひ、軍評定の爲、三度まで東寺の陣に至りけれども、高經出會へば直常出でず。直常出づれば高經出でず。是に依つて山名も頭を搔き、怒を抑へてぞ止まれける。義詮は只七騎にて、兵庫に着き給ひしが、程なく多勢になり給ふ。小林之を聞きて、本の西岡に退けば、義詮は又、本の神南にぞ陣し給ひける。

官軍退二散國々一附正儀被レ送二高經・直常一事

同十二日、尾張修理大夫高經・仁木・細川・土岐・佐々木以下と戰ひしが、戒光寺を敵に取られ、東寺の勢は、氣を屈し勢を呑まれ、城戸より外へ出でざりけり。然るに今日（太平記に、十三日に作るは非なり、十二日なり）直常・高經を助けざるは、直常敵に內應し、明日東山の勢を引入るなんど、誰れいふともなく風聞しければ、大將直冬・高經以下の人々、淀・鳥羽の官

軍にも知らせず、住吉・天王寺を指してぞ落ちられける。直常之を聞き、是又能き謀の種なるべしと、東寺の陣に火を放てば、敵兵、すは東寺は落ちたるぞと、雲霞の如く馳せ來るを、此彼より駈出で〳〵、敵少々討取りしかば、悉く逃げ行きけり。翌十三日の早旦、直常鳥羽まで引きしかども、味方は早一人もなかりしかば、又八幡まで引返し、正儀に對面せしに、早兩大將は落ちられぬと語らるれば、哀れ大臆病の人かな。直冬も、今よりは臆冬と名乘られよとぞ笑はれける。斯くて數日經て、同十七日、南方の兩將及び直冬以下、八幡山に上らるゝ。面目なくぞ見えし。諸將異心なき旨和睦あつて、翌日合戰の評定あり。異儀區々なりければ、神慮に任すべしとて、神託を窺はれけるに、直冬、父に向つて弓を引く事、諸神の惡み給ふ所なれば、勝利を得る事あるべからざる旨、神託灼に下りければ、諸卒の心忽に變り果て、山名・桃井・尾張以下に至るまで、重ねて大將を給はつてこそ上らめとて、山名は丹波路に掛つて本國に歸り、直冬は堺浦より船に乘じ、備後へ歸陣し給ひけり。修理大夫高經は、丹波より若狹に廻つて歸らんと宣ひけるを、直常、某に於ては、尊氏が陣下を

通るべし。敵出合はゞ、願ふ所の幸なり。十死一生の合戰をすべしと申さるれば、高經も是に同じ給ふ。楠正儀、さらば某、京まで送り參らせんとて、六千餘騎を本陣になして、七條河原に充滿たり。高經は先陣として、六千餘騎を七つに分つ。後陣は直常八千餘騎を九つに分け、河原を上りに、粟田口より、山科に懸つて押通らる。東山の陣には、敵又如何なる術をかなすらんと、周章騷ぐもあり。いや〳〵北國へ引退くぞといふもあり。只兵を、一騎も出すべからずとて、堅く制し給ひける故、矢一つをも射ず、のさ〳〵と通しければ、楠は河原を下りに、八幡に引返さる。兩大將も、三千餘騎にて淀へ打つて出で、正儀を待付けて、其日は八幡に陣し給ひ、翌日南方へ引返し給ひけり。是に依つて同廿二日、將軍父子歸洛あつて、尊氏卿は、藤原爲定卿の宅に入り給へば、義詮は、宣明卿の宅に移り給ひ、同廿八日、主上を山門より、土御門の內裡に還幸なし奉られけり。

南帝臨二幸觀心寺一幷和田・楠軍評定の事

足利尊氏死去

後村上天皇觀心寺に御臨幸

さる程に足利直冬、東寺沒落の後は、南方の官軍等、飯盛・渡邊を限つて宮方の領とし、折々野伏共出合ひ〳〵、戰ひたる計にて、さまでの合戰もなかりし所に、延文三年四月廿九日、尊氏卿御年五十九歲太平記に五十四に作るは非なりにて逝去ありしかば、嫡子宰相中將義詮朝臣相續いで、征夷大將軍の宣下を蒙り給ふ。此弊に乘つて、南朝の官軍京都を攻めんと企てけれども、勢微にして叶はず。力なく止みける所に、結句鎌倉管領足利左馬頭基氏義詮弟の執事畠山太夫入道道誓、基氏の名代として、南朝退治の爲、延文四年南朝正平十四年十一月六日の申の刻、多勢を率ゐて上洛し、直に將軍家の御所に參じ、義詮朝臣に謁しければ、御悅び限りなく、御盃を下さるゝ。同十四日には、畠山が宅に將軍を招請し參らせて、善盡し美盡し、樣々と饗應す。將軍も自ら南方に進發し給ふとて、其用意頻りなり。其頃南帝は、河内の天野を皇居にて御坐ありける所に、楠左馬頭正儀・和田和泉守正武參內し、此處は要害無下に淺間に候へばとて、天野の奧觀心寺に行幸なし奉る。斯くて正儀一族、諸臣を集めて合戰の評定あり。正儀宣ひけるは、此度は赤坂を始め城々を燒拂ひ、和泉・河內の寺社の禰宜法師人民まで、

悉く紀州・和州の方へ落し置き、千劒破一城に籠るべし。和田殿は岸和田の城を燒拂ひ、紀州の鹽谷伊勢守と一手となり、紀伊川を前に當てゝ防がれ候へ。某は籠泉・石川へ打出で戰ひ候べし。然らば東國勢、百日とも在陣叶ひ難かるべしと申さるる。和田正武進み出で、某はさは存ぜず。始終は兎もあれ角もあれ、初度の勝利こそ快く、諸人も勇む者に候へ。紀州の勢を給はつて、正武渡邊に罷向ひ、一軍仕り候はん。數ヶ所の城を御開き候はんも、餘り穩便に候と申さるゝ。正儀聞き給ひ、兄正行、先年東條にて戰ひしは、討死を期しての事、多勢に微勢、替る術もなくては、如何なりと制せらる。其時恩地・橋本詞を揃へ、泉州の仰も、勇の過ぎたるとや申さん。今見よ、城又城々を明けんも、餘り穩便に候といへば、然らば兎も角も計らはれよ。城を攻落され、人を損ずる上に、兵糧も敵のものとなるべけれとぞ立たれける。

丹下・志貴・湯淺・俣野等出ニ降人一附金剛山軍の事

斯くて新將軍義詮朝臣、南方進發に依つて、同十二月十九日、內裏より頭左中將忠

光朝臣を以て、御旗御馬を下さるゝ。翌廿日の寅の刻、御供の勢二千騎計りにて打立ち給ふ。甲冑弓箭を帶せらる。一兩日東寺に逗留あつて、同廿三日に、尼崎に向ひ給へば、翌日畠山以下の東國勢數十萬騎南方に發向し、河内の國に亂入し、山野を餘さず陣を取る。楠は豫て忍びの者共を、敵陣に入れ置かれける所に、走り歸つて申しけるは、畠山が陣は、津々山の南の尾崎に陣を取りて候が、畠山こそ用心嚴しく候へ。其餘の大名は、多勢を賴み、用心の體も候はず。其上飯盛の寄手、今日飯盛に着きて候が、十餘里を一日に打つて候故、大に疲れて見え候と告げければ、丹下・志貴大に悅び、今宵夜討に仕り候はゞ、小勢を以て大勢を追散らし候はんといふ。正儀、いや〱、百日の中には追拂ふべき敵を、危き戰をして何かせんとて許されず。丹下・志貴・譽田・俣野以下大に怒り、いひ甲斐なき人を、大將と賴みぬるこそ口惜しけれ。謀略を以て、敵を引入るべけれども、其は逆罪なればとて、六百餘人にて、降人にぞ出でにける。其後程經て、譽田・湯淺が方より、恩地が方へ使を以て忍びやかにいひけるは、此度寄手に降りぬる事、思へば不義不忠の至り、千悔すといへども

是非に及ばず候。就いては今夜細川相模守淸氏を大將にて、我々兩人案内仕り、觀心寺に押寄せ候。急ぎ切所に勢を遣はされ、我々共を討取り給ふべしとぞいひ送りける。恩地、正儀に斯くと語りければ、いや〳〵、渠等が心中計り難し。敵に與する不覺人共が、我に忠を存ずべきや。當地の兵を他所へ出して、是に寄せんとの巧にや。さりとて差置くべきにあらずとて、恩地・安間を觀心寺へぞ向けられける。安間は、觀心寺のあなた、金剛山の高き岸に兵を伏せて備ふれば、恩地は十町計麓の茂林に勢を隱し、一千餘騎にて控へたり。案の如く、其夜細川相模守、士卒を皆步立になし、さしも嶮しき金剛山へぞ登られける。安間是を見て、時分は能きぞと下知すれば、士卒等一同に鬨を咄と作り、下り拳に散々に射る。豫て心得たる事なれば、十分に逃散りて、行方知れず落失せけり。細川が勢、駈上らんとするに、盤石銳に、岸高くして上り得ず。弓手の方は深谷なり、細き道に沓の子を打ちたる如く、群り立ちて押合ひたるに、敵の射る矢は、さながら白雨の足の如し。寄手三千餘騎の勢なれば、先の難儀なるをも知らず、矢叫びの聲を聞き、曳や〳〵と進む程に、先陣の四

百餘騎、一度に谷へ押落され、殘少なになりにけり。清氏眼を瞋らし長刀を取つて、進み懸る味方に向ひ、敵難所を取つて、先驅既に多く命を損ず。汝味方深谷に落つるをも知らず、進み懸るは何事ぞ。己等こそ差當りたる敵なりとて、先に進める者共三人まで、長刀に刺貫き、谷へ投捨て〳〵、齒を切つて立たれければ、漸々其時靜まりけり。斯くて淸氏、後陣の河原が方へ軍使を走らし、此由をいひ送り、案內者共は、討たれしや落行きしや、行方を知らざれば、進退途を失へり。如何はせんと、使者往返の程を待つ所に、思地、思ひも寄らざる後より、後陣の勢へ、咄と叫んで切懸くれば、一戰にも及ばず、弓手の谷へ驅落され、上が上に重なり死す。たま〳〵死に殘りたる者共も、皆赤裸にて、翌日すご〳〵と逃げ歸る。見苦しかりし分野(ありさま)なり。淸氏も大勢に取籠められ、痛手二ヶ所負ひながら、辛き命を助り、主從二騎にてぞ落ちられける。翌日譽田・湯淺二人、太夫入道道誓に向ひ、味方に野心の者あつて、謀を敵に泄らしつるると覺え候といへば、入道、さればとよ、先年石川河原に對城を構へ、楠と數日戰ひしに、味方の術を皆敵に知られ、悉く今度の如く仕損じてありつ

るなり。何として聞え候や。旁能く知られつらん。語られよといへば、湯淺それこそ深き樣子の候。楠が陣へ夜討などは、思ひも寄らず候とて、夜廻りの油斷なき次第、雁番の樣子をぞ語りける。是は正儀、父兄に替つて、少し油斷ありし故、千劒破へ夜討に寄させじが爲なりけり。

南朝太平記卷第廿一終

南朝太平記巻第廿二

楠正儀津々山へ夜討の事

さる程に志貴・丹下・湯淺以下、敵方にありながら、樣々謀を巡らしけるが、時分よくなりぬ。夜討に寄せらるべしといひ送りしかども、一旦敵になりたる者なればとて、正儀、是を用ひられず。和田も恩地も諫め兼ねて、斯く圖に當りたる軍を怖れ、人を疑ひ給ふぞやとて、七人の降人の陣々へ、五人六人あて勇士を差遣し、渠等が傍を離れず居て、不義あらば刺違へよとぞ下知しけるに、七人の者共此由を聞き、左樣に疑ふまじき所を、深く疑ひ給ふ大將にて候。殊に不義ある我々にて候へば、御疑尤に候。然らば我々の手の者共を、十人二十人一與にして、合詞を定め、畠山が陣へ忍ばせ置き候べし。究竟の兵五百人計り、差遣され候へ。其勢と交り、陣々へ切

入り候べしといひ送れば、恩地大に悦び、正儀に斯くといふに、心得ぬ事なれ。若僞つて味方を方便り討ちなば如何せん。質を渡さずんば、叶ふまじと申されければ、恩地又斯くと返事するに、七人の者共、皆子供又弟などを質として出しける。斯くて合圖の夜になりしかば、和田・恩地・安間・高安三千八百餘騎を四つに分くる。次は大將左典厩正儀、七百餘騎を一隊となし向はるゝ。先鋒の和田・恩地、畠山太夫入道が、張番の者共を追立て、逃ぐる敵に追縋つて、透間もなく敵陣に切つて入る。安間・高安、一聲鬨を喵と作れば、後の山に隱れ居たる野伏七百餘人、同音に鬨を合す。寄手の勢、やれ夜討よと狼狽へ廻り、太刀よ松明よと犇く所に、豫て入れ置きたる忍びの兵、方々に火をかけて、此に顯はれ彼に隱れ、喚き叫んで切廻る。志貴・丹下七人の者共、七つに分れ、手勢を從へ所々に切入れば、數萬の敵軍、何と思ひ分けたる心もなく、只百千の雷の、一度に鳴落ちたるやうに覺え、太刀をも取らず、赤裸にて裸馬に乘りて逃ぐるもあり。弓にて切合ふ者もあり。遊佐安藝守・佐原將監・內山小太郎を始め、一騎當千の者共討死す。其間に太夫入道は、甲斐なき命を助かり、這

這逃延び、其夜は久法寺にぞ落着きける。七人の者共、正儀に對面し、此間の罪を謝す。恩地は道誓があらん所まで押寄せて、討取り候はんといひけれども、典厩是を許されず、哀れ翌日寄せたらましかば、敵足はためまじかりつるに、圖を外されけるこそ方見けれ。四五日經しかば、敗軍の勢集まつて、又元の如く寄手多勢にぞなりにける。

正儀計略附千劍破攻の事

斯くて寄手の勢は、手負死人出來ると雖、多勢なれば事共せず、龍泉寺・平岩二ヶ所の城を攻落し、赤坂の城を十重廿重に取圍む。和田和泉守城中より忍び出で、不意に夜討を懸くると雖、敵陣敢て退かざれば、和田・楠諸共に、其夜赤坂の城に火をかけて、千劍破の城へぞ引籠られける。其後正儀謀を巡らし、丹下・安間・志貴・早瀬等に心を合せ、寄手の中へいはせけるは、故廷尉正成、一度先帝に頼まれ奉りしより以來、將軍家に對し奉り、少しも遺恨なしと雖、忠義を專ら存ずるに依つて、數年怨

敵となつて候。併當家の不義とは、誰が申すべきなれば、今の義の誠あるを感じさせ給はゞ、老臣等正儀に諫言を仕り、武家へ對して、忠戰を勵ますべきにて候。此儀、主人正儀には未だ知らせず候へども、仰に依つて申聞かすべく候と、實しやかに申し遣しけれども、又謀にやいふらんと、承引の氣色はなかりけり。是に依つて重ねて申入れけるは、疑はせ給ふは理にては候へども、今は國中の城々、悉く退失仕り候ひぬ。其上紀州・和州にも、敵發り候ひぬ。加之將軍家を敵に受く正儀にて候へばこそ、今まで斯く安穩に候へ。然りとて千劒破の城を攻落されんには、唐土天竺が寄せ來りたりとも、一年二年には、爭か叶ひ候べき。然れども始終の勝利叶ふべくも候はねば、老臣等心を合せ、斯くは內談仕り候なり。將軍家御許容に於ては、正儀申聞かせ候べし。若又承引仕らず候はゞ、老臣數人誓書を差上げ、正儀の實子を盜み取り、御幕下に屬して、忠戰を盡すべく候。然るに於ては、楠が一跡の事、彼幼子に給はるべく候や。此儀御許容なきに於ては、力なく討死を思ひ極め候べしと申しければ、將軍も今は實ぞと思召し、楠味方に屬しなば、天下は一時に治まるべ

し。然る上は河內・和泉・大和・紀伊四ヶ國の守護職を賜はるべし。若老中忠あらば、河內一國を與ふべしとなり。斯る所に又老臣等いひ送りけるは、此度正儀に申聞かせ候處に、曾て承引仕らず、自害せんなどゝ怒り候。又幼子多門丸の事、內々の企を、如何して知り候ひけん。片時も傍を離さず、却て我々を討たんと議せられ候なり。然れば我々味方に參らずとも、攻めさせ給ふべき城にて候へば、只攻寄せられ候へ。我々が役所より引入れ申候はんとなり。寄手も何とやらん實しからず思ひ居ける所に、千劒破より夜中に松明を燈しつれ、大勢八方へ分れ、落行く體を見せし事、五六夜に及びけるが、此落人共、敵の陣中に緣のある者共は、竊に來つて、正儀老中等と不和なる事共、實しやかに語る。數人が口を聞合するに、少しも違ふ所なければ、扨は僞にあらず、押寄せて正儀に腹を切らせ、南帝を捕り奉れとて、同五月廿三日の卯の刻、四方の寄手、同じ時に攻寄せて、さしも嶮しき坂道を、只一息に攻上る。城中には思ふ圖に敵を僞引き寄せ、大石大木を投掛け〳〵打ちける程に、敵の內應を賴みて楯をも突かず、攻支度をも用意せらる。寄手共、何かは以て耐るべき。

四方の谷へ人雪崩を築きて、いやが上に重なり死す。適命を助かりたる者共も、痛手を負ひて、半死半生の體なりけり。

尾張守義深敗軍附相公歸陣の事

寄手の大將畠山尾張守義深は、八千餘騎にて居られけるが、敵方よりの返忠は、又僞と覺ゆるぞ。但し塀の本に用意し置きたる大石大木は、早悉く切落しつらん。斯程に味方を討たせながら、此小城を攻落さずんば、後代迄の瑕瑾たらん。只一攻攻めよと下知せらるれば、士卒等金鼓を鳴らして攻懸る。されども以前に懲りて進み得ず、暫く見合はせ居る所に、豫て用意し置きたる事なれば、恩地伊勢守が舍弟六郎一房、早瀨小藤太・志貴・安間以下、宗徒の者共一千餘人、吉野十八郷の野伏共三千人、此の峯彼の谷蔭より、五百三百一群々々打出づる。畠山が勢、是に駈合せんと、備騷ぎ立つ所に、以前五六夜計り、虛落したる者共、畠山が陣中此彼に顯れて、十騎二十騎づつ、一與にて切り廻れば、寄手大に周章し、大崩れに哄と崩れ立つ。恩地・

畠山義深敗軍

足利義詮京都に歸陣

志貴・早瀬、得たり賢しと攻鼓を打つて、短兵急に追懸くれば、數萬の寄手一返しも返さず、我先にと落行く程に、長尾新三郎・猪俣小平次・黒田彌一兵衞・石堂三郎・本間美作守・嫡子原屋太郎・安藤九郎・岩崎源太郎左衞門以下、宗徒の者共三十五人、返し合せて討死す。其餘討たれし士卒三百餘人、大將尾張守も危き死を免れ、津々山にぞ引取られける。猶怺へ得ず、天王寺へ落つるもあり。飯盛・八幡・淀・鳥羽まで、落つるも多かりけり。津々山には、細川清氏・佐々木六角入道・赤松彦五郎・土岐・明智・今川以下三十八頭、軍勢六千餘騎ぞ落留りける。和田・恩地等、翌日津々山の陣へ押寄せんと議しけれども、楠大に制せられし。此時寄せたりせば、津々山はいふに及ばず、天王寺の義詮朝臣も、一日も怺へ得給ふまじきを、正儀當世無雙の良將たりと雖、父兄には劣る故に、又圖を脱されけるこそ方見けれ。義詮朝臣も、斯くては重ねて戰ひ難しとて、矢尾・平石・譽田等の城に、赤松・佐々木が勢を殘し置き、楠を押へさせ、同五年廿八日、京都に歸陣し給へば、諸國の勢も、皆都にぞ歸りける。

和田國府開城并譽田・矢尾・平石・水走落城の事

さる程に敵、京都に引取りしかば、楠又打つて出で、平石の城を攻落さる。京勢是を聞きて、時日を移さず天王寺に馳下れば、楠方は又山林に引籠る。是は南方退治の爲にあらず、京都將軍家内和せずして、仁木左京大夫義長を、攻滅さんとの密談の爲なれば、頓て京都に引返す。正儀大に悦び、此弊に乘らずんば、時を失ふなるべし。先づ一蒸蒸せよと下知せらるれば、方々の山々に篝を燒き、攻むべき體をぞ見せたりける。和泉の國府の城に居たる細川兵部大輔大に驚き、此勢に取り卷かれなば叶ふまじと、城を開きて落行くを、和田正武の勢、遁さじと追懸くる。渡邊の橋まで、四里が間を追討にしければ、細川が一千餘騎も、過半馬に離れ、赤裸にて逃げて行く。見苦しかりし分野なり。譽田の城にありし杉原入道も、今は渡邊の橋を越さん事叶はじと、矢尾・平石の兩城に評し合せ、水走の城に籠らんと、白晝に引行くを、楠正儀、野伏者五千餘人を打散らして之を追はせ、我身は三千餘騎を堅固に備へて追

懸けらる。矢尾・平石・譽田の城兵等、野伏共に追詰められ、討たるゝもの數を知らず。入道は五六十騎に討なされ、水走の城に入りけるを、早瀬八百餘騎にて、手繁く追懸け追縋つて、外郭を引破れば、本城に引籠り、一日一夜防ぎけるが、叶ふべくもあらざれば、首を延べ降を乞ひ城を開渡し、主從十七人にて、南都の方へぞ落行きける。

和田小次郎正寛遁世由來の事

然る所に往生院の正寛といへる法師、千劒破に來り、正儀に謁して申しけるは、此度杉原入道が手に屬し、討死仕りて候なる。津山新五と申すは、愚僧が從兄弟にて候へば、首を給はつて孝養仕りたく候と望みけり。正儀聞き給ひ、扨は左様にてありけるか、然らば望みに任せて與ふべしと約せられ、様々饗應し給ひければ、佛の道など終夜物語りし、翌日暇を乞ひければ、正儀、新五が首を選み出させ、正寛に與へてぞ歸されける。此正寛が、出家遁世の身となりける其由來を尋ぬるに、赤松が家

子宇野六郎といへる者の一子なり。赤松大夫判官光範は、將軍尊氏卿に專一の者と賴まれ、數年攝津の守護にて居られけるが、一年住吉合戰に、家子宇野六郎、忠戰を勵み討死す。然るに六郎が一子熊王といへし者、未だ幼少なりけるが、光範にいひけるは、楠は正しく親の敵にて候へば、如何なる術をも巡らし、近づき寄つて、討つて本意を遂げたく候。願はくは御許を蒙り、河内へ打越え、正儀に仕へたく候。然らば幼少なる身にて候程に、定めて心許し仕らん。よし又心許し仕らずとも、七八年も仕へ候内には、討つべき便の、などかなくて候べきと望めば、光範もいと哀れに思ひながら、幼少なる者を、敵國へ遣らんも心元なく、又命に代りて討死せし者の子なれば、形見にも見たく思はれしかども、强ひて望む上は力なく、常に身を離さず、帶せられける三振といふ名劒を與へ、是にて本意を達すべしとて、士共多く添へて、安倍野までは送らせせられける。其より熊王は、童一人を具して、千劒破の城に行き、其邊に徘徊しける所に、兵庫助忠元之を見付け怪しく思ひ、如何なる人にやと問へば、是は赤松大夫判官光範の郎從宇野六郎と申す者の子に、熊王と申す者

にて候が、一年住吉の合戰に、父の六郎討死仕り候ひしを、一族にて候宇野備後守我を追討つて、所領を奪ひ候へども、主人光範と心を合せ候へば、力及ばず候故、如何なる寺にも入り候ひて、僧法師にもなり、父が跡をも弔ひ申さんが爲め、斯く浮れ出で候と語れば、忠元哀れに思ひ、其より我宿に伴ひ歸り、樣々とぞ勞りける。其後忠元、大將正儀に斯くと語り、未だ幼少には候へども、心ばせ賢々しき者にて候といへば、正儀も哀れに思ひ、具して參るべしとて對面し給ひ、其より傍近く召使はれけるが、本より情深き人なりければ、熊王も其恩惠を感じ、二心なく奉公を勵みけり。正儀も彼が忠勤の程を感じ、十五六歲にもなりなば、河州の內にて少の地をも領せさせんと宣ひしかども、少しの高名も仕りてこそと辭しにけり。斯くて文和二年、父六郎が七回忌に當りけるに付きて心に思ひけるは、父の讐には、倶に天を戴かずといへり。今宵は正儀を討つて、父の手向にもし、光範の御心をも、休め奉らんと思ひ立ちけるに、其日正儀、今日は吉日なれば、熊王に元服せさすべしとて、和田和泉守の烏帽子子になし、和田小次郎正寬と名乘らせ、吉野の主上より賜はり

たる緋縅の鎧を、小次郎にぞ與へられける。熊王淚を流し、悅ぶ事限りなし。夜に入りて正儀の前にありけるが、年來の本意を遂げんは、今宵にこそと思ひ膝を直し、正儀に目を懸けゝるが、此年頃情深かりし事共、又は今日の元服につけて、其厚恩を思ひ續くれば、爭でか情なく討ち奉らんと思ひ返し、心を靜め居たりしに、能々思ひ巡らせば、正しく親の敵といひ、又は譜代相傳の主君の怨といひ、一方ならぬ怨敵なるものを、是非一討にと思へども、何心もなく居給ふ有樣を見れば、痛はしく悲しさの餘りに、廣緣に出で、大聲を揚げて泣き叫ぶ。正儀を始め諸人、こは何事ぞと驚き、障子を開きて如何にと問ふに、小次郎暫く淚を押へ、斯樣々々の次第故、正儀公を討つて、父の讎を報ぜんと思ひ候へ共、此年頃の御情の程、今日の御恩の忝き事を思へば、爭でか恐れ多くも討ち奉り候べき。此上は君の爲め先君の爲め父が爲めに、自ら死なんより外は候はずとて、既に腹を切らんとする、諸人抱き留め刀を奪ひ取りて、大に諫め制しければ、小次郎も兎角の事をもいはず、平伏して泣き居しが、又刀を取つて髻押切り、頓て往生院に行きて、剃髮染衣の身となり、君よ

り給はりたる名なればとて、正寛を改めず、正寛法師と號し、往生院に幽なる庵を結び、道心堅固に、世捨人となり、行ひ澄して居たりけるが、若も心の變る事もやあらんとて、往生院の門より外へは、曾て一足も出でざりければ、出家以後、初めて此時千破劔へも、參りけるとぞ聞えし。

神崎合戰附正儀謀略の事

爰に攝州の守護職は、赤松信濃守範資嫡男判官光範、相續いで二代守護し居たりけるを、此度將軍南方に在陣し給ひし時、軍用の沙汰、每時不足なりけるを憤り給ひけるを、佐々木佐渡入道道譽、折に幸と、種々の讒を構へ、赤松が攝津の守護を召放たせ、己が恩賞にぞ申給はりける。楠左馬頭正儀、此事を傳へ聞き、和田和泉守正成を招き、某攝州の赤松を追拂はん事は、最安く覺えしかども、公家の政道惡ければ、却て敵の擒とならんと思ひ、今まで打捨置きしなり。さりながら新しき攝州の守護の手並を見ざらんも、無下に言甲斐なく覺ゆれば、馳向つて一戰仕らんとて、術の

次第を密談し、正儀は五百餘騎、正武は二百餘騎、野伏共一千餘人を催し、康安元年正平十六年九月廿七日の夜、渡邊の橋を打渡り、地の形勢を見澄し、野伏三百餘人、精兵の射手を勝り、葦の茂りたる中に、廿騎卅騎あて伏せ置き、五町を退きて、和田二百餘騎伏兵となつて、是も葦原に忍び居る。其より五六町を退いて、楠左馬頭、五百餘騎を一手になし、菊水の旗只一流押立てたり。佐々木道譽が嫡孫近江判官秀詮、折しも在國したりけるが、楠が分限、何程の事かあるべきとて、翌くれば廿八日、先陣の吉田肥前坊六百餘騎、後陣は佐々木兄弟七百餘騎、神崎の橋を越えて進んだり。正儀の忍びの中に、板持次郎といひける者、宵より佐々木が陣に忍び居しが、秀詮が郎等共に語りけるは、某は中島の在家の者にて候が、楠が發向故、妻子をも打捨て、逃げ來りて候なり。今夜川を越えられ候は、和田和泉守殿にて候。楠殿は、跡より向はれ候といふ。士卒共、秀詮に斯くと語れば、扨は正儀が來らざる以前に、和田が勢を討散らさんと勇まるれば、肥前坊聞きて、同じくは楠をも渡らせて後、向ひし敵を鏖にし、明日は河內へ發向せんものをと荒言吐けば、諸勢も勇み進みけり。楠は

正儀、畠山秀詮の軍を破る

敵の心を弛ませて後、雑人を走らせて、楠は西より寄せ候ぞ。神崎の橋爪を支へられ候へと呼ばらせられければ、すは楠は跡より寄するぞ、引返せよと、肥前坊を始め、深田や沼の中なる細道を、一騎計に長々となつてぞ打つたりける。正儀、時分は今ぞと下知せらるれば、本陣より太鼓を打出す。野伏共三百餘人、豫て相圖の事なれば、方々の葦原より起つて、廿騎卅騎づつ群り出で、深田を前に當て、沼を隔て、差詰め引詰め横矢に射ければ、佐々木が勢は、的になつて射られける。先陣の肥前坊が六百餘騎、深田の中へ逃入りて、人馬上が上に重なり合ひ、只泥に塗れたる魚の如し。後陣に打ちける近江判官秀詮、あれ駈散らせよと下知せらるれば、士卒等野伏を駈倒さんと、一騎打の道を、遙々取つて返しけるが、敵の射る矢雨の降るが如くなれば、射落さるゝ者數を知らず。射殘されける者共、廣みへ出でて追拂はんとする所に、又葦原の中より和田が加勢二百餘騎、喚と叫んで切り入りしかば、佐々木が勢一戰にも及ばず、我先にと逃行く程に、泥中に追入れられて、或は討たれ或は生捕られ、又は心ならず自害するも多かりけり。正儀士卒に下知し、一隊を二隊に分け、二百餘騎

を、備を亂して追はせければ、敵を討つ事若干なり。近江判官兄弟は、肥前坊と一手にならんと、廿騎計りにて落行く所に、肥前坊は、早中津川の橋を逃げ渡り、追ひ來る敵を落さじとや思ひけん、橋板二三間引落して逃げ行きしかば、佐々木兄弟、今は遁れぬ所と、取つて返して討死せられしかば、瓜生次郎左衞門父子兄弟三人・縣次郎久季以下、我も〱と討死す。此時宗徒の者の首八級、其外の首を得ること三百七十餘級なり。生捕二百六十餘人ありけるを、正儀情深き大將なれば、手負ひたる者には藥を與へ、赤裸なる者には小袖を着せ、悉く京へ返し遣はされければ、諸人皆情の程をぞ感じける。斯りける所に、將軍義詮の執事細川相模守清氏、逆心の聞えあつて、京都以ての外に騷動しけるが、清氏、都の住居叶はずして、若州に逃下り、又若狹をも落ちて南朝に參り、降を乞ひしかば、罪過恩免あつて、朝敵誅伐の謀を巡すべしと敕諚ありしかば、清氏大に悅び、楠正儀と評定し、正平十六年北朝康安元年十二月三日、住吉天王寺にて勢揃へして、京都を指して攻上る。相公義詮朝臣、叶はじとや思ひ給ひけん、同八日に江州へ落ち給へば、頓て清氏・正儀以下、京都に入替へられけ

るが、相公程なく多勢になり、諸方より攻上らるゝ由聞えしかば、官軍は都を落ちて、又南方へぞ引返しける。

南朝太平記卷第廿一終

南朝太平記　卷第廿三

左馬頭正儀神崎發向の事

さる程に楠左馬頭正儀は、攝津の地に發向し、其頭佐々木が守護代とて差置かれたる箕浦を追拂ひ、攝津に數ヶ所の城を築き、西國の兵を防がせ、其後上洛して、四國に居給ふ。細川相模守清氏と牒し合せ、一時に將軍義詮を追落し、此度は公家の人人の評定に係はらず、何國迄も義詮を追懸けて、悉く攻滅し、四海一統の切を立つべしと、勢を集められける所に、楠主上を恨み、逆心の企ある由風聞す。君も大に驚かせ給ひ、叡慮を苦しめさせ給ふ所に、正儀此事を傳へ聞き、恩地伊勢守を以て奏せられけるは、正儀隱謀の由申す諸卿の候由、某父兄より以來、天恩に依つて三ヶ國を管領仕り候所に、百姓等に非道を申懸けらるゝ諸卿多く候。是皆下司・公文・奉行

等が仕る所にて候はんか。正儀是を誡る故に、私曲人等、其主人に向つて正儀を讒し候を、實と思召す諸卿多く候故、斯く讒口に懸り候なり。若隱謀を企て候はゞ、勢を催す迄もなく、君を傾け奉らん事は、恐れ乍ら掌を返す如くに候はんか。此度は細川と兼約仕りし故に、攝州に發向仕らんと、其用意仕る所なり。所詮猶も不審を殘され候に於ては、一子多門丸を、法性寺殿へ預け奉り候ひなん。諸卿正しからず候故、斯く取り易き天下を、今に至つて武家のものとなし置かれ候なり。せめて武の一偏に於ては、枉げて北面の輩に御任せ候へかし。以前より申候へども、大將の勅許なければ、十死一生の軍を仕る事も候はず。定めて武略の足らざる誹にぞ落ち候ひなん。此故に諸卿へ披露をもなさず、兵を集めたる所にて候とぞ奏聞せられける。是等の事に日數押移りける間に、清氏の舍弟細川右馬助・同掃部助二人、河州に來つて、清氏討死の由を語られしかば、正儀も力落されけり。さればとて又止むべきにもあらざれば、康安二年八月十八日、正儀八百餘騎にてぞ打出でられける。和田和泉守正武五百餘騎、天王寺まで馳着くる。恩地伊勢守三百餘騎、矢尾次郎二百

餘騎、志貴・早瀨百七十騎、丹下・牲川・安間・湯淺・富田野・長瀨・天野等、五十騎百騎馳加はり、七千餘騎にぞなりにける。此勢を二手に分けて、神崎の渡へは、和田・早瀨・湯淺・淺野・長瀨・矢尾・天野等、三千餘騎を差向けらる。此勢、橋より此方に陣を取る。株瀨へは、恩地伊勢守を大將にて、安間・高安・丹下・牲川二千五百餘騎を差遣し、大將正儀は、一千六百餘騎にて、一里計引退き、天王寺に陣をぞ取られける。

箕浦俊定敗北附池田十郎教正武勇の事

佐々木が守護代箕浦次郎左衞門尉俊定、此事を聞き大に驚き、箕浦彌次郎・同四郎左衞門・鹽谷六郎・多賀將監・瓜生・木村以下、百餘騎を株瀨の渡へ差遣し、我身は伊丹大和守・河原林彈正左衞門・池田十郎教正・芥河右馬允以下、三百餘騎を引率し、神崎の橋爪に馳向ふ。斯くて四五日が程は、敵味方對陣して居たりけるが、元來正儀は、敵に斯く防がせ置きて、思ひも寄らぬ餘所の瀨より渡し、不意に敵の後を討つて、河中へ追はめんと、豫て巧まれたる事なれば、八月十六日の夜半計に、二十餘町上なる

箕浦俊定敗走

三國の渡りより、千六百餘騎を、三つに分けてぞ渡されける。翌くれば十七日の曉天に、京勢の眞似をして、旗笠印をも引隱し、箕浦が陣の後より、不意に押寄せ、一聲閧を擧ぐる程こそあれ。先陣庄・石川が五百餘騎、菊水の旗を颯と差上げて、無二無三に切つて入る。次は正儀、八町計退きて、六百餘騎の逞兵共を、三軍に分けて進まるゝ。後陣は志知・藤倉五百餘騎、十餘町退きて、小屋野・富松の民屋に火を放ち、多勢の體をぞ見せたりける。箕浦が勢周章騷ぎ、上を下へと騷動す。次郎左衞門尉俊定も、物具すべき間もなかりければ、太刀計り取りて出合ひける。和田和泉守は、神崎の橋爪にて、三千餘騎にて控へけるが、時分は能きぞといふまゝに、豫て餘多用意したる持楯を、橋桁に渡しかけ、其上に莚を多く持掛けたれば、宛も東海道の如くなり。人馬思ふまゝに打渡し、喚き叫んで攻懸れば、箕浦が勢一戰にも及ばず、我先にと落行く程に、堀溝に落入りて、討たるゝ者數を知らず。大將正儀は、先勢五百餘騎、備を亂して追懸けさせ、我身は、旗本の勢六百餘騎、備を正しく見物してぞ居られける。伊丹・佐和・鹽川・河原林以下、踏止り〳〵、枕を雙べて討死す。爰に池田

十郎敎正といひしは、正しく正行の息男なりとぞ聞えし。其故を尋ぬれば、敎正の母は、攝州野瀨の庄の住人内藤右兵衛尉滿幸が息女なりけるが、正行四條繩手にて戰死の後、仔細あつて正行の後室を、正儀、故鄕に送り返さるゝ。彼後室は、只ならぬ身にてありけるを、父滿幸の計らひにて、再び同國の池田九郎敎依に嫁せしめけるに、程なく男子出生したりけるを、さる明將の子なれば、成長の後、如何なる譽をか顯すべきとて、敎依、己れが子として養育しけるが、今は早池田十郎敎正と名乘りて、十九歳にぞなりにける。然るに敎正、父九郎が名跡を續ぎて、京方にてありし故、箕浦が手に居たりけるが、何の間にか着たりけん、鎧一縮し、鹿の角の兜を着て、逞兵二十騎計を前後に立て、靜々と向ひけるが、士卒に下知して、斯る時は、死なんとすれば生き、生きんとすれば却て不覺の死をするものぞ。敵も他人にあらず。汚き擧動をすべからずとて、勢を魚鱗に立て、敵中に駈入り〳〵、七顚八倒して相戰ひ、追拂ひ〳〵して落ちて行く。嚴しかりし働なり。されども敵は多勢なれば、士卒次第に討たれて、今は主從只五人になり、我身も鎧の袖草摺皆切り落され、椋

の木の陰に、暫く息つぎ休み居たる所に、箕浦次郎左衞門尉俊定、馬にも離れ、歩行立になり、逃げ行きければ、敎正を敵なりとや思ひけん、猶も足早に落ちけるを、敎正、如何に箕浦殿とこそ見れ。是こそ池田よ、御心安かれとて、郎等の乘りたる馬に掻乘せ、都を指してぞ上りける。此時芥川右馬允も、池田に命を助けられて、落延びけるとぞ聞えし。

箕浦彌次郎最後并堀新右衞門勇力の事

爰に箕浦彌次郎は、株瀨に向ひ備へける所に、神崎に當つて、鬨の聲矢叫びの聲、響き渡つて夥し。扨は早合戰始まりたりと覺ゆ。何とある事やらんと、其方を詠めやる所に、川向の敵軍より、箕浦殿を始め、悉く討取りたりと、聲々に喚はつたるに、早所々の民屋に火かゝりたり。彌次郎大に驚き、今は戰ふとも叶ふまじ。淨光寺に楯籠つて、敵を防ぐべしといふ所に、士卒等主を捨て、十方に落ちて行く。和田が勢是を見て、一同に川へ打入れ、流れを切つて押渡す。箕浦大に仰天し、木村・後藤

等を相從へ、淨光寺を指して落行きける所に、正儀の後陣の兵五百餘騎、三軍に分つて淨光寺の前に備へたれば、沼多くして、一騎打の細道を、長々と通らんに、的になつて射落されんは治定なり。只々取つて返して、後なる敵を追拂ひ、横切に尼崎を指して落ちよとて、後へ取つて返せば、和田が先陣群り立ちて控へたり。森・箕浦等、能き程の相手ぞと、一同に咄と驅立つれば、和田が先陣敗北す。されども後陣の和田和泉守、二百餘騎を正しく備へ、沼を前に當て、散々に射させければ、箕浦が勢勇氣疲れ、我先にと落ちて行く。多賀左近將監も、馬を射させて歩立になり、近付く敵を射拂うて落ちて行く。箕浦彌次郎、今は是迄なりと、敵の群立ちて控へたる中へ、只一騎切つて入る。志の程は深けれども、十六歳の若武者なれば、敵八騎に取籠められ、終に討死をぞしたりける。同四郎左衞門尉は、内兜に深手負ひて、田の中に伏したりけるが、姪の彌次郎討たれしと聞きて、既に自害せんとしたりけるを、堀新右衞門走り來り、大男の一縮したるを、鎧の上に掻負ひ、持ちたる長刀を森木になし、尼崎の道場まで、只一息にぞ落行きける。正儀は思ふまゝに討勝ちて、首實檢せ

られけるに、三千七百餘級・生捕百餘人とぞ記しける。さる程に攝州の國府には、箕浦が下代山郷勘解由を始め、敗軍の者共少々相集まりて、二三百人にて居たりけるが、楠、今日は先づ引退きなん。若此處に發向すとも、五六日は過ぎなんと思ひ居し所に、翌日正儀、直に國府に寄せられしかば、敗軍に氣を失ひたる軍兵共、何かは以て悚ふべき。其夜城を捨て、悉く落ち行きけり。正儀悦び、翌日城に入替り、其より伊丹へ押寄せられしかば、是も城を明退く。此の如く攝州一國の中は、向はざる以前聞逃にして、落ちたる城十八ヶ所に及びけり。

正儀發二向兵庫一幷池田城攻の事

さる程に楠左馬頭正儀は、國府にあつて、吉野の皇居に使を馳せ、攝州の逆徒等を、悉く追落して候へども、赤松兄弟播州に便りて、兵庫の城に楯籠り、又赤松を頼みに、池田十郎五百餘騎にて、池田に籠城仕り候。早く渠等を退治仕度候へども、國中の城々に勢を分けて候故、殊の外無勢に候。當時紀州・和州の者共數千騎、皇居に召

置かれ候。今何國よりか、朝敵亂入仕るべきなれば、先此勢を當國へ差向けられ候へ。池田・兵庫の兩城を攻落し、其より京都に押寄せ候はんと、奏聞し給ひけれども、京勢若楠がなき間を窺ひ、寄せ來る事もあるべければ、油斷すべきにあらずとて、石堂右馬頭にに五百餘騎を相添へ、攝州國府へぞ遣されける。棟頭をかき、吾君の爲に一命を經んじ、樣々謀を巡らすと雖、諸卿斯く勝つべき圖を脫し給ふ故、數度の戰功を、皆水になしつるぞや。今京都に如何なる敵あつてか、吉野には寄せ來るべき。あたら勢を遊ばせ置きて、糧を費し給ふ事よとぞ呟かれける。斯くて石堂、國府に着きしかば、正儀四千三百餘騎を引率し、兵庫の地に發向し、震々雷々として攻動かす事夥しく、既に城下の町を燒拂はれしかども、豫て城主の判官兄弟が方へ、伯父則祐律師方よりいひ送りければ、敵小勢なりとて、味方の多勢を賴み、城より出でて戰ふべからず。良將の小勢なるは、却て軍難儀なるものぞ。楠は日本無雙の弓取なり。卒爾の合戰せらるべからずと、いひ遣はしければ、赤松兄弟一騎をも出さず、城中に引入りて相守る。正儀謀を巡らし、夜討をして一陣を燒崩し、敵を討つ事

二十餘人。然れども自餘の陣々峯々を取つて、靜り返つて居たりければ、正儀思慮し、此城は急に攻落し難しとて、翌日引取り給ひけり。其より直に池田の城に押寄せらる。池田十郎教正、素より勇氣甚しき若者なれば、打出でて戰はんと進まれけるを、郎等共堅く之を制し、城を守つて拒ぎけり。既に城を攻むること二十日計に及びける所に、京都の多勢攻下る由聞えしかば、味方の疲れたる小勢を以て、荒手の大戰に戰はんは、危き軍なるべしとて、西宮・尼崎邊に引入れられければ、池田の城兵等、悦ぶ事限りなし。京勢此地に發向すとも、將軍の威輕ければ、二十日十五日は延引しなん。然れば楠、今四五日も城を攻めて、城中に和を入れなば、落つべかりしものを、是ぞ正儀の、父兄に劣りし驗なり。

正儀被レ燒二敵船一附千劔破歸陣の事

さる程に京都には、池田の城攻落されなば、事難儀に及ぶべしとて、執事斯波太夫入道道朝の子息二人を始め、佐々木佐渡判官入道道譽・同六角入道崇永・土岐の一族

以下相加はつて二萬餘騎、都を立ちて、淀・鳥羽・赤井・大渡・西岡邊に陣を取る。細川右馬頭賴之は、四國の勢六千餘騎を催し、兵庫に着きて赤松と一手になり、京勢下らば、牒し合せて攻めんとて、多田部の城に入り、諸勢は山々に陣取らせ、番西の兵五百餘騎は、舟守護の爲に置かれけり。正儀此事を聞き給ひ、謀を巡らし、同九月廿五日の夜、委く術をいひ含め、忍びの賊船三十餘艘をぞ差遣されける。其中に賊船十餘艘は、和田崎より上つて、兵庫の在家に火を放つ事七ヶ所なり。番西の者共、之を見て驚き騒ぎ周章す。軍勢共は、兵庫の北の山々に陣しぬ。水主梶取共は、前後も知らず寢入りたる最中なるに、二十艘の賊船共、皆小船なれば、礒傳ひに阿波・讃岐の敵船の中に入り交り、六千餘艘の兵船に火を放つ。水主梶取共は、兵庫の在家に火を見て、やれ夜討よと騷ぐ所に、己等が舟より火出來りぬれば、こは如何にと騷動して、海中に飛入りて、水に溺れ死する者、何百人といふ數を知らず。時に賊船より、鬨を咄と作れば、兵庫にありし楠が兵百餘人、同じく鬨を合す。其勢小勢なりと雖、味方の騷動する聲、山に響き海に答へて、多勢の樣に聞えければ、狼狽へ廻る

程に、大船小船共に磯へ押寄せ〳〵、纜を切り船を捨て、海中に飛入り逃ぐるもあり。楠方は小舟なれば、海中に溺れ漂ふ者共を、敵船の焼くるを松明として、射殺し切殺す事數を知らず。敵船に積置きたる兵糧を、舟餘多に取乘せ、西宮に送らせぬ。素より小勢なれば、其餘の舟をも兵糧をも、皆之を焼捨てけり。楠方の者共は、敵の兵庫に積置きし兵糧をも焼捨て、和田崎より舟に乘り、皆同時に、西宮・尼崎にぞ歸りける。細川右馬頭賴之は、楠多勢にて寄せ來れり。味方出合へば、謀を以て戰はんどの術なり。一人も出づべからずと制せらる。赤松を始め、阿波・讃岐の軍勢共、明日は軍あるべしと、鎧を着し得物々々を提げて、馬引立て待ちたれども、夜明けて見れば、敵一人もなし。物見の者共歸つて申しけるは、道筋に馬の足跡多く候。定めて楠寄せたりと覺え候といふ。賴之聞き給ひ、楠は寄すべからず。兵糧を焼かん爲め、賊船をかけつるならん。又謀られつる口惜しさよとぞ宣ひける。是より細川は、兵糧忽に盡きたるのみにあらず、二度迄焼かれたれば、士卒疲れ苦んで、六千餘の軍勢も、二千六百餘になりにける。其後和田和泉守、楠に向ひ、某泉州の兵船を以

て、兵庫の宿又は敵の兵糧船を燒き候べし。正儀は、追手より寄せ給へ。然らば賴之出合ひ候べければ、一戰に打散らして候はんと申さるゝ。正儀聞き給ひ、賴之は、軍の法を知れる將なれば、夜中に兵を出すべからず。夜明けて某が兵を引入れんずる所を、附慕ひ追懸けなば、由々しき大事なるべければ、無益なりとぞ制せられける。さる程に京勢は、山崎へ向はんと議しけるが、細川兵庫にて打負けられぬと聞えければ、扨は楠、此方へぞ寄せんずらん。謀られて犬死すなと、佐渡判官入道、淀を立ちて都に引返せば、同六角入道も、西岡を立ちて、京都に引返す。是を始めて二萬餘騎の京勢等、何といふ分ちもなく、我も〳〵と逃歸る。見苦しかりし分野なり。賴之は、猶も兵庫を退かれず、正儀も、翌日兵庫に發向し、二日對陣して後、尼崎に引返されけるが、同十一月廿三日、尼崎に、矢尾五郎を五百餘騎にて殘し置き、伊丹の城には、丹下·志貴三百五十騎、津の國府には、恩地伊勢守を殘し置き、正儀は河內に歸陣し給ひけり。賴之京都に早馬を立て、急ぎ御勢を差向けられ候へ。當國敵の物となり候はゞ、西國通路の煩となり候べしと申されけれども、諸國の軍勢、將軍の催促

に從はねば、力及ばで止み給ひぬ。是に依りて右馬頭賴之も、兵庫を引拂ひ、四國にぞ歸られける。

細川武藏守賴之南方發向の事

茲に南方の恩地六郎は、去ぬる正平十七年の春より、四國に下り、土居得能を始め、曾川・中川以下の者共を語らひ、近國の宮方を催すに、阿波の下山伊賀守、伊豫の今張の浦に着きて、恩地に一味し、國中にある所の京方の城十六ヶ所攻落せしかば、恩地國中に威を震ひ、其より讃岐に押渡り、細川兵部大輔と一手になつて、右馬頭賴之の目代、天野四郎が白峯の城を攻めける所に、中院源少將、西長尾の城より、三百餘騎にて打つて出で、恩地が勢と一手になり、白峯を攻めけれども、此城元來堅城なれば、如何ともすべきやうなく、只守りてぞ居たりける。時に九州より、名和伯耆權守長秋、安藝の國へ押渡りて、大内介が城を攻む。南方には和田・楠、所々に楯籠つて、合戰の止む時なし。斯る所に貞治六年極月七日、征夷將軍義詮薨逝し給ひし

かば、若君義滿を守り立て參らせ、三代の柳營と仰ぎ參らする。此時細川右馬頭賴之、執事職に補任せられ、四國より上洛し、武藏守に補せられ、天下の政道を執行はれけるが、此人前代に替りて、專ら仁政を行はれければ、諸國の士靡き從ふ事、古に百倍せり。斯くて翌年は、南方の正平廿三年（北方の應安元年に當る）三月三日、楠左馬頭正儀、吉野殿に參內し、當年は父正成が、廿三年の遠忌に相當つて候へば、命を限りの弔合戰を仕らんと存じ、豫て新田・菊地以下の官軍に觸れ送り候へば、定めて東西より攻上り候はん。正儀が龍顏を拜し奉らん事も、是を限りとこそ存じ候へと奏せられければ、南帝大に驚かせ給ひ。汝が父正成、義を守つて節に死すると雖、是より官軍勢ひ盡き、此の如く南山に苦しむ事幾千ぞや。今汝討死を定めば、朕先立つて玉體に刃すべしと、龍顏に御淚を浮めさせ給へば、正儀も淚にくれ、兎角の敕答にも及ばず、千劔破に歸城せられけるが、同じき十五日より、千劒破・赤坂・矢尾・飯盛四ヶ所の城に楯籠つて、四天の氣を顯し、天下を一時に覆さんとぞ勇みける。京都の執事武藏守賴之此事を聞き、某大將軍に代つて南方に發向し、根を斷ち葉を枯らさんと、旣に

都を打立たる。相從ふ人々には、尾張越中守義將・畠山尾張守義深・山名伊豆守時氏・同左衞門佐師義・同民部少輔氏清・今川上總介泰範・佐々木佐渡入道判官道譽・赤松筑後守光範・宇都宮・三川三郎以下、都合其勢十萬餘騎、同じき四月八日都を立ちて、攝州中島に陣を取り、軍勢を四つに分け、其二つを以て千劒破・赤坂を圍ませ、其一つを以て、飯盛の城へぞ差向けられける。

矢尾城軍の事

然る所に同十五日、武藏守賴之三萬餘騎を率し、矢尾城に押寄せ、攻動さるゝ事雷霆の如し。城中には、酒邊右馬助延綱・佐和入道正善等士卒を下知し、四方の矢倉へ精兵の射手を登せ、散々に射させければ、手負死人數を知らず。茲に佐々木小次郎高重といふ若者、今年十五歲の初陣なりけるに、音信の爲め執事の陣に來りけるが、我邂逅此場に來つて、何ぞ先陣を他に讓るべき。續けや者共とて、堀際に馳寄せ、三間餘りの長木に繩を結び付け、向の岸に刎かけ、梯となして打渡り、塀に手を懸けゝ

る所に、羽床三十六七騎にて續きけるが、小次郎が上帶攫んで引落し、讃州の住人羽床三郎、今日の先登ぞやと高聲に名乘りけるが、城中より射る矢、雨の如くなれば、羽床を始め此手の者共、悉く射落されてぞ死んだりける。小次郎大に悦び、再び塀上に上つて、一番乘と名乘る。是に續いて諸勢、咄と乘入りしかば、外郭を乘破る城兵、今は叶はじと、搦手より打つて出で、東西に駈破り南北に追廻し、縱横無碍に相戰ひ、城中に引入りて、味方の勢を數ふるに、五百餘騎の者共、八十三騎にぞなりにける。今一度快く、最後の合戰をすべしとて、大將賴之の七千餘騎にて控へられたる旗本へ切懸る、其來銳利を碎き堅きを破りしかば、寄手是に辟易し、騷ぎ立ちて見えし程に、旣に崩れつべく覺えければ、賴之、香川將相を招き、御邊馳向つて靜められよ。さなくば味方敗しぬと覺ゆるぞとて、金の采配をぞ與へられける。香川大に悅び、馳廻つて下知すと雖、多勢の騷ぎ立ちたる癖として、備へ曾て靜まらず。多くは崩れて逃退く。香川今は是迄と眞先に進み、佐和兵庫介と渡し合ひ、終に討死をぞしたりける。されど寄手多勢なれば、十方より取卷き、矢衾を作りて射

たりけるに、一日着温めたる鎧なれば、何かは以て耐るべき。八十三騎の者共、身に矢の四筋五筋立たぬ者なく、悉く朱になり、或は自害し又は討たれて、忽矢尾落城にぞ及びける。

南朝太平記卷第廿三終

南朝太平記卷第廿四

金剛山城軍并飯盛合戰の事

さる程に山名伊豆守時氏・同左衞門佐師義・同民部少輔氏清・今川上總介泰範以下は、其勢一萬餘騎にて、千劔破の城を取籠まれけるが、早矢尾は落城しぬと聞えしかば、我々天下に武名を顯はしながら、武州に越されけるこそ安からね。敵兵は僅二千餘騎、味方は其に十倍せり。倡や當城を攻落し、名を後天に揚ぐべしとて、一萬餘騎の勢を以て、山川も崩れよと、喚き叫んで攻寄する。楠左馬頭正儀は、此度討死と勇まれしかども、君の敕諚の忝さに、謀を巡らし、身を全うせんにはと思ひ定め、城より外へは、嘗て兵を出されざりけるが、士卒に下知して、必ず浮矢射べからず。近々と僞引寄せて、鏖にせよと制せられしかば、城中靜まり返つて音もせず。寄手氣に

乘つて、切岸の下まで攻付け、競ひ進んで登らんとする所に、城兵等、時こそ能けれと、矢を射出す事雨の降るが如く、鈎炮礫を二三十、一同に切つて落せしかば、手負死人數を知らず。新に紅の山を築き上げたり。折節黑雲天に滿ち、大雨俄に降出し、疾風大木を吹折り、山谷崩れて、平地になる計なれば、寄手大崩れに崩れ立ち、親を捨て主を踏倒して、逃ぐるともなく轉ぶともなく、我先にと敗北す。淺猿しかりし事共なり。爰に飯盛の城の寄手 土岐大膳大夫入道善忠・佐渡判官入道道譽・同治部大輔高秀・同山內入道崇譽・同六角入道崇永以下一萬三千餘騎、城を取圍んで攻動す事、更に晝夜の分ちなし。寄手も此城を揉落さんと潛き連れて攻めけれども、士卒等、命を義に替へて防ぎ戰ひしかば、寄手討たるゝのみにして、早晩落つべしとも見えざりけり。大將細川武藏守賴之、熟思慮を巡らし、いや〳〵此處に長居せば、却て敵の術に陷れられ、見苦しき負を仕出すべし。兎角勢を打納めんにはとて、山名民部少輔氏淸を、一萬餘騎にて殘し置き、楠を押へさせ、諸勢を引纏めて、京都に歸陣し給ひけり。

細川氏春紀州軍の事

斯る所に北方の永和四年、南方の元德四年、楠左典厩正儀の下知を受け、橋本民部大夫正時・神宮寺小太郎師總・宇佐美次郎正種、三千四百餘騎にて、紀州土丸の城に楯籠り、近邊を侵し掠む。此民部大夫正時は、故橋本八郎正員が一子なり。次郎正種は、宇佐美次郎澄正が孫河內守正安が子なり。小太郎正總は、故神宮寺太郎兵衞が孫なり。此三人は、故廷尉正成の一族家子にて、判官と共に、湊川にて生害したりし、無二の忠臣共の子なり孫なれば、憤怒の思を一時に散じ、年來の本懷を達せんとぞ勇みける。是に依つて同十一月八日、京都の討手として、細川兵部大輔氏春、三千餘騎にて馳向はる。三輪五郎、宇佐美次郎に向ひ、定めて京都の多勢、攻下らんと待ち候所に、斥候を以て見せ候へば、存の外細川小勢にて候由、三千にはよも過ぎじと申候。然れば味方より逆寄せにして、敵兵明日難所を越えん所を、不意に合戰を始め、追散らし候はんといへども、いや〳〵當家の先例に任せ、兎角敵を僞引寄せ、

術を以て殺したるこそ、味方の勢をも損せず、必勝の謀にて候ぞやとぞ制しける。斯くとも知らず細川が先手、紀伊・和泉の集り勢共、土丸の城に押寄すると等しく、只一息に揉落さんと攻上る。城兵は矢一筋をも射出さず、靜まり返つて待居たり。寄手彌氣に乘つて、我先に高名せんと、楯を一面に潛きつれ、曳や〳〵と攻上る。橋本民部大輔正時是を見て、やれ時分こそ能けれとて、塀に掛けたる石弓大石小石を刎落し〳〵、散々に攻立つれば、手負死人、見る中に山の如く出來れり。寄手太に仰天し、周章漂ふ所を、出塀狹間の陰より、差詰め引詰め散々に射る。寄手討たるゝ者數を知らず。前後の諸陣、一同に敗しけり。此事京都に聞えしかば、細川左京大夫賴元・山名修理大夫義理・舍弟民部少輔氏淸以下二萬五千餘騎を、加勢として差下さる。此勢同じき十二月七日、土丸に來着す。城兵是を聞き、敵の不意を討つて、其鋭氣を拔くべしと、其夜五百餘騎にて、夜討に出で、敵將右京大夫賴元の陣へ寄かけ、所々に火をかけ、喚き叫んで切入りしかば、長途に疲れたる軍勢共、驚き騷ぎ、一戰にも及ばず、赤裸にて落ちて行く。賴元も、痛手三ヶ所被り、取太刀計りにて、郎等の淸村

に助けられ、漸々として落ちられけり。山名義理・舍弟氏清、士卒を從へ馳せ着かれしかども、城兵早引入りしかば、山名兄弟大に悔ゐ怒り、よし〳〵城を攻落して、武名を發せんと進まれし程に、右京大夫賴元も、當城を乘破つて、恥辱を雪がんと憤られければ、衆議是に一決して、總攻を相催し、持楯をつき寄せ〳〵相近づく。城兵も破られじと、拒ぎ戰ふと雖、敵多勢なれば、入替り〳〵攻立てし程に、城兵等如何に勵むとも、終には攻落されぬべく見えにけり。斯る所に同國の湯淺・山本・野川・贄川・玉置・鈴木・雜賀以下四十餘騎、土丸の城兵を助けん爲め、後詰として、寄手の陣後十餘町近く迄寄せ來る。細川・山名以下大に驚き、先後より敵に攻立てられなば、由々しき大事なるべしと、諸勢本の陣所に引退き、湯淺・山本等と對陣し、互に白眼み合ひてぞ居たりける。斯くて城中糧盡きしかば、今は矢猛に思ふとも、叶ふべからず。一先づ當城を落ちて、山中に引入らば、敵定めて退くべし、敵引かば、又打出でんに安かりなんと、評議既に定まりしかば、宇佐美次郎謀略を巡らし、夜に入りて、城の前なる林の中に、數千の松明をかけて、火を差したれば、寄手の勢大に驚き、すは又敵

は、夜討に寄するぞと、上を下へと騷動す。城兵等は、其間に、搦手より拔出で、十方に落失せけり。豫て相圖せしかば、野上・山本の後詰の勢も、同時に引取りけり。寄手は斯くとも知らず、敵寄すると待ちかけしかども、寄せ來る勢もなければ、又謀られつるぞやと笑ひけるが、夜明けて見れば、城兵は一人もなく落失せたり。扨こそ城は落ちたるぞ。目出たし〳〵とて、諸勢翌日陣拂ひして、都を指して歸陣せり。

京勢金剛山を圍む事

南方討手の勢、旣に太平を唱へ歸陣せし所に、翌日河州の早馬來りて、楠左馬頭正儀・同小次郎正秀父子、千劔破の城に楯籠り、勢ひ强大に候と注進す。將軍大に驚かせ給ひ、同十五日、東寺まで御旗を向けられぬ。細川・山名の人々に、佐々木治部大輔高詮・小笠原將監盛衡・安藤信濃守信泰・宍戸五郎以下を相添へ、三萬七千餘騎をぞ向けられける。此勢金剛山を取圍み、同十八日より矢合せして、晝夜息をも續がせず攻立つる。寄手にも、手負死人日毎に若干出來ると雖、多勢なれば顧みず、嗅きに

喚きて攻上れば、天地も此時、反覆するかと疑はる。此時正儀父子、敵を一欺き欺かんと、樣々思慮を巡らされけるが、山名氏淸の手に屬せし內浦源次は、郎等の日井六郞が異父兄なりしかば、是こそ究竟の幸なりとて、日井を以て、內浦が方へいはせけるは、城中既に兵糧矢種盡きて候へば、今は旬月を過し難く候故、正成・正行、忠臣の節義を守り、命を戰場に殞し候と雖、何ぞ一塵も私の遺恨を挿み候べき。正儀に、河州一同の守護を給はらば、御味方に參じ、忠戰を勵み候べしといひ送らる。內浦此由を、山名民部少輔に語りしかば、氏淸大に悅び、諸將に此事を談じ、京都に注進せられしかば、天下泰平の基、何事か是に如かんと、頓て御敎書をぞ出されける。其日數經る間に、正儀父子、金剛山の麓に、山を平げ岸を切立て、虎口升形を堅固に用意して後、當國の守護職の事は、君より賜はつて、既に三代安堵仕り候へば、今更將軍家の辭狀に及ばず候とて、返されければ、兩細川・山名・佐々木の人々大に怒り、又攻道具を用意して、曳や〳〵と攻上る。城中よりは、矢の一筋をも射出さず、旗の手も靡らず、朝夕の煙も絕えて、人ありとも見えざりけり。然れども楠は、代々不測

の良將なれば、又如何なる謀をなしつらん。恐ろし〳〵とて進み得ず。細川右京大夫熟と思案して、兎角敵の糧道を斷ちて、食攻にすべしとて、村々里々へ野伏を配り置き、兵糧の道を差塞ぎければ、城兵等、是には疲れてぞ覺えける。正儀又思慮を巡らし、敵に糧道を斷たれぬれば、始終當城を特怺へん事叶ふまじと、豫て用意し置きたる大竹七百取出させ、和州水越峠へ遣し、雲火數千結付けさせ、同十二月廿七日の夜半過に、本宮鬼七・有茂戶彌平次に、富田林の飛影といふ、名譽の忍びを相添へ、八十餘人を橫道に差遣す。相圖の時刻になりしかば、國見坂より、彼雲火に火を放ち、金剛山の奧へと分け登る。寄手の勢是を見て、すはや敵は落行くぞ。追懸けて討取れよ。太刀よ物具よといふ程こそあれ。早數千の雲火は、峯を彼方へ越しぬ。敵は早峯を越せしぞ。あれや〳〵といふ所に、暫あつて水越峠の雲火數千を揚げしかば、寄手呆れて、敵は大和路にかゝりたり。今は追行くとも叶ふまじとて、靜まりけり。國見坂・水越峠へ向ひし城兵等は、岨を傳ひ谷を忍んで、城中に歸りし。此時楠小次郎正秀謀を巡らし、非利法權天と大字に書きたる家の旗一流、八田八郞

にいひ含め、水越峠に捨置かせられければ、野伏共拾ひ取つて、己れが頭香西又太郎が方に持來る。香西悦び、大將細川の陣所に來つて、彼の旗を渡しければ、諸將大に悦び、扨は疑ふ所なく、楠は落ちたるぞと、上下さゝめき渡つて、同廿八日歸陣にぞ赴きける。

楠正儀・和田正武卒去附赤坂落取る事

吉野には、南帝後村上院（後醍醐天皇の皇子）崩御の後、御子長慶院殿相續いて、踐祚の儀坐しけるが、迚も開かるまじき御運の程を思召し知られ、世の中を物うくや思召されけん、今年の春、御位を御弟凞成王に讓らせ給ふ。後龜山院是なり。其より長慶院殿は、御飾を下させ給ひ、何國ともなく出させ給ひ、諸國行脚坐せしかば、南朝拜趨の人々も、いとゞ心細く思はれける所に、天授六年楠左馬頭正儀、重病に侵され卒去せられしかば、官軍勇氣碎け、悲み呑みて、如何はせんと歎きけるが、此事敵に知らせなば、由々しき大事なるべしとて、深く之を隱しけり。紀州の官軍等も力を落し、

楠正儀死去

和田正武死去

己が樣々十方に分れ落ちて行く。山名修理大夫義理、斯る事とは夢にも知らず、紀州の宮方兵糧につまり、退散すと聞えしかば、弊に乘つて討取れとて、七千餘騎にて、紀州阿瀨川の城に押寄する。此城には、湯淺孫六入道禪定が孫左京進、楯籠り居たりけるに、士卒悉く落失せて、今は家子郎等只八騎殘りけるが、早晩まで時刻を待つべきぞ。最後の一軍すべしとて、思ふ程戰うて後、皆自害をぞしたりける。山名氣に乘り、直に土丸の城に押寄せしに、橋本民部大夫、落殘りたる軍兵共十四五騎を從へ切つて出で、悉く討死す。恩地伊勢守・野上修理亮・牲川三郎左衞門は、深山に逃げ入りて、行方も知らず落失せけり。されば山名兄弟、五日が中に、紀州の宮方を退治せし事、莫大の忠功なりとて、紀州を修理大夫義理に恩賜ある。舍弟氏清は、去る應安より、南方の押へとして、十二年の勳功を積みたれば、先祖義家朝臣、奥州十二年の在陣に同じ。是當家の嘉例なればとて、陸奥守にぞなされける。然るに和田和泉守正武、弘和元年の冬、俄に疫癘に侵され、卒去せられしかば、家子郎從共も、盲人の杖を失ひ、海路に楫を斷ちたる心地して、緣にふれ便に付けて、我も〳〵

と、散々に落ちて行く。山名陸奥守氏清、此由を聞き、泉州堺を立ちて、同じき二年正月二日の晩景、赤坂の城に押寄せたり。城中には、和田孫次郎・同孫三郎・同小市以下三十八騎、落殘されてありけるが、少しも疑議せず切つて出で、十方に駈立て、南北に馳巡り、千變萬化して戰ひけるが、多くは討たれ、殘りし者共は、多勢の中を切拔けて、八方に分れ落ちて行く。此の戰功に依つて、氏清に、和泉の國をぞ賜はりける。

河州平尾合戰の事

さる程に南方には、楠典厩正儀・和田和泉守正武、相續いて卒去せられしかば、官軍は氣碎け力盡きて、如何になり行く世の中ぞやと、大息をつき流す。されども正儀の子左馬頭正秀・其子小次郎正盛、猶も千劔破一城に引籠り、時の至るを待たれける所に、士卒等次第に落散りて、城中の兵僅三百七十騎にぞなりにける。然る所に大樹義滿公、紀州玉津島の眺望を遊覽あるべしとて、元中五年八月、紀の路に赴き給ひ

けるが、同八日、和歌に着かせ給ひ、同十八日には、歸洛し給ふべきにぞ極りける。楠左馬頭正秀此由を傳へ聞き、急ぎ吉野殿へ使者を以て、加勢を賜はるべしと乞はれしかば、竹林院の三位花山院少將を大將にて、和田修理亮・堀口三郎以下八百餘騎に、吉野十八鄕の野伏共を、相添へてぞ遣されける。典廐大に悅び、大樹の歸路を遮らんと、同十七日の夜半、千劒破を打立ち、平尾を越えて、和泉路に向はんとぞ急がれける。河州の押へとして、山名陸奥守氏淸、赤坂の城に在りけるが、山川入道馳せ來つて、此由斯くと告げしかば、山名から〳〵と打笑うて、當時の楠が分際にて、大樹の旅行を妨げんや。いで〳〵打散らして捨つべしと、三千五百餘騎を引率し、其夜の寅の刻、平尾に馳着き、敵の近づくを待ち居たり。旣に未明に及んで、典廐正秀、靜り返つて押來られけるが、朝霧の晴間より、向ふを屹と見やりたれば、三引兩の旗數十流、秋風に飜り、混甲の兵、沓の子を打つたる如く充滿たり。楠が勢案に相違して、味方の密計早敵に泄れぬるにやと、驚き辟易す。山名が先鋒小林修理亮が五百餘騎、同音に鬨を咄と作る。時に恩地伊勢守・牲川左衛門二人、眞先に駈出で、金

楠正秀敗る

銀の采配を拔きて、今日を限りの運命ぞや。只切入りて討死せよとて、駈出せしかば、士卒是に續きて、一同に咄と切入りて、今日を限りと戰うたり。吉野十八鄕の野伏共、馬武者に駈立てられ、村々に逃げて行く。左馬頭正秀、貮き者共の擧動かな。返せや〳〵と下知して、縱横無碍に駈立て、天地も反覆せよと、喚き叫んで戰はれしが、志貴・贄川・平野・安間・高安を始め、百六十騎討たれて、殘兵等も朱になり、戰ひ負けて引行けば、山名が勢は、勝鬨作つて引取りけり。是よりして南朝の帝位彌衰へ、官軍の勇氣猶も盡き果てぬ。薄情しかりし分野なり。

南北兩朝御和睦附三種神器御歸洛の事

さる程に京都には、公家武家內々評定あつて、南北兩朝和睦の儀を取り議るべしとて、大內左京大夫義弘を、四位の少將になされ、南方にぞ遣されける。大內、吉野殿に參內し、北畠少將顯敎朝臣を以て、南北御和平の儀、種々言を盡し、理非分明に奏せしかば、南帝御許容坐し、叡感甚だ淺からず。朕久しく南山に居して、一度聖代に歸

南北兩朝御和睦成る

せしめ、九重に德光を耀かさんと思ひしに、聖運微なるが故に、外都邊鄙の土と化して、天涯望鄕の鬼とならんとす。天に二つの日なく、地に二の主なしといへり。天神地祇も、何ぞ朕を助け給はん。早く不肖の身を退けて、天下萬民の歎きを止むべし。三種の神寶を渡すべしと乞ふ事、大儀の一事にして、諸臣の異見區々なりと雖、朕朝政を務めずして、何ぞ繼體連綿たる三種の神寶を抱くべき。若外土の塵となし奉らば、吾朝の王道、永く廢れなん。然る上は、義弘が望みに任すべしと、敕許なされけり。還幸は十二月二日と定められしかば、大內義弘、束帶の下に腹卷を着し、吉野の本丸殿に參向し、神器を請取り奉る。御迎の人々には、一條內府經嗣公・德大寺左府實時公・久我右府具道公・花山院大納言道定・今出川大納言實直・三條大納言公豐以下なり。頓て三種の神寶を、鳳闕に移し奉る。同十五日南帝吉野を出御なされしかば、洛西嵯峨の大覺寺の舊跡に入れ奉り、花山院大納言道定卿を敕使にて、太上天皇の尊號を進ぜらる。是に依つて後龜山院と號し奉る。是より參り仕ふる卿相雲客もなく、閑庭の松風より外は、音信れるものもなければ、明暮御物思ひの

數添へて、御涙の乾く隙もなし。

畠山金吾河州發向附楠正秀父子千劔破籠城の事

斯る所に楠左馬頭正秀は、南帝都に出でさせ給ひしかば、幼子の母に後れ、窮鳥の翼を殺れたる心地せしかども、今一度義兵を揚げ、骸を戰場に曝して、義名を末代に殘すべしと、平一揆を始め、討殘されたる郎等共、又吉野十八郷の野伏共を驅催し、一千六百餘騎にて、千劒破の城に楯籠らる。是に依つて同十二月廿日、畠山右衞門佐基國、討手の大將として、五千餘騎を引率し、都を立ちて、同じき廿二日河州に着陣し、赤坂・守屋・龍泉寺に陣を取り、足輕の射手五百餘人を、水越峠に差遣し、城中の糧道を差塞がせ、足輕二百人を、五條峠に遣して、南方よりの人馬の往來を止めしかば、如何なる楠ともいへ、あぐむべくぞ見えたりける。斯くて畠山は、先づ城中の虛實を窺ひ知るべしとて、斥候の勢八十餘騎に手垂の射手を相添へ、金剛山本見山へ差遣す。素より城中靜まり返つて居たりしかば、城中の虛實を窺ひ知らばや

と、古へ元弘に、東國勢の梯を渡さんと巧みし所ぞ、城中へは近ければとて、遊佐七郎三百人の射手を率し、彼所より射させけれども、其程遙に遠ければ、其矢悉く谷底へぞ落ちにける。時に城中より、田邊六郎太郎、此數十年巧み置きたる强弩を、曳と發しければ、寄手三人、一矢に打通されて、跡なる士卒二人、痛手負ひて百と伏す。寄手是に驚き、我先にと逃げ退く。白江彌五郎一人踏止り、此矢五日が中に射返すべし。當城を落さん事、日あるべからずと、高聲に罵つてぞ引取りける。楠正秀父子大に怒り、故正成より以來、末期の一箭と定め置かれたる强弩を、今日放ちぬることそ、運命盡きぬる驗なれ。寄手是を習つて、金剛山の尾崎より、此强弩を放たば、落城疑あるべからずと。大に仰天せられけり。斯る所に寄手、强弩を巧出し、峯より差下して放ちければ、城中防ぎ兼ねて騷動す。此弊に乘つて攻立てよと、千劒破村より攻懸りしかども、城兵共能く防ぎ戰ひしかば、寄手討たるゝ者數を知らず。是に依つて加勢として、京都より赤松上總介義則・今川左衞門佐仲秋以下、六千餘騎を差向けらる。寄手是に氣を得て强弩數百を用意し放ちかけゝれば、さしもの城兵

楠正秀敗走

等、術計今は盡き果てゝ、持怺ふべくもあらざりしかば、左馬頭正秀、殘兵等を從へ、或夜風雨の紛れに、城中を忍び出で、何地ともなく落ちられけり。舍弟楠小次郎正元は、千劒破落城の後は、彼方此方とさまよひけるが、何とぞして、大樹義滿に近づき、多年の本意を達せばやと案じけるが、恩地が再從兄弟安間左近將監、其頃は降人に出で、京方にありければ、渠が許に忍び行き、日每に窺ひ廻りけるに、何とかして顯はれけん、同五月十八日の未明に、侍所赤松が所司代浦上七郎兵衞行景、六十餘騎にて押寄せ、安間が宿所一條柳原を取卷きて、門戶を破つて込入りしかば、正元少しも騷かず、菊水の太刀を引きそばめ躍り出でて、向ふ敵一人切伏せ、五人に手負せて、猶も進んで戰ひけるに、敵先後より取包んで、終に正元を搦め取り、翌十九日夜、千本の松原にてぞ誅せられける。

楠正元殺さる

南方殘黨三種神器を奪ふ事

茲に南方宮方の殘黨共、芳野に馳集つて、重ねて本意を達せんとぞ議りける。然る

南朝の殘黨神器を奪ふ

に過ぎにし南帝の宮、二所坐しけるが、一方は萬壽寺に入らせ給ひて、出塵の徒とならせ給ひ、一方も、同じく釋門に入らせ給ひ、圓滿院に坐しけるを、賺し出し奉り、還俗なし參らせて、吉野の新帝と仰ぎ、吉野・十津川・觀心寺・叡山・高雄を始め、所々に要害を構へ、天下を覆さんと巧みけるが、先づ三種の神寳を奪ひ取るべしとて、文安三年九月廿三日の夜半計に、南方の餘黨二百餘騎、禁門に亂入す。一手は御坪の內より攻入り、一手は清涼殿の坤の方、殿上の下口より切入つて、前殿に火を放つ。主上も辛うじて御出座せしかば、上伏の殿上人二人、漸々御手を助け奉る。敵兵間近く追かけ奉り、既に危く見えさせ給ひしかども、兎角して他所に行幸なし奉る。一揆共、安々と御寳物を盜み取り、散々に落ちて行く。其夜東門の番黑田判官が手の者青地四郎・木本新介兩人追かけ、敵二人切伏せ、三人に手負はせて、其餘の者共を追散らし、難なく內侍所を奪ひ返し奉る。寳劍をば取落して、清水寺の門外に捨てたりけるを、翌日鏡月坊の阿闍梨是を捧げ奉る。神璽は一揆等終に奪ひ取りにけり。是は日野儀同三司有光子息右大辨資親、內通同意の聞えあり。さるに依つて父

子共に召捕られ、黒田判官に預けられけるが、終に死罪にぞ行はれける。さる程に一揆等は、先帝第三の宮萬壽寺に御坐しけるをも取奉り、叡山の北谷に取籠りけるに、京勢押寄せ、無二無三に攻立てしかば、餘黨等は落失せて、宮は御自害坐しぬ。一色兵部丞御首を給はつて、夜中に京都に引返す。薄情しかりし事共なり。

神璽御歸洛の事

茲に去嘉吉元年、普廣院義敎公を弑し奉りし赤松左京大夫滿祐が弟伊豫守義雅が孫伊豆守政則、流浪の身となり居たりけるが、未だ幼少なりしかば、家子石見太郎祐元養育し、京都に忍び上り、三條内大臣實量公に仕へけるが、折々は赤松が家の衰へし事を、語り出してぞ歎きける。内府も、赤松とは、互に子孫七代まで見放つべからずと、代々の誓約ありし故、内々彼方族を取立て、先祖より違變なき志をも顯すべしと、樣々思慮をぞ巡らされける。石見忍びやかに申しけるは、當時の分野を見候に、細川・山名の兩家、天下に威を振つて、互に權を爭はれ候へば、大亂近きにあ

るべく候。然れば細川勝元に屬し、當家の事を歎き候はゞ、勝元幸と悦び、政則を取立て、山名に敵せさせんと思はれんは、治定候といふ。內府聞き給ひ、其も何とぞ、一つの功なくては叶ふべからずと宣へば、其こそ究竟の事の候。當時の宮の御方に候なる神璽を、盜み返し候はん。案內をば能存じて候といふ。內府悅び、然らば其謀をなすべしと宣へば、其より石見、豫て巧みし事なれば、年來の傍輩間島三郞太郞・中村八郞二人に心を合せ、術を能々いひ含め、南方にぞ遣しける。二人は吉野に立越え、奉公を勤め、忠節を顯すべき由望みしかば、宮大に悅ばせ給ひ、渠等は赤松が家人にて、京都へ恨みある者なれば、よも二心あらじとて、賞愛甚だ淺からず。二人の者共、今は仕濟したりと悅び、將軍義政公の治世長祿二年八月、密に宮を刺殺し奉り、彼神璽を奪ひ逃げて行く。吉野殿に有合ふ者共、遁さじと追懸くる。二人踏止つて、眞前に進む者共五人迄切倒せば、其勇氣に怖れ、此彼に群り立ちて、遠矢に射る。中村八郞矢二筋射立てられ、會て働き得ざりければ、今は叶はじとや思ひけん、間島に向ひ、御邊は如何にもして此所を落延び、年來の本意を達せられよと

いひ捨て、腹搔切つて伏しければ、三郎太郎も、同じ枕に死して、信を守らばやと思ひしかども、いやいや、其は大不忠の至りならんと思ひ返し、息を限りに落延びて、漸々と都に歸りければ、內府を始め、石見太郎大に悅ぶ事限りなし。頓て管領細川勝元の方へいひ送られしかば、勝元甚だ悅び、朝廷へ執奏し、神璽を內裡に納め奉り、公武に對し、專一の忠功なりとて、赤松次郎政則に、加賀半國をぞ與へられける。去ぬる延元元年、後醍醐天皇吉野へ移らせ給ひしより、後村上天皇·長慶院·後龜山院相續いで四代、明德三年に至つて五十六年、今長祿二年に及んで、凡百二十餘年、南朝の號終に絕えて、後深草院の御末永く、本朝の主とならせ給ふ。目出たかりける事共なり。

南朝太平記卷第廿四大尾

大正三年三月十二日印刷
大正三年三月十五日發行

國史叢書 南朝太平記 全一冊

定價金一圓

不許複製 國史研究會

編者 黒川眞道

發行者 國史研究會

右代表者 小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地

印刷者 楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
國史研究會